ハーメルンの笛吹き・後日譚

プロローグ

少女は、歩く速度をやや速めた。速めても意味がないことは、わかっていた。けれども、絶望がそうさせた。今まであたりを照らしてくれていた月は、雲に隠れてしまったようだ。灯りは、他にはない。

家に帰りたい。少女は思った。しかしその家が、自分にとって安寧の場でないこともわかっていた。こうやって暗闇の中をただひたすら歩いているのは、家の主宰者たる父親の命令だったからだ。

少女は、捕まるために、連れて行かれるために歩いた。もう何人もの同年代の子供が連れ去られている。どこか遠くの、暗くて深い場所で死んでいる。そして自分もその子たち同様、「要らない子」なのだと思う。「要らない子」だから、連れて行かれる。私は、その奇妙な格好をしていたという男に捕まる。それがおそらく父の、家族の望みだ。

突然現われた大きな手に、少女の目と口はふさがれた。むろん怖かったけれども、しかし少女はとくに驚かなかった。この闇よりも、もっと暗い闇が自分の家にある。その時代、そんなふうに少女は考えていた。

どこからか、笛の音が聞こえたようだった。

1

教室に入って驚いた。登校して来ているはずの児童が一人もいない。五年一組の教室の中は見事に空っぽだ。

山添祐輔は思わず腕時計を見た。曜日を示す小窓には「ＦＲＩ」とある。いや、そんな確認をしなくても、今日が土曜日や日曜日じゃないことくらいわかっていた。つい五分ほど前までいた職員室には、教職員がほぼ全員顔を揃えていたのだ。

どういうことだ？　小学校教員になって十年ほどだが、担任しているクラスの全員が欠席なんていう事態はむろん初めてだ。

集団感染症？　まずそれを疑った。しかしインフルエンザの流行は、新型従来型ともに峠を越している。三学期に入って一ヶ月あまり、その間、市内どこの小中学校からも、学年・学級閉鎖などという話は聞こえてこない。

そして思い出してみる。昨日は祝日で休みだったから、その前の水曜日、欠席者は確か四人だった。風邪気味なので大事を取ると、そのうち二人の保護者から電話連絡を受けていた。

連絡？　そうだ、連絡だ。三十八人の欠席児童、今朝はその誰の保護者からも、現時点までに連絡をもらっていない。

あるいはと思い、教室を出て、廊下から隣のクラスである五年二組の様子を窺う。見たところ三つばかり空き机があるが、あとは全員出席しているようだった。山添が勤務するN市立川南小学校は、五年は一組と二組の二クラスだけである。

五年二組の児童の何人かが廊下にいる山添を見て、笑いながら手を振ってくる。その様子で、二組の担任である春山美香先生がこちらの存在に気づいた。

「はい、みなさ〜ん、ちょっと待っててくださいね」そう言って、春山先生はジャージに包まれた巨大な腰周りを揺らしながら、こちらへとやって来た。「どうしたのよ？」

春山先生は、四十台半ば。姉御肌で面倒見がいいと、保護者からの絶大な信頼を得ている。もちろん、山添のような若手とはもう言えないまでも、しかし平均年齢がきわめて高い世界の中ではまだまだヒヨッコのうちである教員にとっても、頼りになる存在だ。

「あ、いや。ちょっと見てください」山添は、春山先生を五年一組の前の廊下まで連れて来た。

「なに、これ、どういうことよ」春山先生が、空っぽの五年一組を見て言った。さすがに意外だったようだ。

「クラス全員が欠席することってありうるものなんでしょうか。先生は経験したことありますか？」

教師歴二十五年になんなんとする春山先生は、「いや、ない。一度もない」と、狼狽した口ぶりで答えた。その様子で、山添は、これがまったくの非常事態であることをあらためて確認した。

「保護者からの連絡は？　あ、そうか、職員朝礼でも一組は何もなかったわよね」

「私個人あてにも何も……」山添は、ここにいたってようやく、五年二組の様子を見に来た理由を思い出した。「それで、先生のクラスに、一組の誰かの欠席連絡を受けている子がいるんじゃないかと思って」

春山先生は、「ああ、そうね」と言って二組に戻って行った。山添もあわてて後を追う。

「はい、皆さん」黒板の前に立った春山先生が手を叩きながら言う。児童たちは、ほんの一分ほどの教師の不在に何かを感じ取ったらしく、前後左右の友達と声高に喋っている。「皆さんの中で、一組のお友達のお母さんから、何かことずかっている人はいますかあ〜？」

誰も手を挙げない。

「わかりました。じゃちょっと静かにしていてね。先生は、一組の

山添先生と大切なお話があるから」
「大切なお話って、もしかしてラブ？」「きもっ！」「ありえねー！」などと、二組の児童たちは歓声を上げる。春山先生は当然ながらまったく動じず、再び巨大な腰周りをゆっさと揺らして、廊下で突っ立っている山添の前までやって来た。
「そういうことなのよ」
「わかりました。とりあえず私は……、教頭は今日は出張だから、校長の方に」
「だね。しかしまさか、何かの犯罪に巻き込まれているってことはないよね」
　そのときだった。「げげっ！　一組、誰もいねえよ！」という声がした。二組の利光竜彦が、何かあったことを敏感に察知し教室を出て、一組の様子を確認しに来たのだ。その動きは、春山先生の腰周りに隠れてまったく見えなかった。竜彦の声を聞いて、二組の児童がいっせいに廊下に出て来た。そして一組の教室を覗き込む。
「本当に誰もいない！」「何、これ、ズル？」「なんか、やばくね？」
　口々に好き勝手なことを言い、どうやら一時限目の授業の始まりが遅れそうだということに目を輝かす。
「どーなってんのよ、これ！」利光竜彦が再び叫び、それを期に廊下は蜂の巣を突いたような騒ぎになった。
　といっても、川南小学校北棟三階のこのフロアは、五年一組と二組、そして分割授業のときに使う学習ルーム、ランチルームと称する、空き教室に名前を付けただけの空間、それに図書室があるだけだ。したがって、この大騒ぎが他の学年に波及することはない。この小学校も最盛時には各学年六クラスもあったというが、今は学年一クラスまたは二クラス。おかげでかなり贅沢にフロアが使え、ことこうした事態となっても、五年だけで騒ぎが収まっているのは幸いといえば幸いである。
　喧騒の中、二組の女子の一人が山添の許にやって来た。名前は本居愛美だ。派手でもなく地味でもなく、山添の目からすれば目立たない児童だった。ただし「頭がいい」「成績がいい」という話は何度も聞いたことはあった。もっとも、今の公立小学校の評価システムでは、児童の学力を正確に把握することは、教員でさえもかなわない。
　愛美は言った。「彩香も、夏美も、桃子も、瑤子も、亮太も、大志も、勇介も、み～んな昨日、連れて行かれてたよ」
　山添はうろたえた。愛美があげた名前は、全員、一組の児童である。「連れて行かれたって、誰に？」
「こういう円錐型の帽子をかぶって」愛美は、頭の上でかたちをつくった。「緑や赤や黄色や、そんないろんな色の生地を使った服を

着た男の人。彩香たちは、その男の人について行ってしまったのよ」
「ま、マジかよ？」思わず、教師にはあるまじき反応をしてしまう。山添は、腰をかがめ愛美と目線を同一にし、失態を取り戻そうとして尋ねた。「それで、愛美さんは、ついて行かなかったの？」
「うん。なんだか楽しそうだったけど、私は用事があったし」愛美は、あっさり言った。
「でもそれってまるで」山添は、愛美の目を見て言った。「グリム童話の『ハーメルンの笛吹き』みたいじゃないか？」
「ハーメルンの笛吹き？」愛美は小首を傾げたが、自分の知らないことを少しでも吸収しようとするかのように、目に強い光を湛えている。愛美が理知的な美少女であることに、山添はこのとき初めて気づいた。いや、内側から発せられる意思の強さが、彼女をして美少女に見せているというべきか。本居愛美は、今年度からの転校生だったはずだ。
「そうか、知らないのか。今はみんな、ハリー・ポッターとかダレン・シャンとかで、グリム童話なんてあんまり読まないのかなあ」
「グリム童話は知ってるよ。でも、そういうお話はなかった」愛美は抗議する。
「愛美さんが読んでいないだけだよ」
「そうかな？　グリムは一年生や二年生のときにたくさん読んで、題名も内容もほとんど覚えているけど、そんなのはなかったよ」
　こんな話をしている場合ではないと感じてはいたが、ついつい愛美のペースに引きずり込まれ、自分でも思いもかけなかった質問を、愛美を試すようにしてしまう。「じゃ、愛美さんはグリムのお話で何が好きなの？」
「手無し娘」
　愛美はやけにきっぱりと言い、山添は少々うろたえた。グリム童話にそんなタイトルの話があったとは、三十二歳の現在に至るまで知らなかったし、それが愛美のお気に入りという事実にも、言いようのない違和感を持った。思わず再び訊いてしまう。「それはどんなお話なの？」
「とってもいいお話。先生も読んでみて。図書室にあるグリム全集にも収録されているよ」
　小学校五年生が「収録」ときたか。さっきも「円錐型」なんて言葉を使っていたし。愛美は本当はどんな子なのだろう？　そう考えているとき、「皆さ～ん」という声が聞こえ、春山先生がぱちぱちと手を叩いて、児童たちを五年二組の教室に追い込むことに成功するのが確認できた。したがって山添はまた一人、廊下にとり残されたかたちとなった。

とにもかくにも、この事態を校長に報告しなければならない。山添は現実に戻り、階段を下りた。

校長室のドアをノックして開けると、後頭部にぽっかりと地肌を見せている斉藤校長が振り向いた。定年まであと一ヶ月半あまり。この小学校を最後に勇退することとなっている。窓から学校の前庭を眺め、長かった教師生活に思いを馳せていたのかもしれない。何事もなく定年を迎えたいであろう校長に、この一件を話さなければならないのは心苦しかったが、しかし伝えないわけにはいかない。

山添は努めてさりげなく言った。「五年一組、全員欠席です」

「えっ何？　インフルエンザか何かですか？」校長は狼狽する。

「それが、保護者からの連絡がただの一件もないんです」

「……」校長は絶句した。

そのとき、春山先生が「ちょっと失礼しますね」と校長室に入って来た。校長の目に安堵の色が浮かんだようにも見えた。

「何かの事件に巻き込まれている可能性があることが、一番心配ですね」春山先生はそう言って、校長のデスクの電話に取り付き、一一〇番をプッシュした。「すみません。市立川南小学校教諭の春山と申しますが、ちょっとお尋ねしたいことがあって」

春山先生は、電話の相手に小学校で大量欠席があったこと、その全員の保護者から連絡を受けていないことなどを要領よく伝え、子供の捜索願などが出されていないかどうかを尋ねた後、「だったら校長室に回してください」と言って電話を切った。

「なんでも、こちらが本当に小学校教員かどうか確認できないんで、向こうで調べて電話かけてくるってさ」春山先生は憤慨して言う。

「そういう場合じゃないだろっての！」

が、ともあれ三分ほどしてから、電話が鳴った。校長がそれを取る。内線なので「つないでください」と言った。

「はい、はい。春山は確かに本校に在籍しております。ええ、今、私の隣にいますが。私は校長の斉藤といいます。承ります。ええ、はい、そうですか。ご迷惑をお掛けしました。ありがとうございます」そう言って校長は電話を切った。「N南署には、小学生の捜索願いなどは出てないそうです。念のため県警本部にも問い合わせてくれたようですが、本部、各所轄署とも、そうしたことはないらしい」

三人は顔を見合わせ、それぞれにほっとした。

「じゃ念のため、市の教育委員会に、他の学校で学級閉鎖が発生しているかどうかも」

春山先生が再び電話に手をかけようとすると、校長が「しかし、あまり騒ぎを大きくするのも……」と言った。

「大丈夫です。その辺、上手くやりますから！」と、春山先生は不器用なウインクをし、そう言ったわりには「川南小の春山ですが」とストレートに学校名と自分の名前を明かし、その後も訊きたいことをそのまま訊いたようではあったが、市教委の人間はとくに怪しむこともなく教えてくれたのだろう、電話を置くと「N市の小学校では今のところ、学年・学級閉鎖の報告はありません」と告げた。

「わかりました。それじゃ私は、休んでいる子の家庭にとりあえず電話を入れてみます」

「オーケー。私は教室に戻るけど、誰か登校して来ないか、それとなく一組を見張っているわよ。で、山添先生、三限の算数は習熟度別授業で分割だから、そんときゃ、よろしく」

その言葉で、三限までは何もすることがないのだと、あらためて思い至った。児童がいなけりゃ、教員なんてものは単なるでくの坊だ。

「じゃ、失礼します」そう言って、春山先生に続き校長室を出ようとした山添は、校長から呼び止められた。

「各ご家庭に電話するのなら、ここでしてください。職員室でするとと、他の先生方も動揺するかもしれないし」

いかにも斉藤校長が言いそうなことではあったが、なるほどもっともだと思えたので、職員室から自分のノートパソコンを持ってきて、校長用の応接セットに腰を据えた。校長がコードを伸ばした電話機を山添の前に置いてくれる。

パソコンを立ち上げ、児童の家庭の連絡先一覧を呼び出し、出席番号順に電話をかけてみる。まずは、安部真美からだ。呼び出し音が二十回ばかり。不在だ。病院にでも連れて行っているのだろうか？　次に井上加奈の家にかけるが、ここも不在。三番目の岩屋健太郎の家でようやく相手が出てくれた。どうやら、おばあちゃんらしい。

「川南小の山添ですが、健太郎さん今日欠席なんですけれども、何かご病気でも……」と訊いてみた。

が、相手は「健太郎は今はいません」と言い募るばかりで要領を得ない。「それでは、お母さまは？」と重ねて訊くが、「今、いない」の一点ばりである。

「では、担任の山添から電話があったとお伝えください」そう言って電話を置いた。

どうも、おかしい。健太郎のおばあちゃんは何歳くらいの方だろう？　おばあちゃんといっても、小学生の祖母である。しかも、健太郎は一番上だったはずだ。ということは、まだ七十歳には届いていないのではないか。口ぶりもしっかりしていた。なのに、自分はそんなことは知らないんだから面倒ごとに巻き込まないでくれ、と

いったニュアンスが電話口から伝わってきた。こういう反応をするのは、一般にもっと歳のいった老人だと思う。

気を取り直して、また電話をかける。上田太一宅不在、衛藤夏美宅不在、遠藤宏の家で、ようやく母親が出てくれた。名前を名乗ってから、宏さんは、と尋ねる。すると、母親はしどろもどろになり、「あ、今、病院に」と言うのだった。平日の昼間、母親が家にいて、宏が病院とはどういうわけだろう。しかし、そうした家庭の事情に立ち入ることはできない。

結局――。三十八の家庭うち、電話に出ない、あるいは留守番電話だったのが二十一、おじいちゃんおばあちゃんが電話に出て、なんとなく要領を得なかったケース六、父親母親が電話に出たが、結局、児童の欠席の本当のところはわからなかったケース八、「この電話はお客様のご要望によりおつなぎできません」という案内があったのが三、という結果だった。まったく釈然としない。

「しかし山添先生」山添の気持ちを見透かしたように、校長が声を掛けてきた。「子供たちの家を直接訪ねるのはやめておきましょう。事件性はないようですし、いたずらに騒ぎを大きくするのも……」

校長が単に保身の類いの感情からそうしたことを言っているのではないことは、わかっている。家庭への過干渉は、今の公立学校ではご法度だ。ご多聞にもれず、川南小でも給食費未納はある。それを回収に行った教員が、近所の手前もあるから家には来ないでくれと追い返されたケースもあった。また、このことをこちらがことさらに騒ぎ立てると、マスコミに嗅ぎ付けられ、火に油を注ぐ結果になる可能性もある。だから、とりあえず様子を見るしかないことは、山添も理解していた。

結局――。その日は、算数の習熟度別授業の「発展」を担当しただけで、後は何もすることはなかった。することができたのは、月曜日にはたして俺は、授業ができるのだろうかという自問だけだった。

2

翌日は土曜日だったが、山添は学校に来てみた。通知表作成時期にはまだ少し間があるが、それでも何らかの事務処理をしている数人の同僚教員にあいまいな言い訳をしつつ、五年一組を覗きに行く。当然ながら誰もいない。やはり月曜日まで待ってみるしかないか。

職員室に戻った山添は、ノートパソコンを開き、五年一組の児童に関する個人データを呼び出してみた。全三十八名のうち、川南小に兄妹がいるのは四名だった。その四名の昨日の出欠を、確認してみようと思い立ったのだ。出欠簿は、記載されているのが氏名だけ

なので、職員室の壁のフックに掛けられていて、これは教職員なら誰でも閲覧可能だ。山添は、五年一組の児童の兄妹の出欠を、それぞれ該当するクラスの出欠簿で確認していった。昨日に関しては全員が欠席である。

そのときだった。学校の校門の前の道を、自転車に乗って横切っていく本居愛美の姿が窓越しに目に入った。あわてて玄関を出て、校門脇に置いていてあった自分の通勤用の自転車に飛び乗って後を追う。頭で考えるよりも先に身体が動いてしまった。とはいえ、もう愛美の姿は見えなかった。

が、簡単に諦める気にはなれない。こんな状況で、愛美の存在が唯一の光明のようにも思えた。昨日の愛美の言葉を思い出す。彩香も、夏美も、桃子も、瑤子も、亮太も、大志も、勇介も、み～んな昨日、連れて行かれたよ――。

山添は腰を浮かし、自転車のペダルをこぐ足に力を入れた。スピードを上げると、ほどなく坂を下っていく愛美の後姿をとらえることができた。自転車のブレーキを小刻みに握っては開放するといったことを繰り返し、愛美に気付かれぬよう山添も坂を下った。

下りきったところには橋が架かっていて、それは、N市の中心部に向かうためのものだった。愛美は、自動車橋の横に設置されている歩行者・自転車専用橋に自転車を乗り入れた。

友だちの家に行くのではないのか？　山添はいぶかしく思った。この橋を渡ってしまうと、川南小の通学区ではなくなる。

愛美は、目的地はしっかりあるというふうな意思を背中に見せ、ずんずんとその橋を渡っていく。山添は少し愛美に近づいてみた。背中にかなり大きなリュック型のバックをしょっていて、いかにも重そうだ。よくよく見ると、女子小学生に人気のある「エンジェル・ブルー」というブランドのものらしかった。しかし、そのブランドは高価なことでも有名で、たいていの家の子は、修学旅行など「ハレの場」用にしか買ってもらえないらしい。

愛美はいったいどういう家の子なんだろう？　そんな山添の思惑とは当然ながら無関係に愛美は橋を渡り、その後も力強く自転車を漕いでいく。山添も後を追う。やがて、愛美の自転車はトンネルに突っ込んでいった。これを抜けると、市中心部の繁華街となる。

どこまで行くんだよ？　山添は少々慌てた。トンネルは、三〇〇メートルにも及ぶもので、交通量も多く、当然、自動車の排気ガスが充満している。ここを自転車や徒歩で抜けるのは、かなりの勇気が必要だ。愛美が当たり前のようにトンネルに入っていったことにも当惑したが、山添も覚悟を決めて、そのトンネルの歩道に自転車を乗り入れた。とたんに排ガスの洗礼を受け、目がしょぼしょぼする。愛美も同じだろう。小学校五年生が、こんな思いまでして、い

ったいどこに行こうというのか。
　トンネルを抜けた愛美は、二つ目の信号のところで自転車を降り、押して横断歩道を渡って、白い五階建てのビルの裏手に自転車を置きに行ったようだった。山添は、道の向こうにあるそのビルを見上げた。ビルの壁面に設置された電照看板には、「中高大受験　桃李館」とある。そうか、愛美は塾に来ていたのか。ようやく納得したが、しかし立派な塾である。ビルの五フロアすべてをその桃李館が占めているようだった。
　山添には、その桃李館という名前に思い当るものがあった。桃李モノ言ワザレドモ下自ズカラ蹊ヲ成ス。そんな故事成語にふさわしい人物であるところの高校時代の同級生が、市内で大きな塾を経営しているということを、同窓会か何かの場で聞いたことがあったのだ。
　その人物のことは、前々から、そして常々気になってはいた。正確には高校時代、同じクラスで机を並べた日から。
　久我今日子。
　高校時代の今日子のことを思う。今日子は、いつも一人でいた。そんな印象が強い。山添が、今日子と同じクラスになったのは、文理選択を終えた二年次だった。文系クラスとはいえ、人数的には男子優勢ではあったが、その分、女子たちの結束は固いようで、いくつかのグループができていて、トイレに行くにも、学食に行くにも、そのグループ単位で行動していた。が、今日子は、どのグループに属することもなく、いつも一人で背筋を伸ばして本を読み、弁当を食べていた。そうした今日子を見ていると、群れることを本能としているような他の女子生徒たちが滑稽に見えてくるから不思議だった。かといって、別に仲間外れにされていたわけでも、他の女子と没交渉だったわけでもないようだった。楽しそうに話しているときもあれば、案外天然ボケ、みたいな噂を聞いたこともあった。
　同時に今日子は、学力的にきわめて優秀だった。N県立N北高で、定期テストにおいても実力テストにおいても常に五番以内をキープし、今日子にアプローチできるのは、今日子よりもいい成績を取ったやつだけ、というのが、男子生徒のコンセンサスになっていたように思う。思う、というのは、山添自身、今日子に何らかのアプローチをする自分というのが、当時は想像もつかなかったからだ。あっちが「桃李モノ言ワザレドモ下自ズカラ蹊ヲ成ス」なら、こっちは同じ「ナス」でも、「小人閑居シテ不善ヲ為ス」だと自覚していた。
　今日子は東大も狙えると言われていたが、教員志望であったため筑波大に進学、修士まで進んだ。その後、こちらに戻ってきて県の高校教員採用試験にトップ合格、母校の北高で三年ほど教鞭をふる

い、その教え方があまりにも分かりやすいため、生徒たちに異常なほどに慕われていたという――そもそも教育実習で今日子が北高に行った際には、「今日子先生を北高に絶対に呼ぶ会」なるものが男子生徒を中心に結成されたらしい。

そんな今日子だったから、いずれは、県教育庁史上初の女性審議監になるかもしれないというのが、山添たち北高同期の教員組の予想であり期待だった。N県教育庁では、そのトップである教育長には教員以外のキャリアを持つ人間が就くことが不文律になっているため、現場の教員として望みうる最高位は、審議監か北高の校長だ。ただし北高校長は慰労賞的ポストなので、実力で勝ち取るものとしては審議監が最高である。

が、そんなふうに評価されていたのにも関わらず、今日子は突然教員を辞め、受験塾を立ち上げた。噂では、何か保護者とトラブル起こしたため、ということだった。

今日子は、高校生のときから、群れるということを極端に嫌っていて同窓会にも出てきたためしがないが、それでいて人を惹きつけるようなオーラを放っていた。山添は、そのオーラに吸い寄せられるように、桃李館の自転車置き場に自転車を止めた。

塾の正面玄関に回ると、塾講師であろう数名が、車で送迎する親のために交通整理を行っていた。そういえば、ここの駐車場はいかにも手狭だ。

その狭い駐車場とは対照的に、やって来る車はドイツ製の大型SUV車が目立ち、降り立つ母親も、小学生や中学生の子供がいるとはとても思えない容姿の女性が多かった。いわゆるセレブ系ママってやつだなと思いつつ、交通整理をしている講師の一人に、山添は「すみません」と声を掛けた。講師が振り向き、「はい」と丁寧に答える。二十台半ばと思われる女性である。髪の毛を栗色に染め、同じ色のマスカラを塗っている。以前なら、塾講師には絶対にいなかったタイプだ。しかしそれでも、どこか知的な雰囲気を湛えているのはさすがというべきだろう。

「えーと、久我先生はいらっしゃいますか？」山添は尋ねた。

女性講師は首を傾げ柔らかく微笑し、「失礼ですが」と訊いてきた。

それでこの桃李館が今日子の塾だと確信した山添は、「私は山添といいまして、久我先生とは高校の同級生なんです。いや、近くに来たものですから。アポは取っていません」と面会を申し込んだ。

講師はにっこりと頷くと、館内に入っていった。一階はガラス張りで、中の様子がよく見えた。カウンターがあり、その向こうは事務スペースだ。カウンターの前でたむろしている小中学生もたくさんいる。その子供たちをかきわけるように、女性講師が出てきた。

「すぐ、久我が参ります」そう言って、山添を館内に案内してくれる。
　一分もせず、今日子が姿を現わした。鼻梁が細く、その両脇の目は綺麗なアーモンド形をしている。黒目がちではあるが、白目の部分は学生時代と変わらず、白磁のように清潔に白い。視線をかすかに下にやれば、薄い唇が穏やかに微笑み、要は、あいも変わらず、まったく今日子は美しかった。学生時代と変わったところといえば、髪をひっつめにしている点と、縁なしの眼鏡を掛けていることぐらいだろう。黒のパンツスーツに包まれた長身かつストイックな今日子の肢体も相変わらずだ。いやいや、やはり歳相応に多少はエロっぽくなったか。山添が馬鹿なことを考えながら今日子を観察していると、目の前に手が差し出された。その右手の薬指に指輪がある。単なるファッションリングなんだろうと自分に言い聞かせつつ、その手を握りかえした。
「山添くん、高校卒業以来、かな？」
「そりゃそうだよ。お前は同窓会にも何にも出てこないから」
「それもそうだね」同窓会って何だっけ、という口ぶりで今日子は答えた。
「いや、わかってるよ」何がわかっているのか自分でもわからなかったが、なんとなくお前のことはわかっているよ、ということをとにかく伝えたくてそう言った。伝わったかどうかはわからない。たぶん、伝わってないだろう。
「しかし、たいした出世ぶりだな。採用倍率三十倍の県立高校の社会の教師をあっさり辞めて、始めた塾が大繁盛。こっちは倍率三倍の小学校教員にしがみついているよ」
「山添くん、小学校の先生しているの」
　今日子が驚いたように言う。ちぇっ、そんなことも知らなかったのかよ。俺が教員になったのは、お前の影響も大きいんだぞ。山添は心の中で毒づいた。
「で、今日は何？」
　単刀直入に今日子は訊いてくる。山添は当惑した。えーと、なんだったっけ？　愛美を追いかけて、なんとなくここに来てしまった。
「本居愛美さん……」山添は、苦し紛れに言った。
　今日子の眼が輝いた。ように見えた。「山添くん、もしかして、愛美の学校の？」
　この大規模な塾で、塾長である今日子が愛美のことをよく知っているふうに言ったのにも内心驚いたが、とりあえず「そうだ」と答えた。
「ねえ、ちょっと話せない」
「俺は今日休みだから何もすることはないけど、お前は忙しい

……」

そう言う山脇をさえぎって、今日子は「私も五時まで授業入っていないから」と、なぜか懇願するように言い、山添をエレベーターに半ば強引に乗せた。エレベーターが五階に着くと、長く伸びた廊下の一番奥右手の部屋に案内してくれた。今日子の丸っこい小さな尻を眺めながら、山添はその部屋に入った。

「ふーん、ここが塾長室というわけか」

八畳ほどのスペースに、事務デスクが一つとパソコンとプリンターを載せたサイドデスクが一つ、それに質素な応接セットを備えただけの部屋だったが、それでも山添は感慨に打たれた。俺と同じ歳で、五階建のビルの最上階に専用個室か。

「それで愛美なんだけど、学校ではどんなふう？」今日子はいきなり訊いてきた。

「どんなふうと言われてもな、俺のクラスじゃなくて隣のクラスなんでよくわからないけど、まあ普通の子だよ」応接セットに腰を下ろした山添は、素直に言った。

「そっか。そうだろうね。今の小学校は、児童の学力を測る基準が何もないからね」

「言ってくれるじゃないか。でも、もしあったとしても、隣のクラスの子のことはわからない。これは、ゆとり教育とかそういう問題じゃなく、単純に個人情報保護の問題だ」

「だね」さして落胆したふうでもなく、今日子は立ち上がり、パソコンを操作した。プリンタがジリジリと音を立て、なにか書類が出してくる。それを取り上げると、「これも個人情報。絶対に他言無用だよ」と言って示してくれた。

山添はそれに目を落とす。書類には KOMAHARA-net とあり、中学受験塾の全国最大手である駒場原宿進学教室の資料であることが知れた。名前の欄は「本居愛美」で、学齢や小学校名、所属する塾名などが記されてあった。さらに視線をスクロールしていき、「全国順位」と記された欄のところで息を呑んだ。「全国順位、三位！」

今日子が大きく頷く。

「しかし、どういうわけなんだ？」

「私が知りたいよ。愛美の小学校の教師からなら、何かヒントが得られるかと思って」

まったくこいつの性向は、学生時代そのままだ。自分の興味の対象を見つけると、わき目も振らず、それを追究しようとする。

「うちの塾は、駒場原宿の提携塾なの。だから塾生はそのテストを受けるんだけど、でも全国三位とはね。私がこの塾始めて、このテストで全国五〇〇番以内に入ったのは愛美が初めて」

「愛美さんはいつからこの塾に？」
「小四春から」
「入塾した当初はどうだった？」
「うーん、塾の中では上の中といったところかな。駒原の模試だと、偏差値で五五くらい」
「で、今は『七五以上』か」再び書類に目を落としながら、山添は言った。駒場原宿のそのテストの偏差値は、昔ながらの二五～七五方式であったので、それで捉えきれない児童については、「七五以上」という表記がなされ、それは全国約一万人の受験生の中でも、六人しかいなかった。
「しかし、駒場原宿の模擬テストって、要は全国の秀才小学生が受けるわけだろ。それでこの偏差値ってことは……、ゆくゆくは東大も狙えるじゃないか」
「東大なんてもんじゃない。理Ⅲだって夢じゃないよ。実際、愛美は、うちの調査票には、将来行きたい大学を『東大の医学系』て書いているし」
今日子は、東大の中でも最難関の学類の名をあげた。医学部医学科進学を前提とした理Ⅲの定員は一〇〇名。現在、大学センター試験の受験者数は約五十五万人だから、五千五百人に一人しか合格者が出ないことになる。また現在の十八歳人口は約一二〇万人なので、こちらを母数とすれば同学年一万二千人のうち一人だ。甲子園にレギュラーとして出場できる確率は約四千人に一人だから、これよりも四倍難しい。
しかし東大理Ⅲ受験の意味は、それだけではない。東大理Ⅲが他の大学の医学部医学科とまるっきり違う点は、それが受験の世界での頂点であるということだ。つまり、医師に成りたいということではなく、自分の能力の高さを最高のかたちで証明するために、理Ⅲを受験する秀才が少なからずいる。
「ほんとにすごいな。しかし自分の学校にそんな子がいたなんて、まるで気づかなかった。教師失格だな」
「今の公立小学校の評価システムじゃ仕方ないよ」思いもかけず、今日子が優しく言ってくれる。
「東大だ理Ⅲだ、というのは、先の話だけどね。とりあえず、桜陰と筑波大附属を受けてもらおうかなと思って」今日子は東京にある超難関中学の名前をあげた。
「もらおうかなって……」山添は当惑した。「彼女自身の考えもあるだろうし、ご両親だって。第一、国立の筑波大附属はもちろん、桜陰も、N市の住所からだと出願できないんじゃないのか」
「その問題は、東京に私が部屋を借りるなりして、住民票を移してもらおうと思ってるのよ。とにかく記念受験でも何でもいいから、

桜陰か筑附、受けてほしいなあ」今日子の口ぶりが、夢見る少女のようなものになった。「だってN市って、東京からの転勤族も多いでしょ。その層に対して『桜陰合格！』ってアピールしたら、うちの塾も……」

「そういう偽悪癖は、社会人になって身に付いたものかな？」

あんたにゃ敵わないという顔をして、今日子が答える。「私は、愛美がどこまで伸びるか、見てみたいのよ。東京の難関中学という環境にあの子を放りこんだらどうなるのか見届けたいし、中学でも高校でも愛美の教育に関わりたい」

「どこまで伸びるか見届けたいって……、お前の子じゃないだろ」

「愛美の親御さんも絶対にそう思っているって。それに、本当に頭がいい子というのは、親を満足させるとか、親の自慢とか、そういうレベルじゃないのよね。それだけで、万人を巻き込むオーラを放ってる」

そうだ、高校時代のお前も、まさにそうだったよ。山添も、ある程度共感できるところもあったので黙って頷いた。

今日子は「私は」と言ってから、ちょっと照れたように「演説してもいい？」と訊いてきた。

「今までのも十分に演説だったと思うけどね」

今日子は、山添の皮肉を無視して続ける。「私は、教育ということを、教え育てる、というふうにとらえること自体が思い上がっているし、間違っていると感じている。だってそうでしょ。教師が自分の持っているものを生徒に教える。それじゃ、生徒の学力は、教師以上のものになりようがないじゃない。愛美のことにしても、じゃうちの塾で教えたから、あそこまでなったかといえば、そうじゃない。うちの塾で上の中程度だった彼女が、コマハラのテストで全国三位まで伸びるというのは本当のに奇蹟なの。そこには何らかの要因があるはずなんだけど……」

「それが知りたいわけだな」

「そう。もしそこに何らかの理由があって、それがわかったら、全生徒とまではいかなくても、かなりの生徒に適用できるじゃない」

「それで、今日子センセイの塾もうはうは、と」

「そういうことなのよ」

今日子はやっぱりいいやつだと思う。愛美のことをもっとよく知りたいのも、伸びていくためのメソッドのようなものを何とか体系化したいからだ。それが、彼女なりの知に対する尊崇ということなのだろう。

ただ、山添にはまだ疑問があったので、それを口にしてみた。

「現実問題として、愛美さんのご両親はどう考えているんだ？」

「うちの塾に提出してもらっている書類によると、保護者は『本居

優子』ていう女性名なのよね」
「そうなのか？」隣のクラスの児童の立ち入った個人情報には踏め込めないとはいえ、保護者の名前程度は山添の立場でも知ることができたが、しかし、そんなことを知ろうと考えたことすらなかった。
「私が知っているのもそこまで。お母さんとも、愛美を預かるときに一度話しただけだし、うちに電話をかけてきたことも今までないし」
「お前のところから電話連絡することもあるんだろ？　そのときにお父さんらしき人が出たってことは？」
「うちは、塾生の家への伝達は全部プリントかメールで、電話するってことはよっぽど緊急じゃないとないのよ」そう言ってから、今日子は一呼吸置き、そして意を決したように続けた。「いや、もし愛美んちが母子家庭で、お母さんがパートかなにかで生計を立てているとするよね。そしたら勝手な考えだけど、どこで暮らそうとあんまり関係ないんじゃないかな、と思って。東京に出てもらってもいいかな、と」
「まったく勝手な考えだな」
「そう言わないで。愛美はそれくらいすごいってことよ」
　高校時代から、弱みのようなものを見せたことがない今日子が殊勝なことを言ったので、少々当惑する。それだけ、愛美の知のオーラが強烈だということなのだろう。しかし、それにまったく気付いていなかった、愛美を預かっている小学校の教員である俺はいったい何なのだろう、と自己嫌悪に襲われそうになる。
「しかしさ、お前の塾に来ているくらいだから、愛美さんのところは結構、経済的に恵まれているんじゃないのか。いい授業料取ってるんだろ」山添は、先ほど、この桃李館の前で見た高級ＳＵＶの群れを思い出しながら、話題を変えた。
「愛美は特待生なんだよ」今日子はあっさりと言う。
「そういう制度が塾にもあるのか？」
　学校の場合、たとえ特待生として授業料を免除したとしても、国からの補助金は一人あたまで出るから、その特待生は、一般の生徒の半分程度、経営に寄与してくれる。定員に満たない学校が、学費免除の特待生を設定することで定員を満たすことができれば、特待生は、補助金獲得のための頭数となるのだ。が、塾には補助金などないから、特待生を出せば、その学費は、まるまる塾側の持ち出しである。学校と塾とでは、特待生の重みが大きく異なる。
「うちのオリジナルテストで偏差値七〇以上――もちろん、駒場原宿のテストの偏差値七〇とはレベルが全然違うけど――の子は、学費免除にしているんだよ。愛美は、新小五の六月のテストで基準を

クリアしたんで、今は特待生。だから、学費がかかるわけじゃないし、私は、もし愛美が東京の中学に合格したらその学費も出そうと思っているし、受験のための費用だって……」
「わかった、わかった。お前の愛美さんに対する思い入れはよくわかったから。でも、その特待生になる前は、月謝を払っていたんだろ。本居家は」
「もちろん、そうだよ」
「ここ、毎月、どれくらい取っているんだ？」
「小五のトップクラスだと、週三回で四万二千円」
「その……」山添は、ためらいながら訊いた。「結構な金額の月謝を、払えていたのか？」
「とくに問題はなかったようね」
その言葉で、山添は、今日子がビルを丸ごと一つ有し、さらに、多くのスタッフを抱える大規模塾の塾長なのだということを改めて感じた。
そうした山添の様子を察して今日子は言う。「あ、あのね、私もこの塾始めたばかりの頃は、何ヶ月も月謝を滞納するような家庭に頭を下げて集金に行ったりもしたんだけどね。その経験から言えば、月謝をきちんと払ってくれるってことと、その家庭の経済状態はまったくと言っていいほど関係ないよ」
「そうだな」山添も、それは実体験で理解していた。
「ところで、山添くん、何か用事があったんじゃないの？」今日子が逆に訊いてきた。

3

それで今、自分が置かれている現実に引き戻された。「本居愛美さん……」山添は呟く。
「だから愛美が？」
「あ、いや、愛美さんを追いかけて来たんだ。そしたらこの塾に入って」
「追いかけてって、何のために？」
山添は、今日子に、すべてを話そうと決めた。高校時代から、頭が切れることでは有名だった今日子のことだ。そして今また、愛美を媒介として、高校を卒業して以来、親しく話すことができた。山添は、昨日の金曜日、自分のクラスの児童全員が欠席だったこと、その前日には、クラスの児童たちが、色とりどりの服を着た男についていくところを、愛美が目撃していることを話した。
「だから、もう少し、詳しい様子を愛美さんから聞きたいと思って」

「それは……」一度言葉を区切ってから、今日子は言った。「まるで、ハーメルンの笛吹きの話みたいだね」
「まったくそうなんだよ」
「うーん」今日子は、腕を組み、何かを考えているようだったが、しばらくしてなぜか嬉しそうに訊いてきた。「ねえ山添くん、山添くんは、ハーメルンの笛吹きってどういうお話かちゃんと知ってる？」
「俺だってガキの頃は、グリム童話くらいは買ってもらっていたぞ」山添は、憮然として答えた。
「じゃ、話してみてよ。今ここで。読み聞かせ教室みたいに」
今日子がこちらの顔を覗きこんでくる。山添は、くらくらとした。そして、その視線の力強さに負けて、自分が認識しているところの簡単なあらすじを、馬鹿馬鹿しいとは思いつつ今日子の前で話すことにした。

ドイツのハーメルンの町は、大量に発生したネズミに困っていました。ネコもまったく役に立たず、あべこべにネズミに追いまわされる始末です。町の大切な穀物小屋もネズミに荒らされてしまい、町の人たちは途方に暮れていました。そんなとき、色とりどりの服を着た男が町にやって来て言いました。
「私がネズミどもを追い払ってあげましょう。その代わりにお金をください」
町の人たちは大喜びで、市長は報酬を払うことを約束しました。
男は笛を取り出すと、不思議なメロディを吹きました。すると、家という家から、穀倉という穀倉から、次から次へとネズミが出てきて、男の周りに集まりました。それを確認すると、男は、笛を吹きながら歩き始めました。ネズミたちも男の後を追います。男は、やがて町の城門を出て、川の方に向かって行きました。男がざぶざぶと川に入っていくと、ネズミの大群も男の後を追って川に入り、そしてすべてのネズミは溺れ死んでしまいました。
数日後、男は再びハーメルンの町に現われ、約束の報酬を要求しました。しかし、市長はじめ町の大人たちは、急にお金を払うのが惜しくなりました。だから、「ネズミは勝手に出て行ったんだ。お前が追い払ったんじゃない」などと勝手な理屈を言って、支払いを拒否しました。
男は、黙って笛を取り出すと、この前とはまた違う恐ろしげなメロディを吹き始めました。すると、今度は、家という家から子供たちが出てきて、男の周りに集まりました。男は、笛を吹きながら歩きます。子供たちも男の後を追います。町の大人たちは慌てて引きとめようとしますが、子供たちは踊りながら男についていこうとし、

まったく大人たちの声に耳を傾けません。
　男についていく子供の中には市長の娘もいたので、市長は叫びました。「金はいくらでも払う！　だから娘を置いていってくれ」
　しかし、男は聞く耳を持ちません。市長の叫びは、踊りながら、歌いながら、何かに憑かれたように練り歩く子供たちのざわめきにかき消されてしまったようでした。
　やがて男は、子供たちを、ネズミのときと同じように城門の外に連れ出し、どこへともなく消えてしまいました。そして、子供たちは二度と、ハーメルンの町へ戻って来ることはありませんでした。

「しかし、この話を初めて読んでもらったときには、何だか本能的な恐怖を感じたな」
「どんなふうに？」今日子が身を乗り出してきた。
「あ、いやね、たぶんこの話は、約束を破ると痛い目に合うよという教訓話なんだろうけど、それとは別に、笛吹き男に連れて行かれる子供たちを親が引き止めることができなかったということが、子供心に怖くてね」
「鋭い感想ね。笛吹き男がネズミを退治する件は、後になって付け加えられた創作で、この話は、要は一人の男が、ハーメルンの町から一三〇人の子供を連れ出したということが主体となっているからね」
「どういうことだ？」山添は戸惑った。「後から付け加えられたとか、一三〇人の子供とか」
「だから、この話は史実なのよ」
「史実？」
「そう。本当にあったこと。グリム童話には、民間伝承をもとにしたものも多いんだけど、それでもこの話は、グリムの中じゃかなり異色だと言える。最近じゃ、グリム全集の中に収録されないケースも多くなっているみたい。創作じゃなく、史実の記録としての側面が強いからね」
　愛美も「収録」という言葉を使っていたのを思い出した。「それでか」
「何が？」
「愛美さんがさ、グリムの話はほとんど読んでいるのに、ハーメルンのこの話は知らないって言ってたから」
「さすがというべきね」
「何でもかんでも、愛美さん礼賛に置き換えるなよ」
「確かに」今日子は、らしくもなく苦笑した。
「愛美さんは、一組の児童全員が連れ去られた――と言っていいかどうかわからないが――唯一の目撃者だ」

「そういうこと、か」今日子は状況を完全に把握したようだった。
「まったく参っているよ。校長からは、事件性はないのだし、児童の家を訪ねるようなことはするなと釘を刺されているし、俺は月曜日に学校へ行くのが怖いよ」山添は、少しでも現実逃れしたくて今日子に訊いた。「ハーメルンの笛吹きの話が、史実だったと言ったよな」
「そう。一二八四年、六月二六日、ドイツのハーメルン市から、一三〇人の子供たちが忽然と消えた」
「日付までわかっているのか？」急に喉が渇いてくる。
「記録が残ってるの。ハーメルン市のマルクト教会というところの窓にも、この史実を伝承するガラス絵がはめられていたんだって。これは十七世紀に撤去されたんだけど、しかしその模写は、今でも伝えられている」
そう言って今日子は立ち上がり、パソコンを操作して、その画をモニター上に出してくれた。
そこには、笛吹き男が左側に大きく描かれ、右側には、男について、なにやら不気味な山の洞穴に向かう子供たちがいた。
「この画は俺もどこで見たことがあるな。えーと、この事件が起きたのは、一二八……」
「一二八四年」再びソファーに座った今日子が言う。
「しかし久我は、この事件について詳しいな。一二八四年というと、日本じゃ鎌倉時代か」
「二度目の元寇があって、そのときの得宗だった北条時宗が死んだ年」
「しかし……、そういうことって、その、起きるものなのか？」山添は、素朴な疑問を口にした。
「少なくとも、一三〇人もの子供が忽然と消え去ったということが、はっきりとしたかたちで記録されているのは、世界史の中でもこの一件だけだろうね」
「理由はなんなんだ？」
「昔からいろんな説が唱えられているんだけど、大きく四つに分類される」
「四つの説って、結局、謎なのかよ？」
「まあ、聞いてよ。でも山添くん、こんな話に付き合っていて時間、大丈夫？」今日子が逆に訊いてくる。やつの方がよほど忙しいだろうに。
「いや、心配はご無用」
もしかしたら、今日子からもたらされるであろうハーメルン事件についての知識が、自分のクラスの児童の大量欠席を解するための何かのヒントになるかもしれない。山添は、はかない期待を抱い

た。
「オーケー。じゃ、私の授業開始時間まであと一時間」今日子は優雅な仕草で腕時計に目をやると話を始めた。「なぜ、一三〇人もの子供が忽然と消え去ったか。現在までに支持を受けている説は四つ。うち一つは、何らかの事故に巻き込まれたという至極穏当なものね」
「しかし、その場合、笛吹き男が存在が意味のないものになってしまうな」
「そう」今日子が、なかなかわかってるじゃないという面持ちで頷く。「二つめは、子供たちが何らかの病気に感染した結果、町を出ていくことになったというもので、この説はさらに二つに分類される。一つは、その病気はペストなどの伝染病で、それに罹患した子供をその町から追放した、というもの。この説なら、後になってネズミの一件が追加されたことも説明がつくよね。ペストはネズミが媒介するから」
山添は喉が渇いてきた。「しかし、そういうことって……」
「伝染病に感染した病人をどこかに追放してしまうというのは、それこそ人類の歴史とともにあった行為だから、考えられないことはないんだけど、子供だけペストに罹患したというのもね、かなり無理がある。だからこの説はボツね」
「そうか」何となくほっとする。
「病気説のもう一つは、子供たちが舞踏病に罹患したというもので、これは古くから支持を受けているみたい。舞踏病というのは、身体が不随意運動を行う病気全般を指すんだけど、一般的によく知られているのはハンチントン舞踏病ね」
「その病気は俺も知っているけど、遺伝的要因で起きるものなんだろ。一三〇人の子供が一斉に罹患するというのも……」
「そう。だから舞踏病説もナンセンスだね」
「今は一応、病気説というのは否定されているんだな」
「でも、そうやって何かにとり憑かれたように練り歩く様子を昔、舞踏病と称していた可能性は十分にあるし、広い意味での舞踏病説というのはありだと思うのよ」
「なるほど。浮かれた子供たちがなんらかのきっかけで、ハイテンションになってしまい、やがてどこかへ消えたということは考えられる範疇ではあるな」
「うん。でもさ、これまたそういう例は他にもあっただろうし、ハーメルンの一件だけが、長く語り継がれている理由にはならないよね」
「じゃ、あとの二つは？」
「一つは、子供の十字軍」

山添にとっては初耳の言葉だった。
「ハーメルンの事件が起きたのは、十二世紀後半。十字軍は、だいたい九世紀から十三世紀にわたって行われていて、確かに少年少女義勇軍も編成されている。最初は、子供たちによる自主的なものだったようだけど、徴兵されるようなケースもあったと思うし、十字軍とは別に、司教勢力と市民の戦いに子供たちが駆り出されたという説もある」
「笛吹き男は、徴兵官か。しかし、親はそれを指をくわえて見ていたというのか？」
自分が子供のときに感じた恐怖が、何十年かぶりに突き上げてくる。そもそもこの、ハーメルンの事件が起きた当時、子供というものは、社会の中でどのような存在であったのか？
「子供といっても、この時代、何歳くらいまでを指すのか、それすらもわかっていない」今日子も同じ思いを抱いているようだった。
「一つ言えるのは、今も、子供を兵士にするということは行われている……」
「今でさえそうなんだから、十三世紀では普通のことだった、ということか」山添は、気分が落ち込んでくるのがわかった。
今日子は続ける。「でも実際のところ、子供――明確な定義はないけれども――の戦争における戦闘力は、当然、大人よりも下回るよね。だから、戦士として有効だったかというと――」
「それでも、子供が実戦に参加していたとしたら」山添は恐る恐る訊いた。
「おそらく、人間の楯みたいな使われ方をしたんだと思う。今だって」
「やめてくれ。言いたいことはわかるから」と、今日子の話をさえぎる。「ハーメルンの謎の話を続けてくれ」
「わかった。で、この子供の十字軍説と似たようなものに、東方植民説というものがある。これが四番目の説」
「東方植民？」
「当時のドイツは、さかんに東方植民していて、その役割を子供や青年が担っていたらしいのね。笛吹き男は、その植民募集官だというもの」
「笛吹き男についていった子供たちは、親の土地を相続する見込みがない子たちだな」
「そうなるだろうね」
そこで山添は、根源的な疑問に突き当たった。「あのさ、子供というのはたいてい複数生まれるものだよな。でも、親が田畑なりを相続させることができる子供は基本的には一人。じゃ、その親の田畑なりを相続できなかった子はどうなるんだ？」

「そこのところをどうするかってことは、人類が近代になるまでずっと解決できなかった問題だろうね」
「つまり、その」山添は、また息苦しくなった。「子捨てということが行われていた、か」
「ハーメルンの事件があった頃、十三世紀の世界の人口は約三億人弱だったと推定されている。産業革命前の十八世紀の初頭で五億人強だから、もう本当に微増。人口が増えていないということは、十人の子供がいたとしたら、単純に考えればそのうち二人しか生存が許されなかったってことよね」
「昔は、十人子供がいるなんてことは珍しくはなかっただろうしな」
「一つには避妊手段がなかったこともある。でも、多産の一番大きな要因は、スペアとしての子供が必要だったということだと思う」
「スペア？」
「そう。土地なり、あるいは中世のドイツだったら、ギルドやツンフトの権利でもいい、それを相続させるためには、子供が一人いれば十分。男の子でなくても、婿を取るという方法もある。ただ、その相続権を持つ子供――多くの場合、長子なんだろうけど――が何かで死んだとき、どうすればいいのか。子供の死亡率が乳児に限らず、今とは比べものにならないほど高かった時代では、どうしても多くの子供をつくっておかなきゃならない。だから多産は、二律背反なのよ。幸いにしてというべきか不幸にしてというべきか、相続候補の子供もスペアの子供も、今でいうところの就学年齢まで生きてしまった場合……」
「子捨て、か」
「十人子供がいて、八人が病気などで死ぬというのは、あまり考えられないから」
「そう、なのか」
「でも、やっぱり子捨ては最終手段だよ。人類は、そこをなんとかするために、社会制度を整えてきたんだと思う」
「というと？」
「日本の場合は、要らない子の吸収という点では、長らく寺社勢力が大きな役割を果たしていた。権力を拡大していくための尖兵、つまり僧兵などにするわけよね。今と違って仏教産業従事者は妻帯なんてできないから、基本的には子供は残せない。要らない子の処分ということと、仏教の戒律はきわめて相性がよかった」今日子は、生々しいことをクールに言う。「でも、信長、秀吉、家康の三人が、この寺社勢力を徹底的に叩いて縮小させた。で、その代わりに、当時の世界では類を見なかったような大都市を現出させ、そこに、要らない子の吸収という役割を持たせた。農村出身で、田畑を相続す

る見込みのない子は、そういう大都市ならではの大店などに丁稚奉公に行かされていたわけ。そして、本来相続すべき長男に何かのことがあれば、再び実家に呼び戻された。つまり都市は、余っているけれどもスペアとしては必要な子供を一時的にプールしておく役目を担っていた」

「中世のドイツには、そうした余った子を吸収できるような大都市はなかった」そう言ってから山添は「あ」と声を上げた。

「だから、東方植民だった。要らない子たちの、ごくごく穏当な処理策として、開拓植民としてよその土地にやる。子供たちとて、植民ということに新たな夢を見出しただろうし。例の笛吹き男は、その植民者募集官だった」

「なるほど」そう見るのはきわめて妥当だろう。しかし、と思ってしまう。子供の頃、『ハーメルンの笛吹き』を読んで感じた、何とも不穏さはなんだったのか。相続の見込みのない子を東方植民に出した、では、あの不気味な謎の解決としては穏当すぎる――。

「なんだか納得いかないって顔ね」今日子がにやにやしながら、こっちを見てきた。

「納得いかないってわけじゃないんだが。ちょっとね、拍子抜けしたというか」

拍子抜けした理由は、それだけではなかった。山添は、今日子のレクチャーを受けることにより、自身の学級の大量欠席事件について何らかの糸口を見出したかったのだが、しかし中世ドイツの東方植民と、二十一世紀の日本の児童大量欠席とは、どう考えても接点がありそうもない。

「ねえ、ハーメルンの謎が、東方植民じゃまずいの？」

「いや、そんなことはないんだが……」

「私もそう思うよ」

「え？」

「私も、東方植民説じゃおかしいと思う。だって、要らない子をなんとかするっていうのは、ことハーメルンに限らず、人類の長い歴史の中での課題だったわけでしょ。今でさえ、親から見捨てられたあげくに奴隷的労働をさせられている子が、世界にはたくさんいる」そう言って一瞬、今日子は目を瞑った。「それなのになぜ、ことさらにハーメルンの一件だけが今日まで伝承されているんだろう？」

「それはグリムが……」

「違う。グリムは伝承をお話にしたに過ぎない。まず伝承ありき、なのよ。おかしいと思わない？　東方植民はドイツのあらゆる都市で行われていたはずよね。なのになぜ、ハーメルン、この伝承のみで世界に知られているような町だけに、こうした話が悲劇として伝

わっているんだろう？　それに今、ハーメルンの町には舞楽禁制通りというものがあって、ここでは放歌高吟してはいけませんということになっているけど、それって現代になってからの感覚よ。悲劇は二度と繰り返しません、といった感じの」
「十三世紀の人にとっては、一三〇人の子供の失踪は悲劇じゃなかったというのか」
「そこまでは言わない。ただ伝承の在り方が、なんだかあまりにも現代的で腑に落ちない」
　話を終えると、今日子は腕時計を見た。つられて、山添も自分の時計に目を落とす。「16:32」とあった。
「もう時間だな」そう声を掛けた。今日子は、確か、五時から授業があると言っていた。
「この話の続きはまたにしよう。もし愛美を待つんだったら、ここで待っていてもいいよ」
「愛美さんの授業は何時まで？」
「小五のトップゼミクラスは、土曜日は八時四五分まで」
「今日のところは帰るよ」山添は立ち上がった。「その時間までビールを断つのは、俺にとっては拷問だ。だいいち、八時四五分なんて時間なら、愛美さんの親が迎えに来るだろ。そのときに俺があれこれ訊くのもね」
「愛美のお母さんは迎えに来ないよ」
「どういうことだ？」山添は足を止めた。
「愛美はいつも、一人で帰ってる」
「夜の九時に、か？」
　そう訊くと、今日子は少し目を伏せて言い訳のように言った。
「うちでは、親が迎えに来れない塾生については、タクシー会社と提携して、ワゴンタクシーの送迎サービスをやっているし、愛美はそれを利用しているから」
　なるほど、それだったら自転車も乗せられると一応は納得してから、山添は再び訊いた。「しかし、そのサービスは料金がかかるんだろ？」
「まあね」今日子は、隠し事がばれたときの子供のような顔をした。
「愛美の場合は、そっちの方も特待扱いってことにしてある」
「たいした入れ込みぶりだな」山添は呆れ、そして「タクシーで帰るんだったら心配もないし、今日のところは帰るよ」と言った。
「そうだね」
　とりあえず、今日子とこんなふうに話せたことだけでも収穫というものだ。近いうちにまた知恵を借りることになるだろう。「携帯の番号教えといてくれ」し言った。
　今日子は山添の携帯の番号を訊き、それにダイヤルしてくれた。

「それじゃ、近いうちに」
立ち上がった山添に、今日子が声を掛けてくる。
「ハーメルンの話に興味があるんだったら、いい教科書があるよ。阿部謹也さんという学者が著した『ハーメルンの笛吹き男』という本。今は文庫にもなってるし、中央商店街の文々堂あたりだったら売ってるんじゃないかな」
「サンキュー。探してみるよ」
その阿部氏の著書を読みながらハーメルンの事件について調査すれば、こちらのハーメルン類似事件についての手掛かりが得られるかもしれない。そう自分に言い聞かせて廊下に出ようとした山添に、再び後ろから声がかかった。
「あと、愛美の劇的な学力アップの謎についても、ちょっと調査してみてくれないかなあ」
「オーライ」そう言って、山添は後ろ手を振った。

4

頭がガンガンする。山添は、ベッド横のテーブルに置いた時計を見た。八時半過ぎ。目覚ましが鳴らなかったということは、今日は休日か。目は開いたもののわかったのはそれだけで、しばらくの間は何も考えられる状態ではなく、しかし何かをしなければならないという焦燥感だけがあり、浴室まで這いずるようにして行って熱いシャワーを浴びたら焦燥の正体が判明して、ますます頭が痛くなってしまった。
自分の担任している児童が全員いなくなったというのに、俺は手をこまねいていなければならないというわけか。くそっ、と酒臭い息とともに小さく悪態をつく。校長が何と言おうが今日こそは調査に乗り出してやる。そう決意したが、決意はしたものの身体は言うことを聞いてくれず、山添は再びベッドに倒れこんだ。
昨日は、と思い出してみる。
今日子と会った後、繁華街に出て、今日子が薦めてくれた『ハーメルンの笛吹き男』を手に入れ、さらに阿部謹也氏の著作のうち、本屋にあった『中世の窓から』と『甦える中世ヨーロッパ』を購入した。帰ってじっくりこれらの本を読もうと一度は決めたものの、しかしこうした状況の中、一人暮らしの部屋の中で文献に取り組むのもどうにも気が滅入るような気がして、明るいうちから店を開けたばかりの焼き鳥屋ののれんをくぐった。そこで、好物の地鶏白肝の串焼きを肴に生ビールをまず二杯、さらにはきーんと冷えた冷酒の一合瓶を三本。それで勢いがついて、ビートルズパブになだれ込

み、キープしてあったバーボンのボトルを空けたあげくに、ニューボトルを入れてさらに飲み、それから先は……、よく覚えていない。

脱ぎ捨ててあったズボンの後ろポケットから財布を取り出し、中身を確かめてみる。空っぽだった。次に、カーテンを開けてアパートの駐輪場を見る。自転車はない。なけなしの金をはたいて、タクシーでここまで帰ってきたわけか。

これも脱ぎ捨てたのだろう、床にばんざいのかたちでうつぶせになっていたジャケットの中で携帯のくぐもった着信音がした。あわてて取り出して発信元を確認する。「瀬上」とあった。北高の同級生で、去年の盆の同窓会で会って以来だ。

「お目覚めさわやか、とはいかないようだな」電話の向こうで瀬上がからかうように言う。

「なんでわかるんだよ？」

「やっぱり覚えてないのか。昨日の晩遅く、俺の携帯に電話してきたろ」

「何て？」

「お前さ」瀬上は呆れたように言った。「小学生の失踪事件が起きていないか調べろ、明日の朝一番に俺の携帯に報告しろ、それが市民の安全を守るおまわりの責務だ！　なんて、すごい剣幕だったんだぞ」

「すまん」山添は力なく謝った。瀬上は、N南署勤務の警察官である。

「まあ、いいや」毒気を抜かれたように瀬上は言った。「それで、善良な市民の方から警察へのご依頼の件なんだけど、今日の七時現在、そういう報告は、県警本部、各所轄署とも受けておりません」

「本当にすまん」山添はとりあえずほっとした。「しかし瀬上、今日は休みだったんじゃ」

「市民の方々の安全を守るおまわりには、休みなんてねえよ。なんてな、俺は休みだけど後輩に訊いてみた」

「ありがとう」こんな俺に比べて、瀬上はなんていいやつなんだろうと思う。

「しかし山添、なんかあったのか？　ずいぶん荒れていたようだが」

心配してくれる瀬上には、すべてを話さざるを得ないだろうと判断した。

山添の話を聞いた瀬上は言った。「でもよ、集団誘拐とか、集団失踪とか、そういうわけじゃないんだから、あんまり心配しなくてもいいんじゃないのか？　長く教師やってりゃ、一度くらいはそういうこともあるんじゃね？　それとも、お前の教え方が下手で、み

んなボイコットしちゃったとか」
　瀬上の軽口に、あらためて思いあたった。なんでそこに、今まで気づかなかったのだろう。
「おいおい」山添が沈黙していると、少しあせったような瀬上の声が電話口から聞こえた。「勝手に傷つくんじゃねえよ。今のは冗談だってわかるだろ。ていうか、何で俺が、野郎の同級生に対して、こんな恋人を取り成すようなこと言わなきゃなんねえんだよ」
「そうだな」しかし、そこに原因があるのなら、これは何としてでも解明しなきゃならない。
「おい」再び瀬上が言う。「お前、勝手に動くなって校長から釘刺されているって嘆いていたよな。昨日の電話で。そういうときは、きちんと言い付けを守るのが正しい組織人というもんだ。それに探偵まがいのことは素人の教員がやるもんじゃない。何か、事件の匂いがするようだったら、おまわりさんがきっかり動いて、しっかり解決してやるからよ」
「頼もしいな。とりあえず今後、子供の捜索願いが出たら、すぐに教えてくれないか」
「任せろ」瀬上は請け負ってくれた。「でも当然ながら、そういうことは民間人には漏らしちゃいけないんだぞ。お前だから、特別にやってやるんだからな。他言無用だぞ」
「わかった」
「それから」
「まだあるのかよ？」山添が訊く。
「お前、久我にアプローチしてみたら」
　瀬上が言い、山添は少し焦った。
「どういうことだ？」
「お前、昔から久我に惚れてたろ？」
　そんなことを唐突に言う瀬上の意図がわからない。山添は訊いた。
「お前は、久我に会ったりしているのか？」
「いや。でも久我のこと、気にしているやつは多いぜ。ライバル多数だからがんばれよ」そう言って、瀬上は一方的に電話を切った。
　まったくわけがわからないまま、アパートの窓から下を見下ろすと、自転車置き場の向こう側の駐車場に、愛車のスイフトスポーツが止まっているのが目に入った。そういえば、車なんてものにずいぶん乗っていないな。山添は、二日酔いの頭を揺らさないように静かに着替えると、着脱式のカーナビを持ってアパートの階段を、これまたそろりそろりと下りた。

5

スイフトのエンジンを掛け、ダッシュボードのアタッチメントにカーナビを取り付ける。そして自作のルートガイドを呼び出した。五年一組の「家庭訪問コース」だ。

児童の住所・電話番号に関するデータは、このカーナビと学校に置いてあるノートパソコンの中にしかない。どちらも私物だ。ノートパソコンは自室に持って帰って自分用にも使いたいのだが、半年ほど前に禁止になった。学校と自宅の中途で、ノートパソコンを入れた教員の鞄が置き引きされるという事件が発生したからだ。

山添はスイフトを発進させた。カーナビに設定したコースは、川南小学校の通学区の中でも、一番遠い地域から訪問するようになっていた。

川南小学校の通学区は、主に三つの団地から成っている。桔梗が丘団地、紅葉原団地、みどり台団地だ。そして川南小学校は、桔梗が丘団地の一番端にある。団地は、もとからあった丘陵のてっぺんを削るようなかたちで造成され、それら元丘陵・現団地の間を縫うように国道が走っている。その国道に沿って、昔ながらの住宅が続き、また市営住宅などもあった。こうした新旧の住民が、川南小学校の通学区を形成していた。

桔梗が丘団地、紅葉原団地、みどり台団地は、団地といっても戸建て中心の分譲地であり、一九七〇年代半ばに造成された。したがって初期の入居者は現在では老齢であり、団地住民の中で小学生の子を持つ家族は限られている。川南小も、七〇年代から八〇年代半ばにかけては、各学年最大六クラスを持つに至ったが、九〇年代後半より顕著になった全国的な少子化よりもさらに極端な少子化によってクラス数を減らしている。このままいけば、近隣の小学校と統合ということになっても何の不思議もない。

だいたい……、と山添は思う。団地がいっぺんに出来る。小学校学齢の子を持つ家族が一挙に増える。そうすると、市町村としては小学校を設置せざるを得ない。だが、当然ながら子供は成長し小学校を卒業する。通学区全体の所帯数は変わらなくても、児童の数は減っていく。しかし小学校が統廃合されることはなかった。少なくともこれまでは、だ。と山添はつぶやいた。これからはそうもいかないだろう。

ただ、一介の教員である自分がそんな高所からの視点を持っても仕方ないとあっさり思考放棄し、車を走らせることに専念する。ナビが示す最初の訪問地は、川南小からは一番遠い、隣の小学校通学区に隣接した、みどり台団地の久保優輝宅だ。

桔梗が丘団地の坂を下って国道に入り、ほんの一〇〇メートルほど走ってから、みどり台団地へと上っていく道に車を乗り入れる。すると、周りの様子がいつもと違うことに気付いた。坂の両脇には

歩道があり、きれいな植樹が続いているはずだが、その植樹の多くに何やら看板が掛かっていて、雰囲気が穏やかでない。

山添はいったん車を停めて下り、その看板の文字を確かめてみた。「産廃処理場建設、絶対反対！」「子どもたちに安心できる環境を！」「住宅地に産廃は要りません！」などとある。看板の脇に書かれた署名は、「みどり台団地自治会」である。

まったく知らなかった。通学圏なのだし、自分の耳に入ってきても、よさそうなものだが……。しかしもし、このみどり台団地に住む児童の保護者が何らかのかたちで自分に相談してきたとしても、自分としては、どうすることもできない。あるいは、相談されたらされたで、迷惑に感じたのではないか。そう思うと、昨日、今日子の塾で感じた、教員としての自分に対する嫌悪の続きがやってきそうな気がして、あわてて車に戻った。

山添が、運転席側のドアノブに手をかけると、後ろから大きなクラクションとともに轟音が聞こえた。何が起こったのかわからず、とにもかくにもドアに張り付く。山添の背中のすぐ後ろを何か大きなものが、空気の渦を巻きつつ、かなりのスピードで通過していった。大きなダンプカーだった。後ろの荷台に、市発行の産廃業者指定マークが貼り付けてあったから、この看板に関係した車なのは明らかだ。ということは、事はかなり進行しているのか。

気を取り直して車に乗り込み、久保優輝の家に向かう。

優輝の家は、みどり台団地の一番上の区画の一つで、道からさらに階段を上るという構造を有していた。したがって優輝の家から二軒分ほど手前に車を止めた山添から窺えるのは、道に面した石垣をくりぬいたようなかたちでつくられている駐車場だけであり、そこには車はなかった。日曜日とあって、家族でどこかに出掛けているのだろうか。山添は車を発進させ、その駐車場の中を人が歩くほどのスピードで確認してみた。優輝のものらしき自転車が駐車場の奥に置いてあるのがちらと確認でき、なんとなくほっとする。

さらに車を走らせる。次の目的地は、ここから二区画下った玉井直哉の家だ。周囲はまったく閑散としている。それが、このあたり一帯の高齢化を物語っているように思えた。

山添は、直哉の家の前の通りに入ると、車を減速させた。直哉の家は確か青い屋根と見当を付けて行くと、その家は、工事用の足場のパイプに覆われていた。どういうことだ？　できるだけエンジン音を響かせぬよう、家の前をゆっくりと通り過ぎてみた。直哉の家に、何らかの工事が入っていることは間違いない。外壁の塗り替えか。そういうこともあるだろう。しかし、何か釈然としないものを感じた。

さらに、団地のゆるやかな坂を下る。次に訪れた鈴木有理の家に

は、「賃貸物件　入居者募集」の看板が立っていた。
　山添は混乱した。有理は、すでに引っ越してしまったということか。そういえば有理の家の電話は、「この電話はこの電話はお客様のご要望によりおつなぎできません」と応えていたように思う。
　そのとき、山添の車のバックミラーが光った。誰かが後ろからパッシングしたらしい。ここに駐車するなということかと思い、もう一度バックミラーを覗き込むと、見慣れた車が映っていた。旧型の白いマーチ。ありふれた車種と色ではあったが、この場所でこの状況で、山添に何らかの合図を送るのは、春山先生しかいないだろう。
　給水塔が立った大きな公園沿いの歩道に乗り上げるようなかたちで駐車し、車から降りた山添に対して、「やっぱ、来てたのね」と春山先生が、咎めるような、宥めるような微妙な口ぶりで言った。
「居てもいってもいられなくて」山添は、取ってつけたような言い訳をした。「それで先生は、私の監視というわけですか」
　背中が、どんっと叩かれる。頭が揺すられ、二日酔いがぶり返す思いがする。
「別に校長に頼まれたわけじゃないよ。ばばあの、ま、これが本当の老婆心ということで勘弁してよ」
「はあ」
「でも」春山先生がたたみ掛けるように言う。「私たちの小学校の通学区で何かが起こっていることは確かのようね」
「産廃処理場建設のことですか？」
「みどり台はね。桔梗が丘だって小児科が突然廃業したり、その小児科の前にあるスーパーももうすぐ閉店するって噂だし」
　小児科閉院の一件は、山添も聞いていた。通学区に一軒だけ古くからある小児科で、必然的に通学区の児童たちのほとんどが何らかのかたちでお世話になっていた。集団予防接種は今はもうないけれど、それが実施されていた頃は、いつも担当してくれていたという。
「あの春山先生、こんなところで訊くのもなんですが、例の噂は……」
　その小児科、水野小児科の院長はかなり高齢で、隣県の公立病院に小児科医として勤務している「若先生」がいずれは戻ってきて継ぐというのが、このあたり一帯の住民の予測であり希望だった。しかしながら「若先生」は三ヶ月ほど前、出会い系サイトに「中学生と援助交際希望」という書き込みを行ったとして逮捕された。自宅のパソコンからは、小中学生女児の裸の写真が大量に見つかり、児童ポルノムービーもダウンロードされていたという。「若先生」は一貫して犯行を否認しており、今も拘留中だが、やはり社会的な地

位の高い人物の犯行ということで、新聞テレビも比較的大きく報じ名前も出た。むろん水野小児科の「若先生」の名前など、このあたりでも一部の人しか知らなかったし、その事件と水野小児科を結びつける人も少なかったのであるが、老院長は、医院自体を閉院してしまった。

「結局、それが院長の責任の取り方だったんだろうね」春山先生は、噂を肯定するような言い方をした。

「しかし、黙っていれば、噂なんてすぐ消えてしまうでしょう」

「それができないのが、父親ってものなのかもしれない」

山添は、水野小児科の透明なドアに貼られていた「都合で閉院いたします」と書かれた紙がはがれかかり風に揺らされていた様子を、暗然とした気持ちで思い出していた。

「ま、今日のところは引き上げようよ」春山先生が言う。

「そうですね」山添はこの場は春山先生の意見に従おうと決めた。しかしその代わり、一つの任務を果たしておこうと考える。「二組に、本居愛美さんっていますよね？　どういう子です？」

「どういうって……」春山先生は怪訝な顔をした。「何が訊きたいの？」

「成績、というよりも、ズバリ、頭の性能ですね」

「おっと、直球できたわね。まず、成績ということからいこうか。成績は申し分ないです。主要四教科の各項目は全部『よくできる』だし、体育や音楽、図工も得意。生活態度全般もほぼ全部『よくできる』と付けている」

「春山先生は……」一瞬ためらってから訊いた。前から訊いてみたかったことでもある。『『よくできる』派ですか？」

「それは絶対評価大好き派か、という意味？」

山添は頷いた。現在では、小中高の通知表および調査書は絶対評価となっており、その子の中でそれが最大限であると教師が認めたら「よくできる」であるとか、調査書ならば「５」の評価を与えることができる。「５」はクラスで七パーセント、「４」は二四パーセントとしていた相対評価に比べ、教師の恣意性がきわめて高い評価制度と言えた。したがって教員の中には、すべての子のすべての項目に「よくできる」を付ける者もいる。イデオロギストがきわめて多い教員の世界にあっては、そうした極端なことも起こりえた。山添は、もしかしたら春山先生もその口か、とちらと疑ってみたのだ。

「んなわけないじゃん」というのが春山先生の答えだった。

「そうじゃなくて、愛美さんは、相対評価で五段階評価したって『オール５』だよ」

「それは、いわゆる地頭がいいということですか？」

「そうとばかりも言い切れないな」春山先生はにやりとして山添に向き直った。「ねえ、どうしてそんなこと訊くの？」

「あ、いや」当惑しながらも、山添は春山先生に今日子の疑問をぶつけてみようと考えた。個人情報漏えいという思いが頭をかすめたが、春山先生なら問題ないだろうと勝手に判断する。

「うん」山添の話を聞き終わった春山先生は莞爾とした。「そうだろうね。さすがに全国三位とはびっくりしたけど。残念ながら、今の公立小学校の評価システムじゃ、児童の本当の意味での学力を測ることはできないし、測ること自体が悪だとされている部分もある。でも、そんな中でも、愛美さんは明らかに違うんだよ。それが、他の児童にもわかるから、あの子は一目置かれているんだよね。悪ガキの竜彦さんや拓郎さんだって、愛美さんの言うことだけは聞くから」

「なるほど」

「とにかくあの子は宝だね」春山先生は確信を込めて言う。「私たち教員にとっても、この町にとっても、そして日本にとっても」春山先生は、自ら信じるところを披露したことで照れてしまったのか、「んじゃ、先生も早く帰んなよ」と言ってそさくさと車に乗り込んでしまった。

去っていく古ぼけたマーチのテールランプを眺めながら、やはり見ている人はしっかり見ているんだな、今の公立小学校も捨てたもんじゃないなと、他人事のように山添は思っていた。

アパートの自室に戻ると、ベッドに倒れこんだ。自分のクラスの児童が全員欠席という事態に遭遇して以来、精神的にも追い込まれていた。その疲労が、睡魔となって襲ってくる。山添はそのまま目を閉じた。

目が覚めたのは、もう夕刻だった。冬の頼りない陽射しが、カーテンごしに最後のサービスをまさに終えようとしているところだ。

携帯をチェックしてみる。着信履歴はなし。今日は何事もなく過ぎたようで、いいことなのか悪いことなのかわからなかったが、とりあえずテレビを点けてみた。

五時半からの笑点、六時からの全国ニュースをベッドの上でぼんやり眺めた後、ローカルニュースの時間になった。これは一応、見ておかなければならない。

「今日午前、県教育庁義務教育課課長の沢村俊之さん四十六歳が、自宅で首を吊っているのを家族が発見し、警察に通報しました」

山添は飛び起き、ベッドの上に正座した。ニュースは続ける。

「沢村さんは、一昨年四月から現職にあり、小中学校選択制を推進してきました。学校選択制については賛否両論ありましたが、しか

し警察はとくに事件性はないとしています」
　思わず携帯に手がいく。着信履歴から「瀬上」を探し、発信ボタンを押しかけて思いとどまった。ニュースで示された沢村課長の自宅は南署の管轄のはずだ。やつがこの一件の処理に関わっているとするならば、いかに事件性はないとはいえ、今は部外者からの電話など迷惑以外の何者でもないだろう。
　山添は、姿勢を正座から胡坐に変えて考える。沢村氏とは、直接の面識はない。ただ、県の教育界にあってキーパーソンであり、何かと矢面に立たされている人物であることは知っていた。ニュースで触れていた学校選択制にしても、その説明会において、導入に反対する市民団体と議論したこともあったらしい。山添が聞いた限りでは、沢村氏はそうした交渉事でも、粘り強く冷静に対処できるタイプだったらしい。つまり、自殺とは縁遠いタイプとも言えた。
「ま、人間、他人には窺い知れない事情や性向を抱えているものですからねえ」そうつぶやきながら、この沢村課長の自殺と川南小学校の児童大量欠席の一件は、何かつながりがあるのだろうかと考えた。むろん、答えは出なかった。

6

　翌朝、山添は六時過ぎに登校した。
　川南小の場合、児童の登校時間は、七時以降と制限を設けている。あまり早く来られても、学校内に教員がいない状態では無用心であるし、また地域のお年寄りや児童の保護者に依頼してある通学路の交通整理および安全確保も、早い時間帯からでは無理があるからだ。こうしたタイムテーブルに沿って、山添はおよそ六時四〇分を目処に出勤していた。ただ、教頭だけは毎朝それよりもかなり早く出勤してくることがわかっていたので、今日はそれに合わせる必要があった。
　教員用駐車スペースで待ち構えていると、白いＭＲスポーツで乗り付けた教頭は、山添が職員用駐車場に人待ち顔で立っているのを確認したようで、訝げな顔をした。
「おはようございます」山添は声を掛ける。
　教頭は五十過ぎの女性で、児童や保護者向けの発行物に「趣味愛犬のくっさい匂いを嗅ぐこと」などと書いてしまう、ざっくばらんな性格だ。生まれた頃から家に犬がいて、犬の匂いとともに育った山添とは何とはなしに気が合った。
　山添は、彼女が出張中だった先週金曜日に起こった事件を報告した。
「全員欠席？」教頭は再び怪訝な顔をしたが、とにもかくにも、朝

の職員会議の欠席と、ずっと五年一組に張り付いていることを許可してくれた。

五年一組の教壇に立つ。いや、教壇なんていうものは、この川南小にはない。山添が通っていた小学校にはあったようにも思う。あの頃の「先生」は、尊崇と畏怖の対象だった。今でも山添は、小学校、中学校、高校のときの担任の先生、大学のゼミの指導教授に年賀状を書くときは少しばかり緊張する。しかし、いざその先生というものになってみると、クラスの児童全員に欠席されるという情けない立場に追い込まれていた。

隣の二組の前の廊下からは、なにやら人の気配がしてくる。腕時計を見ると、七時を少し過ぎた時刻だった。二組にはもう登校してきている児童がいるのだろうと思って廊下に目をやる。こちらの様子を窺っていたらしい愛美と目が合った。愛美は一組の教室に入って来た。

「みんなお休みなの？」と、教室を見回しながら訊いてくる。

「まだ七時過ぎだからね。これから来るかもしれないし」山添は、心にもないことを言った。「一組のことは心配しないで、愛美さんは自分のお勉強の準備を」

そう言いかけて愛美を見ると、ぽろぽろ涙をこぼしている。

「先生、かわいそう」

山添は当惑した。小学生に同情されている自分の立場がなかなか喜劇的で、ちょっと信じられない思いだった。

愛美はそんな山添の心持ちを知ってか知らずか、「いいわ、私がなんとかしてあげる！」と、やけにきっぱり宣言したのだった。

「いや、愛美さん、これは一組のことだから、先生が考えればいいことだから。愛美さんのお仕事は、一生懸命お勉強することとお友だちと仲良く遊ぶことでしょ」山添は、しごく当たり前のことを言ってみた。

「そうだけど……」と、愛美は納得しかねる様子である。

そのときだった。廊下で声がした。「げっ！　今日も一組、誰もいねーよ。どうなってんのよ、これ？」

利光竜彦だった。続いて数人の男子が歓声とも奇声ともつかぬ声を上げる。

愛美は廊下の方をきっとした目で見、そして叫んだ。「な〜にやってんだよこらぁ！　教室でおとなしくしてろ！」

山添は、愛美の口ぶりの豹変にも驚いたが、竜彦たちはもっとだったらしく、すごすごと二組の教室に引き返して行った。春山先生の「あの子は一目置かれているんだよね。悪ガキの竜彦さんや拓郎さんだって、愛美さんの言うことだけは聞くから」という言葉が、

図らずも証明されたかたちとなった。
「あのくらい、ね、言ってやらないと駄目なのよ。あいつらには」
愛美は、少し恥ずかしそうに言った。
そういえば、と、思う。小学校五年から六年という学齢は、女子と男子の、精神的身体的発達の差が顕著に顕われる時期だ。むろん、女子の方が心身両面で発達が早い。だから、一般的には中学受験では女子が有利である。したがって私立共学校においては、女子のボーダーを男子よりも高く設定している学校が少なからずある。
山添がそんなことを考えていると、結論付けるように愛美が言った。「私も、彩香たちが消えた理由が知りたい」
「あ、いや、だから愛美さんは……」
「私も協力するから、一緒に謎を探ろう」愛美は目を輝かし、「じゃ」と言って教室を出ていった。
なんだかなあ……。愛美の後姿を見ながら、複雑な思いにかられていた。
それから二十分ばかり、クラスの児童が登校してくるのを待ったが誰も来ない。昨日、通学区を見て回った時点でなんとなく感じていたことではあったが、やはり落胆した。
職員会議を終えた春山先生が、教室に入ってくる。「一応、一組のことは全教職員に連絡したから。教頭が校門に立って登校児童をチェックしたけど、やっぱり一組は全員欠席のようね」
「そうですか」山添はため息をつく。
「警察の方はどうする？　もう一度、校長からでも訊いといてもらう？」
「いや、その件については、同級生に県警の警察官がいるんで、もし何かそれらしい事件があったら、すぐに電話してくれるよう頼んでいます」
「だったら心強いね。その同級生って北高の？」
「そうです」春山先生が自分の高校の先輩に当たることを思い出していた。
「山添先生は北高の何期生？」春山先生が訊いてくる。
「新制四十四期ですが、先生は？」
「三十期」春山先生は言った。「で、その大先輩からお願いなんだけどさ、今日、県教委の沢村課長のお通夜に川南小代表で出席してくれないかなあ？　お通夜は五時からだって通達が入っていたんだけど」
なるほど、その時間に動けるのは、担任クラスの児童が全員欠席している哀れな教師の俺だけか。
「そんな顔しないの！」昨日に引き続き、また背中をどんと叩かれた。「あんたのクラスが全員欠席になっているけど、でもこれは川

南小学校全体の問題なんだから」
　春山先生の言葉使いが、「山添先生」から「あんた」になっている。それだけ親身になってくれているのだろうと好意的に解釈することにし、「えーと、沢村課長と先生とは？」と尋ねた。
「同級生よ」
「そうなんですか。そりゃショックですね。今回の一件は」山添は、間が抜けた返答をした。
「ま、ショックといえばショックなんだけど、うーん、なんていうのかな、自殺という事象は、あの人と正反対の位置にあるような気がして、な～んか納得いかないのよねえ」
「高校時代はどんな人だったんです？　沢村課長は」
「プリンシプルがはっきりしていたわね。教員を目指すって決めていたから、それに必要のないことは一切やらなかったし、必要なことはどんなことでもやった」
「そういう沢村氏を春山先生も憎からず思っていた、と」
　山添は軽口を叩いてみた。すると、意外なことに春山先生は下を向き、ぽつんと「まあね」と言ったのだった。
　山添は北高のセーラー服を着た春山先生を思い描いたが、それが脳裏に像を結ぶとすぐに後悔し、首をぶるぶると振った。

7

　沢村のお通夜は、市内中心部にある、N市最大の葬儀場で行われていた。急な通夜、しかも平日午後五時ということもあって出席者は百人に満たないようであったが、さすがに献花の数は多かった。
　読経が終わり、焼香の段になって霊前に進んだとき、山添はちらと親族席に目をやった。
　喪主の席で頭を下げている女性は三十代後半くらいか。細面の整った顔立ちで、こりゃとても春山先生は敵わないなと場に似合わぬ不謹慎なことを考える。
　その隣は、北高の制服を着た娘でこれが長女だろう。さらにその隣には、白いブラウスに黒いスカート、すなわち私服であるところの喪服を着た女子がいた。小学校五年か、あるいは六年くらいか。次席は中年男性であり、彼は沢村の兄弟だろうから、沢村には二人の女児がいたということがわかった。
　しかし、二人の娘ともまだまだ精神的にも経済的にも父親の庇護を必要としている年齢である。その意味でも、沢村の自殺は不可解ではあった。
　斎場を出ると、あたりはもう暗かった。車寄せをダウンライトが

照らし、その中に二つの人影が見えた。そのうちの一つが声を掛けてくる。N県警南署の瀬上だ。直接会うのは去年の盆の同窓会以来半年ぶりであったが、あらためて見ると、やはり体格がいい。強豪とはとても言えなかった北高ラグビー部を、キャプテンとしてプロップとして牽引し、花園に連れていった高校時代からほとんど変わっていないだろう。その横には、背丈は瀬上と同じくらいだが、肩幅が三分の二程度のひょろっとした人物が立っていた。

山添は、彼らに近づくと小声で言った。「沢村課長は自殺だって確定したんだろ」

「もちろんです」瀬上の横にいた男が答えた。

「こいつ、谷口っていうんだよ。俺らよりも五つ下でビー部の後輩。こいつらのときは、花園行けなかったけどな」瀬上が紹介してくれる。

「瀬上さんはそればっかり」谷口は苦笑しながら、「山添先生のことは、いつも聞いています」と頭を下げた。

「どうせ碌なことじゃないでしょう。で、何でお前がここにいるの？」と、瀬上に訊く。

「まあ、一応ってことで」瀬上は曖昧に言ってから、急に真面目な顔をして山添の顔を覗き込んできた。「お前も公務員の端くれなんだから、守秘義務ってのがあるのはわかっているよな。守れなかったら、俺が県教委だか市教委だか、とにかくそういうところにかけあって懲戒免職に追い込んでやるからな」

「いきなりなんだよ？」

そう訊くと、瀬上は大きな身体をもそもそいわせてスーツの内ポケットからなにやら紙を取り出し、山添に見せた。

「なんだこりゃ？」その紙には、数字が羅列してあった。山添は当惑する。

「一種の暗号だろうな。沢村氏の自宅でもらった」

「てことは、ダイイングメッセージってやつか」

「そんな大それたもんじゃないだろう。第一、沢村課長の遺体は明日焼かれてしまうんだぜ」そこで瀬上は声をひそめた。「ここで話す話題じゃないな。とりあえず出よう」

三人は斎場を出た。弔問者たちが帰る車で、アプローチは混雑し始めている。その車の列を避けるように、葬儀場の長く続く白い石垣にもたれた瀬上は再び口を開いた。

「沢村課長は自宅で首を吊ったわけだし、奥さんと娘さん宛の遺書はあった。だから自殺以外の何者でもないわけだが、もしもこれが何かを示しているとしたら……」

「それが怖くて、いてもたってもいられず、お通夜に出向いて来たわけか」

「まあ、そういうことです」瀬上の代わりに谷口が答えた。
「それでこれはダイイングメッセージじゃないとしたら何？」山添は再び訊く。
「沢村課長が生前、死ぬ三日ほど前に、下の娘さんに出題したクイズのようなものらしい」
山添は、さきほど見た娘のうつむいた白い顔を思い出した。「これは、あの子からもらったものなのか？」
「そうだ。昨日事情を訊きに行って、最近変わった様子はなかったか何でもいいから教えてくれと頼んだら、下の娘さんが泣きながらこれをくれた。なあ山添、お前これが何を意味しているのか、わかるか？」
「南署には、暗号解読班とか、そういうのはないのか？」
「んなもん、あるわけないだろ」瀬上が憮然として答え、横で谷口が噴き出す。
「で、お前、これがわからないかなと思って」
今度は、山添が噴き出す番だった。「わかるわけがないだろ。犯罪捜査の専門家が鳩首会議を開いて、かどうかは知らないけど、知恵を寄せ合ってそれでもわからなかったんだったら、俺にわかるわけがない」
「だけどお前、小学校教員だろ」
「教員だからって頭がいいわけじゃないよ」
「お前さんの頭の性能は、高校時代から、よーく知っているよ。だからそっち方面に期待したわけではない」
「じゃ、なんだよ？」山添は憮然とした。
「だからこれは、沢村課長が小学校五年の娘さんに出題したものなんだよ。小学校五年生にも解けるということを前提として作成されていると考えていい。お前、五年の担任だろ」
やはり沢村課長の下の娘は、小学校五年生だったのかと思う。
「つまり俺に、小学校五年生の立場になって考えてみろ、と。大人の知性を用いてではなく」
瀬上は黙ってにやにやしている。
「まあ、なんだ。ちょっと人を馬鹿にした話だな」
「お前、そういうこと言える立場なのかよ」瀬上は山添と谷口の間を遮るように立って小声で続けた。「例の児童大量欠席の件、何かあったらすぐ連絡してやるからよ」
山添は降参した。「わかった。俺にできるかどうかわからないが、小学校五年担当教員の経験とノウハウを総動員してやってみる」
しかし……、とも思う。その数字の羅列を見た限り、自分で解けるという感じがまるでしない。山添は、今日子の顔を思い浮かべた。

「守秘義務は絶対守れよ」そう言って瀬上は、一台の携帯電話を山添に渡してくれる。
「これは？」山添は怪訝に思った。
「警察の、情報提供者専用携帯。万が一の情報漏れってこともあるからな。Ｎ署刑事課の直通番号も、俺の携帯番号も、谷口のも全部登録してある。連絡するときはこれを使ってくれ。俺もそれ宛にかけるから」
山添は、その携帯を見つめた。
「言っとくけどな、この携帯、私用に使ったりしたら、公金横領になるんだからな。懲戒免職どころじゃなく懲役してもらう。気を付けろよ」
「じゃあ要らない」
「駄目だ。これで連絡してくれなきゃ困る」そう言って、瀬上は顔を覗き込んできた。「でもよ、久我今日子にだったら、暗号も見せてもいいし、連絡にこの携帯を使ってもいいぞ。一昨日の夜、お前が俺に電話してきたとき、久我に会ったぞーってかなりハイになっていたからな。こっちとしては、荒れてるんだか、興奮しているんだか、ま、たぶん両方なんだろうけど、まったく圧倒されましたよ」
山添は心の中で舌打ちした。

8

アパートの自室に戻り、自宅用のラップトップパソコンの電源をオンにした。冷蔵庫から缶ビールを取り出しデスクに座って一気に三分の一ほど空けると、パソコン画面がＯＳのそれになった。
ワープロソフトを呼び出し、手帳に書き写しておいた数字の羅列を打ち込みプリントアウトして改めて見てみる。

5　63　350
8　54　256

4　21　490
8　52　555

9　21　564
4　28　458

ダイイングメッセージのような大それたものではないにしろ、数字で何かのメッセージを表わしたものと考えていいだろう。瀬上の話によると、沢村は、こうした暗号クイズを娘たちによく出していたそうだ。娘たちもそれを喜んでいたらしい。

確かに、と思う。子供はクイズが大好きだ。そして、沢村家のように知的なクイズを行う家庭の子は、概して学力が高い。親が知的なことが好きだということを子供は本能的に察し、その親の価値観に同調、あるいは迎合しようとするからだ。沢村家は、そういう家庭の典型だったのだろう。しかし、父親が最後に出したクイズを、下の娘は結局解くことができなかった。

山添はあらためて印字された数字を見てみた。わかるのは、左の数字が一桁数字で、真ん中が二桁、右が三桁であるということだけだ。

山添はビールをぐびりと飲む。酔ってしまえば、瀬上に指摘された通り、もともといいとは言えない頭の性能がさらに劣化してしまうのはわかっていたが、しかし飲まずにはいられない。頭を回転させなければならないのに、精神は酒による安らぎを求めていた。半分は働くのを放棄し、しかし残りの半分は酒という刺激を受け、理知的とはとても言えない奇妙な回転をしだした脳でかろうじて思考する。

こうした数字をメッセージとして使おうという場合、まず考えられるのは、数字と文字が置換関係にあるということだろう。たとえば「1」が「あ」または「A」を示す、といった具合にだ。むろん、それではあまりにもあからさまなので、この暗号らしきものに現われた数字でいえば、「5」が「あ」ならば、「63」は「い」というふうに、ランダムに対応する数字と文字を設定するという方法もありうる。ただし、こうした数字で文字を表わす方法では、それを示した対応表が必要であり、それでは味方同士の「暗号」にはなっても、父が娘に出題する「クイズ」にはならない。

山添は、さらに思考を進めた。ＡＳＣⅡコードというものがある。コンピュータで使われる文字コードで、「A」なら、二進法で「1000001」、すなわち十進法なら「65」という数字が割り当てられている。これで、たとえば「ＡＣＴ」という「文字」を伝達しようとするならば、十進法記述では「65　67　84」とすればいい。そして、二進法記述、十進法記述という「進数」が頭に浮かんだところで、山添はヒントを得たようにも感じた。

現在、インターネット上での買い物などでクレジットカード番号などを送信するための暗号として、ＲＳＡ法というものが用いられている。これは、任意に選んだ二つの素数を利用するものだ。

たとえば、「3」という素数と「13」という素数を選んだとする。

この積の「39」をいわば進数として使うのがＲＳＡ法だ。この場合、整数は「1」から「38」までで、「39」が再び「1」となる。そして、「38」までの数に対して「39」を進数として累乗を求める。たとえば「1」の累乗は当然ながら「1」「1」「1」……であるが、「2」の累乗は「2」「4」「8」「16」「32」と来て、次は「26」(64-38)となり、その次は「14」(128-38-38-38)だ。

自分が伝えるべきクレジットカードの最初の四桁が「5432」だとする。これを「39」という進数と、「3」という公開鍵を用いて暗号化するならば、「5」は三乗すると「11」(125-38-38-38)、「4」は三乗すると「26」(64-38)、「3」は三乗すると「27」、「2」は三乗すると「8」だから、「5432」は「1126278」に変化する――むろん、現実に用いられている暗号は、百桁以上の非常に大きな素数が使われており、さらにそこから一定の加減乗除をするので、こんな単純なものではないのだが……。

あるいは、この「暗号」もそうしたものか？

たとえば、一番上の

5　63　350

について、検討してみる。「5」が公開鍵で「63」が進数、「350」が暗号にするべき数とする。すると、「27」(3の三乗)、「62」(5の三乗-63)、「0」で「27620」となる。これが、何らかの意味を持つ言葉になるのか？

仮に「2」と「7」で一つの文字を表わすとしよう。「2」が五十音の「い」の段を表わし、「7」が「ま」の行を表わしているとしてみる。すると「み」になる。次に「62」だが、これは「6」を段にするわけにはいかないので逆転して考えると、「は行のい段」で「ひ」。合わせると「みひ」になり、「0」を仮に「ん」とすると、「みひん」……。意味が通じないが、ここで諦めるわけにもいかず、次の

8　54　256

についても、同じ法則でやってみる。答えらしきものは、「441546」だ。今度は綺麗に二桁づつ並んだ。五十音の行と段を適合すると「ておへ」または「てなへ」になる。

先ほどの「みひん」と合わせてみても、言葉としてまったく意味を成さない。

「わけわかんねー」教え子たちが、自分の理解の範囲外の記述に出くわしたとき一様に叫ぶ台詞を口に出してみた。暗号解読を放り出し、ベッドにごろんとなる。すると、頭に何か固いものが触れた。昨日の夜、読みかけたまま開きっぱなしになっている『ハーメルンの笛吹き男』だ。それを取り上げ表紙を眺める。珍妙な格好をした男に子供達が石をぶつけている画が描かれていた。「ブリューゲル

の『セント・ヨーリスの縁日』より」という記載がある。つまり、これは、あのハーメルン事件をモチーフにしたものではないということか。しかし、こうした道化男が子供達にとって、いわゆる「鬼」の役をするということは、ヨーロッパの縁日などにおいては、よく見られた光景なのかもしれない。

山添は目を閉じた。愛美の言葉を思い出す。彩香も、夏美も、桃子も、瑤子も、亮太も、大志も、勇介も、み～んな昨日、連れて行かれてたよ。緑や赤や黄色や、いろんな色の生地を使った服を着た男の人に――。

それにしても、先週の金曜日から、いくつ謎を抱え込んでしまったのだろう。クラスの児童全員欠席の謎、ハーメルンの笛吹き男のような格好をした男の謎、沢村課長の自殺と不思議な暗号の謎、そして愛美の学力の驚異的な伸長の謎……。そうしたことについて考えるという行為を、脳が拒否しているように感じた山添は、その脳の命令通り眠りに落ちてしまった。

9

翌朝――。

山添は誰よりも早く登校した。朝、目覚めたときは、昨晩目覚まし時計をセットしなかったことを激しく悔やんだが、しかし意外にも時計の針は五時半を指していた。昨晩、あのまま眠ってしまったことが睡眠時間の確保につながり、かえって早起きができたようだ。

今日は職員会議に出席する。教室で児童たちが登校してくるのをあてもなく待つのも辛かったからだ。

職員会議では、山添のクラスのことの他、沢村課長の告別式への出席とそれに伴う授業の受け持ち変更などが議題となった。その結果、校長と沢村課長の元同級生である春山先生が午後一時からの告別式に出席するので、山添は三時限目から、二組の授業を担当することとなった。一組の児童は出席して来ないと判断されたわけだが、もし誰かが来た場合は、五年の副担任であり音楽担当の中津美子先生が対応する。山添は、二時限までは一組で待機だ。

来るあてのない児童を待って、教員卓の椅子に座る。何もすることがない。自然、ポケットから例の数字が羅列された暗号ともクイズともつかない紙片を取り出していた。

数字の羅列を、眺めてみる。二段の数字列で一つの文字を示すという考えは捨てきれないでいる。しかし、数字列から訴えかけてくるものは何もない――。

人の気配を感じて、ふと顔を上げると、目の前に愛美の顔があった。一時限が終わり、五分休みなのだろう。にも関わらず、一組を覗きこむ二組の児童がいないのは、この愛美の「統制」が効いているのかもしれない。

「先生、それ何？」

あわてて紙片を隠そうとするが、愛美に一瞬早く取り上げられてしまった。紙に目を近づけて食い入るように見ていた愛美が、「これ、暗号ってやつだね。ホームズのお話とかによく出てくる」と訊いてきた。

「いや、そんなんじゃないんだ」山添は意表を突かれ、取り成すように言った。「ちょっとした遊びだよ」

「遊びにしては、先生、すっごく真剣な顔して見ていたよ。だいたい今、先生はちょっとした遊びなんかしている状況じゃないでしょ。ということは、もしかしてこれ、一組の子たちがみんないなくなったことと関係ある？」

愛美はさすがに鋭い。しかし、そうだと答えるわけにもいかない。

「それでこれ、先生、何のことだかわかったの？」愛美が重ねて訊いてきた。

「いや、わからない」つい正直に答えてしまった。これじゃ、ここに書かれた数字が、愛美が言うところの暗号であると告白してしまったようなものではないか。

「ね、先生、私が解いてあげるよ。こういうの超得意だから。そしたら彩香たちも一組に戻ってくるかもしれないじゃない」愛美は、山添の目を真剣な面持ちで真っ直ぐに見てきた。「私、先生のこと助けるって決めたから！」

そう宣言すると、愛美は、その紙片を取り上げようとする山添の腕をかわし廊下に走り出てしまった。まずいことになったと思ったが、二組まで行って取り返すわけにもいかない。

ただ、愛美の「先生のこと助ける」という言葉に、少なからず勇気をもらったのは確かだった。小学五年生からなぐさめられた、とは思わなかった。愛美があんなに真剣である以上、こちらも真剣に向き合わなければならないだろう。愛美に対してはもちろんだが、ここ数日、山添の周りで起きている不可解な事象に対しても、だ。

三時限から六時限まで、二組の授業を担当した。六日ぶりの授業を、山添は素直に楽しんだ。やはり教員は、児童に相対してこそだということを改めて確認する。一組の現在の状況について茶化してくるような子も、あるいはいるかも知れないと危惧したが、そうしたことはまったくなかった。これも、愛美の力が何らかのかたちで

作用しているのかもしれない。
　久しぶりに充実した思いで職員室に戻ると、しかし、いきなり気勢を削がれた。
「一組の件、大変ですよ」今野先生が愚痴をぶつけてくる。今野先生は理科担当で、現在は担任を持っていない。歳は確か、五十を幾つか超えているはずだ。「今日は電話が鳴りっぱなしで」
　やはり、一組児童全員欠席の件は学校中の家庭に広がっているようだった。
「すみませんでした。後は私がやります」
「お願いします」そう言って、今野は席を立った。
　山添は思い出す。先週の土曜日も彼は職員室にいた。担任を持っていないのに珍しいな、と少しばかり不審に感じたものだ。
　教員の休日出勤の取り扱いについては、市町村ごと、あるいは学校ごとで異なる。出勤した場合は必ず記録し、その代わり不要不急の出勤はしないようにと指導しているケースと、タイムカードには付けないのだから休日に学校に来て残務をこなしてもいいだろうという意識が支配的なケースだ。川南小は後者だった。したがって、土曜日や日曜日に教員が学校に来て何をしていても、他の教員から不審がられるということはない。自分もそうだということを棚に上げて今野のことをいぶかしく思っていた山添は、電話の鳴る音で、今のここにある現実に引き戻された。
「はい、川南小学校です」そう言って受話器を手にする。
「あの～、五年一組のことなんですけどね、いったいどうなっているの？」中年と思しき女性の声がした。
　やっぱりこれか。山添はうんざりした。昨日も、同じ内容で数件かかってきていた。当事者である山添がうんざりしているということは、今野先生はじめ電話に出た他の先生はもっとうんざりしているわけで、山添に対する感情も微妙なものになっているであろうことは容易に想像できた。
「県警にも相談してみたんですが、何の事件性もないようですし、お休みするしないは個々のご家庭のご事情ですから」昨日から答え続けている内容をそのまま伝えた。
「とはいえ、全員欠席なんて異常でしょ。責任問題ですよ！」
　電話の主はヒステリックに言う。どの児童の保護者だろう？
「失礼ですが」山添は訊いてみた。とたんに電話が切られる。昨日も、山添が受けた限りではそうだった。その後も二件、同様の電話がかかってきて、まったく同じ対応をするが、しかしさすがに疲労を覚えた。窓の外を見ると真っ暗だ。沢村氏はもう焼かれてしまったのだろうと考える。あの二人の娘は、今頃、どんな思いでいるのだろう？

また、電話が鳴った。腕時計を見ると七時を回っている。これで最後にしようと決めて電話に出た。
「お世話になっている五年二組の本居愛美の母親ですが……」
とたんに脇の下が汗で冷たくなる。受話器を握る手のひらにもじわりと汗が滲んでくるのがわかった。動揺をなるべく出さずに、
「五年一組担任の山添です。二組の春山は本日は所要で早退なので私が承ります」と答えた。
「愛美が、まだ帰って来ないのです」
やはり、という言葉が、何度も頭の中で響いたが、努めて冷静に言った。「愛美さんは、今日は塾などは？」
「火曜日はありません」
「ということは、いつも四時半くらいには帰宅しているわけですね」
「はい。お友達と遊ぶときもいったん家に帰る約束になっていましたので」
愛美の母親――確か本居優子という名前だった――は、存外に冷静である。そうした状況なら、もっと取り乱すものではないのか。自分こそ取り乱してしまいそうな山添は、なんとなく敬意を抱いた。
「愛美さんは、携帯かＧＰＳ端末のようなものは持っていますか？」
「持っていません」
「わかりました。では愛美さんは、クラスでは誰と親しかったですか？」
「瀬名ちゃんと美晴ちゃんですが、二人とも自宅にいました」
「警察へは？」
「一応、しました」
「それで何と？」
「それが」落ち着いていた本居優子の声が少し震えた。「この状況では動くことはできない、そう心配することはないのではないか、と」
「わかりました。お母さん、今、ご自宅ですよね。その電話の前を動かないでください。いつ、愛美さんから電話がかかってくるかもしれないし、こちらから電話をするかもしれない。愛美さんは私が探します」
電話番号をメモして電話を切った。これは完全に、俺のせいだ。居残っている教員が数人いたが、彼らにこのことを話す気にはなれない。
職員室を飛び出し、スイフトを自宅アパートに向け走らせる。着くやいなや、アパートの外階段を駆け上がりパソコンに駆け寄るとスイッチをオンしたが、なかなか立ち上がらない。思わず、くそっ

たれと大きな声を出す。ようやく立ち上がったパソコンで、昨日打ち込んだ数字の羅列を呼び出しプリントアウトした。
　おそらく愛美は、この暗号らしきものを解いたのだ。そしてそれが、一組の生徒が全員欠席したことと関係があると確信したのだ。なにしろ、俺が深刻そうな顔をして紙片を見ていたのだから。
　なんとか解読しなければ。そう思って紙片を再び見つめるが、何のインスピレーションも浮かんで来ず気ばかりが焦る。くそっ、どうすりゃいいんだ。警察も動いてくれないというのに。今度、瀬上に会ったら怒鳴りつけてやる。
　瀬上の存在が頭に浮かんだことで、ようやく出口を見つけた気がした。そういえばやつは、この暗号を今日子になら見せてもいいと言っていた。
　急いで今日子の携帯に電話する。授業中である公算が高いが、祈るような気持ちだ。だが、今日子の携帯は「ただいま電話に出ることができません」と返答した。
　山添は少し躊躇したが、今日子の名刺を取り出して桃李館の代表番号に電話し、「久我先生をお願いします」と申し込んだ。「久我はただいま授業中ですが」という返答だったが、意を決した。
「久我先生の同級生で、市立川南小学校教諭の山添といいます。御塾塾生の本居愛美について、大至急お伝えしたいことがあるとご伝言ください。私は今からそちらに向かいます」そう言うと、紙片を持って、アパートの前にエンジンを掛けっぱなしで置いてあったスイフトに飛び乗った。
　この時間帯、桃李館がある市中心部へは通勤ラッシュとは逆方向となるので、道は比較的空いている。十分ほどで着いた。例によって高級ＳＵＶで混雑している狭い駐車スペースになんとかスイフトの鼻先をねじ込む。今日子は、塾の建物の前に出て待っていてくれた。
「愛美がどうしたの？」心配そうに訊いてくる。こいつにとっては、愛美は掌中の珠といった存在なのだろうと思う。
「失踪した」
「山添くんの口ぶりが尋常じゃなかったと言っていたよ」
　受付の講師がそう伝えてくれたのだろう。
「で、これだ」山添は紙片を差し出した。
「これは？」
「今は詳しいことを話している暇はない。これを解いてくれ」
「これが、愛美の居場所の手掛りになるんだね」
　さすがに今日子は回転が速かった。
「自殺した県教委の沢村課長が、小五の娘さんに出題した暗号クイズだ。今日学校で眺めていたら、愛美さんに盗られてしまった。こ

いつを解いて、俺を助けてくれるんだそうだ」
山添は、そのときの様子を思い出した。
「馬鹿。山添くんが涙目になってどうするのよ。これを愛美が解いたから、愛美はいなくなった。そうだよね」
山添は頷く。
「小学校五年生にでも解けるということを前提に、これは作成されているんだよね」
「そうだ。俺には無理だったが」
今日子は、ほんのしばらくの間その紙片を眺めていると、桃李館のガラス戸を開け中に入った。山添も後に続く。受付カウンターの横のラックから『駒場原宿事前精講 算数 小学5年』を取り出すと、ぱらぱらとめくった。そして、カウンターの中に「竹内先生」と声をかける。竹内と呼ばれた二十代後半と思しきいかにも切れそうな男が小走りにやって来た。彼も非常事態であることを感じているらしい。
今日子は「今、小五のトップゼミはどのへん？」と、竹内に『事前精講』を渡す。竹内はそれをぱらぱらとめくり、「このあたりですね」と指を挟んで今日子に示した。
今日子は頷くと、暗号が書かれた紙片をもう一度見た。「オーケー。たぶんこれね。電卓お願い」
カウンターの女性が急いで差し出す。桃李館全体に、山添と今日子の焦燥が感染しているようで、山添は恐縮した。
今日子は電卓を叩き、紙片に細かな数字を書き込み、また電卓を叩くという作業を繰り返した後、「わかった」と言った。そして、山添は今日子によって塾の外に連れ出された。
「答えは『まつい』」
山添は、今日子の顔を見る。「まつい、ということは人の名字だな。しかし、どこのまついさんなんだ？」
「これは、県教委の沢村課長が作成したものだと言ったわよね。その沢村氏と愛美には、何か接点があると考えられる？」
「いや、それはないだろう」
「だとしたら、この『まつい』は、この町なら誰でも知っている『まつい』でしかないじゃない」
「そうか」山添は、今日子の顔を見た。
今日子と一緒にスイフトに乗り込み、そのときに気づく。「お前、授業、大丈夫なのか？」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。ランデックまついの本社ビルまで飛ばしてよね、運転手さん！　ＨＥＲＥ　ＷＥ　ＧＯ！」

ランデックまつい――。元は松井組という地場の建設会社だ。地場といっても売上高は二〇〇〇億を超えており、全国規模のゼネコンランキングの中でも中堅ないしは準大手といってもいい存在である。むろん、県下では圧倒的なナンバーワン企業で、山添や今日子の同級生でそこに就職した人間も多かった。

その松井組が二年前、会社更生手続きの適用を受けた。倒産の原因は、当然ながら公共事業費の大幅削減だ。とくに、公共事業こそすべてという地方をホームグラウンドとし、しかし地場企業とは思えないほどに肥大化した松井組には、ことさらにダメージとなった。経営者一族である松井家の放漫ぶりも一因にあげられると、地元メディアは、それまでの大スポンサーについて掌を返したように伝えた。

しかしながら、松井組が大手ゼネコンにもひけをとらぬ営業力と技術力を有していることは事実であったので、会社更生にあたっては多くの企業が支援者として立候補し、その結果、松井組を手に入れたのは米国と中国の合弁ファンドだった。外資ファンドが、地場産業まで手を伸ばしてくるのは、やはりご時勢というものだろう。

そのファンド――ローウェン&パートナーズは、当然のように松井一族を放逐し、なおかつ大規模なリストラを行った。組合を解散させ、社員に相応の退職金を支払った上で全員を解雇。その上で、元社員のうち約半分を正社員として、残り半分のそのまた半分を契約社員として再雇用するという形態を採った。その際にＣＩも行い、社名を「ランデックまつい」に改めている――そうした時期に、なぜ大きな費用が掛かるＣＩを実施したのか、地元の人間には少々奇異に映ったものだった。さらに、下請け企業との関係も大幅に見直してきた結果、地域経済に与えた影響は少なくなく、もちろんそれは現在も尾を引いている。

ランデックまついの十二階建ての本社ビル――五年前に、松井一族の肝入りで新築されたもので、このビルもまた倒産の一要因とされていた――は、八時になんなんとする時間にも関わらず、最上階を除く全フロアに明かりが煌々と点いていた。本社ビルは表通りから一本入ったところに位置しているので、その向かい側の路肩に、容易に車を止めることができた。

ビルのファサードをバックに、小さな影がある。愛美だ。愛美は、なんだか儚げに身じろぎもせずそこに立っていた。山添と今日子は駆け寄った。

愛美はやはり心細かったのだろう、半べそをかいているようだった。しかし、それでも気丈に言った。「彩香たちが、このビルの中にいるんだよ。ここの人たちが、みんなを連れ去ったんだよ」

緊張の糸が切れたのか、愛美は肩を震わせた。

「愛美、無理しちゃ駄目よね。愛美は、愛美の家族だけじゃなく、この町のみんなの宝物なんだから」
今日子は中腰になり、愛美に目線を合わせ、春山先生が日曜日に山添に対して言ったのと同じことを言った。ビルのエントランスにいる守衛が、三人の様子を怪訝な顔つきで見ている。
山添と今日子は、ともかく愛美を連れて車に戻った。

「彩香さんたちがあのビルの中にいたってどういうこと？」山添はスイフトを発進させながら、後部座席の愛美に訊く。
しかし、今日子はその質問にかぶせるように言った。「まず、家に連絡しなきゃ」今日子は、携帯を愛美に渡す。
「あ、携帯使うの初めて」愛美は子供らしく反応し、ようやく笑顔を見せたようだった。
その様子にほっとした山添は尋ねた。「お友だちで携帯持ってる子は、どのくらいいるの？」
「うーんとね、クラスの女子だと五〜六人くらいかな」
「愛美さんも携帯欲しい？」今時の小学生のメンタリティについて少しでも詳しくなりたいという、小学校教員としてのいわば本能から訊いてみる。
「いや、携帯なんて小学生には要らない」今日子が口を挟んできた。
「どうして？　私は欲しいなあ。お母さんには言えないけど」
「いい、愛美。携帯電話は時間を奪う。たとえば、お友だちからメールが来たらどうする？」
「そりゃ返信するよ。一回やってみたい」愛美は、素直に言った。
「だよね。お返事しなきゃいけないって思うもんね。お勉強の途中だってするよね」
「たぶん……」
「でも、愛美みたいな子は大人よりも忙しいんだよ。やんなきゃいけないことがいっぱいある。いちいち返事してたら時間が足りなくなっちゃう。大人にもいるのよ。会社に行って、午前中はメールの返信をするだけで、他のお仕事が何にもできないって人が。パソコンのメールだってそうなんだから、いつも隣にあって、メールが着信するたびに音が鳴る携帯だともっとでしょ。携帯持っていると、携帯の奴隷になっちゃう。でも愛美は、誰の、どんなものの奴隷になってはいけない。愛美の、その頭のよさは、他のものから縛られてはいけないものなんだよ」
「わかった」愛美は、今日子の、今日子らしくもない長舌のお説教に辟易としたのか、ダイヤルをプッシュし始めた。自宅とつながったようだ。「山添先生と今日子先生が迎えに来てくれた」「うん、大

丈夫」といった会話が、途切れ途切れに聞こえて来る。
「それで、彩香さんたちがランデックまついのビルにいたっていうのは？」愛美が電話を切ったのを確認して、山添は尋ねた。
「うん。帰りに公園で、先生が持っていたあの暗号を見ながらいろいろやってみたら、答えは『まつい』だってことがわかったから、ランデックまついの住所を調べてあそこまで行ってみたの。この市で、誰でも知ってる『まつい』はランデックまついしかないからね」
愛美は、今日子とまったく同じことを言う。
「でも、受付で何か言われなかった？　そんなランドセルしょって」今度は今日子が、愛美の風体を見ながら訊いた。
「ううん。受付のお姉さんがこちらにどうぞってエレベーターに乗せてくれて、大きな部屋に連れて行ってくれたの」
「そこに、彩香さんたちがいたってわけか」
「そう。久しぶりだったんで私もすっごく嬉しくて、みんなに『何で学校来ないの？　山添先生が心配しているよ』って言ったのね。そしたら、それを聞いていたそこの先生みたいな人に……」
「追い出されたのか？」
「追い出されたというわけじゃなくて……。いろいろ訊かれそうになったんで、なんか怖くなって走ってエレベーターに乗って」
「それであそこにいたんだね」
「そう。でも帰りのバス代は持ってなかったし、どうしようかなと思っていたら、先生と、今日子先生まで来てくれて感激したわよ」
愛美の口ぶりがいつもの愛美に戻った。
「でも先生、あの暗号、分かったんだね」
「あ、いや」山添は焦った。
「そうか。今日子先生が解いたのか」愛美は、すばやく事情を察したようだった。
「おい」山添は二人に向かって言った。「あの数字の羅列が、何で『まつい』になるんだ？」
「ね、どうする？」後ろの席で、愛美がいたずらっぽく今日子に話しかける声が聞こえる。
「愛美、教えてあげなよ」
今日子はそう言うが、愛美は、「どうしよっかなあ～」と、あくまでもこのネタで山添をからかおうという所存らしかった。
山添は宣言した。「い～ですよ～だ。自分で解いてみるから」
愛美と今日子は、後ろの席で嬉しそうに笑ったようだった。
「ところで、愛美さんの家はどこ？」
「みどり台の横の市営団地」愛美が答える。「市営に当たったから、川南小に転校して来たんだよね」
山添はスイフトを走らせ、二棟建った市営アパートの間にある住

民用駐車場の空いているスペースに乗りつけた。「一言、お母さんに」と言ってから「保護者の方に」と言いなおし、「ご挨拶していくよ」と続けた。
「いいよ、先生。お母さんと私はものすっごく強い絆で結ばれているから大丈夫。私がちゃんと話せば、お母さんはわかってくれる」そう言ってから、愛美は思いついたように訊いてきた。「あの、ランデックまついのビルのね、会社の名前が書いてある表札みたいなのに、エル、エー、エヌ、ディー、イー、シー、エム、エー、ティー、エス、ユー、アイってあるんだけど」
「愛美さんは、英語もわかるの？」
「アルファベット程度だけどね。中学に入ってから困らないようにって、お母さんに教えてもらっているの。あ、もちろん、桃李館の勉強もちゃんとやってるよ」
愛美は今日子に気を遣っているようだったが、今日子はそんなことはまったく問題ないという口ぶりで「そのランデックまついのネームプレートを見て、なにか気付いたのね」と言った。
「そう。そのアルファベットの『C』だけが、大文字だった」
「どういうことだ？」山添が訊く。
「だから」今日子がその質問を引き取る。「ランデックまついの社名表記の中で『C』の文字だけが大文字だった。そうよね？」
今日子は小学五年生に対して、「社名」などという言葉を使った。愛美は頷く。なんだか、優秀な姉妹の前で、一人だけそれについていけない出来の悪い従兄弟、という気分になってしまった。
「それが愛美には、不思議に思えたわけね」
「そう」
「うーん」今日子が腕を組む。
「しかしそいつは、単なるグラフィックデザインってやつじゃないのか？」
「グラフィックデザインって？」愛美が目を輝かせる。
「グラフィックっていうのは、平面のデザインのことだな。ほら、雑誌の表紙とか、愛美さんが見た企業のロゴとか」山添は説明した。
「ふーん」愛美はいまいち納得していない様子だ。
今日子が代わって言う。「愛美が食べるお菓子のパッケージだって、美味しそうで思わず買ってしまいたくなるようなものもあれば、そうでもないものがあるでしょ。そんなふうに、デザインによって人の心を動かすことが、グラフィックデザインのお仕事なのよ」
「グラフィックデザインというものには、何かの意図があるってことだね」
さすがに愛美は理解が速く、そして最初の山添の「単なるグラフ

イックデザイン」とは真逆の結論に達したようだった。
「じゃ私、あの一つだけ大文字になっている『C』にどんな意味があるのか、調べてみるよ」そう言い残すと愛美は車から下り、手を振って一棟のアパートの中に消えていった。

10

「ねえ、酒でも飲もうか」二人になった車の中で、今日子が提案してきた。
「そりゃ嬉しいけど、お前、授業は？」
塾の授業が休講になるということは、一般の小中高や大学のそれとは大きく事情が異なる。塾の授業の受講者、というよりもその親は、支払った対価分は絶対に元を取ろうと考えるからだ。ましてや桃李館は、おそらく今日子の授業が看板であろう。
今日子は、携帯で塾に何やら連絡したらしく、「なんとかなりそう。まあ、いいんじゃない」と言った。
「どこで飲む？　とりあえず、車を置きにアパートに帰らなきゃならないが」
「山添くんの部屋でいいよ」
山添はどきりとした。
山添の１ＤＫのアパートに上がった今日子は、不思議そうにあたりを見回した。「ふーん、大学生の一人暮らしみたいだね」
「お前は？」
今日子が結婚しているのかどうか、まだ訊いていなかった。
「私も一人だよ。一応、塾の近くに部屋は借りているんだけど、塾に寝泊りすることも多いかな」
まったくお前はたいしたもんだよ、とつぶやきながら、この部屋に一脚だけあるアームチェアを勧め、冷蔵庫から缶ビールを取り出し今日子に放った。
「親父さんとお袋さんはお元気？　確か親父さんは高校の先生だったよね」ビールを受け取りながら今日子が訊いてくる。
「定年退職して、今は毎日昼から、いや朝から酒飲んでお袋を嘆かせているよ。教頭止まりだったからな。校長まで行ってりゃ、退職校長会がらみの出事も多くなるだろうけど、そういうこともなくて暇みたいだな。お前のところは？」
今日子の父親は、地元の新聞社の記者だったことを思い出していた。
「私が大学のときに胃癌で死んだ。母も、私が教員になって二年経ったときかな。やっぱり癌で、こっちはすい臓」
「そうか。それは知らなかったな。何もできなくてすまん」

俺たちはまだ三十台になったばかりだ。親父やお袋と死に別れるのはもっと先でいいんじゃないか。山添はため息をついた。
「お姉さん、いたよな」やはり美貌で、北高の伝説になっていた今日子の姉のことを思い出す。お前は天涯孤独なのかという思いを打ち消すように訊いてみる。
「結婚して京都にいるけどね。でも他人のようなもん」
「どうして？」
「姉貴は水産大、今の海洋大の食品関係の学科に行ったんだけど、そこで京都の老舗の仕出し屋の息子と知り合って結婚したのよ。と言えば、だいたい想像がつくでしょ。京都の老舗に嫁に行ったら、完全にそこの人間になるということ。実家なんてものはもうまったく関係ない。結婚以来、私が姉貴と顔を合わせたのは父の葬儀と母の葬儀、その二回だけ。しかも母のときは、向こうの親から『またか』と言われて、ようやくやって来た。まあ、結婚式の親族二次会で一度だけ一緒に酒飲んだ向こうの旦那がいい人そうなんで、それが救いなんだけど」
「そうか」
頭脳も、気概も、人望も、そして美貌も、なんでも持っているような今日子にも、ないものはあるんだな。山添は再び嘆息する。
「そんなことはどうでもいいんだけど」陰鬱な雰囲気を振り払うように今日子が言った。「この、愛美の一件で、敵がはっきりしたね」
「敵？」山添は訝しく思う。あの、ランデックまついが敵ということか。
「そう。愛美が言ってたでしょ。山添くんのクラスの子たちが、ランデックまついのビルの中にいたって」
しかし、どうして、会社更生手続きの適用を受けたとはいえ、未だに県下ナンバーワン企業であるランデックまついが、小学校の児童を連れ去らなきゃいけないんだ？
「なんとなくからくりが読めてきたよ」今日子が言う。
「どういうことだ？」
「実はね、山添くんのところみたいみたいにクラス全員欠席というわけじゃないんだけど、四～五人オーダーで欠席して連絡がないというケースは、何校かの小学校で発生していたらしいのね」
「……」
「こういうふうに考えたらどうだろう？　ランデックまついはゼネコンで、当然、宅地分譲や建売住宅分譲もやっている。じゃ、その住宅を売っていく際、一番重要なのは何かといえば住環境だよね。その近隣に病院があるとかスーパーがあるとか」
「しかし、このあたりじゃみんな車で行動するから、そういうことは……」

「そうとも言えないと思う。ガソリン価格は、『ピークオイル』と言われる二〇二〇年に向けて、これからどんどん上昇していく。もうこれは避けられない。そう考えると、徒歩で行こうと思えば行ける施設の有無は、大きな問題よ。今、『地方は車がないと動けない』なんて言われるじゃない。でも、車があっても動けない日もいずれ来るだろうし、それが日本の、地方の、いわば脆弱さよね」
「しかし、それはまだ先のことだろ？」
「そうだね。ただ今現在でも、車では通えない施設もある」
「学校か！」
「とくに小学校の場合、児童の足で通える距離というのは限られている。自転車通学させるわけにはいかないし、親が毎日送るということも考えられなくはないけど、行きはよくても帰りも、となると、なかなか難しいでしょ」
「小学校ってのは、だいたい児童の足で通える範囲に一校、というふうになっているんだが」
「だから、これからそうじゃなくなくなるだろうから、事は重大なのよ」
「少子化か」そう言って、自分の頭の巡りの悪さに愕然とする。
「確かに東京や大阪では、少子化は下げ止まりの傾向にある。でも、私たちのこの町、というよりも、地方都市はまた違う。日本の地方都市は、東京や大阪の企業の工場の進出で繁栄してきたという側面があるよね。でもグローバル化ってやつで、そうした工場がどんどん日本の地方から中国などに移って行ったわけでしょ。ということは、労働力の需要は、地方においてはとくに少なくなっているわけで、少子化は地方ではもちろんこれからも続くし、ますます顕著になるだろうね」
「なるほど」山添は憮然とした。
「それは教育公務員の削減を意味するし、私たち塾業界だって死活問題。でも、私は思うのよ。私たち子供相手の商売以上に、若年人口の流出とそれに伴う少子化で困る商売があるって」
「それが、ランデックまついみたいなゼネコンだと言うんだな」
「以前は、地方のゼネコンといえば、一に公共事業、二に公共事業だったと思う。でも、その公共事業が劇的に減ってしまえば、方向転換せざるを得ない。それがランデック松井の場合、自社による宅地造成と販売だった。この局面において、『まつい』というネームバリューは大いに威力を発揮するよね。購入者にしたところで、不動産会社の分譲物件よりも、ゼネコンの分譲物件の方が、なんとなく信頼を置けるから。でも、そうした不動産分譲に重きを置いていこうとした場合、そこには、今度は、地方における若年人口の流出とそれに伴う少子化いう壁が立ちはだかる。不動産物件の最大の顧

客は、小中学生の子供がいる夫婦だから」

「そりゃそうだな」山添は、１ＤＫの我が家を見渡した。子供がいなけりゃ、この程度のもので十分だ。

「これから家を買おうという家族にとって、近くに小学校があるかどうかというのは、とても重要な要素よ。しかも、そのレベルも問われる。もちろん今後、小学校の統廃合が進んでいったら、行政によるスクールバスのようなことも行われると思う。でもバスでの送迎というのは、ものすごい時間のロスよ。子供にきちんと学力を付けたい保護者は、小学校にスクールバスで行かなければいけないような場所には、おそらく家を買わない」

ここＮ県において、学校の統廃合が深度化しているという認識は、むろん山添にもあった。高校の場合は、県庁所在地であるＮ市こそ今のところないが、他の市、あるいは郡部では、もうすでに、三組の高校が統合されていた。また統廃合とまではいかなくても、毎年、三～四校程度で学級減が実施されている。

小中学校も、Ｎ市ではまだ統廃合はないが、それだけにクラス減が顕著である。小学校の場合、川南小のように一学年平均二クラスといった学校がほとんどだし、中学でも、一学年三～四クラス程度にまでなってしまっている。とくに中学では、これ以上クラス減が続くと、部活動に大きな影響が出ると危惧されていた。県庁所在地のＮ市でもこの有様であったから、他の市町村にいたってはもっと悲惨で、すでに統廃合された小中学校も数多くあった。

今後、こうした動きが加速化しても、あるいはＮ市において小中学校が統廃合されるケースが出てきても何の不思議もない。そして、そのいわば前段階として、Ｎ市では、小中学校の学校選択制が、昨年度から実施されている。

学校選択制は、平成十二年度から東京都品川区で実施されたことにより、広く知られるようになった。区内であれば自分の希望する学校を選べるというもので、東京都の場合、現在では十九区十一市に拡大している。同時に、各学校の評価システムも導入されており、これは成績のいい学校には予算を多く配分し、教育現場にモチベーションをもたらそうという趣旨らしい。

Ｎ市の場合は、そこまでは行っていない。学校選択制の目的にしても、通学区の一番端に住んでいる児童生徒の場合、隣接する通学区にある小中学校の方が距離的に近くなるケースもあり、その便宜を図るため、とされていた。また、まったくの自由選択制ではなく、本来の通学区以外の学校を選べる児童生徒の数の上限も、一学校一学年につき十人までと定められていた。

昨年度、鳴り物入りで始まったこの制度であるが、昨年度実績では、どの学校も、「利用者」は一学年五人に満たないというのが実

情だった。しかしながらこれを、学校統廃合への布石と見る教職員組合や市民団体もあった。なぜ、教職員組合が学校の統廃合に反対するかといえば、むろんそれは、ポスト減となってしまうからなのだが、もっと深刻な問題もあった。

現在までのところ、公務員の定年までの雇用は特別なことがない限り保証されている。けれどもそれも、今後の公務員改革の行方次第でどうなるかわからないことではあるし、また教員過剰になることはわかりきっているので、評価制度の導入とともに、公務員教員も不安定な地位に置かれてしまう可能性も大いにある。

「社会にとって子供ってどういう存在なんだろうね？」今日子が口を開いた。

今日子にしては、あいまいな言い方だと感じたが、「俺は、子供がいなけりゃ食っていけないし、事実、そうなりかけている」と、先ほどまで考えていたことを、山添は素直に口にした。

「私だってそう。じゃ社会全体にとって、子供ってどういう存在なんだろう？　今、少子化が大きな社会問題になっている。でも、これは本当に問題なのかな？」今日子は試すように訊いてきた。

「そりゃ問題だろう。年金にしてもその他の社会保障制度にしても、受益者と負担者がいる以上、その負担者がいなけりゃ崩壊してしまうわけで、そういう意味では少子化は困るよな」と、山添はしごく当たり前のことを言ってみた。

「つまり日本という国としてのシステムが、社会保障費の負担者がある一定数必ずいる、ということを前提につくられているということよね。ところが現実には、子供の数は減り続けてきた」

「しかし、何でこんなふうになってしまったんだろう？」山添は基本的なことを訊いた。

今日子が応える。「今は社会保障が発達しているから、親が年老いて働けなくなっても、子供に面倒みてもらう必要はない。でもその一方で、子供を育てるには、経費が掛かる。親子関係の収支バランスみたいなものが、大きく崩れちゃってるってことだろうね」

「桃李館に毎月相当額を納付しなきゃならないしな」山添は皮肉った。

「うん」素直に頷いた今日子は続ける。「でも、問題は金銭的なことだけじゃないのよ。子供がいれば、夜遊びなんてことはできなくなる。とくに母親はそう。そしてもし、その子供を幸せにしようとするならば――反論はあるかもしれないけど、少なくとも私の立場で言えるのは――学力を付けてあげなければならない。これがクセモノで、学力は、単に塾に行かせるとか、そういうもので付くものじゃないのよ」

「そうなのか？」塾の経営者である今日子がそうしたことを言うと

は、少し意外だった。
「学力伸長にとって一番重要なのは規則的な生活習慣だってことは、例の百マス計算で有名になった陰山英男先生の主張なんだけど……。このことは、文科省がやっている全国一斉学力テストの結果でも、ある程度証明されているよね」そう言って今日子はビールをくいと飲んだ。それでもう空になったようだった。「でも、子供に規則的な生活をさせるというのは、ことのほか難しいのよ。規則的な生活ということで一番重要になるのは早寝させることだけど、これは、九時か十時までには学校の宿題も、塾に行っていれば塾の宿題も全部終わらせるってことでしょ。親としては、たとえば子供が居間で勉強しているのに、そこでビール飲んだり、テレビ視たりするわけにはいかない。親もがまんしなきゃならないのよ」
それは山添にはよく理解できた。自分がそれとはまるで逆のケースだったからだ。「俺の父親は教員だったけど、俺が勉強していても、平気でナイター視ていたし、ビール飲んでいたけどな」
今日子は笑いながら、部屋を見回した。「そういや、山添くんの部屋、本が少ないね」
「率直なご感想、ありがとう」そう言って山添は立ち上がり、提案した。「もうちょっと強い酒飲もう」
山添はワイルドターキーのボトルを取りに行き、今日子が座っているアームチェアの前のローテーブルにどんと置く。そうしておいて、ショットグラスとミネラルウォーターボトルとデュラレックスの大振りなグラスを両手と顎も使って運んだ。
「知的なことよりも、こっちの方が好きなんだよ。まさに親譲りだな。俺の飲み方でいいか」ショットグラスにバーボンを注ぎ、グラスには、ミネラルウォーターを注いだ。
「サンキュー。じゃ、本題に戻ろう」ターキーを一口含んだ今日子は言った。頬のふちがうっすら赤くなっている。「子供ってのは、社会体制によって、絶対に必要であったり、そうじゃなかったりする存在だよね。しかも、今の日本のでは、子供を育てることが割りの合わない行為になっている。でもその一方で、社会保障のシステムは、未来の税収を当てにしたものだから、子供は必要。つまり、個人としては子供は必要なくても社会としては必要という、なんだかおかしなことになってるんだよ」
「そうした状況が、俺のクラスの子が全員欠席していること、その子たちがランデックまついにいたこととどう関係があるんだ？」
「ランデックまついもまた、子供を必要としているってことだと思う。塾の子たちに訊いたりしてみたんだけど、山添くんの川南小学校も含めて、児童の休みが目立つ学校の近くには、どうもランデックまついの分譲地があるみたいなんだよね」

「どういうことだ？」
「はっきりとしたことはわからないけど、子供のスカウトじゃないかな。今後は、小中学校も統廃合がどんどん進むでしょ。不動産分譲を行う側にとってみては、これは到底無関心ではいられない問題。だから……」
「そうか」山添も、ようやく思い至った。確かに、川南小学校の通学区に隣接する一帯では、この地区にはふさわしいとはいえない高級かつ大規模な宅地開発が行われている。そして、その分譲地にほど近い大西小と川南小は、統廃合ということを前提とするならば、児童獲得にあたっては競合関係となる。「こっちから、児童を引き抜いた、というわけか」
「基本的なラインとしては、ね。しかしまだわからないことがたくさんあるよね」
「そうだ。そうした行為は、ランデックまついとしては、割りに合うものなのか」
「うん、そうね。だいたい不動産分譲に重きを置くといっても、それだけであの図体の大きなランデックを支えられるとは思えないし、不動産分譲という事業自体、少子化で先細りになって将来的な展望が明るいとは言えない。だから背後には、もっと大きな陰謀、といっていいのかどうかわからないけど、そういうものがあるとしか思えない。ねえ、愛美は、ランデックの『C』の字だけが大文字なのが変って言ってたわよね。それも気になるし、私は『ランデックまつい』という名前自体もどうも気になるんだよ。ちょっとランデックまついのホームページを開いてみてくれない」
　山添は、三時間ほど前、暗号文を呼び出して以来電源を入れっぱなしにしていたパソコンのエンターキーを推してスリープ状態を解除すると、同社のサイトを呼び出した。
「ほら、この『ランデックまつい』の下に小さく『land design C』って記してあるでしょ」今日子が、モニターを覗き込みながら指摘する。「ランドデザインって……、大それた表現だと思わない？」
「地平をデザインする、か」
「まるで、自分たちは神だと言わんばかりの。しかも愛美が指摘したように『C』だけが大文字」
「でも、その『C』は、カンパニーのCだろ」
「違うと思う」そう言った今日子は閃いたようだった。「やっぱりこれはクリエイターのCよ。大文字のCで始まるクリエイターといえば……」
「造物主、か」
　今日子が大きく頷く。
「で、このネーミングが、お前の言うところの陰謀の根拠にもなる

というのか」
「うん」
　他の人間が言えば、一笑に付すところだが、他ならぬ今日子の考えだけに、笑うことはできなかった。なにしろ今日子は、山添がいくら頭をひねってもわからなかったあの暗号を一瞬のうちに解いてしまったのだ。山添は、じっと今日子を見つめた。
「今日のところは、帰るね」
　その視線をはぐらかすように立ち上がる今日子を、あわてて呼び止める。「あの、暗号について教えてくれ」
「愛美に、自分で解いてみせると宣言してたじゃない。アンチョコは駄目だよ」笑いながら今日子は言って、ちょっとよろけながらも玄関に向かいドアを開けた。「適当にタクシー拾うから」
　今日子が帰ってしまうと、まったく拍子抜けがしてしまった。男と女として、もうちょっと違う展開があったような気もしたが、そうした思いを、あるいは今日子に悟られ逃げられてしまったのかもしれない。だがそれ以上に、高校時代、遊びに来ていた友人が帰ってしまった後の空虚感にも似たものを感じ、あらためて山添は、今日子が大切な一時期を共有した人間なんだなと思い至った。そういや、今日子のやつ、俺の部屋には本があんまりないなんてことを抜かしていたな、と思い部屋を見回す。ご指摘の通りだった。あるのは話題の新書本と車のメンテナンス指南書くらいのものだ。
　俺が、父親というものになったらどうするのだろう。知的な雰囲気を家庭の中に創出し、それで子供を感化させたりもできるのだろうか。なかなかそいつは難しいぞと思ったが、それでも、ベッドの上に放り出してあった本に目が止まった。せめて、これらだけはきちんと読んで理解しよう。山添は、グラスにバーボンを注ぐと、『ハーメルンの笛吹き男』を手に取り読み始めた。

11

　またしても頭が重い。昨日の夜、というより今朝四時までかかって『ハーメルンの笛吹き男』を読破した。よくわからない部分もあったのでその度にネット検索し、ドイツ語のサイトまで出張した――むろんドイツ語を読めるはずもなく、翻訳ソフトの力を借りたのだが、機械翻訳された文章の読解にも時間がかかってしまった。ついでにいえば、三分の一ほど残っていたバーボンのボトルも空けてしまっている。さすがに酒臭い息で学校に来るわけにもいかなかったので、起きぬけにブラックコーヒーを二杯飲み、歯を丁寧に磨くとともにブレスケアの類いをさんざん口の中に吹き込んだのだが、何か発言すると酒が残っていることがばれそうで、職員会議の間中

黙っていることにした。しかし、そうした山添の目論見はすぐに破綻することとなった。

「五年一組の件ですが」教頭が会議の口を開く。「転校届けが五通、届いています。郵便で来たものではないですから、おそらく昨日の夜、学校のポストに入れられたものと考えられます。後で市教委の方に問い合わせてみますが……」

その一言で、山添はすっかり酔いが覚めた。

通常、転校届けの類は、クラスの担任に出されるのだが、それが無視されたかたちとなった。覚悟していたこととはいえ、さすがにがっかりする。教師失格の烙印を押されたようだった。

山添は立ち上がった。もうこの学校には俺はお呼びではない。それに、ことがはっきりした以上、俺が調査に乗り出すことにも問題はないだろう。

「教頭先生、今日は休みます。いや当分、休暇をいただきます」山添は、教頭の前に置かれていた転校届けを奪うように手に取ると、「これも借りておきます。後で私の休暇届とともに持ってきますから」と宣言し、相手の反応を待たずに職員室を出た。

職員用駐車場まで走ると、スイフトのエンジンをかける。かなり無理のある行動だったが、追いかけて来る教員はいないようだった。黙認、と解釈させてもらう。

車を走らせながら、カーナビを操作する。カーナビの検索ボタンから「氏名で探す」を呼び出し、「あ行」のところにある「遠藤宏」の表示を押した。転校届けが出されていた児童の一人である。

そのときだった。前方に人影を認めた。慌ててブレーキを踏み、ハンドルを左に切った。ぐわしゃと嫌な音がして、車が左手の家の塀にぶつかったことがわかったが、かろうじて人は跳ねずに済んだようだった。山添は半ばほっとし半ば落胆して車を下りた。

山添が先ほど認めた人影が、こちらを見ていた。歳の頃、七十歳台と思しき男性だ。その顔には見覚えがある。スクールガードのボランティアに立ってくれている老人だ。

「大丈夫ですか？」

声を掛けたが、老人は放心しているようだった。もう一度、声を掛けるとやっと反応し、「ああ、私のせいでこんなことに」と、大破したスイフトの左フロントを見やりながら言った。

「いや、私がカーナビ操作していて、前方不注意だったんです。それよりも、お怪我は？」クラスの児童全員に逃げられた上に、学校の近所で、しかもスクールガードボランティアに怪我をさせたとなれば、最悪の底が抜けてしまう。

「大丈夫です」彼は言った。

ひとまずほっとしたが、もう一つの問題が山添の視界に入った。

スイフトのフロントが、家の塀を派手に破壊している。
「ここはあなたのお宅ですよね」
そうですと答える老人に、山添は名刺を出して言った。「スクールガードで大変お世話になっています。お宅の塀の修理は責任持ってさせていただきます」
とにかく、塀からスイフトを引き剥がさなければならない。車に乗り込もうとした山添に、名刺をじっと見ていた老人が、思いのほか大きな声で声を掛けてきた。
「学校の、川南小学校の先生だったんですか」
「そうです。この度は大変なご迷惑を」
もう一度謝ろうとする山添に対して、老人は「小学校、あの小学校はなくなってしまうんですか？」と訊いてきた。
山添は意表を突かれた。大量欠席の噂は、近所にも広まっているのか。「その話をどこで？」と訊きかえすのが精いっぱいだ。
「銀行、です」というのが老人の答えだった。
「銀行？」意外だった。「よかったら事情を詳しく話してくれませんか」
「それはいいのですが、先生こそ、どこかに急いで行かれようとしていたのでは？」
「いや、いいんです。お願いします。宮城さん」山添は、表札を見ながら懇願した。
それを受けて、宮城はぽつぽつと話し始めた。

宮城は、市内で印刷業を営んでいた。会社組織ではなく個人事業としてである。事業内容は、軽印刷と製版。一般の人たちを相手とした年賀状印刷や名刺印刷などを手がける一方、大きな印刷会社から印刷工程の中の製版の部分だけを下請けしていたという。
しかしながら、印刷業は九〇年代から大きな変革の波にさらされてきた。まず、個人向けの軽印刷という分野は急速に縮小した。パソコンやプリンタの普及と高性能化で、個人パブリッシングがきわめて容易になったからだ。その一方で、コンピュータ・トゥ・プリンティングが業界の常識となり、印刷の工程から製版という分野が消えた。宮城の事業は、主力分野を二つとも失ってしまったわけである。
事業に先行きの見通しがないと判断した宮城は、七年前に廃業した。その時点で、年金受給年齢にはなっていた。ただし国民年金なので、夫婦合わせても給付は月に十二万円そこそこだ。持ち家で家賃はなかったが、それでも、そこから国民健康保険料や住民税は容赦なく取られる。若干の蓄えはあったものの、廃業前数年間は赤字であったし、その補填と廃業後の生活費に消えてしまっていたとい

う。
　このままでは生活していくことができない。子供は一人、娘がいたが、嫁いだ身でもあり、とても援助を頼めるものではない。そこで宮城は、銀行の不動産担保年金に申し込んだ。
　不動産担保年金は、その名の通り、自宅などを担保に月々一定の年金――名称は年金だが、実態は貸付ということになるのだろう――を受け取るという仕組みで、契約者が死んだとき、担保となっている土地や家屋は銀行のものになる。
　しかし、銀行は断ってきた。宮城の自宅には、担保価値はないと判断されたのだ。むろん家屋は築三十年超であり、担保価値ゼロと判断されても仕方がないが、土地も価値なしとの通告を受けたという。
「毎年の固定資産税は納付していたんでしょう？」山添は、素朴な疑問を口にした。
「はい。やっとの思いで」宮城は、口の端を少し歪めて言った。
「立ち入ったことを伺うようですが、税額はどのくらいだったんです？」
「今年の納付通告書には、十五万ちょっとだと」
　山添は、月十二万の年金受給者が年に十五万払うのか、と憤慨しながらも頭の中で計算してみる。固定資産税の税額は路線価の一・四パーセントだから、十五万ということは、宮城の自宅の価値は一千万はあってもいいはずだし、一般に実勢価格は路線価よりも高くなるものだから、宮城夫婦が仮に後十五年生きたとして、年間五十万円程度「給付」を受けたとしても銀行は損はしないはずだ。
「銀行はなぜ、担保価値がないと？」
「利便性がきわめて悪い、ということらしいのです。小児科がなくなり、スーパーももうすぐ閉店する」
「小学校もなくなると銀行が言ったのですか？」気負いこんで尋ねた。
「はっきり言ったわけじゃないですが。もし小学校がなくなって、最寄りの小学校までスクールバス通学をしなければいけないとなると、そこに家を持とうという人はほとんどいなくなる、だから担保価値はないという説明でした」
　今日子が昨晩言っていたことが、図らずも証明されたかたちとなった。しかし、とも思う。路線価に応じた固定資産税を払わされているにも関わらず、実際にはそれを担保にすることもできないとは……。税金を払うということは、それに価値があるという証拠ではないのか。
「実は、先生に謝らなければならなければいけないのです」宮城は下を向いた。「わざと、なんです」

「何が、ですか？」
「先生の車の前に飛び出したのは、わざとだったんです。轢いてもらえるならば、それでもいい、と。そしたら補償も受けられるだろうし、私が死んだとしても、家内だけは、なんとかそれで生きていけるでしょう。それに、ある程度まとまった金が入れば、娘のところの子供たちにも、大学進学の費用を援助することができる……」
怒りが沸いてきた。その矛先として、なぜかランデックまついが浮かんできた。敵が見えてきたという今日子の言葉を思い出す。
「宮城さん」山添は、老人に向いた。「小学校は、絶対に絶対になくならせやしません。だから宮城さんも、ずっとずっとこの川南小学校を見守っていてください」

12

宮城老人に寒いから家に入るようにと進言し、道に一人残った山添は、スイフトを購入した馴染みの修理工場に、代車とレッカー車を依頼した。スズキの場合、街のいわゆる叩き上げの修理工場が販売ディーラーを兼務しているケースが多いので、こうしたときには便利だ。
スイフトに乗り込みバックギアに入れ後退させた。メリメリと嫌な音を立てて、しかし、ともかくも塀と車は親密な関係ではなくなった。一度前進させて、その塀にぴたりと寄せた。カーナビはじめ必要なものを鞄に入れて、後部座席からダッフルコートを取り出し車の外に出ると、十分ほどで修理工場のレッカー車と代車がやって来た。
「ありゃりゃりゃりゃ、先生、こりゃ派手にやっちまいましたねえ」吉永という顔見知りの若い整備士がレッカーから降り、大きな声を上げた。
「いくらぐらいかかります？」
「さあ、それはちょっと社長じゃないと」
山添は自分の銀行預金残高を頭の中で確認してみる。宮城家の塀の修理に充当し、その上で車の修理にも手が回るだろうか？
「今、社長いますか？」
「俺たちが出るときはいましたけど」吉永は答えた。
山添が電話をすると、件の社長はすぐに出た。
「先生、やっちゃったみたいだねえ。お怪我は？」
「いや、それはないんですけど、財布が出血しそうで……」
電話口から豪快な笑いが聞こえた。それに勇気付けられて、おそるおそる言ってみる。「あの、修理代、少し待ってもらうわけにはいかないものでしょうか」

笑い声が止まる。しばしの沈黙。そして「まあ、それはそれとして」という返事があった。交渉次第ということか。
「それよりも先生」と、社長の飯島が言う。「代車を見てやってください」
レッカー車の後ろに、白い小さな車があった。携帯を持ったまま近づく。また飯島の声がした。「ワンダーシビックのＳｉグレードです。先生、見たことありますか？」
「僕が小学生の頃に出た車ですね。強烈に覚えていますよ。初めて見たときは、未来から来た車だと思った」
山添がそう答えると、飯島は自分の子供をほめられたような口ぶりで、「ああ、知ってますか！」と言った。「いやいや、しかし当時斬新だっただけじゃない。たぶん今でも、乗って一番気持ちいい車ですよ。先生にはぴったりじゃないかと思って」
山添は、無趣味な人間であるが、車だけは幼稚園の頃から好きで、実物や写真を見れば、どんなにマイナーな外国メーカーの車でも車種をピタリと当てられた――思えばそれが、これまでの人生で唯一、他人に自慢できたことなのかもしれなかった。免許を取ってからは、むろん運転することも大好きになった。学生時代に無理して買ったのが中古のプジョー２０５ＧＴｉであり、仕事に就いて二年目からはプジョー３０６、今のスイフトスポーツは三代目の愛車だ。いわゆるホットハッチを呼ばれる軽量のスポーツタイプの車を、マニュアルで運転するのが好きだった。
山添は、旧いシビックに近づいた。二十年以上も前の車とは思えないほど、その車は艶々に輝いていた。
「それ、大切に乗ってくださいよ。たぶん県下に一台にしかない、いや日本に一台かも……」
「どういうことです？」
「そのシビック、正確に言うと、八六年型シビック三ドアＳｉ、型番はＡＫ型ということになるな。で、そいつが凄いのは、広報チューンが施されていることです」
「広報チューン？」
「メーカーがメディアに車を貸し出すときに、通常に販売する車よりもアクセルレスポンスをよくしたり出力をアップさせたりして、『走りがいい』と書いてもらう、まあ、ある種のズルだな。しかしズルではあるけれど、実際、広報チューンの走りは凄いよ。ＡＫシビックみたいに軽量の車はなおさらだ。しかも、ホンダの広報チューンには定評がある」飯島は得々と語った。
「そんな貴重な車がなんでこの県に？」山添は、小振りな、しかし只者ではない雰囲気をたたえた車を凝視しながら言った。
「業者オークションで落としたんだけどね、ＡＫシビック自体の出

物が激レアだし、思い切って高値を付けたら、あっさり落札できて。そしたら、これが広報チューン流れの個体だったんで、二度びっくりしたわけよ。前オーナーは大学の自動車部の学生で、卒業して実家から離れ、ガレージがなくなるんで泣く泣く手放したという事情らしい。その前のオーナーは、ホンダのディーラーマンだって聞いてる」

「わかりました。それで、そんな貴重な車を代車に借りていいものなのでしょうか？」

「先生、それ買いません？」飯島が唐突に言う。「スイフトスポーツもいいけど、そのシビックは最高の快楽マシンよ」

「あ、いや」今はそれどころではないという思いが先に立ち、しどろもどろになる。

「ま、乗ってみてください。何かが変わるかもしれないんで。先生には、なんていうのかな、刺激が必要じゃないのかな」そう言うと飯島は、この車に関する注意を一言二言付け加えて電話を切った。

何か釈然としないものを感じつつ、シビックに近づくと、修理工場のもう一人の若い衆である小泉が、にこにこしながらそのシビックから降りて来て鍵をくれた。

「じゃ、遠慮なく使わせていただきます」

シビックに乗り込み、キーを回してみる。１．６リットルのＤＯＨＣエンジンがエンジンマウントを大げさに揺らし、その振動は、ステアリングにもろに伝わるとともに、窓ガラスをビリビリいわせた。今の車とは大違いである。

大切にされてきた車と聞いたし、事実、シートのへたりもあまり感じなかったが、クラッチ盤の状況がわからないので、エンジン回転を二千回転にキープし、優しくクラッチを繋いだ。

アクセルをポンと踏み、二速に入れると、まるでジェットコースターである。宙に浮くように、加速を始めた。二速から三速はかなりのクロスミッションで、ミッション自体がへたっていることもあるだろう、すこっと抜けるようなシフトアップになる。が、それが実に気持ちいい。四つ角に来て、あらためて二速にシフトダウン、十分に減速してからステアリングを左に切ると、操舵角そのままにタイヤが反応するのがわかった。人馬一体とはこのことか。軽い、ということは、これほどまでに、車の操作性に気持ちよさを与えるものなのか。山添は、電話を切りしなに飯島が言っていた言葉を思い出していた。

こいつは、安全対策でホットハッチといえどもどこか鈍重になってしまう前の、最後の、そして最高の輝きなんだ――。

左折を終え、再びアクセルを踏みこむと、零コンマ数秒のタイムラグもなく、再びみずすましのようにシビックは滑り出した。この

時点で山添は、通学区の調査をすることを放棄していた。このシビックが心を動かしてくれるのかもしれない。ちまちまと動き回るよりも、いきなり敵陣に乗り込んでやろう。

それにしても、と山添は思った。俺は、今まで何かに突き動かされて生きる、ということをしたことがあっただろうか。高校を卒業して進学した大学は、国立旧二期校である地元のN大の教育学部。高校教員であった父の意見に盲従しただけだ。別に父を尊敬していたわけでも、教員という仕事に魅力を感じたわけでもない。教育学部だからといって教員にならなければいけないというものでもあるまい、大学の四年間で自分の本当にやりたいことを見つければいいのだ、という思いを抱いて大学に入学しただけだった。

しかし、そうした甘い考えと国立大学教育学部が提供するカリキュラムは、まったく相容れないものだった。山添は、主に入学難度が低いという理由から初等を選んだのだが、そこは、まさに小学校の教員を養成するための場所だった。国民の税金で運営される国立大学なのだから、国民に奉仕する教員を育てるのが目的であり、モラトリアムを求めて、などという学生に本当にモラトリアムを与えていては国民の皆様に申し開きができない、という理屈が何の隙もなく成立していた。しかし山添がそのことに気付いたのは、うかつにも入学した後だった。

初等教育科では、専門科目が一年次から設定され、二年次からは実習ががんがん入るようになった。さらに周りの学生はといえば、教員になるという情熱に燃えている人間ばかりであり、とくに初等教育科の場合、女子が圧倒的に多く、女子の常として男子よりもひたむきであったので、山添も、好む好まぬに関わらず、こうした教育学部独特の雰囲気に、いわば洗脳されることを強制されてしまった。と、今にして思えば、そういうことになる。

そうした環境の中で、なんとなく教員になるのが当然と考えるようになり、それでも三年次には、他学部学生のように就職活動に動いてはみたものの、東京の大手出版社への会社訪問では、周りは東大一橋早慶上智ばかりで、地方の旧二期校、しかも教育学部の学生はいかにも場違いであり、むろん大学からの支援もまったく受けられず、自分一人で情報収集し対策していくことにも限界を感じて早々に就職戦線を離脱してしまったのだった。

しかし教員採用に関しては、ラクといえばラクであった。昭和の終わりには、教育学部を出てはみたものの教員になれない学生が多かったというが、山添の世代の少子化もあり、また当時、県立高校教頭であった父の存在も多少は関係したのだろう、山添は、県の小学校教員としてあっさり採用された。

そうした経緯で教員になり、これまで十年間というもの平穏無事

に教員生活を送ってきた。その代わり、この仕事に胸を締め付けられるような気概を抱いたことも、震えるようなやりがいを持ったこともない。児童との関係も――。これまで延べ四百人近い児童を担任してきたが、山添を見て先生になろうと考えた子は、もしかしたら一人もいないのではないか。そのことに山添は初めて寂しさを感じ、そうした自分の感情を持て余した。

シビックのアクセルを踏む。目指すは、ランデックまついが開発した分譲住宅地だ。川南小に、そして川南小通学区に、いや、もしかしたらこのN市全体に、何かが起きている。それは、クラスの児童全員欠席というかたちで、自分に降りかかってきた。これは、自分に突きつけられた試練だ。なるほど、これまでの俺は、それほど熱心でもないし、有能でもなかったのだろう。だがこの一件だけは何としてでも自分の手で解決したかった。若干の上り坂を受けてギアを三速に落とすと、シビックのエンジンが、山添を勇気付けるようにヴーンと唸った。

13

高価そうなレンガを積み上げた門塀に、金色の銘板が嵌め込まれている。そこには、「LANDEAR NANPEIDAI」とあった。驚くべきことにその住宅地は、いわゆるゲーテッド・コミュニティ、すなわちセキュリティゲートを備え、そこにいる警備員に許可を受けた者しか入ることの出来ない排他的エリアとなっていた。

こうしたタイプの住宅地は、東南アジアやアメリカに多くあり、また日本でも徐々にではあるが出来つつある、といった程度の知識は山添にもあったが、まさか自分の生まれ育った、どちらかといえばのんびりした地方都市にこのようなものが出現するとは意外でもあり、自分の町が自分のものでなくなるような寂しさと敵愾心を感じた。

免許証と名刺を、ゲート脇に設置された小さな、しかし意匠は洒落た建物にいる警備員に示す。訪問先の欄には「遠藤様」と、とりあえず書いてみた。遠藤宏の転校届けの新住所には、ここの住所が示されていたからだ。警備員はとくに怪しみもせず、すぐにゲートを開けてくれた。ついでに、カウンターに置いてあるパンフレットを貰う。そこには「世代をつなぐ家」というキャッチコピーが麗々しく踊っていた。

なるほどね、とつぶやきつつ車に戻り、メインストリートと思しきゆるやかに右にカーブを描く道を上る。一本路地を入ると、引越し用の大型トラックが見えた。山添はグローブボックスからサングラスを取り出した。

トラックの脇にいた人物が、レトロ・シビックに気づいたようだった。顔が輝くのがわかる。齢の頃は四十台半ばといったところ。見覚えのある遠藤宏の父親だった。

遠藤父がこちらにやって来た。山添は車を路肩に寄せ、窓を開けた。

「うわっ、懐かしいなあ。このシビック！」そう言いながら遠藤父は、シビックに対して、初恋の人にでも再会したような視線を向けてくる。まだ、ドライバーが山添だということに気付いていないらしい。その山添に向かって、声を掛けてきた。「いや、このワンダーシビックね、僕が学生時代、初めて買った車なんですよ。中古でグレードもＳｉじゃなかったけど。これ気持ちいいでしょ。ひゅんひゅん走って。僕の単なる２５ｉでもそうだったんだから、Ｓｉだったら『どんだけーっ』てな感じですかね」

こちらを同好の士と認めたのだろう。一気にまくし立てた。山添は、あいまいな笑いを彼に向けながら、車を降りサングラスを外した。

「宏さんのお父さん、ごぶさたしています」

遠藤父が凍りついた、ように見えた。

「こちらに引越しされたのですね」山添は、努めてさりげなく言った。「宏さんがいなくなると、寂しいですよ」

「あ、いや、先生には、後ほどあらためてご挨拶に伺おうかと」遠藤父はうろたえて言う。

「なぜ突然、この時期に引越しを？」単刀直入に切り込んでみた。

「それは、先生には関係ないでしょう」

やっぱりそうくるか。ここで話が終わってしまうじゃないか。我ながら拙い切り出し方をしたと思うが、それでも食い下がってみた。

「宏さんは、引越しがあっても、学校には来れるとは思うのですが。昨日の夜、転校届けを本校に出したということは、本校から市教委に連絡することになるので、こちらの通学区の大西小に即座に入学するわけにはいかないはずです」

「それはわかっています。でも今、いろいろ家のことでバタバタしていまして、それだったら休んでもいいんじゃないかと」

ペースは完全に向こう側にあった。

「では、一組全員が欠席というのは？」

「そうだったんですか。それは知りませんでした」遠藤父は言った。

「でも先生、私たちは、犯罪行為をしているわけじゃない。規定の出席日数には十分足りているはずです」

「私たち？」山添は聞きとがめる。やっぱりクラス全員の保護者に共謀があるということか。

「私たちというのは、私たち家族のことです」
遠藤父におちょくられたようだった。
「わかりました。宏さんによろしく伝えておいてください」
山添は、シビックを発進させた。
敗北感があった。もう児童たちが、山添学級に戻ってくることはないのだろうと思う。それはそれで仕方がない。山添は一応、今日子だけには知らせておこうと、携帯を手にした。

14

一時間後、山添と今日子は、ランデックまつい本社ビルの一室にいた。平日の午前中とあって、今日子も行動の自由が利くようで、同行すると言ってくれたのだ。
「広報担当の方を」と身分を明かしてから受付で申し込むと、この部屋に通された。おそらく会議室であろう、大テーブルの周りを三十脚ほどの椅子が取り囲んでいる。山添と今日子は、奥の列に並んで座った。背後は全面ガラス張りであり、冬とは思えない日差しが背中に照りつけた。
入って来たのは、意外というか案の定というか外国人だった。交換した名刺には、「プレス担当シニアレキップ　ウィリアム・アムスデン」とある。歳の頃は、山添や今日子と同じくらい、三十台前半だろう。巻き髪の金髪、白い肌に緑がかった目、身長は一九〇センチ近いか。こうした風貌もまた、この地方都市に乗り込んできた外資系企業のプレス担当としての業務になんらかの効果を与えているのかもしれない。
「小学校の先生と塾の先生が、何か」アムスデンは、名刺を手に取り、好意的でもなく好戦的でもなく言った。これが意図的なものであるとすれば、日本語運用能力はきわめて高いということになる。
山添は、直球で勝負することにした。それ以外に方法が思い浮かばなかったからだ。「私の勤務している小学校、川南小五年一組の児童全員が、先週の金曜日から全員欠席しています。そのうちの数人の家庭から転校届けが届いていたのですが、新住所を確認すると、どうやら御社が分譲している住宅地に引っ越しているようです」
「はい」アムスデンは小首を傾げた。言っていることがまるでわからない、という表情だ。
「もし、よければ」山添は転校届に記された児童の保護者の名前を読み上げながら言った。「こうした方たちが、御社の分譲地を購入するに至った経緯をお話しいただければ、と思いまして」
「さあ、それは」アムスデンは小首を傾げる。「申し訳ありませんが、お客様の個人情報に関わることは……。第一、学校の先生とも

あろうお立場で、その書類に記された名前を、こんなところで堂々と読み上げるなんざあ、こりゃかなりヤバい行為じゃないんですかねえー」

アムスデンが長い脚を、その長さを誇張するかのような所作で組んだ。おまけに、口調もべらんめえ調に変わった。こいつが東京神田の生まれとは到底思えなかったので、これも日本語運用能力のうちの一つなのかもしれない。

「話は変わりますが」今日子が口を開いた。「これをご存知ですか？」

今日子は、例の数字の暗号文をジャケットの内ポケットから取り出しテーブルの上に置いた。そういえば、今日子に渡したままだったと気づく。

「何ですか」アムスデンがそれに視線を落とす。

「県教委義務教育課の沢村課長。先日、自殺した。ご存知ですか？」

「ニュースは視ましたが」

「この数字の羅列は、自殺した沢村課長が、死ぬ数日前に彼の娘さんに『出題』した暗号です。ダイイングメッセージといってもいいものかもしれない。これに、ある法則を適用すると、『まつい』になります。この町で万人が思いつく『まつい』といえば、御社しかない」

「ソー・ホワット？」

「沢村課長の死は、自殺であることには間違いないでしょう。こうしたものを数日前に娘さんに渡していることから考えても。でも、その原因をつくったのが、この町でもっとも知られている『まつい』さんであるところの御社であるとしても、状況からして、そんなに突飛な推理であるとは思えませんが」

アムスデンは笑い出した。「サワムラさんとやらの自殺に弊社が関わっている。こうおっしゃるわけですね。この奇妙な数字の羅列だけを根拠に。しかし、だいたいこれが『まつい』と読めるなんて、こじつけ以外の何者でもないでしょう」

「そうは言えないと思う」山添は口を挟んだ。「これは、小学五年生の児童にも解けたものなんだ」

そう言ったとたん、脛を今日子から思いっきり蹴られた。ヒールで蹴ってきたらしく、その衝撃は脳天まで突きあがる。山添は、それ以上話すことが物理的に不可能になってしまった。

「なるほど」アムスデンが冷たい笑いを浮かべる。「昨日、弊社に押しかけてきた女の子がいたと聞いているが、その子がこれをねえ……」

「馬鹿！」ランデックまついの本社ビルを出て、近くのコインパーキングまで痛む左足をひきずるようにしてたどり着き、シビックに落ち着いたとたんに今日子から怒鳴られた。「なんで、愛美のことまでばらしてしまうのよ」
「そうか」
　ようやく今日子のヒールアタックの理由がわかった。しかし、痛みがそれで去ってくれるわけではなく、また脂汗が出てくる。今日子は、そんなことは心配するに足らないという様子で「愛美に目を付けられてしまったかも」と、本当に心配そうに言った。
「俺は、どうすればいいんだ？」
「山添くん、休暇を取ったって言ってたよね。じゃあとりあえず、愛美の護衛をして」
「おっしゃる通りにします。しかし久我よ、俺にはどうにもわけがわからないんだが」
　山添はそう言いながら、シビックを発進させる。横で今日子も頷く。
「私にもわからない。わからないときは、何がわかっていて、何がわからないのかを一つ一つ洗い出してみるのが、問題を解く常道だよね」
「数学の図形の問題みたいだな」
「そう。まずわかっていることといえば、山添くんのクラスの全員を集めて、ランデックまついが何かをやっているということ。そして、そうした児童の家庭を自社の分譲地に引き抜いている公算が高い、ということ」
「わからないのは、昨日も話したけど、そんなことをして何の得があるかということだ。ランデックにとっても、俺のクラスの子たちの保護者にとっても、だ。むろんランデックについては、分譲地が売れるというきわめて一般的な解釈ができるわけだが、しかしそれが、こういう強引なやり方をする理由になるのか」
「そうよね。小中学校の統廃合を見据えて、自社の分譲地に一番近い小中学校が廃校になる危険を避ける、ということもあるだろうけど、でもそれだけで」
「だな」
「あとさ、山添くんのところのクラスの保護者に、川南小学校から転校しませんか、うちの分譲地を購入しませんか、というふうに持ちかけたとする。でもそれだけで、はい、そうですか、というふうになるものなのかな。これも大きな謎だよね」
「もう一つの謎は、沢村課長の自殺に、ランデックがどういうふうに絡んでいるか」
「それもわからないね。でも、私にとっての最大の謎は……」今日

子がにやりとして言った。
山添はうんざりした。「はいはい。愛美さんの成績アップの謎だろ」
「単なる成績アップじゃないよ。全国三位」
「その大切な、お前の心の恋人の愛美さんは、俺がしっかり守りますよ」
「頼みます」
桃李館の前に車を止めると、今日子は真剣な面持ちで山添を見つめてきてそう言った。

15

今日は水曜日だから、愛美の下校時間は、一時半過ぎのはずだ。公立小では今のところ、高学年でも水曜日は四時限授業だ。そして今日が塾日ではないことは、今日子から聞いている。
時計を見ると一時ちょっと過ぎだった。学校近辺には、スクールガードが数十メートルごとに立っている。山添は、そのボランティアの見回り隊の列が途切れる、桔梗が丘団地の外れに車を止め、愛美を待った。
愛美は、同じ市営住宅に住む由真と一緒に現われた。こちらのことは気に留めない。どうしようかとためらったが、思わず声を掛けてしまった。
「先生！」愛美が声を輝かす。
「偶然だね。送っていくよ」山添は助手席側のドアを開け、助手席の背を倒した。
「イエーイ！　超ラッキー！」と言いながら、愛美と由真は車に乗り込んできた。
「先生、この車、超かわいい！」愛美が言う。シビックも嬉しかろう。
由真が一緒だったので、とくに何か話しかけるでもなく、そのまま市営住宅まで乗り付けた。愛美と由真は、後部座席で今度一緒に観に行くらしい映画の話をしていた。
市営住宅の入口で二人を降ろすとき、一応確認してみる。「今日はお友達と遊ばないの？」
「遊ぶ！」と答えたのは由真の方だ。愛美はといえば、「水曜日は遊べない」と下を向く。少し寂しそうだった。が、遊べない理由は見当がついた。明日、木曜日は塾日で、桃李館は駒場原宿方式だから予習をして来ることが大前提だ。
「あ、先生」車を降りて走りかけた愛美が振り返り、こちらに戻って来て言った。「昨日の、一つだけ大文字の『C』のこと、わかっ

たよ。辞書で調べてみた。そしたらびっくりだよ。大文字のCで始まるのは、えーとちょっと待ってね」愛美は、ランドセルからノートを取り出し、それを読みながら続ける。「クリエイターという言葉なんだけど、クリエイターは、普通、ものをつくる人のことをいうんでしょ。ママに訊いたら、昨日先生たちが言っていたグラフィックデザイナーもクリエイターの一つの種類だって」

「そうだね」

「でも、大文字のCで始まるクリエイターは、造物主、神様のことだって辞書には書いてあった」

「そうだ。今日子先生もそう言ってたよ」

「そうかあ～」愛美は、感慨深そうにする。「やっぱ、今日子先生ってわかってるんだよなあ」

「愛美さんはどうして、ランデックまついの大文字の『C』に何か意味があるって思ったの？」

「私、幼稚園はカトリックだったのね」愛美は、市内の私立幼稚園の名前をあげる。そこは、N市では、主に富裕層の子女が通う幼稚園として有名だった。「それで年長さんのとき、降誕劇のオペレッタをやったんだけど、私の役は、イエス様のお誕生をお祝いにやって来た博士たちの一人だったのよ」

「東方三博士だな」

「そう。本当はマリア様の役がやりたかったんだけど。でも年中さんのときにイエス様の役をやらせてもらっていたから、二年続けて主役というわけにはいかないのはわかっていたんだけどね」そう言って、愛美はぺろっと舌を出した。「そのときにね、園長先生に教えてもらったの。博士たちは、イエス様という神様の子がベツレヘムで生まれるってことがわかっていた、本当に賢い人たちだった。だから彼らは、ワイズメンと呼ばれる。英語で書かれるワイズメンの最初のダブリューの字が大文字だったら、それは普通、博士たちのことを指すんだって。それ以来、英語の単語の最初の字が大文字だと、何か特別な意味があるんじゃないかと思って、いろいろ探すようになったの」

愛美のそうした学究姿勢に驚く。「愛美さんは……、本当にいろんなことを知るのが好きなんだね」

「好き。だって、こういうお話をすると、お母さんはすごく喜んでくれるし」

山添はまったく感心して、大きくため息をついた。そして、頭のどこかになんとなく引っかかっていることを訊いてみる。「年中さんのときは、イエス様の役をやったって言ったけど……」

その問いに対して、愛美は、自分でその劇のアイデアを出したことを楽しそうに話してくれた。山添は、今度は愛美の企画力に驚く。

愛美は話し終わると、「じゃ、行くから」と走り出した。
山添はその背中に声をかける。「愛美さんのそういうところ、先生も、春山先生も、そして今日子先生も、本当にすごいと思ってる！」
愛美は、振り返って大きく頷き、そして手を振った。
愛美を見送った山添は、愛美の家に電話をかけ、今日偶然、通学路で拾ったことを告げ、その後、家庭内で変わりはないか、と訊いた。
愛美の母親はずいぶんと恐縮した様子だったが、思いきったように言った。「愛美は先生のことがとても好きで、この間から『私が先生を助ける』と宣言していて」
「すみません」今度は、山添が恐縮する番だった。
「あ、あの……」愛美の母親が躊躇った様子で訊いてきた。「一組は全員、お休みしているそうですね」
「愛美さんから聞いたのですね。正確に言えば、すでにお休みではなくなっていて、数名から転校届も出ていました。まったく私の不徳の致すところです」いったい俺は何を言っているのだろうと思いつつ、言葉だけがぺらぺらと出てきてしまった。優子が、電話口の向こうで息を呑むのがわかる。あわてて取り繕うように言った。
「それで、ですね。愛美さんは、そんな私に同情してくれまして、まったく情けない話です」
「そんなことは……」
優子の当惑した様子が伝わってくる。要らぬおしゃべりをしてしまったようだ。「とにかく、この問題は私が自分でケリを、あ、いや解決しますので、愛美さんは、自分のお勉強だけをしっかりやるようにと伝えてください」
「わかりました」と優子は応え、やや間を置いて「山添先生は、今日子先生とお友だちだったのですね」と訊いてきた。愛美がそう言ったのだろう。
「そうです。高校の同級生です。そういえば……」長話ついでに、今日子から出された宿題を解いてみようと考える。少しは、あいつに対してもお土産が必要だろう。「愛美さんは、桃李館でたいそう成績がいいとか。駒場原宿の全国模試でも、一桁の順位だと聞きました。ご家庭では、どのような勉強をしているのですか？」
しばらく間がある。その背後で「ただいま！」という愛美の声が聞こえた。「すみません。帰ってきたみたいで」
「愛美さんに、くれぐれも危ないことはしないようにとお伝えください」山添はそう言って電話を切ろうとした。
が、優子は、何か気負った感じで言ってきた。「あの、先生、愛美は先生のことが大好きで、分割授業などでは、なんだか本当に真

剣にやってくれるそうで、それがとてもいいと。だから、私も――あ、愛美がですよ――先生のために真剣にお手伝いしたいって」優子は、そこでいったん言葉を切った。「すみません。生意気なことを言う子で。それじゃ、失礼いたします」

俺のことを愛美が教師として評価してくれていた。そのことに少なからず、山添は勇気を得ていた。そして何が何でも、愛美を守らなければならないと、肝に命じた。

16

どんどんどんと窓を叩く音がする。山添は、慌てて腕時計を見た。九時二十分ほど前。当然ながら、あたりは真っ暗だ。窓越しに今日子の顔が見えた。

「すまん、久我。交代だ。トイレに行かせてくれ」山添はその場を離れると、夕方に買い物をしたコンビニに走った。

そうだ。長期戦になるのを覚悟してコンビニおにぎりで腹ごしらえをしたら、急に睡魔に襲われたのだった。愛美を絶対に守ると決意した直後だけに情けなかった。それに、今日子に起こされる直前には、思う存分に小便をする夢を見ていた。山添は苦笑した。

コンビニで念願のトイレを済ませたついでに、缶コーヒーと夜食のサンドイッチを二人分購入し、車を置いた見張りポイントに戻る。シビックの後ろには、ハイエースがあって、それが今日子の車らしかった。

ハイエースのドアを音を立てないように開け、助手席に座り、今日子に缶コーヒーとサンドイッチを渡しながら言った。「しかし、お前、授業だろ」

一般に、塾講師の勤務時間帯は、午後二時から十一時といったところだ。午後九時前に外に出ることなど不可能に近い。

「代わってもらった」今日子はあっさりと言う。

「この前からそればっかりだな。大丈夫なのか、あの塾、今日子先生でもっているんじゃないのかよ？　あ、それともお前、愛美さんの護衛が、俺だけだと頼りな……」

「そうじゃないよ」今日子は山添の言葉を遮った。「それよりも、愛美の家はどれ？」

「あっちの棟の三階の一番手前だ」

「あれか」今日子はその窓を凝視する。

しばらく経つと窓の明かりが消えた。本居家はそれで就寝体制に入ったようだった。

「愛美の成績の驚異的な伸びの一因が判明したね」今日子は言う。

「九時に寝るってことが、か？　でも、それだけじゃ」

「もちろんそうよ。ただ、すべてのベースになるのは、やっぱり生活習慣なのよ。これができていないと、何をやっても駄目」
「今日子大先生のところじゃ、午後九時近くまで子供を拘束しているじゃないか」ここのところ、今日子に一本取られっぱなしだった山添は、ようやく反撃の材料を得た思いだった。
「そう言われると、辛いんだけど」
驚くほど素直な反応が返ってきた。が、今日子はにやにやしている。愛美が九時に就寝したことがよほど嬉しいのだろう。
「でも、こちら側だけじゃわからないね。北側の窓ってのは、たいてい寝室や子供部屋であるケースが多いし、ちょっと南側もチェックして来るね」そう言って今日子は、車を降りた。
取り残された山添は、今日子のハイエースの室内を見渡してみる。驚くべきことに、この車は十数人が乗れるような設えとなっていた。
今日子がオーケーマークを指でつくりながら、再び車に乗り込んできた。「やっぱり南側の窓も全部、電気が消えていた。一家で就寝体制に入っているということだよね。よしよし」
「わかった、わかったから」山添は今日子の本居家礼賛に辟易として、話題を変えようと企てた。「車なんだけど、いつもこれに乗っているの？」
「そうだけど、変？」
「うん。久我ならＢＭＷとか、そういうのに乗ってると思ってた」
「まさか」今日子は苦笑する。「これ、教員になって最初のボーナスを頭金にして買ったんだよね」
「いきなり、こんな多人数乗車用車をか？　これじゃ、デートもできないだろ」
「そうだね。呆れられたこともあった」
この車に呆れた男に嫉妬心を抱き、そうした自分の感情に当惑する。
「私、北高が最初の赴任校だったんだけど、赴任と同時に水泳部顧問を拝命して。だけど北高はプールないでしょ」
北高は、ロケーション的には小高い丘の上にあり、水を引き上げることが新制高校令が施行された戦後すぐの技術では物理的に不可能であったため、プールは設営されないままで、今ではそれが伝統となっていた。が、当然ながら中学の部活で水泳をやっていたという生徒も入学してくるため、水泳部という存在はあった。今日子は、より効率のよい練習ができるよう、水泳部の連中を市営プールまで連れて行くためにこの車を購ったということだった。
「水泳部ということは、その、お前も水着着てたの？」
「当たり前でしょ」

「あの、競泳選手が着てるみたいな身体にぴたっと張り付くようなやつを？」
「水着ってのは、だいたい身体にぴたっと張り付くもんでしょ」今日子はあっさりとしたものだ。
「でも、それじゃ、男子部員が鼻血ブーなんてことに……」今日子の意外に張り出した胸元を見ながら山添は言った。
「あ～の～ね～、今は高校の水泳部は男女別なの。私が拝命したのは、当たり前だけど女子水泳部の顧問。やらしいこと考えてないで、ちゃんと張り込みしてよね」
「そ、そうだったな」山添は拙いことを言ってしまったかもと若干の悔恨を感じながらも、それでも今日子の水着姿が男子部員の視線にさらされていなかったことにほっとして、話題を車のことに戻した。「しかし張り込みのときは、かえって便利だな。こういう車。何かの工事の車が止まっているとしか見えないし」
「その工事用車輌なんだけど、私はあっち側の窓が見える位置に場所を移すよ」
「オーケー。両面作戦だな」
山添は、今日子のハイエースから降りた。腕時計を見ると九時半を少し回っていた。夜の冷たい空気が身を刺す。乗り込んだシビックの車内も、外よりはいくぶんましとはいえ、冷え冷えとしている。しかし車のエンジンを掛けることは、やはり憚られる。明かりが消えていない部屋が大半とはいえ、あたりは静寂に満ちていたからだ。山添は、バックシートからダッフルコートを取って着込んだ。
山添が、コートのトングルを外し前たてを重ねて少しでも暖を取ろうとしたその刹那、フロントガラスを他の車のヘッドライトが照らした。あわててダッシュボードの下に潜り込み、そこから頭半分だけ出して様子を伺う。
ヘッドライトの主は、視線の先のシビックの存在は認識しているのだろうが、その中に人がいると気づいた気配はない。ドアをバタンと乱暴に閉めると、市営A棟のいちばん手前の階段口を入って行った。車の止め方も、どこか乱雑で気配りがないことが、山添の不安を掻き立てた。
バイブレーションモードにしていた携帯が震える。ポケットから取り出すと「久我」の表示だ。嫌な予感がしたがその通りだった。
「愛美の家の明かりが点いた。すぐそっち行くから」
こちらから確認する限り、愛美の家の明かりは点いていない。ということは、愛美は寝室と思しき部屋で寝たままで、訪問者は居間かダイニングか。
山添が車を降りるとすぐ今日子がやって来た。
「どういう人だった？」今日子が訊いてくる。

「男だ。それしかわからない」
「ランデックの人間？」
「いや、そういう感じはしなかったな」
「じゃ、愛美の父親ってことはあると思う？」
「一緒に住んでいる父親だったら、きちんと駐車場に車を入れるだろう。あんなふうには」山添は、先ほどの男が置いた車を目で示した。
「わかった」意を決したように今日子が言う。「私は今から愛美の部屋のドアから様子を伺うから、山添くんはここにいて」
「駄目だ。お前に危険なことをさせるわけにはいかない」山添は、目に力を込めて言った。だいたい今日子に何かあったら、愛美の才能に対して申し開きができないではないか。
多少は思いが通じたのかもしれない。今日子は「わかった。私はやつが出てきたら、後を追うから」と言い、ハイエースを取りに行った。
山添は、男が入っていった階段口から三階まで上った。愛美の家の鉄の扉には、「ＭＯＴＯＯＲＩ」と記された可愛らしいネームプレートがぶら下がっていた。
息を潜めて中の様子を伺う。何の物音もしない。踊り場からさらに階段を五段ばかり上り、そこから本居家の扉を観察することにした。
扉を見続けること三十分ばかり――。扉が開き、先ほどの男が出て来た。高く通った鼻梁、窪んだ眼窩に切れ長の目、なかなか男前である。しかし、どこか酷薄そうな印象も受けた。
男は、自分のすぐ一メートルほど上にいる山添の存在にはまるで気付かず、足早に階段を下りていった。靴音が、コンクリートの壁に派手に反響する。夜も十時を過ぎたというのに、静かに下りようという気配りはまったくできないらしい。
山添は踊り場から身を乗り出し、その眼下にある男のクラウンを見やった。予想通り、派手なアクセルの吹かし方で発進して行く。それを、しずしずと追いかける今日子のハイエースがあった。
山添が自分のシビックに戻り、両手に息を吹きかけていると、今日子から電話があった。
「今、さっきの男の車を追跡中。ナンバーも記憶したから、もう帰っていいよ。寒いでしょ。本命と思しき人物が本居家に来訪した以上、今夜は何も起こらないと思うから、ね」
思いもかけず、今日子が優しい言葉をかけてくれた。しかし、だからといってこの場を離れる気分にはならなかった。

17

光が真っ直ぐに山添の顔を捉えてきた。フロントガラスが朝日と相対するようなかたちで駐車してしまったらしい。眩しさで目が覚め、こんな目覚めを経験したのはいつ以来かと思う。時計を見ると七時前だ。夜明けから二〇分ばかりが経過し、昇る朝日とバックレストにもたれた顔の角度がちょうど一致したのだろう。

もうすぐ愛美が出てくる時間だった。山添は、車から降りると、コートの前立てを重ね足踏みする。愛美が手前の階段口から現われた。

「おはよう！」大きく言って手を上げた。

愛美の顔が輝く。こちらに駆け寄って来て、「先生、ずっとそこにいたの？」と訊いてきた。

「愛美さんのことが心配で。今日子先生も夜中までいたんだぞ」

「サンキュー！」愛美は明るく言ってくれる。

「送っていくから乗りなよ」山添は、助手席の扉を開けた。

「えっ、前に乗っていいの？」と目を輝かし、愛美は席に滑り込む。ランドセルをうんこらしょといって肩から外し、膝に抱えた。

車を発進させながら、山添は愛美に訊いた。「昨日、夜中にお客さん来たでしょ」

愛美は驚いた顔をした。しかしなぜ、山添が自分の家を一晩中見張っていたのか、おおよその見当は付いているのだろう、「うん」と言った。

「愛美さんの知っている人？」

「お父さんだよ」愛美はあっさりと答えた。

山添は思いきって質問を続けた。「お父さんは一緒に住んでいないの？」

「住んでない。離婚したの」

「なるほど」間抜けな合槌を打つ。「あの、こんなこと訊くのもなんなんだけど」明らかに教師としての枠をはみだし、危険な領域に踏み込んでいると自覚しながらも訊かざるを得ない。「愛美さんは、お父さんのことどう思っていたの？　帰ってきてほしいと思う？」

「いや。帰って来てほしくない」愛美はきっぱりと言った。そして笑いながら続けた。「だいいち私、お父さんと住んでいた頃は、根岸愛美だったのよ。略して『ネギマ』。よく男子にからかわれたよ。ね、ネギマって焼き鳥なんでしょ。先生、食べたことある？」

「あるよ。先生は焼き鳥が大好きだ」

「美味しい？」

「美味しいよ。そうだ、愛美さんが一生懸命お勉強して大学に入って二十歳になったら、先生と一緒に焼き鳥屋さんに行こう」

「絶対に行く！　でも先生、それまでにダサいオヤジになっていたらこの計画は却下だからね。今みたいにかっこよかったら、絶対に

行く」
「今みたいにかっこいいって、先生が？　そんなこと言われたの、生まれて初めてだな」
「そりゃ先生、顔だって平凡だし、背だって普通だし、服のセンスは、今時ダッフルコートを愛用していたりしてややダサってところだけど、授業しているときとか、質問に答えているときとかは、本当に真剣な顔をしていて、かっこいいよ」
「そ、そうか」
「でもさすがに今日子先生は、先生には無理めだと思うけどね」
　ありがたくもそう結論づけてくれた愛美を学校の西門の前で降ろし、休暇届と休暇中にやっつけなければならない書類を取るため職員用の駐車場に車を置きに行く。駐車場は、三棟ある校舎の一番北側の校舎のさらに北側に設けられていた。
　駐車場の向こうは、ゆるやかな斜面が続いている。そしてその斜面は、川南小の児童や教職員そして保護者が「自然林」と呼ぶ、ブナ、クヌギ、ケヤキなどが密生する林となっていた。児童たちにとっては格好の遊び場であり、川南小の非公式な「ウリ」でもあった。その自然林の方向から、寒気を切り裂くような悲鳴が聞こえた。
　あわてて山添は自然林に向かう。一瞬、何が起きているのか、わからなかった。数人の児童が逃げ惑っている。遊びで追いかけっこをしているようにはとても見えない。山添が当惑していると、その原因をつくっていると思える物体が一声吼えて、正体を明らかにした。猿だった。
　N市のところどころに存在している、まだ自然が残る丘陵地帯には野生の日本猿が生息している。その日本猿が、川南小の自然林に顔を出すことはこれまでにも度々あった。むろん危険でもあるので、児童たちに注意するよう呼び掛けてはいた。しかしこれまで猿は、たとえ出現したにせよ、自然林の外周部を徘徊していただけで、とくに児童たちが自然林で遊ぶ時間帯は、そこに入ってくることはなかった。猿の方が人間を恐れていたわけだ。
　しかし今、猿が児童を襲おうとしている。山添は、校庭と自然林の間にある木戸を蹴飛ばし、自然林の中に分け入った。「早く、こっちだ！」児童たちを呼び寄せる。
　パニックに陥っていた児童たちは、その声に今さらのように気づき、山添に助けを求め、こちらへ全速力で走ってこようとした。が、自然林の地面は、枯葉で覆い尽くされていて、それに足をとられるのだろう、なかなか進んで来れない様子だ。その間にも、猿は迫って来る。山添は斜面を下り、児童と猿の間に一気に滑り込んだ。その刹那、猿が牙を剥いて山添の肩に噛み付いてきた。火鏝を肩に捻りこまれたような熱さと激痛。一瞬、意識が遠のく。野生動物に噛

まれるとは、こんなにも痛いものなのか。たぶん、これは俺が今まで生きてきて最大の痛みだ――。

頭が存外まともに働いてくれることに勇気を得て、視界を覆っている茶色の物体を、とにかく両手で抱くようにして思い切り締め上げた。肩から火鏝が離れ、猿は身体を捻って山添の腕の中からするりと抜けようとする。その瞬間に山添は、猿の両足を掴むことに成功した。子供の頃から家で飼っていた犬とじゃれたいとき、山添は唐突にその犬の後ろ両足を掴み、遊ぼうという合図を送ってきたのだった。犬にとっては迷惑千万な行為だったろうが、それを何千回もやってきた「成果」が、こんなところで発揮されていた。

山添は、猿の両足をがっしりと掴んだ。仰向けの体勢から、身体をこねるようにして反動をつけ、猿を地面に叩きつける。ぎゃっと奇声を発して猿は白目をむいた。

急いで立ち上がり、自然林の斜面を駆け上る。猿は、あと二〜三頭はいたはずだ。児童の姿も猿の姿もここからは見えないが、何が起こっているかは想像がついた。

自然林から出ると、校庭の様子が視界を満たした。集団で逃げ惑う児童たちに、牙を剥き支離滅裂に走り回る猿。狂気がかった光景だ。こんなことがこの川南小で起こっていいものなのか。うつぶせに倒れている児童も数人いる。騒ぎを聞きつけて、校庭につながる階段を駆け下りてくる数人の教員の姿も視界に入った。

山添は、校庭の横にある用具入れまで走り、そこから野球クラブが使っているジュニア用金属バットを取り出した。

一頭の猿が、児童たちのかたまりに突入しようとしていた。山添は全力で走った。

「助けて！」

猿に一番近い位置にいるのは利光竜彦だ。山添は、竜彦に飛びつき、その身体を抱きこんだ。その刹那、今度はわき腹に、気が遠くなりそうな激痛を感じる。

何なんだ？　どうして俺に、こんな理不尽なことが次から次へと振りかかる？　今の状況に対する怒りと、たぶんこれを呼び込んだのは、その大部分は俺自身に原因があるのだろうという情けなさで、涙が出てきた。

18

「情けない！」

父のその言葉が、何よりも恐かった。だから必死で頭を働かせる。

一〇〇割る二五、一〇〇割る二五、一〇〇割る二五……。

焦れば焦るほど混乱した。割り算はいつも筆算でやっているから、突然「おい、一〇〇割る二五は何だ？」などと訊かれると、パニックに陥ってしまうのだった。父がみるみる不機嫌になっていくのがわかる。お父さんに怒られたくない、お父さんを喜ばせたい。真剣にそう願った瞬間、天啓のように、ある数字が脳裏に降ってきた。

「八！」

父の顔がゆがむ。

「あ、違った八〇だ」急いで訂正した。

その瞬間だった。例の言葉が父の口から発せられたのだ。「情けない！」

涙があふれる。なぜ、僕がこんなことで怒られなきゃならないのかという理不尽さと、上手くやってのけて父を喜ばすことができなかった悔恨が入り混じりになる。

いたたまれない思いを抱いていると場面が変わり、ふいに目の前に男の子が現われた。小学校五年生くらいか。唇を噛み、泣こうとするのを必死で堪えている様子だ。

それを見たとたんに、激しい後悔にとらわれた。なぜ、そんなことを言ってしまったのだろう？　自分が父から言われるのが一番嫌だった言葉――。どうやら、それを俺は、彼に向かって言ってしまったらしい。

ということは、この目の前にいる男の子は俺の子ということか？　その子を凝視した。自分よりも確実に男前だということはわかる。つまり俺は、顔立ちの整った女と結婚することに成功したのだろうか。が、俺はだいたいいつ結婚したんだ？　まるで思い出せない。

「情けない！」

また、あの言葉だ。しかしその響きは、父のものとも自分が言ったであろうものとも明らかに違っていた。第一、女の声だ。罵倒の言葉であるのにも関わらず、どこか優しく、それでいて知的な声――。

「いい？　紙の上での筆算と暗算とは、まったくの別物なの。唐突に、『一〇〇割る二五は？』なんて訊いて即答を求めても、この子を追い詰めるだけで、何の教育効果ももたらさない。お父さんなんだから、その辺のところわかってよ」

また同じ女の声がした。

そうだ、まったくその通りだ。その言葉を発する女の顔を確認したかった。そして一つのことを激しく求めた。

「今日子！」そう夢の中で叫んで山添は覚醒した。

目の前にいたのは、残念ながら今日子ではなかった。

「おい」と、今日子とは正反対のルックスの瀬上が訊いてきた。「俺

が誰だかわかるか？」
「瀬上だ。瀬上和彦。警察官。階級は警部補で、南署の刑事課所属。高校時代はビー部で花園にも出場したけど、一回戦で、その瀬上キャプテン率いる北高フォワードは、西東京代表高井戸学院のスーパースター新城選手に抜かれまくってボロボロ。スコアは確か……」
山添はそう言って身体を起こそうとしたが、とたんに脳天まで突き上げる痛みを感じ、その試みを放棄した。
「五対一〇八。しかし北高の五点ってのはスクラムトライだ。あの年の花園で、優勝したタカガクからスクラムトライを奪ったのはわが北高だけだったという事実も、高校ラグビーの歴史に長く記憶されるべきだな」瀬上は山添を心配するでもなく言い、横にいるもう一人の刑事――確か、谷口という瀬上の後輩だった――が、吹き出した。
「ま、ともかく」瀬上が続ける。「それだけへらず口が叩けるのは、身体はともかく精神はまともな証拠だ。目が覚める前は、突然涙を浮かべたり、そうかと思うとにやにやしたり、俺はマジで心配したよ」
そうだ。俺は猿に噛まれて……。あらためて周りを見回す。どう見てもここは病院だった。腕には点滴の針が取り付き、指先にはクリップのようなものがはめられていた。ベッドの横には、血圧と心拍数らしきものが表示されているモニターがあり、心拍に合わせてだろうピコピコと電子音を鳴らしている。山添は、自分に取り付いている医療機器のあれやこれやが外れないよう注意しながら、もう一度身体を起こそうとし、今度は痛みをこらえながらもなんとか成功した。「子供たちは？」と訊く。
「やっと状況が理解できたようだな。教師の顔になっているぜ」
瀬上の余裕ある口ぶりで子供たちは無事であったであろうと推測し、ひとまず安心する。
「そうだ。奇跡的に大丈夫だ」瀬上は、山添の表情を受け止めて言った。「転んで軽傷の子はいるが、猿に襲われた子はいない。これも、山添先生の大立ち回りのおかげだ」
「じゃ猿は？」
「そこだよ。こいつは大変だぞ。猿四頭のうち、二頭は頭をかち割られて死亡。もう二頭は、人間でいえば脳挫傷になるんだろうな、重傷だ」瀬上は嬉しそうに言う。「もっとも重傷猿も薬殺したけどな。これもみ～んな、山添先生の金属バットがイチロー選手並みの打率を示したおかげだ。お前、動物愛護団体のブラックリストの一番上に名前が載っちまったな」
「学校はどうなったんだ？」瀬上の駄弁を無視して訊く。
「閉鎖中。県教委と県警のお偉方が協議中だが、当分は休校ってこ

とになるんじゃなるんじゃないか。とりあえず、今はバリケード張ってるがな」
「子供たちは？」
「全員登校してきた時点で、保護者に迎えに来てもらいました。保護者が二人とも仕事のご家庭の子は、市教委の方で預かり、連絡が付き次第、迎えに来てもらったようです。ショックを受けている子については、カウンセラーが自宅に派遣されています」谷口が答えてくれる。
　そうか、と息を吐き、あらためて周りを見渡す。病室は二人部屋だが隣のベッドには誰もいない。窓にはカーテンがかかっているが、どうやら夜のようだった。
「ところで……、お前に月曜日に渡した暗号なんだがな、解けたか？」
「解けた。俺が解いたわけじゃないが……」
「久我か」
　山添は頷く。
「で、久我は何と？」
「ランデックまつい」
　瀬上と谷口が目を合わせた。
　山添は確信した。「やっぱり、ランデックまついは、沢村課長の自殺に何らかの役割を果たしているんだな」と、ランデックに乗り込み、そこの広報担当と会ったことは伏せて訊いた。
「今は何とも言えない。それより山添、お前、暗号が解けたのにすぐに連絡してこなかったろ。どういうわけだ？」
「いや、それは」じどろもどろになる。
「なんにせよ」瀬上が勝手に宣言する。「お前は公務員なんだから、きちんとお巡りさんの言いつけは守って、何か情報があれば、すぐに報告してくれよな。それから今は重症患者なんだから、自分で動こうなんて考えは決して持つな」
「了解」憮然として山添は答えた。
「じゃその頭で、何か有益なことが思いつけたら連絡してくれ」瀬上が言って踵を返し、その後を谷口が追った。
「それはこっちの台詞だ！」山添は、その二人の背中に対して精一杯大きな声で言った。とたんに痛みが走る。が、瀬上は背中を向けたまま投げやりに手を上げ、谷口ともども出て行ってしまった。
　くそっ。あれが、重傷患者にして学校救済の功労者に対する態度かよ。山添が心の中で悪態をついていると、瀬上たちと入れ替わるようなかたちで年配の看護師が入ってきた。
「警察は帰ったようだね」看護師は言って、山添のベッドの横に立つと「あれれれれ、これ、輸液剤がなくなってからずいぶん経って

るよ」と言い、点滴と、そのついでに指先に取り付いた器具を外してくれた。
「あの、この点滴、このままずーっとくっつけていたら、私はどうなっていたんでしょうか？」
「そりゃあんた、血管の中に空気がどんどん入っていっちゃって、下手すりゃ死ぬわよ」
山添はまたしても憮然とする。その背中を看護師に叩かれ、思わず「うっ」という声が出た。
「あ、痛かったね」その看護師は、まるで心配するに当たらないという口ぶりで言った。「嘘よ。今の点滴は、輪液剤がなくなっても空気が入るなんてことはないし、仮に入ったとしても静脈点滴の場合どうってことないわよ」
「はあ、そんなもんですか」山添は間の抜けた返事をした。
看護師は五十歳くらいの巨大な腰周りを有した女性で、胸に「看護師長　春山」のプレートを付けていることに気付いた。
「看護師さんはもしかして……」
「そう。春山美香の姉よ。山添先生。妹がいつもお世話になっています」看護師は頭を下げた。
「えーと……」山添は、春山師長のネームプレートを見つめる。
「なんでおばちゃん姉妹なのに、二人とも同姓かっていう質問はなし。人それぞれ事情があるんだから」
「あ、いや、そういうつもりじゃ」
「といっても別にいいんだけどね。私はバツイチ。今後も予定なし。妹はずーっと独身。あっちの今後についちゃ知らないけど、たぶんないね」
「そうすか」山添は初めて、春山先生のプライベートな部分に触れた思いだった。
「で、本題なんだけどね」春山師長は、持って来た書類に目を落とした。「猿による噛傷が二箇所。左肩とわき腹ね。抗生物質もたっぷり打ってるから、これで死ぬなんてことはないから安心して。ただ鎮痛剤の効き目が切れると、ちょっとつらいかもね。そんときゃ、ナースコールしてくれりゃすぐに来るから」
「そりゃどうも心強いことで」
「でも、何が起きるかわからないから、最低一週間は入院してもらいます。野生動物に噛まれた傷って結構やっかいなのよ。なにせ、やつらの口の中は雑菌だらけだからね」
「わかりました」山添は素直に言った。どうせ休暇届を出しているし、通知表作成にしても、もう自分がすることはないだろう。今の自分の状況があまりにも滑稽で、先ほどの夢を思い出していた。
「あ、それでね、山添先生。二時くらいかなあ、お父さまとお母さ

まが着替えその他を置いていってくれたから」
　さっきの夢は、その事実を反映したものか。とすると……。「他に誰か来ませんでしたか」山添は、勢い込んで訊いた。
　春山師長が破顔する。「おっと、そう来たか。ふ～ん、なるほど」
　山添は、ある種の期待を抱いて、次の発言を待った。
「まず一つ、山添先生に会いたいという児童は、そうね、十人ほど来たけど、これは悪いけど断っておいた。妹の指令でね。だいたい先生はずっと眠っていたわけだから、児童たちが来てもわからないし。手紙は預かったわよ。そこの引き出しに入れてある。あとご両親が持ってきた着替えは、その下」春山師長は、ベッド横のサイドチェストを指し、さらに続けた。「それから、マスコミが来たね。新聞が一社、テレビが二社。でも、こいつらは追い返したから。やつらにしたところで、先生が目覚めていない以上コメントの取りようもないし、先生だって何か話す以上、校長にお伺い立てなきゃいけないこともあるでしょ。突然、何か訊かれて言質を取られてもねえ……」
「ありがとうございます」山添は、ため息をつきつつ頭を下げた。
「な～んか、納得いかないって顔だわね」
「いや、別にそういうわけでは」
「来たわよ、もう一人」
　自分でも顔が輝くのがわかる。
「そんな犬が骨を見せられたときのような顔しないの！　しかし、山添先生に婚約者がいたとはねえ」
「婚約者？」
「あの綺麗な人。いや、あれは綺麗っていう形容詞じゃとらえきれないルックスと雰囲気だな。でも山添先生には……」
　余計なお世話だと心の中で毒づく。
　春山師長が続ける。「婚約者じゃないわよね。そう思ったけど、一応、病室には通したわよ。怪しい人にも見えなかったんだし、婚約者と言われれば信じるしかないし」
「北高の同級生です。久我今日子さん。婚約者じゃありません。駅近くの『桃李館』をやっています」
「ああ、そういや、妹から聞いたことがあるよ。北高の後輩で、教師辞めて塾始めてすごい実績を上げている女性がいるって。ふーん、そうか」
「で、彼女は何と？」
「いや、別に。思いつめたような顔で先生のこと見つめていたけど、私が大丈夫よ、と言ったら、お願いしますとだけ言って帰って行った」
　また、気分が高揚してくる。

「彼女の方はともかく、先生が、あの久我さんという素敵な女性を憎からず思っていることは、その表情でよ～くわかったよ。退院したら、私も、それから妹も、できることがあれば協力するから、それまではゆっくり身体を休めることね」
「はあ、それで……」まだ訊いてないことがあった。「ここは、そもそもどこなんです？」
「それ言うの忘れていたわね。慈愛記念病院。知ってるでしょ」
慈愛記念病院は、市内南部で一番大きい救急指定病院だ。川南小から救急車で運ばれた場合、ここに来るのは、まずは順当なところだろう。
「しかし、このご時勢、よくベッドが空いてましたね。おまけに隣は無人だ。ツインルームのシングルユースてなところでしょう。健康保険で全額賄えるとは……。私、今、いろいろと入用な時期で」宮城家の塀のことを思い浮かべながら言う。
「その辺のところは心配ご無用なんじゃないかな。なにしろ先生は、学校の危機を救った大功労者なんだから。警察からも一人部屋にしてくれという要請があったし、警察がなんとかしてくれなきゃ、やっぱりねえ」春山師長が、妙に所帯じみた口調で言った。
「春山さんは、監視役に任命されたわけですか」
「任命じゃなく志願だけどね。これから一週間かな。私が山添先生の官房長官てなところね。どーんと任せておいてよ」
何を任せるのかいまいち判然としなかったが、ともかく、「ご多忙な師長さんに自ら担当していただけるとは光栄の至りです」と言った。
春山師長は、山添のそうした皮肉も、まったく意に介さず宣言する。「とにかく何かあったら、そのナースコールボタンね。ここにはできるだけ私が来るようにするから」
できれば若くて細めの看護師さんに来てほしいのですが、とはとても言えず、「まったく心強い限りです」とだけ、これも若干の皮肉を込めて言ったが、伝わった様子はまったくなかった。
春山師長が出て行ってから、山添は病室を見渡した。カーテンがかかってるが夜だということはわかった。時間を確かめるため左手首を持ち上げたが、そこに腕時計はなく、あらためて自分の格好を確認した。病院備え付けのものであろう、浴衣状の寝巻きを着せられていた。
山添は、鎮痛剤の効果がなくなってきたのか、継続的な鈍い痛みを発し始めた身体をなるべく刺激しないようにひねると、サイドチェストの一番上の引き出しを開けた。そこには、児童からの手紙のほかに、携帯や腕時計、財布や車のキーなどが一まとめにされていた。

携帯を取り出して時間と着信履歴を確認する。液晶表示は「20:23」となっている。その画面が唐突に「受信中」に変化し、続いて受信音が鳴った。着信表示には「久我」とある。
「あ、あの大丈夫？」ためらいがちに今日子が訊いてきた。思わず頬がゆるむのが自分でもわかる。
「なんとかね。来てくれたんだって」
今日子はそれには応えずに言った。「愛美が来てない」
「どういうことだ？」
「愛美が塾に来ない」
「愛美さんが、これまで塾を休んだことは？」
「ない」
「愛美さんの自宅には？」
「これから確認してみる。とりあえず、山添くんにと思って」
「わかった。確認は俺にやらせてくれないか。すぐ折り返し電話する」
「ありがとう」
「それでさっきの話なんだけど、看護師さんが婚約……」
「あの、電話待ってるから」
電話は切れてしまった。山添は苦笑し、そして携帯から本居家の電話番号を探しコールボタンを押した。
「はい、本居です」三回目のコールで、いつか聞いたことがある本居優子の声がした。
「川南小の山添です」
電話口で息を呑んだ様子がこちらにも伝わってきた。優子がためらいがちに言う。「先生、大丈夫なのですか？　なんでも大変なことに……」
「今、病院のベッドからですが私は大丈夫です。それよりも、先ほど桃李館の久我先生から私に電話があり、愛美さんが塾に来ていないと」
「はい」
山添は、とりあえずほっとした。このことは、母親も承認済みということか。
「今、愛美さんはそこに？」
「いや、いません」
「愛美さんは、これまで一度も塾を休んだことがないと……」重ねて訊いた。電話の相手は黙っている。「すみません。お母さまが、そのことをご存知ならいいんです。どうも、余計な詮索をしたようで」何か事情があるのだろうと察した山添は「愛美さんによろしくお伝えください」とだけ言って電話を切ろうとした。
「あの」そのとき、電話口に声が返ってきた。「愛美なんですが、

父親と一緒なんです」
さすがに、昨日の夜、お宅を訪問した人ですねとは言えず、山添は黙っていた。
「お恥ずかしい話ですが、三年前に離婚していまして、それからもいろいろ言っては来ていたのですが、昨日の夜、突然やって来て、また一緒に暮らそうと。もちろん断ったのですが……」
「はい」今度は短く返事する。
「そしたら今日になって、今愛美と一緒にいて、これから食事と映画に行く、と」
「それは……、ある種の誘拐じゃないですか。警察には？」
「いえ。愛美が電話に出て、上手くやるからと言ってくれたものですから」
もしかして、という疑惑が湧いてくる。
優子は続けた。「愛美にとっては実の父親ですし」
「元のご主人が愛美さんに危害を加えるようなことは？」
「それは、ないと思います」優子は言った。
山添はしかし、一つの疑念を取り払うことができなかった。「あの……、大変、立ち入ったことなんですが、愛美さんはアッシジ幼稚園出身だとか」以前、愛美から聞いた、この市内で富裕層が通うとされている、フランシスコ会創始者の出身地の名を戴いた幼稚園の名をあげた。
「はい……、その頃は元の主人の仕事も上手くいってましたから」
しめた、と思う。「ちなみに、元のご主人はどんなお仕事を？」
「建築設計事務所を自営していました」
「わかりました。立ち入ったことを伺って申し訳ありませんでした。私のことは大丈夫ですから、愛美さんが戻ったら、そうお伝えください」そう言って電話をきると、山添は思考を進めた。
愛美は、いったいどういうつもりなんだろう？　だいたい、「上手くやる」とはどういうことか。愛美は今朝、お父さんとは一緒に暮らしたくないと言っていた。にも関わらず、今、父親と一緒にいる。そしてその行為の、母親に対する弁明として「上手くやるから」という言葉を使った。山添は、一つの結論を出さざるを得なかった。
愛美は、この町の、この県の、そして日本の宝なんだよという、今日子と春山先生の言葉を思い出す。
今日子に電話すると、コール一回ですぐに出た。先ほどの本居優子とのやり取りを知らせる。自分の考えは伏せていることにした。事情を聞いた今日子は「そう」と言ったきり黙りこくってしまった。
「父親が一緒だっていうんだから、俺たちにできることはないよ」山添は取り成すように言った。「だいたいお前、本来なら授業時間

中だろ。それを俺に電話かけてきたり、電話の前でじっと連絡を待っていたり、愛美が心配なことはわかるが、お前らしくないぞ」
「そうだね」か細い声で今日子は答えた。
「とにかく、待つしかないんだからな」今日子に釘を刺して電話を切ると、今日子のためにも、行動を起こさなくてならないことが明らかになった。
外出できる服に苦労して着替えた山添は、財布とシビックのキーと携帯を持っていこうとして、引き出しの中のもう一つの携帯の存在に気づいた。瀬上が持たせてくれたものである。せめて愛美が、ＧＰＳ機能付きの携帯を持っていてくれれば……。そう考えたとき、一つの疑念を抱いた。この携帯がＧＰＳ機能付きであり、俺の動きを特定するために瀬上が持たせたものであるとするならば……。山添は、ＧＰＳ機能付き携帯を扱うのは初めてだったが、しかしこれが県警仕様であるならば、こちらの携帯に検索履歴を残さずに、この携帯がある場所を特定することくらい簡単だと直感した。
むろん警察組織が本気になれば、ＧＰＳの有無に関わらず、たとえば山添自身が契約している携帯が存在する場所を特定することもできるだろう。ただしそれには、さまざまな手続きが必要だと思われる。県警のＧＰＳ付き携帯を渡してしまった方が諸事お手軽だ。
瀬上のやつ、徹底的に俺を馬鹿にしてやがると怒りがこみ上げてくる。しかし、こいつを利用して瀬上の鼻をあかすこともまた可能だと考えた山添は、県警携帯をチェストにしまった。
病室を出て廊下を歩く。慈愛記念病院は救急指定病院なので、待合室に下りると、そこは夜の八時半とは思えぬ喧騒ぶりだった。十数組の、主に親子連れが診察の順番を待っている。母親の胸でごほごほと咳き込む幼児、それを迷惑そうに見やって自分の子供を抱きかかえる別の母親。子を思いかばう一途な気持ちと自分の子だけがよければいいというエゴイズムが情念となって渦巻いているかのようだった。
それにしても、と山添は思う。慈愛病院の当直医は確か一人なので、今、受け付けてもらっても、診療してもらえるのは数時間後になるだろう。こんな、さまざまなウイルスが飛び交っているような劣悪な環境に数時間も滞在するくらいなら、家で静かに休ませていた方がいいのではないか。その方が、この時間に医師を本当に必要としている子供を助けることになるのではないか。もっとも山添自身、実際に自分に子供ができて、夜中に熱を出したときに、そうした冷静な対応ができるかどうかははなはだ心もとなかったが。
ともあれ、受付の職員や看護師は、次から次へとやって来る患者の対応におおわらわであり、こちらに注意を払おうともしない。山添は堂々と正面玄関から外に出た。

いましがた、病気の子供をここまで乗せてきたであろうタクシーがドアを開けたまま停まっていたので乗り込み、行き先を告げる。まずは自宅に戻り、車を取ってこなければならない。

自宅までは、タクシーで十分ほどだ。山添は、アパート前の駐車場にタクシーを着けてもらった。このまま部屋には戻らず、シビックで、この市最大のシネマコンプレックスに行き、愛美の父親の車を探してみるつもりだった。車種と色、おおよその年式は記憶していたし、今日子がナンバーを控えているはずだから、いざとなったら訊けばいい。そう考えながらシビックに近づくと、様子がいつもと違っているのに気づいた。微妙に傾いている。左前輪がパンクしているようだった。

肝心なときにこれかよ。走り寄って身をかがめて見ると、タイヤの横腹に裂傷があった。明らかに人為的に傷つけられたものだ。どういうことだ？　いぶかしく感じたのと同時に、後ろに人の気配がした。振り返ると、いきなり金属バットらしきものが振り下ろされ、猿に噛まれた肩を痛打された。一瞬、気が遠くなる。が、相手の攻撃は情け容赦なかった。尻もちをついた山添の、これも猿に噛まれたわき腹を蹴り上げてくる。ぐへっと情けない声が出て、酸っぱい胃液が逆流してきた。さらに間髪入れずつま先蹴りが襲来し、その勢いで山添の身体は反転してうつぶせになった。とたんに、苦い液体が口から飛び出したが、なんとか相手の足首を掴み、形勢逆転を試みる。しかし、その反撃が相手を一層刺激したのだろう、腎臓目掛けて靴底攻撃が来た。それを受けて気が遠くなった山添は、相手の足首に爪を立てるのがやっとだった。

「おい」という声がした。

なんとか起き上がろうとするが、思うようにいかず四つんばいの姿勢になる。

再び頭上で声がする。「お前、もう教員辞めろよ」

聞いたことがあるような声だったが、誰のものかは特定できない。おららく、マスクをしているのだろう。「どういうことだ？」かろうじて発声した。

「受け持っている児童全員に逃げられ、おまけに学校に行けば、猿に襲われる始末だ。猿しか、お前の相手をしてくれなかったってことだ」酷薄そうな笑い声がした。「別に、何かご立派な理念があったわけでもないだろ。大学を卒業するまでに本当にやりたいことも見つけられず、親が教員だったんで、なんとなく教員採用試験を受けたってクチだ」

背中を踏みつけられた。手と足から力が抜け、地面に身体が叩きつけられる。声の主は続ける。「どうせコネ採用だろ。とっとと辞めるのが世間様に対する礼儀ってもんだ。教える児童もいないんだ

しな」
もう起き上がる体力も抵抗する気力もないまま、山添は、そのまま冷たい駐車場の地面に顔をつけた。

19

「山添くん、山添くん」
顔をゆっくりと上げ、霞んだ視界で声の主を見ると今日子、のようだった。かがみこんだスカートの奥に、白いものが見える。一瞬、天国に来たのかと思うが、全身に鈍痛を感じたことで、先ほどのことを思い出し、そして今置かれている状況をなんとか把握した。
「どうしたの？」だとか「誰にやられたの？」などと意味のないことを言わない今日子の頭のよさに感心する。
「今、何時だ？」身体を起こしつつ訊いた。
「十一時半過ぎ」
「そうか。久我、俺は教師に向いてないのか？」
「さんざん痛めつけられた様子で、口の周りにはゲロが固まっている状態でそんな質問をされてもねえ」
今日子は、無理に笑おうとしたが、失敗したようだった。何も言わず、山添の脇に肩を入れてきて抱き起こそうとしてくれた。
「すまん。大丈夫だ」
「どうして俺がこういう状態だってことがわかったんだ？」
「私、昨日の夜、愛美の父親と思しき車を追跡したでしょ。でも途中、赤信号に阻まれて見失っちゃったのよ。で、さっきの電話で、愛美が父親と一緒に映画を観に行くって聞いたから、シネコンの駐車場を探ってみようかと。山添くんもたぶん動いてくれると……」そう言って今日子は目を伏せた。「私の、愛美に対する過剰な気持ちが、山添くんをこんなふうにしてしまった」
「そんなことはない。愛美さんは、たぶんお前の言う通り、この町の、そして国の宝だろう。それを守るのは、教師として当然のことだ。なあ、久我」そう呼びかけて、山添は今日子を見た。いつもと違って髪を下ろしているその顔の、いつも以上の美しさに若干たじろぎながらも続けた。「お前、自分なんか世の中に生まれてこなければよかったと思ったことはあるか」
「何度も、何度もあるよ」今日子は真剣な面持ちで言い、山添は当惑した。
「久我みたいな……」何でも持っている人間が、と言いかけたが口をつぐむ。
「何？」
「いや、なんでもない。じゃ、今の久我は、愛美さんや他の教え子

たちに生かされているわけ、か」
「そういう部分はある」
「俺には……、それもなくなったようだ」
今日子は何も言わない。だから山添は、今、一番望んでいることを言うことにした。「眼鏡を外してくれないか」
今日子がまた無理に笑おうとしたようだった。「それって、キスしたいってこと？」
「まったくその通りだ」
「その、ゲロまみれの口で？」
山添は、あわてて口を押えた。その手が今日子に掴まれ、そっと外された。そして、柔らかな唇が押し当てられた。
「なんだか、生きる希望が湧いてきたよ」数秒後、山添は言った。
「それは大げさだよ」今日子も、救われたように言う。「とにかく部屋まで行こう」
今日子の肩を借りてアパートの階段をどうにか上がり、部屋に入った山添はそのままベッドに倒れこんだ。
「山添くんが電話くれた後、私、シネコンの駐車場に行ってみたって言ったよね。山添くんも来ているんじゃないかというはなはだ身勝手な期待を抱いていたんだけど、あの可愛いシビックの姿がなかったし、やっぱり動けるような状態じゃないんだと思って病院に行ってみたら」
「もぬけの殻だったということか」
「そう。それで、山添くんの担当の看護師さん――川南小の春山先生のお姉さんよね――に、このことは内緒にしておいてくださいって頼んで、とにかくここに来てみたの」
「てことは、病室から俺がいなくなったことは、まだ春山師長しか知らないんだな？」
「いつまで彼女が黙っていてくれるかわからないけど。でも少なくとも今晩は、病院に戻らず、ここで休んだ方がいい」
「愛美さんは……」
「本当にごめんなさい」
「違う。これは俺の問題だ」
「わかった。わかったから今日だけは休んで。お願いだから」
今日子は、山添の顔を真っ直ぐに見据えてくる。その視線の力強さに降参してしまう。「春山師長に電話してくれないかな。わけあって病室を抜け出したけど、とりあえず無事だということ。あと俺、病室のチェストの引き出しに、瀬上から預かった連絡用の携帯を入れっぱなしにしてるんだけど、ついでに、そいつも保管してくれるように頼んでくれると助かる。なにせ警察備品だからな。誰かに不正使用されたりしたら、俺は懲役になるらしい」

「オーケー、やっとく。じゃ、山添くんは休んで。私も時間が許す限り、ここにいるから」
その今日子の一言で幸せな気分になった山添は、すぐに眠りに落ちた。

20

目が覚めると、陽が昇っていることが、カーテン越しにもわかった。今日子はと見ると、ベッドの足元に上半身をうつぶせにして預け、かすかな寝息を立てていた。
今日子を起こさないようにそっとベッドから抜け出し、ダイニングで手早く服を着替えて歯を磨く。ベッドのあるリビング兼寝室の扉を開けると、今日子はすでに起きていてテレビを視ていた。
「今からお昼のニュースよ。昨日、川南小で大立ち回りを演じた山添先生の話題が報じられるかも」
おどけるように今日子は言ったが、ローカルニュースの第一報はそんなものではなかった。女性キャスターが伝える。
「昨夜遅く、市内錦町の踏切で、貨物列車と乗用車が衝突。乗用車から男性の遺体が見つかりました。遺体の損傷が激しいこともあり、身元は確認できていません。県警は、事件事故両方から調べを進めています」
N市では、市街地に隣接するように工業地帯が広がっている。そこから単線の引き込み線がＪＲの本線に何本か通じていて、その一つの中途にある踏切で事故は起きたということだった。
テレビ画面に映し出された件の車は原形を留めていなかったが、しかし山添には、その車種はわかったし、むろんボディカラーも確認できた。「ダークグリーンのＳ１７０型クラウン。愛美さんの父親が乗っていた車と同じ形式、同じ色だ」
「じゃあ、一昨日の夜のあの車は……」
「そういうことだ。愛美さんに確認した」
「でも身元不明って……。確かに車はぐしゃぐしゃだけど、ナンバーくらいは確認できるだろうし」
「そのあたりはわからないが、死んだのが愛美の父親である可能性は、かなり高いと思う。Ｓ１７０型クラウン自体はありふれた車種だけど、ダークグリーンはそうある色じゃない。前後の状況から考えても……」
今日子は目を見開いた。「だとしたら、愛美は？」
「一緒にいたってことはないだろう。ニュースも何も言っていないし」
「そうか。そうだよね」自分に言い聞かせるように、今日子は言

う。
「ただ、不安な点もある。昨日の夜、愛美さんのお母さんと話して、離婚したということは聞いたんだが、そのとき彼女は、離婚した愛美の父親は、建築設計事務所を経営していたと言っていたんだ。この市で建築業に携わっていたら、ランデックまついと何の関わり合いを持たないということは不可能に近い。接点はあったはずだ。それに愛美さんは、お母さんに『上手くやるから』と電話で言ってる。もちろん、父親と折り合いよくやってみるという意味もあると思う。でも、彼女は父親のことを嫌っていた。なのに、こんな言葉が出てくるのもちょっと変だ」
「父親とランデックまついが何らかのかたちでつながっているのを、愛美は知った。だから父親を通じて、児童消失の謎を追ってみようと」
「そう考えるのが、まったく妥当だと思う」
「とすれば、愛美は今、ランデックまついに拘束されてる可能性が高い……」
「奪還しよう」山添は力を込めて言った。「でもその前に、愛美の母親に一応確認してみるよ」
山添は、「本居家」の登録を呼び出しコールボタンを押した。
「はい、本居です」と言って、本居優子はすぐに電話に出た。母一人子一人なのに、母親は働いていないのだろうか。疑念が湧くが、そんなことを考えている場合ではない。
「川南小の山添ですが、愛美さんは戻っているでしょうか？」
「まだ、ですが」
予想通りとはいえ、携帯を持つ手が汗ばむのを感じる。「テレビのニュースは」
「いえ、うちにはテレビがないので」優子は、今日子が聞いたら喜びそうなことを言った。
山添は今日子を見た。今日子は小さく首を振り、その気持ちは山添にもわかる気がした。
「あの……」と言いかけた愛美の母親を制して一方的に電話を切った。
「愛美さんを探そう」
「だね。愛美の父親の車のナンバー、私控えているけど」
「どういうわけかはわからないが、警察は車の持ち主を特定できないでいるようだ。だから、そいつは、こっちの切り札として取っておくのも悪くない」山添は、病院での瀬上の態度と、ＧＰＳ携帯の一件を思い出しながら言った。
「オーケー。じゃどうやって、愛美を奪還する？」
「ウイリアム・アムスデンっていったよな。ランデックまついのス

カした広報マン。あいつを誘拐して、愛美を返せと要求する。ついでにいろいろ訊いてやる」
「私がハニトラってやつを仕掛けてみようか」真剣な目をして今日子が言う。
「いや、そいつはぜひ今度、俺に対してやってくれ」山添は、今日子に、アムスデン誘拐計画の手順を話した。
「すごいじゃない、山添くん。ホームズばりの観察力と発想力と計画力だよ」今日子が素直に驚いてくれる。
発想の方は愛美にヒントをもらったとは言えず、ともかく「お前にキスしてもらったんだから、それくらいの価値はある男だってことを証明しなきゃ、な」と宣言した。「とりあえず、俺はシビックのタイヤ交換をしてくる。その後で、お前のハイエースを借りに行くから」
「スペアキー渡しとくよ。停めている場所は、桃李館から歩いて二分くらいの月極駐車場。すぐわかると思う」そう言って今日子は簡単な地図を描いてくれた。
「オーケー、じゃ行動開始だ」
「私は夜、連絡を待っていればいいのね」そう言って今日子も立ち上がった。

21

カー用品店でタイヤを四本購い、飯島の工場に装着を頼み、丁寧にバランスを取ってもらう。その時点で山添は宣言した。「社長、俺、このシビック買うことに決めましたから」
飯島は驚いたようにこちらを見たが、すぐににやりとした。「支払いは夏のボーナス……と、いいよ、それでも。そう言うだろうと思って、カーナビも移設しておいたから。先生のスイフトの保険には他車運転特約が付いているから、そのまま乗っても大丈夫。でも先生、そのシビックは本当に貴重な車なんで、保険を使うなんて事態は……、大切にしてやってくださいね」
その言葉に胸が痛み、「ありがとうございます」と言うだけに留めた。
工場を出て、シビックを走らせる。さすがに飯島にバランスを取ってもらっただけのことはある。直進時のステアリングはまったく揺らぐことはなく、コーナーでは、こちらが頭に描いたそのままのラインをトレースするように曲がってくれた。もともと素性がいい車であることはわかっていたが、それが飯島の技術によってますます磨きがかかったようだった。これなら、シビックも完璧に仕事をしてくれるだろう。

今日子の地図が示した駐車場に行ってハイエースをいったん引き出し、空いたスペースにシビックを入れようとしたときだった。駐車場に入ってきた黒いアコードが、困惑したように停車した。男が一人出てくる。

「その車をどうしようというのですか？」

「ああ」と山添は応えた。「桃李館の方ですね」

男の顔には、見覚えがあった。暗号を持って桃李館に行ったとき、今日子に問題集を持ってきた男だ。確か竹内先生と呼ばれていた。

「久我、いや、久我先生に借りたんですよ。これから、ちょっとかさばる買い物をしなければならないんで」

ハイエースの窓から顔を出してそう言うと、少しばかり気負いこんだ様子で竹内が反応した。

「もう、関わらないでくれませんか」

山添は無言で竹内を見返した。竹内の言わんとするところはよく理解できる。

「先週の土曜日でしたか、あなたがうちの塾にやって来て以来、久我は、授業に穴を空けること十数コマ。我々でフォローはしましたが、保護者の方からのクレームがぽつぽつと来始めています。そしてそれ以上に、スタッフが最近の久我に対して懸念しています。お気づきだとは思いますが、弊塾は久我で保っている塾です。生徒さんも保護者さんも、そして僕らも、久我の強い求心力に引かれて集まっているようなものです。その久我の心が塾から離れているとなると、たちまちのうちに崩壊してしまう」

「わかりました。本当にそうだと思います。今まで、すみませんでした」山添は車をいったん降りて頭を下げた。

「あの」と、竹内が言って、こちらに歩み寄って来た。「私は、教員採用に落ちた組で、私の実力がなかったのか、最近巷間でよく言われるコネってやつがなかったのか、それはわかりません。それでも今は、塾講師になって本当によかったと思っています。久我先生と一緒に仕事ができたんですから」

「申し訳ありませんでした」山添は再び頭を下げた。「この件はもともと私の問題ですから、今後はもう久我先生を巻き込まないようにします。ただ今日一日だけ、彼女を貸してください」

「昨日、本居愛美が休んだことと関係があるんですね」

山添は黙っていた。

「本居愛美……、本当にすごい子です。ああいう子に関われることは、塾講師としてこの上のない喜びです。久我が熱を上げるのもわかる。でもそれ以上に、我々にとっては久我が大切なんです。単に塾の経営者としてということじゃなく、日本のこれからの教育ということ考えても、とても重要な役割を果たし、なおかつ正しいと思

われる方向に導いていける人だと思う」そう一気に言って、大げさなことを言ってしまったと思ったのか、竹内は下を向いた。
「そいつについちゃあ、私もあなたとまったく同意見です。それでは急ぐので」
ハイエースに乗り込もうとした山添に対して、竹内が「山添先生」と大きな声を上げた。「この間、暗号みたいなのを久我に見せていたでしょう。あれ、今持っていたら、私にも見せてくれませんか」
山添はシビックまで戻り、鞄の中から件の紙片を取り出して、竹内に渡しながら言った。「実は、この答えについては、久我先生からも本居愛美さんからも、私は教えてもらってないんですよ」
紙片を見た竹内は、「そうですか。これ、たぶん循環小数ですよ」と言う。
「循環小数？」
「そう。あのとき、本居愛美たちのクラスでやっている単元を示したら、久我はすらすらと解いてみせたから。この数字は、二行をひとくくりにして三段に分けて書かれていますよね」
「そうです。私がワープロで打ち直したものですが、原本もそうなっていました」
「じゃ、この一番上の『5 63 350』と『8 54 256』について考えてみましょう」そう言って、竹内はスーツの内ポケットから携帯を取り出した。電卓を使うつもりらしい。
「これが、循環小数を利用した暗号だとします。まず『5』を『63』で割ってみる。やっぱり思った通りだ」竹内は、携帯を示した。そこには、「0.0793650793 6」という数字が現われていた。
「なるほど。小数点以下六桁が循環していますね」
「これは携帯なので、小数点以下十一桁までしか示されていませんが、この『079365』の並びは永遠に続きます。そして『5 63 350』のうちの最後に示された『350』という数字、これを小数点以下の桁数とすると……」
「そうか。六で割ればいいのか」
「そうです。そこに気付くかどうかということを、中学入試の循環小数の問題は主眼としています。当然、本居愛美は気付いたのでしょう。やってみると、この350桁目の数字は『7』であることがわかります。下の『8 54 256』についても同じようにやってみます」
竹内は再び電卓を操作した。「こちらは、『1』になりますね」
「五十音の七行目は『ま』の行、その一番上の段だから『ま』か！」
「そうです。同じように、『4 21 490』と『8 52 555』の組み合わせは『つ』になるし、『9 21 564』と『4 28 459』では『い』になります」
「なるほど。しかしそいつは、今よく使われているＲＳＡ暗号って

やつにも考え方としては似ていますね」俺は結構いいところまで迫っていたのか、今度、今日子と愛美に報告しなければと思いつつ言った。

「そうなんですそうなんです」と、竹内が先ほどまでとは打って変わってくしゃくしゃの笑顔を見せた。「循環小数の問題を解くってことはですね、そういう最先端の数学工学の入り口を覗くってことなんですよ。循環小数は、中学受験の世界では、もう何十年も受け継がれてきた古典中の古典です。むろん、こうした問題が考え出された当時は、C言語だってもちろんＲＳＡ暗号だってなかった。ただ、コンピュータというものに二進法が使われていることくらいは、知識としてあったでしょう。そして『進法』という概念が、これからますます重要なものになると、出題する学校サイドは気づいていたと思われます。だからこそ、その考え方がそれとなく理解できる循環小数を中学入試問題の定番にしていった……」

「よくわかりました。しかし、その大切な循環小数は今の公立小学校内容では扱っていない。本当に残念なことです」そう言ってから、山添は言葉を継いだ。「この暗号は、自殺した県教委の沢村課長が娘さんに対して出題した問題なんです。彼は、自分を自殺に追い込んだ相手を娘に告げようとした。だから」

竹内は黙って頷いてくれた。

山添はハイエースに乗り込み、アクセルを踏んだ。

竹内の言っていたことが、山添の立ち位置をはっきりさせてくれたような気がしていた。要は俺は、とてつもない学力を持っているらしい愛美と、学力伸長に関して、やはりとてつもなく優れた力量を持つ今日子を守っていけばいいのだ。それが、教育者の端くれとしての俺ができることだ。今後は、このプリンシプルにしたがって、自分の行動を決めていけばいい。

山添は、ホームセンターでアムスデン誘拐に必要となるであろう道具を買い揃えた後、誘拐現場に予定してある場所に出向きセッティングを行った。そうしておいて、ハイエースを桃李館そばの賃貸駐車場に返し、シビックに乗り換え、ランデックまついに向かった。

23

ランデックまついの社員用駐車場には、山添が考えた通り、アストンマーティン・ヴァンテージが鎮座ましましていた。今日子に電話をする。「俺にしては上出来の推理だったようだ。例の場所で待っていてくれ」と告げた。

阿部謹也著『甦える中世ヨーロッパ』を読み、気になる場所に付

箋を付けつつ一時間ほど待つと、アムスデンがアストンマーティンに歩み寄り乗り込むのが見えた。
フォード社製Ｖ８エンジンの力強い、それでいて誘うような音色が路駐しているこちらにも聞こえてくる。その音に、山添は一瞬、現在置かれている状況を忘れてうっとりした。
あいにくとランデックまついの社員用駐車場は未舗装だったので、アムスデン操るアストンマーティンは、ただの一つの小石も絶対に跳ね上げないぞという強い意思を持っているかのように、しずしずと動き出した。
思った通り、あいつは相当な車フェチだ。同類だからわかる。山添は丁寧なクラッチミートで、アムスデンに負けず劣らず静かにシビックを発進させた。
大通りに出たアストンマーティン・ヴァンテージの特徴的なリアランプを眺めながら観察する限り、アムスデンという男は、社会的には理想的な運転手だということがわかった。急発進、急加速、急停車は絶対にしない。エンジンはもうちょっと回してやった方が大切なアストンのためだと思うのだが、それは余計なお世話というものだろう。とにかく車に優しい、周囲に優しい、そして地球に優しい――４．２リッターＶ８エンジンを載せる車が地球に優しいも何もあったものではないが――運転を心掛けているようであった。
一昨日、アムスデンと会見したときのことを思い出す。
山添の目は、彼の左手首に釘付けになった。そこには、ジャガールクルト・アストンマーティンＡＭＶＯＸ１が光っていたからだ。スイスの超高級腕時計メーカーであるジャガールクルトとアストンマーティンの、いわゆるコラボで生まれた腕時計だ。
山添は以前、その時計を雑誌で見たことがあった。そのときは、あまりの美しさに息を呑んだものだった。そして、自分には縁がないだろうがもしかしてと思いつつ値段を確認した結果、もう一度息を呑んだ。雑誌には、七桁の数字が示されていた。だからアムスデンに会うまで、山添は、この時計をしている人間が自分と接点を持つ範囲に存在するとは考えたことさえなかった。
なにしろ、百万円を超える値段の時計だ。アストンマーティンのオーナー以外、誰がそれを購おうと思うだろうか。逆に考えば、そのアストンに通ずるデザインを目の当たりにしたアストンマーティンオーナーは、自分の車に対する愛情が深ければ深いほど、これを所有したくなるだろう。アムスデンはまさにそのタイプだと、山添は直感した。アムスデンは、アストンマーティンを所有している。それだけじゃなく溺愛している。アムスデンに初めて会ったときから確信していた。
しかし、それにしても、ジャガールクルトにアストンマーティン

かよ……。あいつは、いったいどのくらい貰っているのだろう？やつらは明らかに、この地方都市の経済活動とはまったく別の錬金術で金を生み出してやがる。山添は、あのアムスデンやアストンマーティン、ジャガールクルトに象徴される新生ランデックまついが、自分が生まれ育ったこの町に別の世界からやって来た征服者のように感じた。

腕時計に目を落とす。液晶数字が「19:46」と示している。学生時代から使っている年代物のG-ＳＨＯＣＫだ。そして車は、これも年代物のシビック。向こうがジャガールクルトとアストンマーティンなら、こっちはカシオとホンダだ。

「がんばれ、ニッポン！」にわか愛国者になった山添はそう一人ごちて、アストンの美尻にシビックを近づけた。アムスデンの行き先がわからない以上、早めに仕掛けた方がいい。

三車線の大通りの真ん中の車線をアムスデンはキープしている。もう帰宅ラッシュも終わりかける時間帯ではあったが、それでも、のろのろ行進を余儀なくされていた。しかしながら、左車線は空いている。というのは、この車線は午後八時まではバス・タクシー・二輪専用レーンになっているからだ。

山添は、アムスデンが模範運転者らしく渋滞の中でも前の車とたっぷり車間距離を取っているのを、アストンマーティンのガラス越しに確認して逆に車間距離をぴたりと詰めた。

そうしておいて、アクセルを踏みながらステアリングを左に切る。シビックの右フェンダーがアストンマーティンの左リアをガリガリと傷付けたのがわかった。シビックに対して、痛い思いをさせてしまってすまんと謝りながら、前が開けたバスレーン車線に出て、アクセルを踏み込んだ。バックミラーを見ると案の定、ヘッドライトを上向きにして狂ったように猛追してくる車があった。

アムス、車フェチのお前は、やっぱりそうでなくっちゃ。アムスデンに奇妙なシンパシティを感じつつ、アストンのヘッドランプを確認した山添は、郵便局の手前の交差点を左折した。

ここから先は、真ん中に遊歩道を配した二車線の道であり、帰宅ルートとしてはあまり有効でないため、さほどの混雑はない。

右車線をキープする。案の定、アムスデンは左車線に移り、猛然とスピードを上げた。左車線前方には路線バスがいた。あのバスの手前までに追い抜きを完了しようとする意図が見てとれた。

しかし、とも思う。アムスデンとしては俺の車を追い越して道を塞ぎ、こちらに怒鳴り込んでくる腹積もりなのだろうが、なにしろ二車線の道なのだから、俺がそのまま車で走り去ってしまう可能性があるとは考えないのだろうか。つまるところ、こうした動きをすること自体、あの冷静に見えたアムスデンが、こと溺愛するアスト

ンのこととなると判断力を失ってしまう証拠のようにも思えた。
　併走されると顔を確認される恐れがあったので、二速にシフトダウンしアクセルを全開にする。シビックは、ひゅんと加速した。バックミラーに映るアストンのヘッドランプが遠のき、アムスデンがバスをかわすために、右車線に移ったのが確認できた。
　前方に赤信号が見えてきた。アムスデンを「現場」に誘導する過程で、ここが一番の難所である。前方で交差する道を直進しなければならない。交差する道は片側二車線。いくらなんでも信号無視で突っ切るのはリスクが大き過ぎるし、アムスデンが追撃を止めてしまう可能性もまったくないとは言い切れない。
　山添は左車線に移ると、スピードを緩めた。たちまちアムスデンが併走し、ホーンを鳴らす。山添は首をすくめてステアリングの隙間から前方を確認、交差する道の車列の切れ間を見つけると信号を無視して左折し、そしてすぐに右車線に車線変更した。
　アムスデンはとバックミラーを見れば、ようやくこの道に入ってきたところだった。
　山添は、対向車線を見て車が来ていないことを確かめると、四〇キロ程度までスピードを落とし、右にステアリングをめいっぱい切り、同時にサイドブレーキを引いた。後輪が滑り出すのがわかり、センターラインをまたぎ、シビックは間逆に頭を向けた。学生時代にさんざん練習したスピンターンだが、やってみたのは十年ぶりだ。それでも見事に決まってくれたのは、このシビックの資質に拠るところが大きいだろう。思った通り、エンストもしない。
　すぐに左車線に移り、先ほどまで走ってきた南北の道を左折。その際、再びちらりとバックミラーを見ると、アムスデンがよろよろとUターンを試みようとしているところだった。まずは理想的な距離を保ったことになる。
　南北の道はここからは一車線で、上り坂になり、少し走ると北高の正面門に突き当たる。高校時代、自転車を立ち漕ぎしながら通った道だ。
　北高が見えてきたところで、アムスデンが追いついてきた。上り坂だと、いかにシビックが軽量といえども、４．２リッターのＶ８エンジンに敵うわけがない。が、ここで、追いつかれるのは計算済みだった。
　道は、藩校からの長い歴史を持つ北高に敬意を表すかのように、その正門前で直角に左に曲がった。ここから先は一段と道が細くなり、センターラインも消えた。しかし、こうした形状の道はシビックが得意とするところだ。対向車や店先に停めてある自転車をスピードを落とさずスラロームして避けて走り、したがってまた少しだけ、図体の大きなアストンマーティンを引き離すことができた。

突き当たりの信号のないT字路を右折。下り坂となる。坂を下りきったところで、再び右折する。乗り入れた道は、北高が位置する小高い丘の外周路にあたり、右手は北高の丘、左手には田んぼが広がっていた。道が広くなりセンターラインも復活。そのわりには、車の通行はほとんどない。

アストンマーティンがシビックの尻に取り付き、ホーンを盛大に鳴らしてきた。山添は、やれやれあんたには参りましたよという風情でスピードをゆるめ、同時にハザードを点滅させる。アムスデンも、そうした動きにつられるようにホーンを鳴らすのを止めた。ここで車を止め、ゆっくり話しましょうやという山添の提案を受け入れたようでもあった。

その瞬間、山添は、クラッチを繋ぎアクセルを踏み込んだ。虚をつかれたであろうアムスデンの車をたちまち引き離す。が、見通しがいい道なので、こちらの姿は確認できるはずだ。

山添は左折し、田んぼの中の、農道というには立派過ぎる二車線ほどもある道にシビックを乗り入れた。とたんにガタガタと振動がくる。たちまちアムスデンが追いついてきた。農道はかなり先まで直線で続いているから、アムスデンが追い越しをかけるには最適ではある。しかし、こちらとしては追い抜かれてしまっては計画が台無しなので、今日子のハイエースに対向車としてゆっくりと近づいてきてもらうことになっていた。アムスデンもそれを確認しているのだろう。無理に右車線に出ようとはしなかった。

やがてシビックが、板の上に乗り上げるのがわかった。山添は、ステアリングを真っ直ぐにし、さらにアクセルを開けた。水路の上に渡した幅二〇センチほどの板とシビックのタイヤ幅はほぼ等しい。その板の幅を正確にトレースするように、シビックは板の上を駆け抜けた。バックミラーを確認すると、計画通り、アストンマーティンが、水路に渡した板に乗り上げて、亀の子状態になってしまっている。

この道は、田んぼの中に敷かれた一本道だ。一見、二車線分の幅があるが、一車線分は、単に用水路に蓋をしただけのものである。そして一部、その蓋さえしていないところがある。山添は、その部分に、シビックのトレッドと同じ間隔で、幅二〇センチほどの二本の板を渡した。したがって、シビックはその板の上を走ることができた。しかしながら、アムスデンのアストンマーティンは、そのトレッドが、シビックよりもずいぶん広いので、シビックの後ろをそのままチェイスして来ると、タイヤは板の外、車体は板の上に乗り上げるといった状況になってしまう。

山添は、用水路の蓋が復活したところでシビックを停めた。亀の子アストンをもう一度見やると、板と同時にホームセンターで購入

しておいたハチェットで、アストンが乗り上げるかたちとなっていた板を、二本とも一気に叩き切った。同時に、アストンの尻を、Uターンして戻って来た今日子のハイエースが押す。哀れな超高級車は、アムスデンもろとも水深一メートルほどの用水路に頭から突っ込むかたちとなった。

山添は、ボンネットに水をかぶっているアストンマーティンに近づいた。アムスデンに携帯を使われたらまずいなとは思ったが、運転席の彼は、突然わが身に降りかかった不条理にどのように対処すればいいのかわからないといった様子で、さかんにわめき散らしている。そして、なんとかこの状況から脱出するべく、ドアを開けようするが、それは無理な相談だった。水路の側壁に阻まれて、アストンの大きなドアは、とても人が通れるほどには開かない。アストンにはサンルーフもなく、したがってアムスデンは脱出のすべをまったく持っていなかった。もう、アムスデン自身の下半身も水没しているだろう。

山添は、ハチェットを持ったままアストンマーティンのボンネットに乗ると、フロントグラスを叩き割り、それは細かなガラス片となって綺麗に崩落した。車内で呆然としているアムスデンに言う。

「そのまま両手をこちらに差し出すんだ」

アムスデンが言った通りにすると、ハイエースから降りて来た今日子が彼の両手首を粘着テープでぐるぐる巻きにした。

「オーケー。それじゃ、車から降りてもらおう」山添は、ハチェットを今日子に渡してアムスデンを牽制してもらいつつ、彼の拘束された腕を掴み引き上げ路上に立たせた。ここにいたって、アムスデンはようやく自分が今置かれている状況を理解したようだった。

「こんなことをして、どうなるかわかってるのかね」

そのアムスデンの言葉を無視して、足払いをかける。両手の自由を失っているせいで簡単に倒れた。足を押さえ、こちらも今日子に粘着テープを巻いてもらう。その姿を、コンパクトデジカメで撮影した。

「アムスデン、シビックの後ろ姿はどうだったかい？　ガリラヤ湖の湖面を歩くイエス・キリストのようだったろう。ここは、田んぼの用水路に蓋をかぶせている道なんだが、どういうわけか一部、蓋がないところがあってね。俺は高校時代、補習の帰りに自転車をふらふらと走らせていたら、道がなくなっていることに気づかず、この水路に突っ込んだことがあった。ちょうど今の君のように。あのときは往生したよ」

アムスデンが、口の端をゆがめて言う。「日本人風情が、イエス・キリストの奇蹟を真似するなど、まったく畏れ多いことだ」

「あいにく、今の日本じゃ、幼稚園のオペレッタでもやっているこ

となんでね」そうアムスデンに対して言い放った山添は、ランデックまつい本社の代表番号に電話した。電話に出た人間は、案の定、本日の業務は終了しておりますと言った。アムスデンの上半身を起こし、携帯を顔に押し当てる。「決裁権のあるやつに繋ぐんだ。働き者のランデックのことだから、まだ何らかの権限を持ったやつは残っているだろう」

アムスデンは「広報のアムスデンだ。Eチームのシロヤマ取締役に繋いでくれ」と言った。そして、英語で一気にまくし立てた。

「何って言ってるんだ？」山添は今日子に訊く。

「ファッキン・ティーチャーどもが俺を拉致した。お前らが間抜けなせいだ。どうしてくれるんだ、て」

「いい具合だ」山添は携帯を自分に戻し言った。「シロヤマさん、こちらは川南小教員の山添という者だ。そちらにいる本居愛美という小学生を今すぐ返してほしい」

「学校の先生が、弊社社員を拉致して酷い目に合わせ、その上脅迫までするわけですか」

そのシロヤマの言葉で、愛美はやはりランデックにいると確信する。「そうだ。これは脅迫だ。アムスデンは、本社から派遣された、いわばお目付け役なんだろ。そちらにとっても、下手を打つことができないお人だ。愛美を返してくれれば、何事もなくミスター・アムスデンを解放する。愛美を連れて、お前一人でこっちに来るんだ」

シロヤマは無言だった。

「まあ、いい。こっちの電話番号は記録されているよな。よ～く考えて五分以内に電話してくれ。もし何の連絡もないと、アムスデンがもっと酷い目に遭うことになるし、そうなりゃ当然、あんたは本社に対して申し開きができなくなるだろうな」

そう言って電話を切った山添は、アムスデンを無理やり立たせ、今日子のハイエースに押し込んだ。そのとき、ハイエースの車内を別の車のハイビームが照らした。急いでサイドドアを閉める。

エンジン音とアスファルトをはむタイヤの音が大きくなり、黒っぽいセダンがハイエースの横に止まった。

降りてきた男は瀬上だった。今日は谷口という後輩は連れていないようだ。後ろ手でドアを乱暴に閉めた瀬上は、「山添よ、お前まじでシャレになんねえぞ」と低い声で言い、それから今日子を見やった。

「瀬上くん、久しぶり」今日子が明るく言う。

「よう久我、相変わらず美人だな」

「ありがと。それでこんな夜分に、私たちのデートを邪魔してくれた理由を訊いてもいいかな」

「いや、瀬上。病院でおとなしくしてろっていうお前の指令を無視したわけじゃないんだ。ただ緊急事態が発生して」言い訳するように山添は言った。今は、瀬上と事を構えている場合じゃない。
「そんなんじゃねえ！　山添、お前、いったいどういうつもりなんだ？」
「なにが、だ？」山添はいぶかしく思う。
「お前、昨日の夜、病院から抜け出してどこにいた？」
「どういう意味だ？」
「とぼけるんなら、ずばり言ってやろう。俺もそういう気分だからな。お前、昨日の夜、貨物列車と乗用車の衝突事故が起きた十一時四十八分、あの踏切にいたよな。あそこで何をしていたんだ？」
山添は、思わず今日子の顔を見る。
「ねえ、瀬上くん、それって山添くんが……」
「そうだ。めちゃくちゃになった乗用車はなあ、子細に点検してみると、なんと四枚のドア全部にチャイルドロックが取り付けてあったのよ。これが何を意味するのか、わかるよな」
「その車が密室になっていたということか？」
「疑問形で訊くなよ、山添。いいか、N南署の刑事課の推理、じゃねえ、確信はこうだ。ガキの頃から車大好きで、高校生になっても稚気が抜けず、教師の目を盗んではノートの端っこに下手っ糞な車の画をいつも描いていた山添くんはだな、とにかく今、彼が巻き込まれている児童大量欠席事件にからんで何かをつかみ、その過程で、どうしても殺さなければならない人間にぶちあたった。そこで彼は、持ち前の車オタクぶりを発揮して、完全犯罪を思いついたんだ。すなわち、すべてのドアにロック装置を付けて、一度乗り込んだら最後、内側からは絶対に開かない密室の車を製作した。むろん、車オタクだから、そういうことをやってくれる工場や技術者は知っていただろうし、その改造を申し込むにあたっては、そうさな、小学校教員という立場を利用すれば、児童を乗せるときに万が一がないように、などと理由が付けられる。むろん、窓も開けられないよう、回線は切っておく。それくらいなら、お前一人でもできただろう。で、殺したい男に、何かの理由を付けてその魔の改造車を運転させ、例の貨物列車が通る時間帯に踏切に誘い込むわけだ。そうしておいて、自分の車で前を塞ぎ、共犯者に後ろを塞いでもらう。あの線路は単線だから、あわれ被害者は、逃げ場もなく踏切内に閉じ込められ、貨物列車を牽引する重量級の機関車に蹂躙された、と。列車と衝突すれば車は大破するから、改造車であることが判明することはない。したがって、単なる事故として扱われ、まさか殺人だとは誰も思わない。そういうふうに山添先生は、浅知恵を働かせたわけだ。浅知恵と言ったが、こいつはなかなか知能犯だぞ。改造車であるこ

とが判明したのは、南署の現場検証がきわめて優秀だったからだ。それだけが、山添先生の想定外だったな」
瀬上は一気にまくしたてた。
山添は、わざと鼻を鳴らした。「馬鹿馬鹿しい。それが、脳みそが筋肉でできたお前の推理、いや確信ってやつか。だいたい機関車の運転手はどうした。踏切の前後を車が塞いでいたのなら、それを運転手は目撃しているはずだろう」
「そりゃお前、運転手は目の前に車がいるんだから、そんな踏切の左右に目をやる余裕なんてねえよ。だいたい機関車の前照灯ってのは照射範囲が狭くてな、基本的には線路の上しか照らすことはできねえんだよ。お前はそこまで計算していたはずだ」
「つまり、前後の車云々についての証言はないってことだな」
「が、証拠ならあるぜ。そこのハイエース。前がへこんでいる。あそこにあるお前の旧いシビックは、後ろがへこんでいることだろうよ。この二台で、踏切の前後を塞ぎ、踏切から脱出しようとする被害者の車を押さえ込んだんだ。被害者は、踏切の前後を凶悪な殺人犯に塞がれる。車から出ることはできない。機関車が迫って来たときにゃ、さぞ恐怖だったろうね」
「瀬上」
「なんだ？　自首するか」
「お前さっきから被害者、被害者と言っているが、その被害者の身元はわかったのか？　お昼のニュースじゃ身元不明になっていたが」
「そ、そんなことはお前に言う必要はねえよ」瀬上が若干たじろぐ。
「じゃ、俺が言ってやろう。機関車と衝突したんだから、おそらく遺体の損傷は激しく、顔かたちはわからなくなっていた。指紋は前科がなきゃ照会できないし、よく歯科の治療痕とか言うが、それも全国共通のデータベースがあるわけでもないらしい。むろん、身元が判明するようなものも何も見つからなかった。したがって警察は被害者が誰かも分からずに、俺を犯人にしようとしていることになる。まったく変な話だ。それに……」山添は、自分自身も気になっていることを訊こうと考え、それで少しだけ、気持ちが優位になったことを感じた。「いいか。いかに、車が大破してようが、ナンバーはある程度は確認できるはずだ。製造番号の刻印だってある。ボディカラーはいわずもがなだ。こうした要素を統合していけば、なにしろ素晴らしい鑑識眼をお持ちの南署のことだ、車の持ち主を特定するなど、いともたやすいことだろう」
「山添よ、お前よ、お前はそれで俺から一本取ったつもりなんだろうが、墓穴を掘ったとはまさにこのことだ。あの車はな、金融車だ

ったんだよ。だから車から現在の持ち主を特定することは、いかに南署が優秀だろうが、そいつは不可能だ」
「金融車……」山添はつぶやいた。
金融車とは、債権のカタとして取り上げられた車であり、所有者は金融会社になっている場合が多い。そして、これを売買しようとする場合、名義変更は不可能であり、買い手は、何かあっても自分の所有権を主張することができないなどさまざまなリスクを負うことになる。が、このような犯罪――かどうかは、現在のところ山添には判断できなかったが――に使う場合、所有者が第三者になるので、便利といえば便利な存在ではある。
「車オタクの山添先生としては、金融車事情にもさぞ詳しかっただろうからな。これも、お前がこの事件に何らかの役割を果たしている証拠だ」
「さっきから車オタク車オタクと言ってくれるがな、車が好きで車のことに詳しい人間なんて世の中に山ほどいる」
「だいたい山添くんは、昨日の夜は私と一緒に……」今日子が口を挟んだ。
「それを聞いて、ますます連行したくなったぜ。それから久我、その前がへしゃげたハイエース、お前のだろ。調べさせてもらうぞ」
「瀬上、その筋肉頭がでっち上げた架空のストーリーだけを根拠に俺を連行することなんて、いくらなんでもできるわけないだろ。お前はもう一つ、お前らにとって決定的なものを持っているんだ」山添は、ある確信を持って瀬上に糾した。「携帯電話だ。お前が連絡用に俺に無理やり押し付けた、県警持ちとやらの携帯。あれにＧＰＳ機能が付いていて、俺のいる場所が逐一わかるようになっていた」
そう言って、山添は思い至る。あの携帯は、あのとき……。今日子を見ると、その完璧なシェイプの目が大きく見開かれていた。
山添は、動揺を押えながら努めて冷静に言った。「瀬上よ、ずいぶんと人をおちょくったやり方をしてくれたもんだな。だいたい警察官が善良な民間人の居場所をＧＰＳ携帯で監視するなんざ、人権侵害ってやつだろ」
「お前は民間人じゃない。公務員だ。公務員が公務員の監視をして何が悪い？　諸外国じゃ当たり前のことだ」
「なにが諸外国だ、開き直るなよ。とにかく俺は急ぐ。大事な用があるんだ」
山添は、ハイエースの前席ドアを開けようとした。瀬上がその腕をつかんできた。
「山添。お前に行動の自由なんてないんだ。南署まで同行してもらう」

そのときだった。今日子が、瀬上が乗ってきた覆面パトカーと思しき車に取り付き、車のキーを抜いたようだった。今日子は、それをアストンマーティンが没している用水路に投げる。アストンの屋根を叩く音に続いて、ぽちゃんと小さな水音がした。
「く、久我、お、お前！」
瀬上がうろたえる。今日子の行動が、自分の想定をはるかに超えたもののように感じたのだろう。瀬上は、用水路を覗き込む。その大きな尻に、駆け寄った今日子の細いハイヒールが蹴り込まれた。瀬上が水路に沈する盛大な音がした。
「愛美をお願い！」今日子が叫んだ。
小さく頷いて、山添はハイエースを発進させた。

24

山添は、ランデックまついのエントランス前にハイエースを乗り付けた。瀬上が現われた以上、愛美とアムスデンの交換場所を変えざるを得ない。本社一階のエントランスで交換する旨、運転しながらの電話でシロヤマ取締役に伝えてあった。
山添はアムスデンを車から降ろすと、念のためにホームセンターで買っておいた登山ナイフをわき腹に突き立てながら、ランデックまついの本社ビルに入った。
シロヤマは、数人のスタッフとともにすでに待っていた。大人の一団の中央に愛美の姿が見える。しかし愛美は、以前ここに紛れこんでしまったときとは違って毅然としていた。
山添はアムスデンを引き立て、シロヤマの方に蹴りだした。スタッフが手早くアムスデンの拘束を解く。
「お前らの大切なアムスデン様は、この通りだ。さあ、愛美さんをこちらへ寄越すんだ」
山添は、駆け寄って来るであろう愛美を受け止めるべく、両手を広げようとした。しかし、愛美はそのままの位置で首を振った。
「先生、私、もう少し、ここにいるよ」
山添は、所在無く空をさまよっている手を、赤面しながら下ろす。
「愛美さん、どういうことだ？　一緒に、お母さんのところに帰ろう」
シロヤマが高々と笑い出した。「そういうことですよ、先生。私たちは、誘拐なんかしていない。まあ、アムスデンシニアレキップに対する狼藉は、先生の、大切な教え子さんに対する愛情の現われと解釈して特別に不問にしましょう。では、お帰りはそちらから」
シロヤマは、正面玄関を指した。
「愛美さん、本当にそれでいいの」

「うん」愛美は、例によって目に強い光を湛えている。脅迫されているわけでもなさそうだった。
「お母さんは何と言ってるの？」未練がましく訊いてみる。
愛美は、しばらく黙っていたが、顔を上げ叫んだ。「先生！　大丈夫だよ！」
それから愛美は、もういいよ、とシロヤマに告げたようだった。
「そういうことなので。まあ、あまり、がんばりすぎない方がいいですよ」シロヤマは冷笑を浮かべ、愛美と他のスタッフを連れてエントランスから消えた。アムスデンだけが残るかたちとなった。
アムスデンが言う。「シロヤマはああ言っていたが、私はお前を許したわけじゃない」
「それはこっちの台詞だ、アムス。また会おうぜ」
そう言って踵を返すと、山添の両脇に警備員が付いた。玄関を出るまでは、何もさせないという意思が伝わってくる。
「はいはい、帰りますよ」
そう警備員に告げ、ランデックまついの本社ビルを出る。山添が乱暴に停めたハイエースの前に回りこむようにしてシビックが止まった。
今日子がシビックから降りてきて、開口一番、案の定なことを訊いてきた。「愛美は？」
「愛美さんは、自分の意思で、ここにいることを選んだ」
「そう、なんだ」そういうこともあるかもしれないと予想していたように今日子は小さくつぶやき、そして「愛美のお母さんは？」と言った。
「俺が会ったのは愛美だけだが、ここに来ている公算が高いと思う。でも一応、電話してみるよ」そう言って、愛美の自宅に電話してみるが、やはり不在である。
「今のところ、私たちにできることは……」
「それについちゃ車の中で話そう」山添がシビックのドアを開けようとノブに手をかけたとき、シビックの進路を塞ぐようなかたちで黒いクラウンが止まった。その瞬間、その場は赤い光で満ち、光源を探すとそれは、ハイエースの後ろに止まったパトカーだった。停車してから、ここぞとばかりに赤灯を点したらしい。
黒いクラウンの方から、全身濡れ鼠の瀬上がのそりと降りて来て言った。「久我、やっぱりお前はすごいよ。何もかもが計算づくだ」
「ありがと」今日子は短く答える。
「なあ山添、お前も見たろ。俺の車からキーを抜き取って用水路に捨てた、というのが、あのときの状況だあな。俺もついとっぱらかっちまって、そうしたところを久我に水路に蹴りこまれてこのざまなんだが」

「ごめん」
「いや、こっちが油断していたのが悪い。それで、とにかく車に戻ってみりゃ、しっかりキーが付いているじゃないか。ははあと俺は悟ったね。要は久我は、お前を逃がしたかったんだが、さりとてお前を危険な目にも遭わせたくない。何かあれば、警察官であるところの俺が駆けつける、そんなふうな展開にしたかった。それで、キーの代わりに小石かなんかを投げて水路に音をさせ、キーは車につけておく。長くもなく短くもなく、ちょうどいい時間を稼ごうとしたわけだ。どうだ、この推理は」
「そんなところかもね」今日子が答えた。
「てことは案外お前、久我に愛されているのかもしれないぞ。が、そんな幸せな山添くんを」いったん言葉を切って、瀬上は山添をにらみつけてきた。「職務に忠実なおまわりさんは、署に連れてかなきゃならない。理由はわかっていると思うが」
「まるでわからない」
「じゃ、署で締め上げるまでだ」
「警察官が、善良な市民に、そんな脅迫まがいの発言をしてもいいのか」
瀬上の頭頂部の薄い髪の毛が、少しばかり盛り上がったよう見えた。怒髪天を突くなんてことが生体現象として本当にあるんだなと、山添は今の立場を忘れて少々感動する。
「山添！」と、瀬上が声を荒げる。
いつのまにか谷口が近づいてきて、耳元で小さく言った。「瀬上さん、今、ちょっとまずい立場になっているんです。連行じゃなく任意ですが、お願いします」
それで観念した山添は「わかりました」と言い、今日子を見た。
「お前のことは、とりあえずは見逃してくれるらしい。せっかくの警察のご好意だ、普段の生活に戻るんだ。お前を必要としている人は愛美さんだけじゃない」
山添は、今日子の返事を待たず、クラウンの後部座席に乗り込んだ。

25

N署に連れて行かれ、テレビドラマなどでよく見る、あの取調室に入れられると思いきや、入れられたのは病院だった。南署近くの中規模の個人病院で「南條外科」とあった。所轄署ごとにこうした病院と契約しているのかもしれない。警察嘱託医なのだろう、南條外科の院長と思しき六十近い医者の手荒な手当てを受けると、個室のベッドに寝かされた。

点滴の針を無言で打ち込んだ看護師が出て行ってすぐに谷口が入って来た。それを見た山添は身を起こそうとした。谷口が山添の身体を片手で支え、片手で何やらベッドの底部を操作すると、ベッドが持ち上がり姿勢を楽にしてくれた。

「ありがとう」

「いえ」そう言って谷口は、備え付けの小さな丸椅子を持って来てそれに座った。

「瀬上は……」

「山添さん」気負った感じで谷口が言う。「南署のような所轄署が殺人事件なんてものに遭遇するのは、それこそ一年に一度あるかないかです。ですから刑事課全員とても張り切っています。そうしたところへ、瀬上が山添さんに渡した携帯が、あの事件が起きた時刻、踏切近くに存在していたことがわかった。課長は、山添さんをとにかく引っ張って来ようと」

「それを、瀬上とあなたが止めてくれたわけですね」

「二時間ほど前になります。旧いホンダと高級外車が派手なカーチェイスをして交通を混乱に陥れている、という通報がありました。それで、そのホンダが山添さんだと瀬上は直感したようです。瀬上はとにかく俺に一任してくれと宣言して、山添さんを追ったんです。あのＧＰＳ付きの携帯をあなたに渡してしまったことが、負い目になっていたのかもしれません」

「そもそも瀬上は、なんであの携帯を私に？」

「一つは、やはり心配だったんだと思います。山添さんがだいぶ荒れていたようなので、無茶な行動をするようなら、すぐに止められるようにと、居場所がわかるようにしておきたかったんじゃないでしょうか。それと」

「それと？」

「沢村課長の自殺。あの暗号が、やはりダイイングメッセージのようなものではないかと思っていた」

「それが、私に県警携帯を持たすこととつながるんです？」

「瀬上は、山添さんからの最初の電話で直感したんでしょうね。山添学級のクラス全員欠席と、県警本部が追っているらしいランデックの動きは何か関係があると。そうしたところに、所轄内で沢村課長が自殺したもんだから、自殺は自殺としてもその真相解明のためには、山添さんの動きを知っていたいと考えた」

山添は苦笑しながら言った。「そこまで話しちゃって大丈夫なんですか？」

「確かに」と言って、谷口は硬い表情をつくった。「本題に戻ります。山添さんは、昨日の夜十一時四八分、あの踏切にいましたか？」

「いいえ」
「では、どこに？」
「自宅のアパートです」
「病院を抜け出したわけですね」
「そうです」
「瀬上が勝手に動くなと言ってたはずです。なのにどうして？」
「久我です。彼女が経営する塾に、私の教え子――といっても隣のクラスですが――が通っているんです。でも昨晩、その子が塾に来ていないという連絡があった」
「それが……」谷口が、けげんな顔をする。「猿に噛まれ重傷を負った人間が、病院を抜け出す理由ですか？」
谷口の当惑はもっともなことのように思えた。「話せば長くなるんですが――。その子、愛美さんの家に電話をかけてみると、お母さんが出て、三年前に離婚した父親と一緒にいると。愛美さんの父親は、建築設計事務所を自営していたと聞いていました。それならば、ランデックまついと接点を持っていても何の不思議もない。愛美さんも、自分の父親がランデックまついと関係していることは知っていたはずです。だから、あえて父親についていって、私のクラスから三十八人の児童が消えた謎を探ろうとした」
「小学生が、ですか？」
「例の暗号」
「はい」
「あれは、私には解けなかった。でも、愛美さんは分かったらしい。あれを解くと、ランデックまついになる」
「なるほど」
「谷口さん。私たちが、ランデックまついに行ったことを、そちらでは知っていたんですね？」
「はい。例の携帯で把握していましたから」谷口は、悪びれることなく言った。
「ランデックまついは、いったい何をやろうとしているんです？」
「山添さん」谷口は苦笑した。「質問しているのは、こちらです。それに、ランデックまついに何らかの興味を持っているのは県警本部の方で、南署には今のところ何の情報も流れて来てはいない」
「警察という組織も、なかなか一筋縄ではいかないもんですね」
「その一筋縄でいかない世界で鍛えられた警察官の質問に答えてください」
「わかりました。とにかくそういった経緯があり、愛美さんは、ランデックまついに関係しているらしい父親と塾まで休んで一緒にいた。これは、私のために謎を探ろうとしたとか思えなかったんです。以前、愛美さんは、私が先生を助けてあげると言ってくれて。小学

五年生に同情されるとは、どうにも情けないことですが」
「その愛美さんと父親の関係は？」
「一度、訊いたことがあります。お父さんとまた一緒に暮らしたいかって。そしたら、愛美さんは暮らしたくないと」
「そうですか……。それで、山添さんは、その愛美さんを探そうとしたわけですよね。病院を抜け出して。それが……」
「夜の八時半くらいだったと思います。でも車を取りに行ったら、自宅の駐車場で何者かにのされてしまった」
谷口はとくに驚かなかった。「南條先生が、猿に噛まれた傷以外にも、身体にかなりのダメージを受けていると言ってました。心あたりは？」
ないこともなかったが、とりあえず「ありません」と言った。谷口は、とくに疑念を抱いたようでもなかった。
山添は続けた。「それで、駐車場でのびていたら、久我が駆けつけてくれて。彼女は彼女で愛美さんを探していたんです」
「あなたたち二人は、そこまでその愛美さんという児童に思い入れていた……」
「久我は、愛美は日本の宝だと言っていました。その久我ですが、愛美さんの父親の車をシネコンで見つけることができず、俺とも連絡が取れないので、とりあえずアパートに来てくれて、それで俺がのびているのを見つけた、というわけです」
「それは、何時頃かわかりますか」
「気がついたとき、時刻を訊いたら十一時半と」
「あなた方は、お互いのみ、お互いのアリバイを証明できる」
「そうですね」
「そのときあなたは、瀬上が渡した携帯を持ってましたか」
さあ、どうするか。瞬時に山添は心を決め、そして言った。「警察があのようなかたちで私にＧＰＳ機能付きの携帯を持たせたのは、重大な人権侵害だ。そうは思いませんか？　だいたいあの携帯は今どこにあるんです？」
「そんなことに答える必要はねえぞ！」ドアが乱暴に開いて、五十がらみの背の低い男が入って来た。こいつが、谷口の言っていた刑事課課長なのだろうと直感する。
「谷口ぃ」ねちっこく呼びかけたその男は、「おめえ、あいかわらず、甘い尋問してやがんな。このセンセーは、先生から傷害事件の容疑者様に昇格なさるんだ。しばらくここに滞在してもらってがんがん締め上げなきゃなあ」と言った。
「容疑者？」山添が声を上げた。
「どういうことです？」今度は、谷口が訊く。
「谷口ぃ、おめえがそんなこと訊いてきてどうするんだ？　それじ

やまるで、この薄汚い容疑者サイドの人間みたいじゃねえか」そうは言ったものの、この五十男は説明したくてたまらない様子で、もみ手をした。「被害届が出るんだよ。この男は、ランデックまついのアヌスとかっていう外人を拉致して、その車ともども酷い目に合わせたというじゃないか。だからそのアヌスさんに、提案してみたのよ。あのくそったれティーチャーに対して、被害届を出してみる気はありませんかってな。今頃は、書類にサインしている頃だ。共犯の女ジュクセンについても同じだ。これから、その女の塾に行って検挙してやるよ」

「ちょっと待て」山添は声を上げた。「今は、授業中だぞ」

「そんなことはわかっていますよ。生徒たちの前で、たいそう美人らしい先生が検挙される。マスコミも呼びたいくらいだ」

山添はベッドから降りようとした。

「おおっとお～、本職に対してその態度。ますます意地悪したくなるわねえ～。マジで俺、記者会見やっちゃうぜ。傷害事件の犯人は、身元不明死体が出た殺人事件の犯人でもあり、それはなんと学校の先生！　共犯は塾の美人先生！　てな」

山添は言い返えす。「その証拠は、県警が民間人に強引に持たせたＧＰＳ機能付きの携帯電話ですと言ったら、その手の人権問題に敏感なマスコミはさぞや喜ぶでしょうね」

「そいつについちゃあ、ね」課長は余裕たっぷりだった。「こっちにも考えがありましてね。つまりそれは、瀬上というとかく問題を起こしがちな糞刑事が独断でやったことだ、と。南署としては何の関知もしていない。瀬上を懲戒処分にして、ただ瀬上がやった行為の結果だけは、いわば怪我の功名として使わせてもらうというスタンスを取れば、さほど問題にはならないだろうね」

「おい！」山添は、ベッドから飛び降りた。なぜかもう傷の痛みは感じなかった。

「おうおうおうおう。おまわりさんに対して、ま～た、そうやって突っかかってくるのか。やっぱりお前ら、瀬上に対して公務執行妨害に類する行為もやってるな。絶対にしていますね～。んで、そっちも、絶対に立件してみせるからな！　お前は、殺人、傷害、公務執行妨害のトリプル満貫で、どんな腕利きの弁護士先生が付いたとしても、爺になるまでの刑務所暮らしは確定だ。おめでとさん」

「俺の未来のことなんか、俺自身もさほど興味も持っていないよ。だが、教師を授業中に逮捕することが許されると思っているのか！」

「あ～あ、それ聞いたらマジやりたくなっちゃったよ。こら、谷口行くぞ！」

すでに立ち上がっていた谷口は山添の方に寄ってきて、小声で

「久我さんに同行を求めることは決定していますが、授業中にどうこうすることだけは阻止します」と言い、課長を促すようにして出て行ったが、またドアを開けて入ってきた。
谷口は、明日以降、この病室で事情聴取を行うこと、私物はすべて預らせてもらうこと、その前に谷口の前であれば、弁護士他に連絡を取ってもいいことなどと、事務的に説明してくれた。
その連絡だが、と考えて当惑した。連絡を取りたいのは今日子と瀬上だったが、二人とも動きを封じられている。弁護士になっている同級生は二人ほど知っていたが、親しいわけでもなかったし、今の状況をどう説明していいか見当もつかない。
もう一人、いや二人か。どうしても連絡を取りたい人間がいたが、さすがに刑事の前でそれはできない。
「じゃ、とりあえず実家にだけは」谷口に預けたかたちになっていた自分の携帯を受け取って、ナンバーリストから「山添」を探しコールボタンを押した。
「あ〜、俺ですけど」そう言いながら、ある種の感慨にとらわれる。
「あんた、病院抜け出したっていうじゃない！　今、どこにいるの？」電話口で母親のきんきん声が響いた。
「ちょっと事情があってね。親父いるかな？」とりあえず、父親にだけは逮捕された事実を伝えておこうと思った。
「いないわよ。最近、お父さん、なんか出事が多くってねえ。昼から出て行って帰りは夜中だったり。昔の先生仲間と会ってるみたいなんだけど、それがね、お酒を飲まないで帰ってくることもあるのよ」母親の口調が世間話をするようなものに変わった。
「それもいいんじゃないか」できるだけ軽い調子で応じる。
「いいんだか悪いんだか。それであんた、どこにいるのよ？」
「南條医院。ほら、南署の手前にあるだろ」
「病院を移ったのね」母親は、あくまでもお気楽である。
「とにかく親父には、俺が南署近くの南條医院にいるって伝えてくれればいいから」南署というところに力を込めた。母親がそのまま伝えてくれれば、父親は、自分で調べるなりしてある程度のことを理解してくれるだろう。「じゃ。たいしたことはないから」と電話を切り、携帯を谷口に渡した。
「明日朝、八時から事情聴取を始めます」そう言って谷口は出て行った。
壁の時計を見やると、十時半過ぎを指していた。
今日子は、どうしているだろう。どうしても思考はそこへ向かってしまう。しかし今は考えないようにしようと自分に言い聞かせた。今日子のことだから、留置されたにせよ、毅然としているだろうこ

とは容易に想像がつく。そして生徒の前で拘束という事態だけは、谷口が阻止してくれていると信じることにした。

ともあれ、クラスの児童全員が教室から消えてからというもの、何かに追い立てられるような日々が続いた。その結果が現在の状況ではあるのだが、ここに至って初めて、ゆっくりと考えてみる時間を持てたのは皮肉といえば皮肉だった。

今は、考えることしかできない。推理することが、現状を打破できる唯一の方法に思えた。

まずは、県警携帯のことだ。あの携帯は、春山師長に預かってもらっていた。それを春山師長は、あの事故、いや事件があった踏切に持っていっていた……。ここまでは、間違いない。

死体が、山添の想像通り愛美の父親の根岸であるとして、彼と春山師長とは何か接点はあったのか――。それはあまり考えられない。では、五年二組の担任であるところの春山美香先生と根岸は何らかのつながりはあるか。こっちの方は、十分考えられる。

愛美の母親と父親は三年前に離婚していた。そして愛美は、昨年の四月に川南小に転校して来た。市営住宅は市内に数箇所ある。たまたま、川南小の通学区のそれに当たったのか。それはいい。しかし、釈然としないものも残る。というのは、現在N市では小学校の学校選択制に暫定的な処置が取られており、あらかじめ決められたゾーンの中ならばどの小学校を選んでもよく、愛美の場合も、住所が変わったからといって必ずしも転校する必要がなかったのかもしれないからだ。

もう一つ、気になることを思い出す。

山添のクラス、五年一組は新学期時点で三十八人だった。春山先生の二組は、愛美が転校してきたことによって四十人編成となっていた。

愛美の保護者が転校申請をしてきたのは、始業式までもうあまり日がない時期だったと記憶している。それまでは、新五年生は、一組三十八人、二組三十九人でスタートするはずだった。愛美が一人加わる場合、一人少ない一組に編入されるのが普通だ。しかし、実際はそうはならなかった。そのことについては、とくに説明もされなかったし、山添も気にもとめなかった。が、今になってみると、それが大きな意味を持つことに気づく。

通常、児童および保護者には担任とクラスの選択権はないが、例外も認められている。たとえば、ＰＴＳＤの児童や双子で同学年に兄妹がいる児童などは、教員やクラスメイトについて、ある程度の配慮がなされる。転校生についても同じだ。愛美が二組に割り振られたのも、その転校生がゆえの配慮だろう。つまり、春山先生と本居家は、以前になんらかの接点を持っていた……。

こうは考えられないだろうか。
以前、春山先生は、愛美の担任をしていた。その頃、愛美の家は、まだ父親がいた。その後、離婚に至ったということは、夫婦の間に何か問題が発生したのだろう。それについて、愛美の母親は春山先生に相談した……。保護者が自分の家庭のことを、子供の担任の先生に相談するのは異例のことかもしれない。しかし、こと春山先生なら、そういったことがあっても不思議はない。その過程で、春山先生は愛美の父親を知るようになった。
とするならば、あの死体が愛美の父親なら、春山先生が殺したという蓋然性が高くなる。その場合、春山師長が何らかの手伝いをした……。
春山師長は、今日子にあの携帯を預かるように頼まれ、自分のバッグに入れ、そのまま現場に来てしまった。そして事を成した後、その携帯がＧＰＳ機能付きであることに気づき、あわてて電源を切った。県警携帯を預かっていることを春山先生に話し、ＧＰＳ付きである可能性を指摘されたのかもしれない。
山添は愕然とする。春山先生が根岸を殺したとすれば、すべての辻褄が合うではないか。そうだと仮定して、考えを進めざるを得ない。殺害方法は、おそらく瀬上が言った通りだ。
春山先生は、金融車を手に入れ、瀬上が指摘した通りの改造を施した――。
金融車というものについては、教員の飲み会か何かで、山添は車オタクとしての知識を披露したこともあったように思う。春山先生は、そのことを覚えていたのかもしれない。
改造の方法も、おそらく瀬上の考えた通りだ。小学校教員が児童を乗せるため万一のことがあってはと申し出れば、すべてのドアにチャイルドロックを取り付け、内側からは絶対にドアが開けられないようにするよう依頼することぐらい比較的たやすい。パワーウインドゥの配線を切ることについても同様だ。
犯行方法はといえば、これもまた瀬上が言った、そのままであろう。春山先生の車と、春山師長の車で踏切の前後を塞ぐ。脱出不可能にしておいて、毎晩あの時間にあの場所を通過する貨物列車に激突させるのだ。むろん、根岸は必至で脱出を図ろうとし、前後を塞いだ車に体当たりするだろうから、春山先生と春山師長の車には、それなりに傷が付いていなければならない。
いずれにせよ、こうした方法で根岸を殺害するのであれば、周到な準備が必要である。
これについては、どうしたのか。二通り考えられる。
一つは、その改造車をあらかじめ根岸に渡しておくことだが、春山先生と根岸が以前より何らかの接点を持っていたとすれば、さほ

どの困難はなかったと思われる。「金融車だけど、普段乗る分には問題ない」とでも言って、車を贈与すればいい。チャイルドロックシステムは、「開」にしておけばいいし、チャイルドロック装置そのものは、小さなスイッチがドアの目立たない位置にあるだけだから、気付かれる心配は低い。そして犯行直前に、隙をうかがい「閉」にする。これも、春山姉妹が協力すれば容易だ。パワーウインドゥについては壊れていると説明すれば、ワケありの車だけに納得するだろう。

もう一つの方法は、根岸が普段乗っている車と同じ車種の金融車を用意し改造、犯行の直前に、根岸の車と入れ換える、という方法だ。こちらも、それほど困難な所業とは思えなかった。

では、春山先生が犯人だとして、どうしてこのような方法を採ったか。これだけは山添にも理解できた。愛美に、父親が殺されたことを知られたくなかったからだ。いずれ、死体の身元は判明するにせよ、ニュースで第一報が伝えられると同時に「根岸栄治」という名前を出したくなかった。その意図は、現在でも警察が死体の身元をつかんでいないらしいということで、とりあえずは達せられたと言える。

と、そこまで思考を進めて、山添は驚いた。状況はすべて、春山先生が犯人であることを示しているではないか。だが、本当にそれでいいのか。山添の感情は、このことについて結論を出すのを拒んでいた。

それでは……、と、別のことを思考のテーマにしてみる。猿の問題だ。

川南小裏手の自然林には、確かに野生のニホンザルがときおり出没していた。が、自然林で遊ぶ児童たちとは、あたらず触らずの関係だった。事実、開校以来、何の問題も起きずにきたのだ。ただ、こうしたことが起きてしまった以上、それは川南小学校現場の一つの汚点として記録されたことは確かだろう。

川南小は閉鎖されたというから、児童たちは隣の大西小で授業を受けている可能性が高い。大西小から家が遠い生徒には、スクールバスが差し向けられているはずだ。川南小はこの先、大西小に統合されてしまうかもしれない。こういう事件が起きてしまった以上、その可能性はかなり高い。そして、このことをきっかけとして、N市では、なだれを打ったように小中学校の統廃合が進んでいくはずだ。

山添は、自分のクラスからクラスの全員がいなくなってしまったことに、ランデックまついが関わっていることは、まず間違いないと考えていた。今日子の推理でもあるし、当然ながら、今日子の考えには絶対的な信頼を置いている。

ランデックまついの狙いはといえば、一次的なものとしては、自分のところの分譲地により近い大西小を存続させることだろう。しかしそれだけで、俺のクラスの児童全員を、それこそ、ハーメルンの笛吹きみたいにどこかに連れ去ってしまうものなのだろうか。その点については、今日子も疑問を呈していた。

それに、とも思う。そんなことをしなくても、猿の事件が起きたことで川南小は休校になったわけだ。この猿の一件にも、ランデックまついが関わっていたとしたら――その可能性もまたかなり高いだろうが、話はちょっとばかりおかしなことにならないか？

ランデックまついが、川南小を廃校に追い込みたいとしてみよう。その目的のために何も、山添のクラスから児童を消してしまう必要はない。最初から、自然林の猿を利用すればいい。もし上手くいかなかったら、そこで初めて山添学級に手を着ければいいではないか。順番が逆だ。

ということは――。山添は、一つの結論に達さざるを得なかった。

クラス全員欠席は、川南小を廃校に追い込むためだけのものではない。それは副次的なものだ。狙われたのは、その担任であるところの俺だ。

昨夜、俺を襲ってきた男は、「教員なんか辞めちまえ」と言っていた。あの男とランデックまついがつながっているのならば――こっちもほぼ確実だろう――すべては、俺を教職から離れさせるために起こったということだ。

しかしなぜ？　山添は、自分が導き出した結論に当惑した。が、一つだけわかったこともある。そうしたランデックサイドの意図は、ここにいたって確実に成功したということだ。殺人に関して潔白が証明できたとしても、警察に留置された事実は動かず、おそらく退職せざるを得なくなるだろう。

山添には、教師という職業が、急に崇高で貴重なもののように思えてきた。

26

案の定というか予想以上というか、柴岡という刑事課課長の取調べは、うんざりするものだった。

事件が起こった時刻、現場の踏切近くに県警携帯があったことははっきりしている、だから、お前が何らかのかたちで事件に関わっているのだという、単純きわまりない理屈で攻め立ててくる。どうやら、本気で今日の夕方にでも記者会見を開き、明日の朝刊に捜査責任者としてのコメントを掲載させる気でいるらしかった。

山添は「もし私が犯人だしたら、わざわざそんな証拠になるようなもの、現場に持っていくはずがないじゃないですか」と反論した。

しかし、それもあまり効果はなかった。だいたいお前は、その携帯にＧＰＳ機能が付いていることなんぞ知らなかった、そこまで頭が回るはずがない、というのが柴岡の言い分であり、これはブラフでもなんでもなく、本気でそう信じているらしいのでたちが悪かった。

山添は再び反論を試みる。「私としては、あの県警の携帯は、ずっと病院に置いていた。そうとしか答えようがない」

「センセーも言うじゃないですか。自分で処分したくせに」柴岡は応えた。これで、あの携帯電話が、警察の手元にもないことがわかった。むろん警察は、慈愛記念病院にも行ってみたのだろう。

ともあれ、取調べの中で一番堪えるのは、柴岡のその口臭だった。柴岡は、いかにも肝臓が悪そうなどす黒い顔をしていて、さらに胃も相当にやられているのであろう、熟し過ぎた柿と発酵し過ぎた鮒寿司が混ざったような息を吐く。

刑事の執拗な追及に容疑者は虚偽の自白を強いられ、などとよく聞くが、案外その要因は、刑事の強烈な口臭にあったのではないだろうかと、山添は真剣に考えたくらいだ。ただし、この口臭刑事がこちらにベタで付いていて、今日子のところに行っていないことは幸いだった。こいつの口臭に今日子がさらされると思うだけで、大切なものが汚される気がする。

しかし、警察が携帯電話の行方をつかんでいないということは……。できるだけ息をしないようにして考える。やはり、春山先生あるいは春山師長が、携帯にＧＰＳ機能が付いていることに気づいて、どこかに処分したということか。

「とにかく！」柴岡課長が、今日、何回目かの「とにかく」を叫んだとき、ドアが開いて谷口が入ってきた。柴岡に何やら耳打ちをする。柴岡の顔がみるみる赤くなった。

「釈放だよ、くそったれがよお」そう言って柴岡は立ち上がり、振り向きもせず出て行った。

「釈放という表現は変ですが、まあそういうことです」谷口が、柴岡とは対照的にクールな調子で言った。

「久我も、そうですか」

「はい。山添さんと久我さんが昨晩のあの時刻、山添さんのアパートの駐車場でその……、仲むつまじくしているのを、アパートの住人である右田尚吾さんが目撃しています。右田さんはご存知ですね」

右田は、アパートの隣の隣の部屋、二〇四号室に住む、山添と同

年輩の県土木課職員だ。まさか右田にピーピーングの趣味があるとも思えないから、残業だか酔っ払ってだか知らないが、深夜帰宅したところ、偶然、自分と今日子を目撃したのだろうと納得する。しかし納得できないこともあった。

「右田さんは、どうして私が留置されていることを知ったんです？」

「それは」と言って、谷口は嬉しそうにした。「山添さんの父上が、ここまでその右田さんを引っ張って来たんですよ。山添さんの父上って山添先生だったんですね。私の代は北高にいらして、私も化学の授業を受けましたよ。最外殻電子の数で元素の性質が決定付けられるということを説明するのに、山添先生は、財布の中の小銭の話をしましてね。『お前ら、８４１円のものを買うのに、財布の中に一円玉があれば、千円札と一円玉一枚という支払い方をするよな。でも８４７円のものだったらどうだ？　五円玉一枚と一円玉二枚、あるいは一円玉七枚を財布の中を見て探すか。探すやつはあんまりいないだろ。つまり、財布の中の一円玉一枚は財布から出て行きやすいけど、財布の中の一円玉七枚はなかなか財布から一度には出ない。元素の性格もそれと同じだ』なんて言われて。私は七円でも一生懸命一円玉を探す方だったんですが、なんだか妙に納得できた記憶があるんです」

谷口の説明は、山添にはいまいちピンと来なかったし、最外殻電子の数云々を説明するのに、財布の中の小銭を例に取ることが妥当かどうかも判断できなかったが、しかし、少なくともこの谷口にとっては自分の父親が「いい先生」だったということを知り、ほんのちょっとだけ気持ちが高揚した。

「でも、なんで父が、そういうことを？」

「昨日の夜、山添さんの電話を受けてから、山添先生は南署に探りを入れてきたらしいんです。うちの署や県警本部にも、山添先生の教え子はいますから、それでわかったんだと思います」

「そうですか……、父のことだから、強引だったんでしょうね」

「強引といえば」そう言って、谷口がまた嬉しそうにした。「山添先生は『二人分の保釈金だ！』と言って、署に一千万円、現金で無理やり置いていったそうですよ。むろん受け取ることはできませんが」

父親の意図がわからない。思えば彼の息子になって以来、彼の行動原理が理解できたことなど一度もなかったようにも思う。が、今は、父の行動原理などどうでもいい。山添は、喫緊の疑問を口にした。「しかし、私は、アムスデンに対する傷害と器物破損で逮捕されたはずです」

「アムスデン氏からは被害届は出ていません。課長はしつこく勧め

たようですが……。あと、山添さんのシビックからも、久我さんのハイエースからも、クラウンの塗料は検出されませんでした。ですから、これ以上拘束するのは無理だという趨勢に」谷口は、晴れ晴れとした口調で言った後に付け加えた。「それで山添さん、どうしますか？　私たちとしては、純粋にあなたの身体のために、ここでしばらく療養した方がいいと考えていますが」
「私たち、ということは瀬上もそう言っているのですね」
谷口は小さく頷く。
「もし、出ていいのなら出ます」そう言って起き上がり、ベッドから降りた。
南條病院の廊下に出ると、瀬上のやたらに広い肩幅があった。
「いろいろ、迷惑かけたようだな」
瀬上は無言だ。
山添はその横をすり抜ける。今はこいつと面倒な話はしたくなかった。が、案の定、「山添」と、背中でぼそりと声がした。
山添は、一応の仁義だと思い立ち止まった。
「お前、教師を辞めるのか」
「辞めたかないが、一度は警察の厄介になった人間に教師を続けさせてくれるほど、県教委も太っ腹じゃないだろう」
「そうか、すまなかったな」
瀬上の謝罪が意外で、憎まれ口が出てくる。「ずいぶんと殊勝なことだな。一つ貸しにしといてやるよ」
「なあ、山添」瀬上がこっちを向いたようだった。「お前、高校のとき、別に教師になろうなんて考えてなかったろ」
「なかったな、確かに」瀬上の、どういう意図なのかわからない質問を受け、とりあえずそう答えた。
「でも、N大の教育学部受けたよな。なぜだ？」
「なんでだろ？　でも今、そんなことが何か関係あるのか？　関係ないんだったら……」山添は、そのまま歩み出そうとした。
「山添」瀬上がもう一度呼びかけてくる。「久我が、なぜ教師を辞めたのか、お前知っているか？」
山添は足を止めた。そして振り返り瀬上を見たが、表情はよく読み取れない。
「高校時代、生活・学習調査っての、やらされただろ」瀬上が言う。
覚えていた。家庭学習の時間は何時間だの、就寝時間は何時だの、朝食は食べているかどうかだの、生徒の生活全般にわたって調査するものだった。面倒だなあ、と思いつつも記入した記憶がある。
「その質問事項に、久我は自分のオリジナルの質問を加えた、というんだな」

「それは？」
「お母さんは働いていますか？　働いているのなら、帰宅時間は何時ごろですか、というものだ」
「そいつは……」ちょっと拙いなと思った。家庭のプライバシーについて、しかも「保護者」ではなく、「母親」と指定して質問するのはご法度だ。「しかし……」
「なぜ、あの賢明な久我がそういうことをしたか、と言いたいんだな」
「確認しておきたいんだが、それが、久我が高校教師を辞めた理由か」
「そう聞いた。なんでも、数人の母親から吊るし上げ食らったらしい。なぜ、そういうことを質問シートに書かなきゃいけないのか、重大な人権侵害だってな。久我は、土下座させられたらしい」
土下座……。山添は口の中で小さくつぶやく。
「今回図らずも、久我の周囲を調査してそういうこともわかったんだけどな」
「そうか」
「山添」再び瀬上が声を掛けてくる。「久我は、孤独だ」
「なんなんだよ、唐突に。そりゃお父さんもお母さんも亡くなって、お姉さんも京都の老舗仕出し屋に嫁いだというから、ま、天涯孤独に近い境遇なんだろうが……」
「そういうことじゃなくて、だな。形而上的に、という意味でだ」
まさか、こいつの口から「形而上的」などという言葉が出てくるとは。山添は小さく笑った。
それに構わず、瀬上は続けた。「高校時代から、その……、本当の意味で孤独だってことだよ」
「ふーん。脳みそが筋肉でできているお前でも、そういうこと考えていたんだな」
「そうだ。俺にはわかっていた。高校時代からな」
「なんで？」今日子のことを、少なくとも目の前にいるこの大男よりは理解していると自負していた山添は、不本意ながら訊いた。
「そりゃお前、久我に告ったからだよ」瀬上は、照れもせず堂々と言った。
「しかし……」久我に告る権利があるのは、久我と同等の成績を取った者だけという不文律があったじゃないか。「お前の成績は、俺とどっこい……」
「俺は、北高ビー部を花園まで引っ張っていった大功労者だ。勉強でいえば、東大に合格したようなもんだ」と、瀬上はこれまた堂々と自慢し、山添を鼻白ませた。
「そんで？」

「そんときに久我から言われたんだよ。私は人との付き合い方がわからないって」
「しかし、そんなふうには見えなかったな。高校時代も」
「でも、たぶん助けを求めている。高校時代から、あるいはもっと前から」
「孤独か」
「久我もちょうど南署を出たところだろう。お前のシビックは、南署の駐車場だ。それからアムスデンが被害届を出さなかったということは、何かたくらんでいるってことかもしれない。気を付けろよ」そう言って瀬上がキーを放ってきた。
山添はキーを受け止め踵を返してから、軽く後ろ手を上げ瀬上に謝意を示した。

27

南條医院を出て、国道脇の狭い歩道を南署に向かって歩く。視界の向こうに、おそらく今日子だろう、逆光によってつくられたスリムなシルエットがあった。しかしなんというか、そのシルエットは力強かった。山添は、それに向かって五十メートルばかり全力疾走した。
「大丈夫だったか」動悸も収まらず、意味のない質問だとは思ったが、言葉が見つからず、とりあえずそう訊いた。
「いい体験させてもらったわよ」今日子はまったく明るく答えた。
「とにかく、山添くんのお父さんに電話をしなくちゃ」
「そうだな」と、携帯を取り出し自宅にかけてみる。母親が出て泣きそうな声を出したが、かろうじて制して、とにかく父親に代わってもらった。
「証人を見つけてくれたんだってな。ありがとう」と切り出した山添に対して、「まあ、気にするな」と父が言った。
「だけどな親父、保釈金といって大金を南署に置いていったらしいが、保釈金というのはだな……」
「んなことは、俺だって馬鹿じゃない、わかっているよ。あれは、警察に対するプレッシャーだ。南署にゃ俺の教え子もいるし、その大恩ある恩師がだぞ、息子の無実を晴らすために証人を連れて、しかも一千万という大金の保釈金を携えてやって来たとなれば、警察官とて人間だ、お前たちの取り扱いについて何らかの配慮はするだろう。ま、高度な心理作戦というやつだ」
何が「大恩ある恩師」だ。このオヤジは、一人で悦に入っていやがる。早くも飲酒しているのか。山添があきれていると、今日子か

ら電話を取り上げられた。
「久我です。この度は大変なご迷惑を……」
山添はすることがなくなり、埃っぽい歩道から、南署の駐車場に足を踏み入れた。空気が極端に乾燥しているのだろう。交通量の多い国道から流れてくる排気ガスとあいまって、やたら鼻の奥がむずむずしてきた。
今日子の方に視線をやれば、深刻な顔をして受け答えしていると思えば無邪気に笑ったりもする。どうせ酔った親父が、くだらないことを言っているんだろう。ほどなく、電話を切った今日子がこちらにやってきた。
「私の分の保釈金まで持って来ていただいて、とにかく今日お返ししますって言ったら、親父さん、それは結納金としてあなたに渡すつもりの分だったから、だって」
悪乗りし過ぎだ。山添はうんざりし、そして訊いた。「久我、お返ししますったって、そんな大金、お前持っているのかよ？」
「だって私たち、社会人になってもう十年だよ。それくらいの貯金は……」と言って今日子が吹き出した。「もしかして、山添くん、ないの？」
「ない」山添は胸を張った。
「どうして？　本も買わないのに？」今日子が心の底から不思議だという顔をする。
「なかなか痛いところを突いてくれるね。でも、どうしてなのかなあ。家賃払って、車のローン払って、少しばかり車に手を入れて、それから毎晩飲んだくれているだけなのになあ」
「毎晩って外で？　そりゃ、お金貯まらないよね」
「じゃ久我、結婚してくれ。そしたら家で飲むから。お前が一緒にいてくれたら、外で飲む必要なんかこれっぽっちもない。あと結納金は、親父の分とは別に、これから死ぬ気で働いて自分で払う」山添は本気で言った。
今日子はからからと笑う。「こんなところで、それ、言うの？」
「じゃ、金だけでも貸してくれ」山添は、これも本気で言った。宮城老人宅の塀のことを思い出す。
「なにか、事情があるのね」今日子は真剣な目をした。
山添は宮城老人の話をした。
「銀行が、そういう行動に出ているんだ？」今日子が驚く。
「そういうことらしいんだ」
「やっぱりランデックまついは、何か、とんでもないことをやろうとしている……」
「単に、自分たちの分譲地に近い小学校を残すとか、そういうことではない。それに……」

「それに？」
今日子が小首を傾げる。南署の留置所で一晩過ごし、相当堪えているであろう今日子が、そんな少女のような仕草をすることに、山添は心打たれた。今日子が何でもかんでも愛美礼賛なら、俺は、何でもかんでも今日子礼賛だ。しかも、借金の相談もしなきゃならないし。
「俺のクラスの児童が全員いなくなったのは、川南小を廃校に追い込むためじゃない。狙いは」そう言って息を吸い込んだ。「俺だ」
「襲われたのもそのせい？」
「たぶんそうだ」
「でもどうして？」
「そいつはわからない。ただ、これから俺がやらなきゃならないのは……」
「その襲撃されたことと猿の一件の解明ね」
「ここからは俺の仕事だ。お前は、塾に帰ってくれ」
「山添くんだけの問題じゃないよ」
「そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、これ以上、お前を巻き込むわけにはいかない。もう、取り返しがつかないくらい巻き込んでしまったけどな」昨日、駐車場で会った竹内の言葉を思い出す。
「私の出勤時間は二時だから」
そう言って今日子は山添を見つめてきた。あらためて、今日子の白目に一点の濁りもないことを確認する。俺はこれに弱いんだよなあ、と思いつつ、「絶対に二時までに戻れよ」と言ってシビックの助手席側のドアを開けた。

28

まず川南小学校に向かう。警察がまだ何らかのかたちで自分をマークしているにせよ、勤務先の小学校に行くのは、それほどの疑惑を誘発するものでもなかろうと判断した。
川南小はひっそりとしていた。むろん、ああいう事件が起こらなくても今日は土曜日だから児童の姿がないのは当然にしても、しかし校庭で犬の散歩をさせる人もおらず、なんだか知らない学校に来てしまったような感慨にとらわれる。
校門にはロープが張られ、「立ち入り禁止」の札が下がっている。告知主はＮ南署だ。
山添と今日子はシビックから降りると、ロープが張られている校門脇の小さな扉を身体が通る分だけ開け、小走りでプールの裏側に回りこんだ。そのまま、身を潜めて自然林に向かう。自然林の入り口にも当然ながらロープが張られていたが、何が何でも進入を防ご

うという強い意思を持ったロックアウトではなく、ロープを張っただけで仕事は済ませましたというお役所仕事であり、そのことに感謝しながら二人は自然林に足を踏み入れた。

冬枯れの落ち葉を踏む音が大きくならないように気を付けながら歩く。別段、変わったところはない。猿がいる気配もまったくないし、声がするわけでもない。ときどき襲って来る肩の痛みがなければ、あの猿の襲撃が、本当にあったことなのかどうかも、疑わしい気分だった。

この自然林に、猿が生息しているらしい、ということは、山添をはじめとした川南小の教職員全員が知っていた。本来であれば、猿がいるとわかった時点で立ち入り禁止にするべきだったのだろうが、自然林で遊ぶことが大好きな児童に対して、それを禁ずることはやはりできなかったし、現場判断で市教委にも報告していなかった。山添が必死で猿と格闘したのは、児童はもちろんだが、川南小のささやかな秘密を守る意味もあったのだ。

そういう経緯がある以上、あの猿の狂気は、人為的にもたらされたものと考えるのが妥当だろう。

山添と今日子は、さらに自然林の奥に分け入っていった。そして丹念に地面を探す。警察はこのあたりも調査したのだろうか。そう考えながら、落ち葉を手当たり次第に払っていくと、目指すものが見つかった。コートのポケットにそれを入れ、引き返す。

ゲートに張られたロープをくぐり、校舎の裏手にある職員用駐車場に出る。車は一台も止まってなかった。

シビックに戻り、手帳を取り出し住所録を見ながら一つの住所をカーナビに入力した。カーナビが連れて行ってくれたのは、川南小の通学区である紅葉原団地の一角だった。

築三十年と思しき古びた家のチャイムを鳴らすと、同僚教員である今野が玄関に姿を現わした。

「どうぞ」今野は無表情で言い、二人を、玄関脇の応接室らしき部屋に案内してくれた。

この家と同じ年齢と思しき古びた応接セットがあり、テーブルは、昔懐かしいガラステーブルだった。大きな陶器の灰皿からは吸殻があふれている。ソファに目をやれば、新聞やチラシや何かの箱やブランケットなどで埋まっており、人が座るべきスペースは見出せなかった。今野が、それらを乱暴にソファの裏側の床に払い落とすと、毛玉のたくさんついた毛糸の手編みらしき座布団が二枚出現し、山添と今日子は、勧められるままにそこに座った。

今野は向かい側の、そこだけ人間の座るスペースがぽっかり空いていた一人用ソファに座って言った。「家内は七年前に出ていってしまって、こんな有様だ」

「なるほど」その家の築年数以上に荒廃した部屋の様子を見ながら、山添は本題に入ることにした。「今野先生は、さすがに理科の先生だ。俺の腎臓を正確に踏みつけてくれた」
今野は無言だった。表情からは何も読み取れない
「先生、取引きをしましょう。猿の一件は、警察では単なる事故と見ているようだ。だから、唯一の被害者である私が何も言わなければ何も起こらない。あとは私自身が何者かに襲われた件だが、こいつも私が黙っていれば、それで済むことです」
「その二件に私が関与している、と？」
「そうです」
「証拠は？」
「一つはこれ」そう言って、山添は、ポケットからサツマイモを取り出した。「自然林に、こんな猿の餌のようなものが落ちているのは不自然でしょう。児童たちにも、自然林に食べ物の類は絶対に持ち込まないようにと厳重に注意していたはずだ。にも関わらず、これがあったということは、誰か、この学校の関係者が持ち込んだとしか考えられない。指紋を照合してみれば」
「そんな」今野がさえぎるように声を荒げる。「そんなことが、許されると思っているのか」
「そう。指紋照合なんてことを、俺の推測だけで警察に頼むことはできない。しかし今は、ＤＮＡ鑑定というものができるんだそうです」そう言って山添は、足元に手を伸ばし、今野のものと思しき、白髪混じりの毛をつまみ上げた。
「私を襲撃したとき、私に足首を引っ掻かれたましたよね。あのときの先生のすね毛と皮膚の一部が爪の間に残っていて、それは保存してあります。私が傷害事件の被害者であることを考えれば、この毛とのＤＮＡ照合とやらを警察もやってくれるんじゃないかと思います。幸い、かどうかはわからないけど、南署には、高校の同級生が勤務していますし」
それを聞いて、今野は肩を落としたようだった。「どうすればいいんだ？」
「私の質問に答えてください。猿の一件、私を襲った一件、両方とも今野先生の仕業ですね」
今野は無言で、軽く顎を引いた。
「それは、ランデックまついの指示によるものだった」
「そうだ」
「いったいどうして？」
「娘だ」
「娘？」
「七年前に女房が出て行ったと言ったろ。そんとき、女房について

行った娘が結婚するんだとさ。彼女が生まれてこの方、父親らしいことは何もしてやれなかったから、せめて家を、この家を建て替え新居として若夫婦に提供してやろうと考えたんだが、土地に担保価値がないから上物建て替えのための融資はできないと銀行は言いやがる」今野は一度ため息をついた。「娘は、子供の頃から絵を描かせると、いつも家の絵ばかりを描いていた。娘が嫁に行くと決まって、なんだかそんなことばかりが思い出してね。そんなときにランデックまついが、ほら、あそこのランディア南平台とかいう高級分譲地の一軒と、この家を等価交換してくれると言ってきたんだ」

今野の言葉に刺激を受けて、頭のどこかで小さな光がチカチカと点滅しはじめた。しかし具体的な思考として実を結ばない。お前さんの頭の性能は高校時代から、よーく知っているよという、瀬上の言葉がよみがえり、山添は、あまり意味がない言葉を口にした。

「その提案に乗った、と」

「そうだ。悪いか？　俺には、娘に渡してやるような財産は何もない。おまけに半年前、パチンコ屋で生徒の個人情報が入ったノートパソコン入りの鞄を置き引きされてしまい、ま、表ざたにはならなかったが、その一件で教頭になる夢も消えてしまった」

「それにしてもリスクが大き過ぎる。自分が職を追われる。いや、それどころか犯罪者として逮捕されるということは考えなかったのですか」山添は、今野の立場に立って、しごく当たり前のことを訊いてみた。

「そんなことは」遮るように今野が言う。「大した問題じゃない。俺は定年まであと六年だ」

「ランデックまついが約束を守るという保証は？」

「もう名義変更も済ませてある。それにいざとなったら、あんたに証言してもらうという手もあるしな」

「あんたに証言してもらう、か。そうですね。そう踏まれても仕方がない。じゃ、今野先生のその親心、ということになるのかな、そいつに免じて、俺に対する狼藉は不問にしましょう。俺の方としても、今野先生に襲われて、少しはいいこともあったわけだし……」

そう言って、横にいる今日子をちらと見たが、まったく無視されてしまった。気を取り直して続ける。「教えてほしいことがあります」

今野は黙っていた。

「ランデックまついの意図は何です？」

「俺は……」今野がうめくように口を開いた。「本当に知らないんだ。ただ、指示されたことをやったまでだ」

やはり、そんなことだろうと思う。山添は作戦を変え、各論でいくことにした。

「あの猿、俺を襲った猿なんですが、どうしてあんなことが？」

「あの自然林の周辺部には、もともと猿がいた。その生態は、これでも理科教師だからな、一応、把握していたつもりだ。で、そいつらを餌づけしたんだ。そしてあの朝は、興奮剤入りの餌をやった」
「そんなことができるんですか」
「三ヶ月間、餌づけをしながら観察して、猿どもの行動パターンはわかっていたから、簡単なことだ」
「三ヶ月間？」
山添はうろたえた。そんなに以前から、計画されていたものなのか。
「それは、児童を襲撃させるために、ですか？」
「そうじゃない」語気を荒げて今野が言う。「そうじゃないんだ。ただ、この先、小中学校の統廃合が進むとしたら、なんらかの騒ぎがあった小学校は、存続していく上で明らかに不利になる。その布石を打つということだろう。俺にわかるのはそこまでだ」
山添の推測通りだった。小中学校の統廃合は、これから避けられないものとなる。そのとき、どの学校を存続させてどの学校を廃校にするのか、これは大きな検討課題だ。文部科学省が実施している全国学力テスト、あるいは、都道府県や政令都市ごとに独自に行っている学力調査の結果で決める、などということも、まことしやかに囁かれていた。が、しかし、やはりそれは副次的なものだろう。二校のうちどちらを残すかということになったとき、真っ先に考慮されるのは、やはりその小学校の校舎ほかの物理的な耐用年数だ。その点において、この川南小は、開校してからまだ三十年ほどしか経っていない。存続で競合する周辺の小学校よりも校舎は新しいはずだった。しかし、そんなアドバンテージも、隣接した自然林に棲む猿が児童を襲う可能性があるとなれば、簡単に消えてしまう。
「ランデックまついとしては、どうしても、この小学校を廃校に追い込みたかったわけ、か」
「そうだ。理由はわからないがな」
「俺を襲ったたのも、当然、ランデックまついの指示ですね」
「理由は訊くなよ」
「その指示というのは、シロヤマとかいう取締役から？」
「責任者はそうだ」
「じゃ、アムスデンという外国人は？」
「あいつは、本社からのお目付け役といったところだろうな。いけ好かないやつだ」
「アムスデンがいけ好かないというご意見には全面的に賛同しますがね」そう無駄口を叩くと今日子の視線を感じ、最大の要件を思い出した。「今野先生は、根岸栄治という男を知っていますか」
今野はかすかに頷いた。

「では、その男が、五年二組の本居愛美の父親であることは？」
今野が顔を上げる。知らなかったようだ。
「その根岸栄治が一昨日の夜、殺された。いや、事故か事件かは、警察も今のところ判断しかねているようですが」
「俺は殺ってない」今野が語気を強める。
「しかし、現場にはいた。そしてそこで何かを見た。そうですね？」
今野は再び頷いた。
「話してください」
「わかった。その前に煙草を一本吸わせてくれ」
「何か事を成し遂げようと思うのなら、できれば煙草は吸わない方がいい。闇討ちに成功したと思っていた相手に特定されてしまうこともある」
「それでわかったのか」煙草に火を点けた今野は、紫煙に目を細めつつ言った。
「襲撃者からは、今野先生とすれ違うときと同じ匂いがしましたから。でもそれだけじゃない。やたら正確に腎臓の位置を知っていたこと、自然林の猿をどうにかできそうな人間であることを考え合わせれば……」
「名探偵気取りなんだな」
「そうです。今の俺のこの状況から抜け出すためには、俺自身が探偵になるしかない。だから続きを聞かせてもらいましょうか。あなたは、根岸を監視していたのですか」
「そうだ」
「ランデックの指示で、ですね」
「そして現場で見たことの一部始終をランデックに伝えた……」
「そうだ」
今野が自嘲気味に重ねて言い、それを聞いて思い当たる。
「こんなことしてる場合じゃないじゃない！」
「ちょっと待って。まだ……」と言う今日子を無視して、山添は今野の家を飛び出した。

29

春山先生の自宅は燃え落ち、その周囲にロープが張られ、人だかりがしていた。消火活動はすでに終わり、警察の出番といった段階になっているようだった。
「ちきしょう！」山添は叫び、瀬上の姿を探した。
瀬上の姿は見えず、その代わりに厄介な人物がこちらを目ざとく見つけて、やって来た。

「この、糞教師！　てめえが昨夜のうちにゲロしてりゃ、こんなことにならなかったんだぞ。蛆虫野郎！」
　その言葉で春山先生の死を悟った山添は、小柄な警察官をにらみつけ、そして自分自身の感情を持て余した。山添は自然、南署刑事課課長に歩み寄っていた。
「なんだとこら」課長は山添を態度を見て、少々うろたえながらも自分の立場というものを思い出したようだった。「お前よ、そういう態度に出るってのはよ、本当に捨ててしまったやつのやることだぞ」
　山添は、何も応えずに、肩をいからせて近づいてくる課長から軽く身を引いた。浮き足立った歩み寄りが目標を失ったかたちとなり、課長は画に描いたように一瞬宙に浮いて、その後、肩から地面に落ちた。何事かとこちらを注視していた野次馬が、どっと湧く。
「てててててててめえ！　今度こそ今度こそ今度こそ、マジで逮捕するぞ。おいっ誰か！」課長は、跳ね起きるやいなや宣言した。
　騒ぎを聞きつけ、白い手袋をした谷口がこちらにやって来て、課長と山添の間に分け入った。
「山添さん」谷口はうんざりした顔で、「知りたいことは、教えられる範囲で教えますんで、とりあえずここからは離れてくれませんか」と言った。
「恐縮です」
「遺体が出ています。身元は、慈愛記念病院看護師長の春山美由紀氏と、市立川南小学校教諭の春山美香氏。事件か事故かは現在調査中。遺書らしきものは、その痕跡も見つかっていません」
「くそっ！」
「お気持ちはお察しします。それじゃ、お帰りはこちらから」
　そう言って谷口は顎をしゃくった。とにかく、これ以上かきまわさないでくれという懇願とも強制ともつかぬ意思が目にあった。
　その後ろで課長が何やらさかんに喚いていたが、谷口は「それでは」と山添に言って課長に駆け寄り、ぺこぺこと頭を下げ、課長の肩を抱くようにして現場に戻って行った。その谷口の背中に、山添は頭を下げた。顔を下に向けると、涙がぽたぽたと地面にこぼれた。
「とりあえず、帰るしかなさそうね」今日子が遠慮勝ちに声を掛けてくる。
「だな。頭の中を整理したい」ポケットからシビックのキーを取り出し顔を上げると、小さな人影が視界に入った。「愛美、さん」
　愛美の肩が小さく震えていた。今日子が駆け寄って抱き寄せる。それで堰が切れたのだろう、愛美は、それでも遠慮勝ちに小さく泣

き始めた。
「春山先生は、死んでしまったの？」愛美が震える声で訊いてくる。
「そう、らしい」山添は愛美に近づき、腰をかがめ、目線を同一にしてから言った。「愛美さんはどうしてここに？」
「春山先生に訊きたいことがあったから。それで来てみたら……」そう言って愛美は再び、今日子の胸に顔を埋めた。
うずくまっている二人の後ろから人影が現われた。今度は、大人だということがわかる。顔を確認すると、愛美に生き写しであることに驚く。
「山添先生と久我先生ですね。いつも大変お世話になっています。愛美の母でございます」
ハーフコートを着たその女性は丁寧に頭を下げた。そのとき、コートの左腕の袖が、ぶらりと空虚に揺れた。
手無し娘――。いつか愛美が言っていた、グリム童話のタイトルが頭の中をぐるぐると駆け巡り、山添は、思わず今日子の方を見た。今日子が猛然と頭を回転させていることが見て取れた。
愛美の母親は、ゆっくりと愛美に近づき、その肩に右手を掛け中腰になった。「春山先生は私たちの恩人でした」そう一言だけ言って、彼女は涙を浮かべたが、すぐにまた立ち上がると「さあ、行こう」と愛美を促した。
愛美も気丈に立ち上がり、母親に従った。
「それじゃ、失礼いたします」
二人は立ち去ろうとしたが、数歩歩くと愛美は振り返り、またこちらに駆け寄って来た。愛美は、周囲を見回すと山添に手招きをし、小声で言った。
「今日、一時に、ランディア南平台、先生知ってるよね」
山添は頷く。
「じゃ、そこのコミュニティセンターに行ってみて」
「しかし」
「それで先生、満足して。そしてこのことにもう関わらないで。私は大丈夫だよ」そう言って愛美はすぐに踵を返し、母親の方に走って行った。
母親は愛美の手を右手で取ると、すぐに身体を入れ替えて、愛美を道の端側に寄せる。
歩き去っていく二人を見送る山添の視界の中で、愛美の母親の左袖が揺れていた。

30

「あ、あの…」と、山添と今日子は同時に口を開いた。シビックの車内である。

その瞬間、山添は急ブレーキを踏んだ。前の車が突然スピードを落とし、それに気づくのが遅れたのだ。三十二年落ちとあってブレーキの効きが甘いシビックの鼻先は、前を行くパジェロミニのリアバンパーに接触寸前にまで近づいた。

「前の車、両方ともブレーキランプが切れている」

「それで、か」山添は半分ほっとし、半分憤慨しながら言った。最近、そういう手合いが増えているような気もする。この地域のあらゆる局面に、綻びが出始めていることを感じた。

「まあ、それは今はいい」自分に言い聞かせるようにつぶやき、次に今日子に質問した。「教えてほしいことがある。グリム童話の『手無し娘』というのは、どういう話なんだ？」

今日子はしばらく黙っていた。なぜ、そんなことを訊くの、と問われると思い、答えが見つからない山添は少しだけ身構えたが、今日子はまったく別のことを言った。

「それ、この前の意趣返し？」

「意趣返しって？」

「この前、私が山添くんに、無理やり『ハーメルンの笛吹き』のあらすじを話させたとき、変な顔していたから」そう言って今日子は話し始めた。

昔、貧しい粉屋がいました。あるとき、粉屋の前に酷い身なりの老人が現われ、お前の粉挽き水車小屋の裏に立っているものをくれれば、莫大な金をやろうと言いました。老人は、悪魔でした。

粉屋は、水車小屋の裏に立っているものとは大きなりんごの木だと思ったので、一も二もなく約束しました。しかし悪魔が所望したのは、いつも水車小屋の掃除をしている粉屋の娘だったのです。

約束の日になって悪魔が娘を迎えに来ましたが、娘の手がとても美しく清らかだったため、近づくことができません。悪魔は、粉屋に「娘の手を切ってしまえ、さもなければお前をさらって行く」と命令しました。悪魔が恐ろしい粉屋は、泣く泣く娘の両手を切ってしまいました。しかし、泣いた娘の涙が傷口を清めたため、またしても悪魔は娘に近寄れず、お金だけを残して退散して行きました。

粉屋は娘に言いました。「お前のおかげで、どっさりお金が手に入ったよ。一生大事にしてあげるよ」

けれども娘は首を振って「私はここにいるわけにはいきません」と言い、切り落とされた両腕を背中にしばりつけて、日の出と同時に旅立ちました。

娘は一日中歩きつづけて、王様のお城の庭へたどり着きました。

手が無い空腹の娘は、現われた天使たちの助けを借りて、庭にある梨の木の実を一つだけ食べてしまいました。それを見ていた王様は、「そなたは、神の御許から来たものか、それともこの世のものか。幽霊なのか人間なのか」と娘に訊きました。

娘は答えます。「私は幽霊ではありません。神さま以外には誰からも見捨てられた、あわれな人間でございます」

「たとえお前がこの世の一切のものから見捨てられていても、私は見捨てはしない」王様は、美しく信心深かい娘を心からいとしく思い、銀の手をつくらせて与え妃としました。

一年後、王様は戦争に行き、妃はかわいらしい男の子を産みました。王様の母親である王太后は、王様に知らせようと手紙を書きましたが、手紙を持った使いの者が途中、川の岸で一休みしているうちに眠りこんでしまいました。そこへ、娘を手に入れそこなった悪魔がやって来て、「妃が醜い赤ん坊を産んだ」と書いてある別の手紙と取り換えてしまったのです。

手紙を読んで王様は落胆しましたが、とにかく王太后に、自分が帰るまでお妃を大事に世話してやってくださいと返事を書きました。使いの者はこの手紙を持って帰る途中、同じ場所で一休みしてまた眠り込み、そこへまた悪魔がやって来て、別の手紙をポケットに入れました。その手紙には、「妃と子供を殺してしまえ」と書いてありました。

王太后は手紙を受取るとびっくりし、王様へ何度も手紙を書きましたが、悪魔がいつも偽手紙とすりかえるものだから、同じ返事しか来ません。その上、最後の手紙には、証拠に妃の舌と目玉をとっておいてくださいと書いてあったのです。

王太后は泣いて、夜の間に牝鹿をつれて来させ、その舌と目玉を切りとり、それから妃に向って言いました。「いくら王様の言いつけでも、お前を殺すわけにはいきません。赤ん坊と一緒に遠いところへ行って、もう二度と帰って来るんじゃありませんよ」

かわいそうな妃は目を泣きはらして、赤ん坊をおぶって出て行きました。やがて大きな森の中へと入り、ひざまずいて神様にお祈りすると小さな家が見えました。

その小屋から白い乙女が出てきて「いらっしゃいまし、お妃さま」と奥へ案内してくれました。「私は天使です。あなたとお子さんのお世話をするように神様から遣わされました」

そうして妃、すなわち手無し娘は、この家に七年間住んで、親切に面倒をみてもらいました。おまけに信心のおかげで、切りとられた手は元の通りになったのです。

一方、王様は、やっとのことで戦場から家に帰って来、何より先に妃と子供に会いたがりました。

年老いた王太后は泣きながら言いました。「罪もない二人の命を取れなどと書いてよこすなんて、お前は何という悪人でしょう」そして悪魔が仕組んだ手紙を見せて、「お前の言いつけ通りしましたよ」と、証拠の舌と目だまを取り出しました。

それを見ると、王様は王太后にもまして泣き出したので、王太后は真実を悟りました。「安心おし、生きてますよ。殺したのは本当は牝鹿です。お前の妃と子供は遠い所へやりました」

これを聞いた王様は誓いました。「蒼空の続くかぎり妻と子を探し、探しあてるまでは飲み食いはいたしません」

それから王様は七年という間、あちらこちらを廻り歩き、切りたった崖や岩穴まで残らず探しまわりました。これが最後と思い、大きな森へ入ると、そこに小さな家を見つけることができました。中から白い乙女が出てきて、王様の手をとって奥へと導き「いらっしゃい。どこからおいでましたか」と尋ねました。

「かれこれ七年の間、妻と子供を探しているのですが、まだ見つからないのです」

乙女は、妃と子供のいる部屋へ案内しましたが、しかし妃を見た王様は、「私の妻は銀の手をしていました」と言いました。

「お恵み深い神様が、元通りの手をまた生やしてくださったのです」

乙女が銀の手を持って来て、王様に見せました。

それで確信が持てた王様は、妃と子供にキスをして喜びました。

「重い石が私の胸から落ちた」

それから三人は王太后の待つ城へ帰って行きました。国中が歓喜し、王様と手無し娘はもう一度婚礼をして、死ぬまで何不足なく幸せに暮しました。

「ふーん」山添は、一人ごちた。

「何よ、これじゃ、いけないの？」今日子が不服そうにする。

「いや、愛美さんがね、『手無し娘』はとってもいい話だって言ってたから。王様の涙が手無し娘の肩口にこぼれると手が生えてきた、みたいな展開だとよかったなと思って」

「なかなか鋭いご指摘ね。確かにグリム版では、あまり劇的でない結末になっているけど、この『手無し娘』に類したお話というのは、世界中にあってね、その中には、山添くんが期待した通り、たとえば手無し娘が川に落ちたわが子を助けようとしたとたん、手が生えてくる、というかたちのものもあるの」そう解説した後、今日子は「そうか！」と大きな声を上げた。「愛美は、お母さんの手を……」

「再生させようと？」山添も思い至る。

「その可能性は十分にあるよ。愛美は、東大理Ⅲ志望だから」

「ｉＰＳ細胞ってやつだな。確かに、そうした先進的な研究をするんだったら、単なる国公立医学部医学科よりも、東大、京大ということになるよな」
「もちろん現時点では、失われた腕をもう一度再生するなんてことは不可能だけど。でも愛美が、いつの日か、そういうことができるようになると信じているとすれば。あるいは、愛美が一生懸命勉強すれば、そういうことも可能だと教えた人がいたとしたら」
「それは……、お前ではないんだな」
「残念ながら」
「ということは……」山添は、春山先生は私たち母娘の恩人でしたという、愛美の母親の言葉を思い出していた。
今日子が言う。「いうまでもなく、将来の目標というのは、勉強していくための大きなモチベーションになるよね。そして、それが自分の愛する人を救うためだったら」
「それ、だったのか……」愛美の驚異的な学力の伸びの秘訣は、と山添は嘆息した。
「でも」山添の感慨に水を差すように今日子が言った。「愛美のお母さんの左腕……、あれって事故か病気なのかな？」
「どういうことだ？」
今日子はその山添の質問には答えずに言う。「お母さん、愛美をかばうように、道の右側に寄せて、右手を愛美とつないでいたよね」「だから？」
「もし、母親がどちらかの手を失わなければならないとしたら、左手にするだろうね。子供を自分の右側においたときにつなぐ右腕は絶対に残しておきたい」そう言って、今日子はうっすらと涙ぐんだようだった。
「ちょ、ちょっと待ってくれ」山添は戸惑った。「愛美さんのお母さんは、わざと左腕を失ったというのか」
「そう考えると、いろんなことの辻褄が合う」
「辻褄って、その、愛美さんの驚異的な学力アップの理由は、お母さんの腕を取り戻すというモチベーションによるものだけじゃない、ということか？」
「うん」
「説明してくれ」山添は、できるだけ前車と車間距離を取り、ギアも三速に落とした。これから、どんな驚きの話が今日子の口から語られるかわからない。そんな予感が、山添の運転を慎重にさせた。
「愛美が、うちの塾に入ってきたのは小四の春から。約二年前よね。入塾テストでは、偏差値六五程度だった。コマハラ換算すると、五五といったところかな。そして去年、小五の春から特待生になった。コマハラのテストで初めて偏差値にして七〇を超えたのは、去年の

六月。そして十一月には、『七五以上』で全国三位。つまり一年半で、偏差値にして二〇アップ。ただの二〇じゃない。五十五からの二〇。これは……」
「とんでもないことだな。それは俺にもわかるよ」
「じゃ、これを可能にしたものは何かと考えると、少なくともうちの教育システムではない」
「ただ、今日子先生のことが大好きで、それで伸びたってことは考えられるぞ」
今日子は嬉しそうに頷き、「それは、春山先生に対しても山添先生に対しても同じ、いや、もっともっとだよ」と答えた。
それを聞いて、涙が出てくる。
「いい、今は、そんなふうにめそめそしている場合じゃないのよ」
今日子は、先ほどまで自分が泣いていたことを棚に上げて言った。
「愛美の驚異的な学力アップの理由は、今、私たちが巻き込まれている事件の、いろんな局面につながっているんだから。春山先生の敵を討つんでしょ」
「もちろんだ」
「だったら聞いて。まず、学力が伸びていくポイントの一つは、やっぱり先生との信頼関係だよね。先生を百パーセント信じることが出来れば、その教えのすべてを受け入れることができる。信頼関係ってのは、受け入れる容器の容量を大きくすることなの」
「お説ごもっとも」
「五年になって、川南小に転校してからは、担任の先生の春山先生と隣のクラスの山添先生、その二人が大好きで、その二人の教えなら、すべて吸収しようとした」
「しかし、春山先生と俺が教えていたのは、ゆとり教育ってやつで極限にまで減らされた学習内容だ。とても、コマハラのテストでの高得点に貢献するものとは……」
「内容は関係ない。小学校内容をおざなりにして、塾の成績だけいい子なんてのは存在しない。コマハラのテストで上位に来るのは、小学校の勉強にも真面目というより誠実――いや、もっとだね、愚直と言って悪ければ、赤心を以って取り組んでいる子なのよ」
「その赤心をもたらすのが、教員との信頼関係と言いたいわけだな」
「愛美には先生との信頼関係が確かにあった。その上で、一番重要なつながり」
「保護者、だな」
「そう。愛美のお母さんの左腕を見てわかった。あのお母さん、ずっと愛美と一緒にいるために」
「まさか……」

「普通に考えれば、まさか、よね。でも、こと愛美母子に関しては考えられなくもないと思う。愛美の両親は離婚している。で、これまでの経緯から考えても、父親の根岸栄治は、養育費なんか払うタマじゃない。ということはよ、それ以降は、お母さんが女手一人で愛美を育てきたわけよね。これは、今のご時勢じゃ本当に大変なことなのよ」

「ワーキングプアなんて、よく聞くしな」

「さすが公務員。お気楽に言ってくれちゃうわね」

「そうだな。すまん……」

「そんなふうに素直にされるとこっちも困っちゃうんだけどね。まあ、いいや。それで、愛美のお母さんは、必死に働いたと思う。でもね、いくつ仕事を掛け持ちしたにしても、生活はかつかつで、とても塾に通わせる費用なんて捻出できない」

「だけど実際には、愛美さんは今日子先生のところに通ってきていた。バッグだって、ナルミヤっていうのか、すごく高価な流行のを持っていたぞ」

「それで愛美の学習モチベーションが上がるのだったら、そういうことにはたぶん、なけなしの、と言ったら申し訳ないけど、お金を遣うのよ」

「今日子先生の塾にも、か」

「そう。もっと早く気づけばよかった」

今日子はまた涙ぐむ。山添はなんだかいたたまれない気持ちになった。ちぇっ、一ポイント減点か。

「何か言った？」

「いや、なんでもない」

「それでね、とにかく愛美のお母さんは一生懸命働いたんだよ。でもこの町で女性がパート労働しても、一日八時間労働で週休二日だと、得られる給料は一ヶ月十万程度。正規労働者で、手取りでそれだけというのなら、まあなんとかやっていけるかもしれない。でも非正規労働で、住民税も国民健康保険も国民年金もそこからとなると、もう無理ね。娘を塾に通わせることなんて絶対に絶対できない。民間の賃貸住宅に住んでいるとしたら、暮らしていくのも不可能」

「愛美さんは……」山添は呻いた。「市営住宅が当たったから、川南小に転校してきたと言ってた」

「そう。私のところの資料でも、去年の四月から住所が変わっている。それで気にはなっていたんだけど」

今日子の推理の裏づけが見えてくる。

「それで」と今日子は続けた。「愛美のお母さんは、複数の仕事を掛け持ちしていたと思う。その収入が、たとえば年に百五十万だったとするよね。この場合、所得税と住民税で年間十万ってところか

な。国民健康保険は愛美と二人分で十五万くらい。国民年金は収入は関係ないから年間十八万」
　山添は素早く計算する。「残りは、百八万か。一ヶ月九万」
「そこに母子手当てが加わるから、十三万くらいにはなるんだろうけど、でも民間の住宅の家賃を払っていたらやっていけない。しかもこの収入は、複数の仕事を掛け持ちして、という前提なの」
「まったく不毛な話だな。日本はいつから……」
「そんなニュースキャスターみたいな無責任な口を利いている場合じゃないのよ。何よりも、愛美のお母さんにとっては、愛美の教育費を捻出できないということが一番の問題だった。こう言っては申し訳ないけど、公立の小学校の勉強だけで、将来的に、たとえば東大に合格できるような学力的資質を身に付けるのは絶対に無理だからね」
「生活保護という方法はどうなんだ？　そんなふうに女性が一人で働くよりも、多額の支給を受けることができるんじゃないか」
「保護を受けたら、子供を塾にやることなんて許してもらえないじゃない！」今日子が大きな声を出した。高校時代から通算してもそんな今日子を見るのは初めてで、山添はたじろいだ。減点二をくらってしまったか。
「ごめん」今日子が、大きな声を出したのを愧じるように、下を向いてぽつりと言った。「とにかく愛美のお母さんとしては、何がなんでも、自分のような境遇、つまり生きるために精一杯のような境遇に、愛美を置きたくはなかった。いや、そうだったらまだいい。不条理は、まず貧者を襲う。女を襲う。愛美は女の子なのよ、ああ、なんてことなんだろう！」そう小さく叫んで、今日子はまた目を伏せる。
　しかし山添は、今度は当惑しなかった。その理由が、先週の土曜日に今日子と会って以来受けてきたレクチャーで、十分以上に理解できていたからである。
「不条理は、貧者の女子に真っ先に襲いかかる。本当に日本全体が貧乏になったら、貧者の女子は……」
「もしもだよ、お前が、愛美さんのお母さんと同じ境遇に置かれたら……」
「する」今日子は顔を上げ、きっぱりと言った。「自分の子供に乞食をさせるとき、腕を切り落としたり顔を硫酸で焼いたりする国だってある。子供にそんなことをするくらいなら、自分の腕を失くした方がずっといい」
「しかし、ここは日本だぞ。そういう国とは違う」
「これからは違わなくなるかもしれない。もちろん、愛美の世代でそんなことになるとは私だって思わない。でもその次の世代はわか

らない。もし、自分の娘の娘が、貧困のために腕を切り落とされたり硫酸で顔を焼かれる可能性が少しでもあるのなら、そして自分の腕を失くすことで将来起こるかもしれないそんな悲劇が避けられるのなら」

山添は言葉を失ったが、かろうじて感情を立て直して言った。

「でも、腕を切り落としたことと、愛美さんの学力アップとどうつながるんだ？」

「たぶん保険金ね。愛美のお母さんは計画を立てたのよ。生命保険に加入する――あるいは離婚前から加入していたのかもしれない。頃合を見計らって、腕を何らかのかたちで自分で失くす。そして保険金を受け取る。その保険金を少しずつ切り崩しながら生活していく。市営住宅など公営住宅に住めば、家賃もあまりかからない。一番大きいのは、働かなかったら、いつも子供の傍にいてあげられるってこと」

「いつも親が傍にいれば、学力が伸びる、か」そう言いながら山添は、今朝、瀬上から聞いた、今日子が北高奉職中に実施したという奇妙なアンケートのことを思い出していた。保護者、とくに母親の就業状況を事細かに訊いたものであり、保護者からは大反発を食らったという。

今日子は続ける。「保護者との関係が密であればあるほど、それは学力に反映されるということは永遠の真実よ」

「そうだろうな」

「とくに小五、小六の女子というのは、学齢的には一番伸び盛り」

「そうだな」再び頷く。この時期、女子と男子では、精神年齢にして、二～三歳の差がある。男子の伸び盛りは、高校生になってからだ。

「そして女子はこの時期、母親の庇護を求める」

「そりゃ生まれたときからだろう」

「物理的な意味ではね。でも、初潮を迎える頃、女子とその母親は、対等の人間同士として親友になる。もちろん、それまでの親子関係が上手くいっていればの話だけど」

「愛美と愛美の母親は、まさにそれだったと言うんだな」

「だから、最高の奇蹟が起きた」

なるほど、と山添も思う。

「もちろん、愛美はもともとポテンシャルを持った子だった。その上で、春山先生や山添先生の影響、そして及ばずながら私たちの塾での効果もあって、勉強するということが好きになっていった。そこに、最高の信頼関係を築いている母親が、いつも家にいて、いつも隣にいて、勉強を見てくれるようになった。そしてもし、自分が一生懸命勉強して医学者になれば、自分の手で、母親の腕をもう一

度取り戻すことができると信じていた。そういうことが統合されたかたちで、本当の奇蹟が起きたのよ」今日子は静かに興奮していた。万有引力を発見したときのニュートンも、惑星の楕円軌道に思い当たったときのケプラーも、こんな感じだったのかと思う。

それでもなお疑問点があったので訊いてみる。「しかし保険金といっても、そうやって学費や生活費に使っていけば、いつかはなくなるものだろ」

「ゴールは愛美の大学合格よ。国公立大学の医学部医学科に合格すれば、教育ローンは『医学部医学科』を担保に借りられるし、もちろん愛美がこの調子で伸びていけば、返済不要の奨学金だってもらえる。防衛医大に行けば、学費免除のほかお給料だってあるしね。そもそも医学部医学科合格ってことは、将来は医者になることがほぼ保証されるわけだから、まさにゴールになる。もし日本がこの先没落して外国の支配を受けるようなことがあっても、医者だったら命を取られるなんてことはないしね。だからそのゴールまで、愛美の学力向上に必要なこと以外は、節約に節約を重ねて保険金を少しずつ崩していく。もっとも愛美本人は、本気でｉＰＳ細胞の研究者になるつもりだろうから、東大理Ⅲに合格して、そこから国費留学でもする算段だろうけどね」

「それで……、愛美さんは理Ⅲに行けるのか」

「いける。絶対に」

そうだな、お前なら絶対にやるだろう。心の中でつぶいた。「でもそれで愛美さんはいいかもしれないけど、お母さんは……」

「愛美が貧困の連鎖から脱出したことを見届けさえすれば、自分はどうなろうとたいした問題じゃない、と普通考えるでしょ」

まったくその通りだと納得した。

「でもそれだけじゃない。愛美の知のオーラは、そこまでさせてしまう魔力のようなものを持っている。あの子は、母親との、あるいは世の中のすべての人間との関わりあいを、すべて自分の実力に結びつけることができる子なの。だから、少なくとも教育関係者は、あの子のためなら、なんでもやってやろうという気になってしまう……」

春山先生もそうだったのかと思い、山添は一つの結論に達した。そして冷静に今日子に告げた。「そういうわけで、お前にとっての最大の謎は、お前が見事に解決した。後は、どうやって愛美さんを理Ⅲ合格に向けて、伸ばしていくのか。それだけを考えればいい」

桃李館のビルを左手に確認した山添は、その狭いアプローチにシビックを乗り付けた。山添のシビックを認めたのだろう、桃李館からぱらぱらと人が出て来た。その中に竹内の姿を確認し、キコキコとサイドウインドゥを巻き下げた。

「久我は……、お返しします。今まで、ご心配をお掛けしました」
竹内は黙って頭を下げ、他の講師たちもそれに倣った。
「というわけだ。降りるんだ」
「ちょ、ちょっと待ってよ。どういうことよ？」
「俺はこれから、消えた教え子たちに会いに行く。だから、その感動のご対面の邪魔をしてほしくない」
「なるほど、私はお邪魔虫ってわけね」今日子は憤慨したふりをしたが、すぐに真顔になった。「くれぐれも気をつけて」山添の顔を覗き込むようにしてそう言い車を降りた。
山添は、真っ直ぐ前を見て、クラッチを繋ぐ。開けた窓から、桃李館の塾講師たちが発する歓声が聞こえた。

31

「ランディア南平台」のゲートは、三日前と同じように閉まっていた。山添はいったんシビックを脇に停め、ゲート横のブースに歩み寄った。
「えーと」と、管理人らしき人物を見ると、この前とは別人で、その三十台と思しき男は、そこに必要事項を記入してくださいと、ていねいに言った。
山添は正直に自分の氏名と身分を記し、「訪問場所」の欄には、「コミュニティセンター」と書き込んだ。その書類を管理人に渡すと、三日前と同じように「訪問証」なるシートをくれ、それを車のダッシュボードに置いておくように指示された。
山添がシビックに戻るとゲートが開いた。車を発進させる。
目指す「コミュニティセンター」は、坂を登った中腹、おそらくこの住宅地のシンボルなのであろう、時計台をその中心に据えた広い公園の一角にあった。小さな教会のような造りだ。
山添は、その玄関の、オーク材と思しき重厚な扉を開け、「ちゃーす」と小声で言って中に踏み入った。正面に廊下が伸び、その両脇にはいくつかの部屋があるようだった。玄関を入ってすぐ左手には二階に通じる階段があり、右手には、管理人室のカウンターが見えたが人の気配はない。まったく閑散としている。が、よくよく耳を澄ますと、階上から声が聞こえてくる。授業、であるようだ。山添も教員の端くれだけに、その声のリズム感で判断できた。そっと階段を上る。
二階も、一階と同じような造りだった。廊下の両脇に、いくつかの部屋が並んでいるようだ。瀟洒な外観とは対照的に、この建造物の内部はきわめて素気なかった。
声が聞こえてくる部屋は一番奥右手のようで、その部屋の扉の窓

からだけ薄暗い廊下に光が漏れてきていた。
ゆっくりと近づき、腰をかがめ中の様子を伺う。予想通り、そこでは「授業」が行われていた。山添は無遠慮に扉を開けた。
児童たちが一斉に振り向く。やはり、川南小五年一組の児童たちだ。彼ら彼女らは一瞬息を飲み、そして顔を紅潮させた。
「先生！」遠藤宏が、席を立ってこちらへ駆け寄って来てくれる。続いてほとんど全員が、席を立ったのが確認できた。
「先生、ごめん」岩屋健太郎が言った。続いて、後藤沙耶美が、日野瑤子が、野尻大輔が腰にすがり付いてくる。
大輔が泣きはらした顔で言った。「先生から電話があったことはわかっていたんだよ。でも、学校の電話番号がディスプレーに出たら、電話に出ちゃ駄目だって、お父さんが」
「病院にも行ってみたんだよ」と言ったのは、国東知子だ。
この一週間、ずっと思い描き、夢に見、そして半ば諦めかけもしていたことが現実になっていた。現実なんだと自分に言い聞かせる。が、そうした幸せは、当然ながら長くは続かなかった。ホワイトボードの前の講師が手を叩く。腰に巻きついていた数人の手がすっと離れたのを感じた。
山添は、その講師を見た。長身のまだ若い男だ。日本人ではあったが、山添はその今風の、しかし仕立てはよさそうなスーツを着た男に、アムスデンと同じ雰囲気を感じた。つまり、いけすかないすかした野郎ということだ。
その男は、山添を見据え、口の端をかすかに上げて言った。「山添先生、気は済みましたか」
山添は、男を見返し、そしてその後ろのホワイトボードに書かれてある立体図形の断面図に目を留めた。
「そうです。空間認識についての問題です。むろん小学校内容ではありません。しかし、この年齢でこれをやっておくことは、脳力の開発という点で、とても重要です」真実をあらためて確認するかのように、その講師は言った。
今の小学校高学年の教科書内容は、小学校高学年という学齢における脳のポテンシャルには明らかに合ってない。そんなことは、山添も知っている。そして思わず、一番手近な机の、高田桃子のノートを見た。ホワイトボードと同じ図形が丁寧に描かれていた。山添のクラスでの授業では、考えられなかったことだった。
山添は、打ちのめされた気分で、その「教室」を出ようとした。愛美が言う通り、これで満足しなきゃいけないのかもしれなかった。
「愛美が……」その小さな声に振り返ってみると、彩香だった。「愛美が、私は大丈夫だって」

「愛美もそう言ってたよ。ありがとう」
腰をかがめ彩香の肩を一度抱き、すぐに放すと扉を開けた。
コミュニティホールの玄関を出て、路肩のシビックまで歩く。シビックのワイパーに紙片が挟まれているのに気付いた。手書きの暗号らしきものだった。その字は、小学生が書いたもののようにも見えた。

4　39　325
5　63　546

5　21　697
6　39　735

4　27　215
2　91　513

6　45
3　18

とある。
循環小数による暗号？　少なくとも、上六列は、この前の「まつい」を示した暗号と同じスタイルだ、山添は竹内が示した解法を思い出し、携帯の電卓と手帳の空きスペースを使って解いてみた。答えは「おくた」。人名か地名、ということだろう。続いて下二列について、先の数字を後の数字で割ってみる。それぞれ、

0.133333333333……
0.166666666666……

となった。この場合、永遠に連なる「3」と「6」に意味があると考えるべきだろう。
山添は、カーナビに「N市奥田3-6」と打ち込んでみた。カーナビは、一度は行く場所を失った山添に対して、これから向かうべき場所を示してくれたようだった。

32

カーナビの指示する通りにシビックを走らせると、やがて市街地の外れ、川南小とは市街地を挟んでちょうど反対側に当たる、高速道路が頭上を横切る平べったい地区に出た。カーナビが最終的に示

した場所には、傲然と言ってもいいような構えを有し、しかしその建物だけを見れば可愛らしくもある一軒家があった。
「セイフハウスっていうやつか」昔、冒険小説で目にしたことがある言葉を口にしつつ、俺だって本ぐらい読んでいるだぞ、と誰に言うともなしにつぶやく。そして、その一軒家の近所にあるスーパーの駐車場の、納品業者のパネルバンと、デカい図体をもてあましているトヨタ・アルファードとの間のスペースに、小柄なシビックを滑り込ました。
グローブボックスから工具を取り出してから車を降り、床下にもぐりこむ。
このシビックＳｉには、フロントリアとも無限製のスタビライザーが装着されている。フロント用のそれをモンキーレンチを使って外し、ダッフルコートの内側に隠して、コートのトングルを留めた。こうした一連の行為は、衝立のようなパネルバンとアルファードに隠されて、外からはまったく見えなかっただろうと勝手に決め付ける。
山添は、コート内側のスタビライザーのせいでいささかぎこちなく歩き、そのセイフハウスと思しき、一軒家の前に山添は立った。先ほどのコミュニティセンター同様、頑丈そうな扉がある。おそらく、セキュリティシステムの類は万全なのだろうなと思いつつ、しかし子細構わず、その二枚の扉の隙間にスタビライザーをこじ入れた。スタビライザーを梃子にしてガチャガチャと動かす。すると、何かフックのようなものが外れたのだろう、思いのほか簡単に扉は開いた。
中に踏み込むと、芝生の前庭が広がっていた。ドーベルマンか何かが放し飼いにされていて飛び掛ってくることもあるかと思い身構えたのだが、そうした気配はまったくなかった。街道近くであるのにも関わらず、この家を取り囲む空気だけが、この地方都市の、街中とも郊外ともつかぬこの一帯の雑駁な雰囲気と隔絶されているようで、そのことに山添は反発を覚えた。
「まったくお高くとまってやがる」そうつぶやき、門塀同様、高価そうな材質でできた玄関の扉に手を掛けた。思いの外というべきか、案の定というべきか、その扉もまた施錠されておらず、すぐに開いた。
玄関を入ると、そこからそのまま見渡せる五十畳ほどもあるホール――ここが、セイフハウスの類いだとしたら、この場でパーティーなども執り行われるのだろう――があり、長身の男が立っていた。アムスデンだった。
「よう、アヌス」山添は得物を握りしめ、一呼吸置いてから言った。
「ハヴ・ユー・ウォッシュド・ユア・アス・ホール・ウェル？」

アムスデンは小さく笑った。「ふん。それで私を挑発したつもりとは、ね。相手を上手に挑発して利益を引き出すという文化がないこともまた、日本という国の脆弱性かもしれませんね」
「言ってることがまるでわからないんだが」
「山添、お前は今の私の言葉だけじゃなく、何もかもわかっていないんだよ。わからないまま消えていくんだ」
後ろに人の気配を感じて振り向くと、ハーメルンの笛吹きの装束をまとった長身の男が立っていた。こいつが、一組の児童を連れ去った実行犯だと考えるべきだろう。
「彼が、お相手をしてくれる。笛吹き男は、わが社のアトラクション要員兼ボディガードの一人だ。お前の相手にはふさわしい」
笛吹き男は何も持っていない。山添は、スタビライザーを横にして構え、慎重に間合いを詰め、男の足元目がけて打ちつけた。相手はプロレスラーのような派手なジャンプでそれをかわすと、着地するや否や、身体を回転させて後ろ蹴りを繰り出した。奇跡的に間一髪で避けたが、やつが何も持っていないわけを理解するには十分過ぎるほどのスピードだった。息つく間もなく、左足の回し蹴りが飛んできて、当然のようにこれは食らった。
一瞬、頭が真っ白になる。たぶん首の後ろに入ったのだろう。前のめりに倒れようとする山添の鳩尾に今度はパンチが来た。嘔吐し倒れつつも、手放したスタビライザーを笛吹き男が取ろうと姿勢をかがめたのが目に入った。
その瞬間、山添は片足だけで地面を蹴り、相手の膝下目がけて思い切りタックルした。笛吹き男は、もう死に体同然の山添には無警戒であったので比較的簡単に決まった。山添は笛吹き男の睾丸を探り当て、それに噛み付いた。
ぎえええええええええええ……。男は、今まで聴いたこともないような悲壮な声を上げた。
山添は、立ち上がるとスタビライザーを拾い上げ、男の鳩尾を突いた。グェと一声残して、男は白目を剥く。山添は、スタビライザーの曲がった部分を、仰向けに倒れている笛吹き男の口の中にこじ入れ、そして首の部分を踏みつけた。
「こいつをこのままくいっと引き上げれば、この笛吹き男の顔に穴が空くだろうな。そうされたくなかったら、俺の質問に答えるんだ」アムスデンに向かって言う。
アムスデンはまた小さく笑った。「お前はどうも状況がわかっていないようだ。しかし、まあいい。少しの時間なら」
「愛美は、愛美はどうしたんだ？」
「この国の公立小学校の教員の間では、児童を呼ぶときは『さん』付けがお約束だったんじゃないのか」

「もう公立小の教員じゃなくなるんだ。愛美はここにいるのか？」
アムスデンは薄く笑っただけだった。「いる」と理解する。
「あの循環小数の暗号は。愛美がつくったものじゃないのか？」
そこでアムスデンが嬉しそうにした。「それにしても、あんなものに引っかかるとはね。さすがは山添先生だ。あの小汚いシビックがランディア南平台に現われたというので、とっさの趣向でやってみたんだが、こちらとしては手間が省けたよ」
「頭の回りの悪さには、昔から定評があるんだ。それで俺は、ここに殺されにのこのこやって来たと、お前らは解釈しているんだな」
山添は自嘲する。
「まったくその通りだよ、山添。で、次の質問は？」
「じゃ、殺される前に、殺されなきゃいけない理由を訊いておこうか」
「いい質問だ。お前が今まで発してきた質問で、一番いい質問だ。お前が死ななきゃいけない理由を、特別に教えてやるよ。それは、まず第一にお前の父親である山添祐太郎」
「親父？　親父がどう関係してくるんだ？」今度は山添が小さく笑う番だった。「教員退職して、今は昼から、いや朝から酒飲んでいるぜ」
「それは、『祇園一力茶屋の大星由良之介』ってやつだな」
「日本のことをよく勉強しているんだな。さすがだよ、アムス」
「お前らが、ガリラヤ湖の奇蹟について半可通な知識を振り回すのとはわけが違う。支配者は、被支配者の文化については、被支配者以上に詳しいものだ」
「支配者？」
「お前には関係ないことだ」
「ふん。で、親父がどうしたんだ？」
「山添祐太郎は、目障りな動きをしてくれる。息子である山添祐輔先生に仕掛けていけば、あっちも手を引くんじゃないかと期待した。この国のオトーサンは、退職するととたんに気力を失い、闘う気持ちを失ってしまうという調査結果もあったしね。うちとしては、本当はそれだけで事を収めたかった。しかしお前と、あの美人の塾講師が動き回ったおかげで、そうもいかなくなった。それでお前は、死ななくちゃいけなくなったわけだが」
「話がまったく見えないな。親父が何をしようとしていたのかは知らないが、俺とは関係ないことだ」
「以前、勉強させてもらったからね。日本人は、息子の不祥事で父親がすぐに責任を取ったりする。互いに独立した人格なのにも関わらず」そう言ってアムスデンは再びクククと笑った。
「くそっ」水野小児科の一件を思い出し、そして気づく。「あの一

件もお前らの仕業だな」
　アムスデンは、嬉しくて仕方がないというふうに身をよじった。
「お前らは、本当に最低だ」山添は、スタビライザーを捨てた。こいつだけは、自分の拳で殴っておかなければならないと決める。アムスデンに歩み寄ると、自分の目線よりも十センチ以上は高い位置にある彼の頬を殴ることはあきらめ、レバーを狙ってフック気味にパンチを出した。案外すんなりそれは決まり、アムスデンは尻餅をついた。
「それでいい。お前はあの薄汚いシビックに装着されたスタビライザーで、ここのドアをこじ開けて入ってきた。そして、スタビライザーを振りまわしたあげく笛吹き男の睾丸を噛み切り、今、私にパンチを入れてくれた。これだけのことを私邸でしてくれた男を、日本の法律は救うことができないんじゃないかな」アムスデンは、立ち上がりながらそう言い、芝居がかった仕草で指を鳴らした。
　笛吹き男が、また五人ばかり姿を現わした。装束に身を包んでいるとはいえ、中には雲をつくような大男もいて、全員、武闘の専門家であろうことが見て取れた。
「まずお前を廃人にする。そして山添祐一郎にその写真を送りつける。あの美人塾講師にも写真を送り、ここに呼びつける。幸い、こいつらは」そう言ってアムスデンは、笛吹き男の集団をあごで指した。「極めつきのサディストたちでね、美人の身体をナイフで切り刻みながら射精することを熱望しているようだ」
「なるほど」山添は、再びスタビライザーを手にした。つまり俺が、ここにいる全員を叩きのめすことができれば、今日子はそういう目に遭わなくて済むわけだ。そう自分に言い聞かせたとき、なぜ先ほど、とっさに笛吹き男の睾丸に噛み付いたのか、その理由に思い当たった。大昔、小学生の頃、喧嘩に負けて泣いて家に帰った山添は、父親から一喝されたのだった。
「喧嘩なんてものはな、相手の金玉を噛み砕くつもりでやれ！」
　金玉を噛み砕けば、射精もできないしな。山添は笛吹き男の集団目掛けて突進した。

33

　覚醒すると、視界には瀬上の大きな顔があった。が、その顔の半分が何か朦朧としている。山添は、自分の目が、左目しか機能していないことを悟った。ということは、やはり俺は、笛吹き男の集団に叩きのめされたのだな。しかし、どうやら生きているらしいことに安堵する。そして、一番気にかかっていたことを思い出した。
「久我は？」

「ここにいるよ、山添くん」今日子が、瀬上の顔の後ろから、瀬上の顔の半分ほどの面積の顔を覗かせた。
「お前、犯されなかったか」思わず訊いてしまう。
「ちょっと、何言うのよ、こんなところで」
「いや、いいんだ。よかった。愛美は？」
「大丈夫だ。保護した。念のため、谷口に自宅周りを警備してもらっている」瀬上が答えてくれた。
「ということは、愛美はやっぱりあそこにいたんだな」ひとまず安心した山添は、右目の状態を確認するため、右手を上げようとした。が、上がらない。見ると、右腕は腹に固定されていた。それで山添は、自分の身体状況を確認する気がなくなり、質問することを選んだ。「瀬上、俺は、ぼろぼろなのか」
「ぼろぼろだ。しかし山添、それより酷いのは、あのランデックの隠れ家のような家にいた、笛吹き男たちよ。なんと、睾丸を噛み砕かれた男が三人もいてな。ランデックとしてはお前を挑発するために、笛吹き男の装束をさせたんだろうが、しかし、あれは下半身はタイツ状だからな、睾丸を探り当てて噛み付くにはきわめて好都合だったわけだ。しかし、この間の猿のときといい、お前、案外喧嘩強いな。俺たちが踏み込んだときは、もう鬼神のごときの暴れっぷりだったよ」
「普段は弱くて泣き虫の癖に、一度スイッチが入ると狂ったように暴れるタイプだ。一番性質が悪い」
「が、今回は、そういうお前の性向が吉に出た。おかげで、ランデックの実態みたいなものがわかってきたよ」
山添は思わず身を乗り出そうとしたが、すぐに諦め、その理由は、牽引されている右足だということに気付いた。
「そいつはな」山添の右足を見ながら、瀬上が言う。「折れてはない。ひびが入ってるだけだ。だからその処置はちょっと大げさだな」
「何が、大げさだ。こっちは重傷患者だ。お前、俺がこうなる前に来るわけにはいかなかったのか」
「例の県警携帯のＧＰＳが復活したんで、とにかくそこへ急行したかったんだが、あの場所は所轄違いでもあるし」瀬上が言い訳がましく言う。
「警察のセクショナリズムてやつが、善良な市民に重傷を負わせたと」
「しかし山添、県警本部の人間と一緒に踏み込んだおかげで、ランデックの疑惑を解明することができそうだぞ。県警本部としてはずっと内偵していたことだしな。なにしろ、山添先生が狂ったように暴れたおかげで、あそこにいたアムスデンとかいう広報担当は、拳

銃まで持ち出していたから、本部としては、非常にありがたい状況が生まれたというわけだ」
「俺はもう少しでズドーンと撃たれるところだったんだな」再び憮然とする。「それで、そのランデックのやろうとしたことなんだが、当然、俺には聞く権利があるんだろうな」山添は、恐る恐る少しだけ上体を起こした。今日子が、背中に枕をあてがってくれる。「すまん」と謝してから、「あいつらはいったい何をやろうとしていたんだ？」今日子と瀬上を交互に見ながら訊いた。
「本部がアムスデンや、あそこにいた他の人間、そして城山という取締役を引っ張ってきて、いろいろ訊いているようだが、その供述内容は、県警本部の後輩から逐一報告されてきている――なにしろ、あの場所を教えてやったのは俺だから、聞く権利ってものは当然ある」瀬上はまた例によって、根拠薄弱な自慢をし胸を張っる。「この報告に、久我の推理を重ね合わせて、俺にもおおよそのものが見えてきたよ」
「それは県警本部の取調べと久我の頭脳のお手柄であって、お前が何の役にも立っていないことはよくわかったから、もったいぶらないで話してくれ」
「その通りだ」瀬上は悪びれずに言った。「お前の質問に応えるかたちで話そうじゃないか。久我、お前もフォローしてくれよな」
瀬上の言葉に今日子も頷く。
「なぜ、俺のクラス全員が消えたんだ？」
「三つの理由がある。一つは、お前個人、そしてお前を通じてお前の親父さんにプレッシャーをかけようというものだ」
「それはアムスデンも言っていたが……」
「お前の親父さんは、県教委の特命を受けて動いていた。というのも、県が毎年、小学校五年生、中学校二年生に対して行っている学力調査テストの個人情報が、内部から漏れていたらしいんだな。それを隠密裏に調査するために、県教委メンバーや現役教員に強い影響力を持つ山添祐太郎氏をリーダーとする捜査チームが組まれた」
父親が強い影響力を持つということには、大きな違和感と小さな誇りを抱いたが、それよりも何よりも、それがなぜ自分と関わってくるのかと疑問に思う。
「山添祐太郎氏は、実はずいぶんと自分の息子である『山添祐輔先生』を誇りに思っていたようだ。その誇りであるところの山添学級から児童全員がいなくなったとなれば、山添祐太郎氏の動きを牽制することができるのではないか。そうランデックは考えた。もっともこれは最大の理由ではないし、ランデックもさほど期待していたわけじゃない。ただしランデックは、そうした父親と子供の関係を、日本という社会の脆弱性ととらえていた節がある」

「そうか、やっぱり水野小児科は……」
「なんだ、それは？」瀬上がけげんそうにする。
山添は、水野小児科の一件と、アムスデンの言葉を伝えた。
「わかったよ。それについては、もう一度、今回のこの一件とからめて再調査するよう、お隣の県警に依頼しておく」瀬上は請け負ってくれた。
「で、二番目の理由は？」
「おう。そいつについちゃ、驚くなよ、なんと、川南小の山添学級であるところの五年一組は、県教委がやってる学力テスト、あれなんという名前だっけ？」
「基礎基本の定着度調査か」
「それだ。それで県内ナンバーワンだ」
もうすでにそのことを知っていたであろう今日子が、山添を見て表情を崩した。
N県の場合、小五と中二を対象とした県の「基礎基本の定着度調査」において、一定の水準をクリアした学校名が県のウェブサイトなどで公表され、それに川南小が入っている、ということは知っていた。が、まさか川南小、そして自分のクラスがナンバーワンであるとは、まったくもって考えの外だった。
第一、他校との比較データは、各学校の校長しか閲覧することはできないし、ましてや、クラスごとあるいは生徒個人個人の成績など、県教委の中でもほんの数人しかタッチできないはずだ。その一人が、自殺した沢村課長であることは間違いないのだが……。「ランデックまついは、沢村課長からそのデータを引き出し仕掛けてきたというわけか」
「そういうことだ。お前さんざん殴られて、頭の回りがよくなってきたみたいだぞ」
「うるさい瀬上」と一喝してから今日子を向く。「やっぱりお前が言っていたように、ランデックは自社の分譲地に優秀な児童の家庭を引き抜いてたってことか」
「そうだ」お呼びでない瀬上が、図々しく口を挟んでくる。「アムスデンってやつは、県警の取調べに対して『日本は、自分が購入しようとする住宅の近くの小中学校の詳細な学力データを知ることができない国だ。そうしたものは当然、購入する不動産の資産価値に反映されてもいいはずだ』とほざいていたらしいぜ。でもそれだけじゃないだろうってのが久我の推理だ。何しろ、お前が覚醒するまで、まるまる一日あったからなあ。ここで、久我と親密に推理をたたかわせることができたってわけだ。なあ久我」
「てことは、ずっとここにいてくれたんだ。塾は？」
「みんなが、山添さんのところへ行ってやってくれ、と言ってくれ

た」
「そうか。それで、お前の推理というのは？」山添は、瀬上を無視して、片目だけの視線を、瀬上には絶対に口を挟ませないぞという強い意思を込めて今日子に送った。
「山添学級の三十八人全員欠席というのは、山添くん個人、さらに親父さんへのプレッシャーという意味もあって、あえて全員というかたちを採ったんだろうけど、でも他の学校にも、不可解な転校というものはあって、それは、以前から二人で話していたように、ランデックまついの分譲地への引き抜きだった……」
「そんなことをして、ランデックにはどんな得があるか、というのが、俺たちの疑問だったよな。それが、わかったのか？」
「瀬上くんから聞いた県警の取調べ内容やこれまでの経緯を総合しての仮説、だけれどもね」
「ぜひ、聞かせてくれ」
「今、この市では、というよりも日本全国、とくに地方都市で、学校の統廃合が俎上に上がっているよね。今までは、たとえばN市の場合、小学校は、どの住所からもで小学生の足で三十分圏内に一つという内規があった。でもこれからは少子化で、というよりも、地域ごとの極端な年齢層の偏りによって、その原則は維持できなくなっていく。小中学校の数そのものも減っていくけど、それに輪をかけて、小中学校が偏在していくようになる。ランデックは、それを一つのチャンスと見たんだと思う。つまり、学校の統廃合ということを利用して、このN市を、自分たちの思うがままに造り変えようとしている。ここが上手くいったら、全国の地方都市に広げていこうという考えなんだろうけど」
「具体的には、やつらはどうするつもりなんだ？」
「まず、自分たちの分譲する住宅地に、学力が高い子供を持つ家族を誘致する。当然、そこにある小中学校は存続する可能性も高い。さらには、病院やスーパーといった生活必需施設も、その地区に集めていく。一方で、その他の地区のそういう施設を排除していく。水野小児科に対して行ったような、あくどい方法も含めてね。そうやって、この市を、価値のある地域と、価値のない地域に色分けする。スーパーも病院も学校もなくなり、宮城老人のような高齢者だけが取り残された地域は……」
「どうなるんだ？」喉が渇いてくる。ここ、ビールか何かないのか？　と思わず訊きそうになった。
「スラム……、ということになるんだろうけど、すぐにはそうならないにせよ、とにかく地価はどんどん下がって行く。そしたらよ、産業廃棄物処理場のような施設だってつくりやすくなるじゃない。今、中国の富裕層が日本の不動産をどんどん買っているというけど、

それがひと段落したら、中間層が動き出す。そのときに、彼らが買える割安の土地を提供していこうということもあると思う。なにせ中国人は、自分の国に自分の土地を持つことなんてできないからね。あと今後、移民が大量にやってきた場合、そこに彼らのための住居をつくるということも考えられる。いくら利便性は悪いとはいえ、電気や水道、通信などのインフラがしっかりしていて、ゴミもきとんと収集してくれて、一定の治安が保たれているというのは、日本の大きなメリットだから。それを税負担なしで、あるいはわずかに納税で享受できるとなれば……」

「でも」車オタクの山添は、以前したことがある質問をもう一度してみる。「利便性が悪いといっても、車があるじゃないか」

「前にも話したけど、これから原油はどんどん値上がりしていく。車を維持できる人も少なくなっていく。この町を見てみて。古いやっと動いている車に乗っているお年寄りだって多い。ショッピングモールに行けば、ただ暖を取るためだけに、そこにいるお年寄りもたくさんいるんだよ。そんな人たちが、ハイブリッドカーやＥＶを買えると思う？　『地方は車で動く』はこれまでの常識だったかもしれないけれど、これからの常識じゃない。しかも、ごていねいに、店という店は大規模ショッピングセンターに集約されて徒歩圏内にはなくなっているし」

「しかし、行政だって」

「行政も赤字赤字赤字。新しいサービスをする体力なんてない。利便性が悪い地区に住む老人は、出て行かざるをえない。ランデックはその不動産を買い叩く。その人たちを引き受ける施設を造り、年金を吸い取り、そこでも収益をあげることを考えているのかもしれない。でもそれは副次的なこと。繰り返すけどランデックは」そう言って、今日子は一度、大きく息を吸い込んだ。「価値を有する地区と、価値を持たない地区を、学校の統廃合を利用して色分けしていこうとしている」

「そうか」山添は、肩を落とした。「ランデックは……」

「この国の土地構造、それに伴う社会構造を根底から造り変えようとしているのよ」

「ランド・デザイン・クリエイター、造物主、か」

アムスデンの「被支配者について知悉しておくのも支配者の責務だ」という言葉思い出す。

「これは、本当に百年の計なんだと思う。そういうことができるかどうか。日本の社会構造の、そして日本人のメンタリティの脆弱性に付け込んで、日本という国を、その国民を支配できるのかどうか。その壮大な実験の端緒と言ってもいいかもしれない」

他の人間がこんなことを言っても一笑するところだが、他ならぬ

今日子の言葉だけに、少なくとも山添には説得力を持った。瀬上も同じ気持ちでいることが見て取れる。
「この町が実験台にされた、ということだな」瀬上が言う。
「たまたま、旧松井組という存在があって、それを利用すればやりやすかったから、だろうけどね」
「まったく、馬鹿にしていやがるぜ」瀬上が苦々しい顔をする。
いや、馬鹿にしていやがる、などという単純なものじゃない。山添は、自分の育った町が、なにか足元から侵食されているような恐怖を覚えた。が、新たな疑問も同時に湧いてきた。「しかし、そうはいっても、遠藤宏の家庭などは、ランデックに言われてはいそうですか、と引っ越すものなのだろうか」
「それについてなんだけどな」瀬上が話を引き取った。「ランデックは、山添学級の三十八家庭については、お前にプレッシャーをかけるという意味もあり、かなり有利な条件で、ランディア南平台の分譲住宅購入を持ちかけたようだ。俺も、南平台住宅地を一度見てみたが、ありゃ普通の家族なら、もう絶対こんなところに住んでみたいと思わせるような家と環境だからな。有利な条件で買えるとなれば、たいていの人間は飛びついてしまうだろう。むろんお前という標的がなかったら、そこまではしなかったんだろうが……、それにあの『ランディア南平台』の分譲住宅は、基本的には二世代ローンで、メインとなるローンの引き受けも、日本の銀行じゃなく、ランデックの親会社のファンドグループ系の銀行だ。二世代ローンで、金利もほとんどなしという条件だから、月々本当にわずかな支払いで、家族の夢を絵に描いたような住宅を手に入れることができるって寸法だ」
「二世代ローン？　遠藤家の場合、宏も、ローンを払い続けるということか？」
「あそこの住宅が購入できるのは、子供の学力がある程度高い、すなわち、将来的に高い社会地位を得られる可能性を持つ子がいる家庭だけよ」今日子が言う。「それに、ランデックは独自で住宅購入者の子の教育も行っている。高い学力、あるいは自ら学力を高めることで、信用供与しているのよ。子供の学力を担保に取っているわけよね。それであえて、二世代ローンという形態を採った」
子供の学力を担保に取る……。山添は、違和感と嫌悪感を同時に覚える。
「しかし山添よ、ここまでランデックがやってきた、そしてこれからやろうとしていることは、一応、法の範囲内のことだぜ。お前との一件は、むしろお前が加害者だし、向こうが拳銃を持ち出したってことが唯一、お前の立場を有利にしているだけだ。むろん、県教委の沢村課長から、県の基礎基本のなんとかっていう学力テストの

詳細な結果がランデックに渡っていたことを証明できれば、それなりのダメージを与えることはできるだろうが、決定打にはならない。さっきお前が話した水野小児科の若先生の一件にしても、それがもし仕組まれたことであっても、おそらく巧妙に隠蔽しているだろうし、ここからランデックにたどり着くには、時間がかかる」
「あいつらに一撃くらわすとしたら、何か決定的なものが必要ということか」
「そうだ」
「よし、瀬上、お前らが殺人事件と踏んでいるあの踏切事故の件だがな、俺の冤罪は晴れたとして、今現在、N署では、どういう見解なんだ？」
「そりゃ……」瀬上が言いよどむ。
「春山先生と春山師長の共犯、なんだな？」
「そうだ。お前の取調べ中に慈愛病院にも捜査員を遣った。お前の病室のチェストには県警携帯はなかったし、担当看護師のはずだった春山師長は出勤してなかった。あの県警携帯を、春山師長がお前に頼まれて保管し、それをバックの中に入れたまま現場に向かったと考えれば辻褄が合う。春山師長の年代だと、携帯にＧＰＳ機能が付いているというふうには普通は考えないだろし」
「春山姉妹が犯行し、自責の念にかられて、自宅に火を点けて自害したと、そう県警では考えているわけだ」
「そうだ」
「南署が想定している殺害方法は、お前が、俺を連行しようとしたとき、滔々と述べたご高説の通りだな」
「そうだ」瀬上は再度肯定する。
「お前の説によれば、春山姉妹それぞれの車の、片方はリアバンパーが、片方がフロントバンパーが派手にへこんでないといけない。それは調べたのか？」
「そんなことを部外者に言えるわけないだろ」
「そりゃそうだな。じゃ瀬上、取引きしよう」
「山添、日本には司法取引なんて制度はないんだぞ。それに民間人が警察に取引きを持ちかけるなんざあ、勘違いもはなはだしい」瀬上が何かを感じ取ったのか、先制攻撃を仕掛けてきた。
「俺は公務員だ。その公務員が公務員に情報交換を持ちかけて何が悪い？　諸外国じゃ当たり前のことだ」山添は、以前、瀬上が言ったのと、同じ論法を展開してみた。
「くそっ」瀬上が吐き捨てるように言う。「お前のカードは何なんだ？」
「あの事件の被害者の身元だ」
「くうっ、山添！　お前、初めから知っていたんだな。なんて野郎

だ」瀬上の髪が、例によってあわっと逆立つ。「なんで、事情聴取のときに言わなかったんだ？」
「あんなかたちで連行されて、それでも警察に協力するほど、俺は人間ができていない。それに、あの出たがりで口が臭い課長に記者会見のネタを与えるわけにもいかないしな」
「で、誰なんだ？　被害者は」
「お前から先に答えるんだ。春山先生の家には、春山先生と春山師長の車があったはずだ。どうだったんだ？　それぞれの車のバンパーから、被害者が乗っていた車の塗料は検出されたのか」
「車も一緒に焼けていたよ」瀬上がぼそりと答えた。
「素晴らしい鑑識眼をお持ちの南署だ。焼けていたって、それくらいはわかるだろ。どうなんだ？」
「それは……」瀬上は言いよどむ。「焼けてるんだからよ、正確なところはわかんねえよ。で、被害者の身元は？」
山添は瀬上の質問を無視して続ける。「春山先生は、やむにやまれぬ事情があって殺人を犯した、いや犯そうとしたのかもしれない。しかし、それを悔いて自殺するにあたって、近隣も延焼する恐れのある方法なんて絶対に採らない」
今日子も同意するように頷いてくれる。
「だから、あれは自殺ではない。自殺でない以上、犯人でないという蓋然性も高い。瀬上、もう一つ調べてくれ。その結果を聞いてから、被害者の身元だけじゃなく、この事件の全容について教えてやるよ」
「なにが事件の全容だ。山添よ、お前よ、そういうふうにな、自分の見解は伏せた上で警察をパシリに使っても許してもらえる存在は、ミステリー小説の中の名探偵だけなんだぞ」
「瀬上くん」今日子が瀬上の肩に手を置いた。
瀬上はそれで、小説の中の警察官になろうと観念したようだった。

34

本居家のチャイムを鳴らすと愛美が飛び出てきたが、山添の姿を見て一瞬、息を呑んだ。そして「馬鹿！」と言ったきり泣き出した。
奥から母親が現われ、やはり同じように息を呑んだ。
「そんなに酷いですか。私の様子」おどけた調子で訊いてみる。それで二人の気持ちも多少は和んだように見受けた。
「愛美さんが先生のこと助けてくれたんだね。ありがとう」山添は腰をかがめ、愛美に言う。
愛美が県警の携帯を持っていて、そのスイッチをあのセイフハウ

スと思しき家で入れたことによって南署は山添を救出できた、というふうに瀬上から聞いていた。まったく愛美は命の恩人だ。
「先生、こちらへどうぞ」本居優子が言ってくれる。通された場所は、ダイニング兼居間といった感じの八畳ほどの部屋だった。しかし、以前聞いていた通りテレビもなく、また通常ならこうした部屋にあってしかるべきソファもなかった。あるのは、ただひたすらに大きなダイニングテーブルで、その端には学習用スタンドライトが置かれていた。愛美は自分の部屋ではなく、ここで勉強しているのだろうと推測する。それを裏付けるように、一方の壁には書棚があつらえられ、その上半分には、桃李館の教材である駒場原宿の『事前精講』や「誤答」ファイリングがあった。下半分は、辞書や学習図鑑と小説の類だ。愛美が勉強しようと思ってここに座れば、たちどころに勉強に取り掛かれる環境が整えられている。自分の小中学校時代とは大違いだ。
山添は、勧められるままに、その大きなダイニングテーブルの椅子に座った。優子がお茶を淹れてくれ、愛美とともに向かい側に座った。
「今日からは大西小で授業があるというのに、山添先生が来ると聞いたら、絶対に会うと言って休んでしまって」
山添は愛美を見た。泣きはらした名残りがその目にあったが、しかし、どうしてもこの問題を解決するのだという強い意思も見て取れた。
「愛美、今日はお母さんと大切な話があってきた。後で席を外してもらうことになるけど、いいよな？」
「わかってる。そのときは向こうの部屋で、英語のリスニングテープ、イヤフォンで聴くから。耳ダンボになんかしないから、大丈夫」そう言って愛美は、おそらくその部屋との間仕切りであろうふすまに目をやった。「でも先生、初めて『愛美』って呼んでくれたよね。『愛美さん』じゃなくて」
愛美は嬉しそうにする。優子があわてて「すみません。生意気で」と言った。
「いや、いいんです」と優子に言ってから、愛美の方を向いた。「もしかして先生は、先生を辞めなきゃいけなくなるかもしれない。でも、先生が先生じゃなくなっても、ずっと愛美のことを見守っていくから」
愛美がまた涙ぐみそうになる。拙いことを言ってしまったなと後悔するが、そうした山添の気持ちを見て取ったのだろう、愛美は気丈に「ありがとう。頼りにしてるぜ」と明るく言った。
「それで、立ち入ったこととは思いますが」一安心した山添は、優子に対して切り出した。「あなたと愛美と亡くなった春山先生は、

単に保護者、児童と教員という関係を超えた関係だったのではないかと私は個人的には考えています。そのあたりについて、教えてもらえませんか。差し支えなければ」

「はい」と覚悟していたように優子は言って話し始めた。「私は、結婚する前は小学校の代用教員でした。春山先生は、私が初めて赴任した小学校で、学年主任をなさっていました。春山先生は、右も左もわからなかった私に親切にしてくれたのですが、本当の意味でお世話になったのは、愛美が小学校に入学してからです。愛美が一年のときの担任が、偶然、春山先生でした。私は、愛美が産まれたのと同時に教員を辞め、子育て生活に入っていましたから六年ぶりに、春山先生に再会したんです。春山先生はずいぶんと愛美に目をかけてくれて、とにかく本を読みなさいと言って、グリム童話全集をいただいたこともあります。ただ、その頃から、主人の仕事が上手くいかなくなって、それもあって主人は家で暴力を振うようになりました。私に対してならいいのですが、愛美にも及ぶようになって」そう言って優子は目を伏せた。

「離婚を考えたのですね」

「はい。でも、主人はなかなか応じてはくれず、しかも毎晩のように、愛美が勉強していてもまったくお構いなく暴れ、ときには愛美に対して『勉強なんかしなくていい、中学出たら働け』とまで言うようになりました。女子が中卒で働ける場所のことを考えると、私は何だか恐ろしく」優子は、今日子の考えを裏付けるようなことを言った。「そして終には、愛美に対しても暴力を振るうようになりました。しかし主人は、別れるなら愛美は俺のものだと言い、どうしたらいいのかわからなくなった私は春山先生に相談したんです。すると春山先生は、弁護士を立ててくれました――その費用も、立て替えてくれたのです。愛美が出世してからもらうよ、と言っていたのですが」

再び優子は、目を伏せる。

「離婚後の生活はどうしたんです？　ご主人から慰謝料や養育費は……」

「そんなものは……」思ってもみなかったというふうに優子は言う。

「しかしそれでは、立ち入ったことですが、経済的にも大変だったのでは……、お母さんのご両親は？」

「そのとき、もう亡くなっていました。私は、初等教育と幼稚園教諭の資格を持っていたので、どんなかたちでもいいので教職復帰したかったのですがN県では難しく、それでも、クリーニング店にパートで勤務することができました。ただ、フルタイムで仕事があるわけではなく、空いている時間は、ワープロ清書のアルバイトを。

それではなかなか生活が立ち行かなくて……」
　N市では、主婦のパートの時給相場は六百円程度だろう。そして、ワープロ清書の相場は十文字二円程度だから、A４一枚打ったとしても、一枚三百二十円。パートの仕事が終わった後、それに取り組むとして、一日にどれくらい打てるものなのだろう。書類づくりが苦手な山添は、気が遠くなる思いがした。
「春山先生は、私たちに同情や施しと感じさせない範囲で、援助してくれました。ご実家でつくったというお米を持って来てくださったり――もしかしたら、買ってくださっていたのかもしれません――愛美が熱を出したときは、先生のお姉さまが、病院から抗生物質を持って来てくれたり、ときには自宅まで来て注射をしてくれたり。お恥ずかしい話ですが、国民健康保険を払ってしまうと、いざ病気になったときに病院代にも事欠く始末で、本当に助かりました」
「ね」と優子は短く言い、愛美も小さく頷いた。
「わかりました。次に」と言って、山添は愛美に向いた。「愛美にも教えてほしいことがある」
「うん」
「愛美が先生のためにいろいろ動いてくれていたのは、わかっていたつもりだけど、それは、お父さんが愛美の家に来てからなのかい」
「ううん」愛美は、首を振る。「最初にランデックまついに行ってみたときから」
「そうなの？」母親も意外そうだった。
「あのとき、彩香たちはね、授業を受けていた。ランデックの先生みたいな人に勉強を教えてもらっていたのよ」
「うん」と山添は頷く。ランデックは、自分たちが囲い込んだ子供たちを自分たちの手で学力伸長していくつもりらしいことはわかっていた。
「それで私は、五年一組がランデックに移ったような気がして、なんだかすごくさびしくなって、彩香に電話してみたの。彩香は携帯持ってるし、その電話番号は年賀状に書いてあったから。お母さん、ごめんなさい。普通の電話から携帯に電話すると、すごく高くついちゃうんでしょ。来月の請求書が怖いね」そう言って愛美は母親を見た。
　優子はやさしく首を振ってから、「そんなふうに、自分のためじゃなく誰か他の人のためだったら、そして愛美がそのために必要だと思ったら、お金は使ってもいいのよ」と言う。
　本居家の教育方針に、またしても驚かされる。
「愛美、先生のためにありがとう」と言うのが精一杯だ。
「ま、いいじゃない。お母さんも了承してくれたことだし。で、彩

香に電話したら、みんな、五年一組に帰りたがってことがわかってね。それで、絶対にみんなを川南小に戻そうと決めたの」
「そうしたときに、お父さんがやって来た、というわけだな」
「そう。また三人で暮らそうって。そしたら、お父さんの仕事も上手くいく、ランデックという会社が、三人に家をプレゼントしてくれるかもしれない。私がランデックの言う通りにすれば何にもかも上手くいくんだって言ってきたの」
わかる気がした。おそらく、ランデックに囲い込まれた一組の児童たちが「愛美はめちゃくちゃ頭がいい」ということを、ランデックサイドにもらしたのだろう。いや、それ以前に、県の基礎基本の定着度調査の結果が、県教委の沢村課長によってランデックにもたらされていたのかもしれない。ただし、基礎基本の定着度調査は、その名の通り、あくまでも基礎基本の問題だ。愛美は満点を取っただろうが、愛美以外にも満点の児童はいたはずだ。だからやはり、愛美自らランデックに乗り込んだ時点で、ランデックは愛美に目を付け、愛美について調査を始めたのだ。その後、ご丁寧にも俺が、愛美があの暗号を解いたことをばらしてしまった。それをきっかけとしてランデックは、愛美の学力の「秘密」を探ろうとした。
激しい悔恨を感じながらも、なんとか気を取り直して訊く。「それで、愛美は？　お父さんにそう提案されてどう思った？」
「嫌だって言った。私は今のお母さんと二人だけの暮らしの方がいい。お母さんがいつも傍にいてくれるから、勉強だってがんばれるんだよ。私は、お母さんの」そう言って愛美は、母親の左腕に目をやった。
母親が話を引き取る。「この子は、私の腕をもう一度生やしてくれると言って」
今日子の推理の正確さに驚く。「ｉＰＳ細胞、だな」
「うん！」愛美は大きく頷いた。「だから絶対に絶対、私は医学の研究者になる」
「なれるよ。絶対になれる。今日子先生も愛美なら大丈夫だって言ってた」
愛美は、今日子が太鼓判を押してくれたことを知って、顔をくしゃくしゃにし母親に言った。「なんか、見えてきたね」
見えてきたというのは、今日子の言うところの「ゴール」なのかと思い、山添も優子の服の左袖を見た。
「これ」それに気付いて母親が答える。「子供会の廃品回収のときに失敗してしまって」
「ごみの回収車の後ろのところに挟まれちゃったんだよ。お母さんは、私たちの手伝いをしていてこうなっちゃったんだよ」
愛美は訴えるように言ったが、「もういいから。先生にきちんと

お話ししなさい」と優子は愛美を制した。今日子が指摘した通り、「わざと」なのかもしれないと思う。
母親に「わかった」と言った愛美は続ける。「私は、今のお母さんと二人の生活がよかった。お母さんと二人だから、コマハラのテストでもいい点が取れた。お父さんと暮らすようになったら、またお母さんがぶたれたり蹴られたりする。そしたら、私はもう勉強ができなくなる。そしたら、お母さんの手を生やすこともできなくなる」と、愛美は訴えるように言う。
「そうか。そうだな」としか応えられない。
「でもね。チャンスだとも思ったの」少し涙を溜めているようにも見えた愛美だったが、毅然として顔を上げた。「お父さんがランデックと関わっているのがわかったから、そのことをきっかけにランデックに探りをいれられるんじゃないかと思って。一組の子たちはみんなランデックにいたわけだし。私が囮になれば、この事件の謎がいろいろ見えてくると思った」
山添の想像通りだった。「それで、お父さんがここにやって来た次の日、お父さんと行動を伴にしたんだな。その日のことを教えてほしい」
「うん。先生が猿に襲われたでしょ。だから学校は早退になった。それで、私はいったん帰って、萌ちゃんたちと一緒に先生の病院に行ってみたんだけど、面会謝絶だって病院の人に言われて、それでまた家に戻ったの。そしたらお父さんが団地の入り口で待っていた。お母さんに話すと心配すると思ったから、私はそのままお父さんとタクシーに乗ったんだよ」
「タクシー？」
「そう。自分の車は壊れているからと言ってた。タクシーの中で私は、お父さんの仕事場が見てみたいってリクエストした。そしたら、事務所に連れて行ってもらって。綺麗なマンションの一室でね、仕事も上手く行っているみたいだった。だからチャンスだと思って言ったの。ランデックっていうところから仕事をもらっているんでしょ。そして、そのランデックというところが、素敵な家をくれるって言ってるんでしょって。お父さんが、そうだって答えたんで、私、少女のような口ぶりで、ランデックというとこにも行ってみたい、お家の話を聞きたいと言ったのよ。お父さん、すっごく喜んで。私をランデックの人に引き合わせたの」
「向こうで出てきた人は？」
「五～六人いたけど、Eチームと呼ばれていた。最初にランデックに行ったときに見た顔もあった」愛美は他人事のようにあっさりと言う。
「お父さんは？」

「Eチームの人たちに、しばらく娘さんをあずからせていただきますと言われて、どうぞどうぞどうにでもしてくださいという感じだったわよ」愛美は苦笑した。
「それからどうしたんだ？」
「テストを受けさせられた」
「本気でやったか？」
「やった。コマハラの模試レベルで結構手応えあったけど、そこそこやれたと思う」愛美は、このときばかりは晴れ晴れとした表情で言った。
「その後は？」
「お父さんが迎えに来て、夕食と映画。気乗りしなかったけど、付き合わないと謎が探れないと思ったから。ランデックからは後でもう一度、ここに戻ってきてくださいと言われたけど」
「映画はシネコンで？」
「ううん。車がなかったから、街中の映画館」
今日子が根岸の車を探し出せなかった理由がわかった。
そして、根岸の車を動かなくしたのは、たぶん春山先生だ。そういえば、ガソリンタンクに砂糖を入れればエンジンはおしゃかになる、とかなんとか、これも教員の飲み会で、金融車についてと同様、オタクとしての「知識」をひけらかしたような気もする。まったくもって俺は「不善を為す」人間だ。
春山先生はあの日、学校が休校になったことで、かねがね計画していた根岸殺害を実行しようとした。俺が、愛美が全国三位だと告げたことも影響はしているだろう。その前日に、根岸が愛美の家にやって来たことの報告を優子から受けていたのかもしれない。それを優子に訊くと、彼女は頷いた。
春山先生はもう待ったなしと感じ、根岸の車に何らかの工作を行い、そして根岸を現場に呼び出した。そこに改造車を持って行き、「車が壊れてるんだったら、これ、使いなよ」と言った。同じ車種であるわけだが、とくに根岸に疑念を抱かせるほどのことでもないだろう。
あるいは、と思う。春山先生は、県教委の沢村課長の自殺に根岸が何らかのかたちで関与していると考えた、いや確信したのかもしれない。そして、愛美母子を守ると同時に、自らの初恋に殉じようとした――。春山師長の「妹はずーっと独身」という言葉を思い出す。
山添が下を向いていると、愛美が「先生、どうしちゃったの？」と声を掛けてくる。
「あ、いや、ごめん」山添は本題に戻った。「それで、映画の前に、ここに電話したんだな」

「そう」
「ランデックに戻ってからは、お父さんは？」
「ランデックの人と話があるからって別の部屋に行った」
「愛美は、一人になったと」
「彩香たちのことが気になったしね。それで、そのランデックのＥチームがテストの結果をもとに、いろいろ訊いて来るんで、まず彩香達の居場所を教えてほしい、ここにいるんでしょ、と言ったの。そしたら、普段はランディア南平台のコミュニティセンターで授業をしているって答えたから、質問に答えてあげた」
「どんなことを訊かれたんだ？」
「普段はどんな勉強をしているのか、とか、塾はどうしているのか、とか、何時に起きて何時に寝るのかとか、テレビを視る時間はどのくらいか、とかまあ普通のことよ」
「お母さんのことは？」
「とくに訊かれなかった。お父さんから母子家庭だって情報は入っていると思うけど、それ以上のことは知らないと思う」
「ということは……」
「うん。私の成績の秘密を知ってるのは、ここにいる三人の他は、たぶん今日子先生だけだよ。今でもね」
　山添は驚く。やはり愛美は自覚していたのだ。
　しかし愛美は、要らぬ自慢をしてしまったといったふうな様子で少し照れながら続けた。「それで、その日は、一度ランデックに戻ってきたお父さんにタクシーで送ってもらった」
　その後、根岸栄治は殺されたわけか、と思う。
「次の日は？」
「学校は臨時休校で、家に家族がいない人は大西小に行くことになってたけど、私はここで塾の勉強をお母さんとした。それで夕方からはまたランデックに呼ばれたの。今度はお母さんも一緒に。またテストを受けたり、質問されたり、そしたら……」
「俺が来た、というわけか」
「そう。嬉しかったよ、やっぱり。でも、あのとき、先生と感動のハグをするのは、まだ時期尚早だと思ったの」
　そう言う愛美を、母親がたしなめるような目で見た。あるいは、「時期尚早」の若干間違った使い方を指摘しようとしたのかもしれない。
「でも、ああいうふうにして、結果的にはよかったみたい。あれで、ランデックの連中は、私たちと先生たちが別の思惑で動いていると解釈したみたいだから。その前からも、ランデックの分譲地の家のことを、こんな素敵なお家に住めたら夢のようって、乙女言葉で言ったりしてたから、それも効を奏したのかも」

愛美は、先ほどの「時期尚早」の用法の間違いを自覚したのだろう。取り戻すように、「思惑」「解釈」「分譲地」「効を奏した」などといった言葉を使いながら、少しばかり気負った感じで話した。こうしたちょっとした負けん気も、愛美の学力形成に寄与しているんだろうと思い、頭の中で「寄与」などいう言葉を使った自分も、そうした愛美の影響を受けたと思うと笑いがこみ上げてきた。

「やっと笑ったね、先生」

「そう。愛美のおかげだ」素直に言葉が出て来る自分に驚く。「それで、続きをいいか。その日は帰ったんだろ」

「うん。次の日、午後一時からランディア南平台のコミュニティセンターで授業を行うってことも聞き出せていたしね。でもその晩、びっくりだよ」

「春山先生が来たんだな」

愛美と母親は、無言で頷いた。

「そして、携帯を渡してくれた」

「うん」そう言うと、そのときのことを思い出したのだろう、愛美の目に涙がたまる。本居優子も目尻をぬぐった。

「春山先生は何て言ったんだ？」

愛美は無言だった。優子が代わりに答えてくれようとしたが、愛美が顔を上げ口を開いた。「しっかり勉強しなさいって。山添先生や今日子先生や、お母さんと仲良くずっと一緒にいなさいって」先ほどまでとは打って変わって、愛美は子供のように答える。しかし、必死で自制しているのがわかる。「それで、何かあったら、この携帯をオンにしなさいって、使い方も教えてくれた。オンにすれば、その場に警察が駆けつけてくれるからって」

春山先生は、愛美が、山添のためにランデックに潜入しようとしていることを予想し、その際にもたらされる危険を回避できるよう、あの携帯を愛美に渡したのだろう。

「それで愛美は一昨日、なんでランデックの、そのなんて説明したらいいのかな」

「セイフハウスね。そこに先生がまたやって来たから驚いたよ」

「愛美はまだまだ探ることがあると考えてあそこにいた。それで、先生とアムスデンがなにか話しているのを知って、とっさにあの携帯の電源をオンにしてくれた」

愛美は再び頷いた。

「愛美は先生の命の恩人だ」

「それは、大げさだよ」いつか今日子が言っていたのと同じ台詞を愛美が言う。

「でも、一昨日はどうしてあの家だったんだ？　普段は、テストなんかはランデックでやっていたわけだろ」愛美があそこにいたから

こそ生還できたのはわかっていたが、やはり訊かざるを得ない。
「昨日は、問題をしながら脳波なんかも録られたから、そういうふうなことは、ランデックの本社ビルではできないんだと思う。ということはよ、山添先生をあの日、あのセイフハウスにおびき寄せて、叩きのめそうというのは当初のランデックの計画にはなかったことだと思う」
愛美は、アムスデンの言葉を裏付けた。愛美の頭の回転の速さは、これまでにも度々見せ付けられてきたけれども、あらためて感心する。
「わかったよ。愛美、ありがとう」しかし、まだ解決しておかなければならない課題もある。「それで、ちょっと先生は、お母さんと話したいんだ。席を外してくれるかな」
「了解。話を聞かなければいいのね」そう言って愛美は襖の向こうに消えた。
「木曜日の晩の事件ですが」山添は、優子を向いた。
「事件？」優子はけげんそうにする。
「知らなかったのです、ね」
「はい。ここには、テレビもラジオもありませんし、新聞も取ってませんから」
しかし……、と、山添は、この居間の片隅に目やった。そこには、新聞らしきものが積んであった。
それに気付いた優子は言う。「あれは小学生新聞です。わが家の唯一の情報源ですね。でも、ニュースペーパーというよりも参考書的なもので、この市の一昨日の晩のことなどは……。それで、事件というのは？」
「はい。一昨日の夜中、錦町の踏切で、踏切内に閉じ込められた車と貨物列車が衝突し、車の中から男性の遺体が発見されました。警察はまだ遺体の身元を特定していないようですが、私は、その遺体は、根岸栄治氏だと考えています」
さすがの優子も、大きく目を見開いた。
「警察は、これを殺人事件と見ていて、最有力容疑者は亡くなった春山姉妹です。その根拠は、私が春山先生に預けたＧＰＳ機能付きの県警携帯だというのですが」山添は、事件の詳細を話した。
優子がけげんそうな顔をしながら訊いてくる。「なぜ、春山先生が主人を……。確かに春山先生は、とにかく元の主人とは絶対に関わるなと常々私に言っていました。二人で暮らすのが、愛美のためだと」
やはり春山先生は、愛美の学力の秘密をある程度見抜いていたのだ。
「春山先生は、あなたたち二人を、根岸から守ろうと常々考えてい

たと思います。だから、何かあれば根岸氏を殺すくらいの覚悟は持っていた。しかし木曜日の事件についていえば、春山先生が犯人であることはあり得ない。というのは、春山先生は殺されたからです」
「あの火事は、春山先生を殺すために、ということですか」
「警察は、春山姉妹が罪の意識に苛まされて焼身自殺を図ったと考えているようですけどね」
「でもそれは……」
「そう。それはおかしい。春山姉妹がもし自殺するにせよ、近所の家を類焼してしまう危険がある方法など、採るはずがない」
　優子も頷く。
「だから、あの火事が、春山先生が犯人ではないという証拠になると思います。春山先生は誰かに殺された。おそらく真犯人に」
「それは……」
「ランデックは直接は手を下していない。それで私は、これからその犯人を特定しに行きたいのですが、その前に確認しておきたいことがあります」
「はい」
「春山先生が、根岸氏の殺された現場を見たことは確実です。おそらく春山先生も、自らの手で根岸氏を葬ろうと、彼とコンタクトを取っていた。結果的にはそうはならなかったものの、ただ先生はあの晩、何者かに殺された根岸氏の身元を当分の間隠す必要にせまられた」そう言って、山添は、春山先生の隠蔽工作について説明した。
「それは愛美の……、ために、ですね」
「そうです」
「あらかじめ、その……、密室になるような車、身元がわからなくなる車を春山先生が用意していたというのも、春山先生が、何かあれば根岸を、私たちの周りから排除しようと常に考えていた証拠ですね」
　さすがに愛美の母親だけあって、なかなか鋭かった。
「ですから、私がこの事件の真相を暴くことは、そんな春山先生の思いを無駄にすることにもなる」
　そう言って山添は、ランデックがこの市でしようしていること、それを阻止するためには、この事件の真相を暴くことが必要なこと、そして、真犯人についての自分の考えていることを優子に告げた。
　優子はかなり驚いていたようであったが、しかし、まっすぐに山添を見てきて言った。「春山先生とお姉さんは、私たちの恩人でした。しかも、今の山添先生のお話で、私たちのことを私たちが思っていた以上に考えていてくれたことが、本当によくわかりました。

愛美は大丈夫です。どんなことがあっても、私が守ります。それが、春山先生の……」
「わかりました」と言って山添は立ち上がった。
本居家の玄関で、優子に手伝ってもらいながら、左足の靴だけを履こうとしていたとき、気配を察したのだろう、愛美が出てきた。
「先生、今日子先生のことなんだけどね。前に私、先生には無理めだよって言ったでしょ」
「うん。あれはちょっと傷ついたな」
「ごめん。でも無理めじゃないよ」
優子が、愛美をたしなめるような目で見たが、山添は素直に言った。
「そうか」いつもこの子に勇気付けられると思う。「じゃもしも、だよ。先生が今日子先生と結婚するようなことになったら、あれ、えーと何ていうのかな、花嫁さんのベールを持つ役」
「フラワーガール！　私、絶対それやる」
「おう！　じゃ先生もがんばってみるから」
下に下りるまで手を貸すという優子の申し出を辞退して、山添は本居家の玄関を出た。
愛美に何か言い忘れたような気もしていた。教師らしく「お母さんの言うことをよく聞いて」などと言おうとして、そのあまりの無力さに脱力する。だから上手く言えないが、しかしどうしても言いたいことだけを素直に告げることにした。「愛美は、お母さんや春山先生や春山先生のお姉さんや今日子先生や、そしてもちろん先生もそうだけど、そういういろんな人の思いを背負っている。賢い愛美のことだから、感じていると思う。その愛美に対する思いが、今回、いろんなことを巻き起こした。でもそれは周りの大人たちが勝手に動いたことで、愛美が何かを感じる必要はない。愛美は――、自分の考えた通りにやればいいんだ。それが周りの人を幸せにする。だってそうだろ。愛美が考えた通りに動いたおかげで、先生はこうやって生きていられるし、今日子先生とも、もしかしたら上手くいくかもしれない」
「うん！」愛美は大きく頷いてくれた。
そして、と山添は思う。そんな愛美のために、いつかお母さんの手を再び取り戻すための研究ができるようにするために、ランデックに一撃を与え、もうあの二人に近づかないようにしないといけない。
山添は松葉杖をつきながら苦労して階段を下り、アパートの外に出た。谷口の乗った車が目に入る。このまま愛美宅を見張っていてくれるつもりらしい。山添が頭を下げると、彼も小さく微笑んだ。
携帯で瀬上に電話する。依頼した調査を瀬上はきっちりやってお

いてくれた。さらに驚くべきことに、俺がキューを出すまで動かないでくれという申し出も了承してくれた。やはり警察には貸しをつくっておくものだと思う。
山添は、目的地に向かうため、タクシー会社の番号をコールした。

35

校長室のドアをノックして開けると、後頭部にぽっかりと地肌を見せている斉藤校長が振り向いた。校長は、定年まであと一ヶ月あまり。この小学校を最後に勇退することとなっている。窓から学校の前庭を眺め、長かった教師生活に思いを馳せていたのかもしれない。何事もなく定年を迎えたいであろう校長に、何事もなく定年を迎えてもらうわけには、やはりいかない。
「ご自宅に行ってみたら不在だったので、ここかと思い」
「山添先生、その姿は……」校長が抑揚なく言った。
「まあ、いろいろありまして。斉藤校長、あなたも一役買ってくれたようです」
校長は無言で首を傾げた。その仕草があまりにも実直で、山添の自信が揺らいだ。思わず、校長室の鴨居を見上げる。歴代の校長十三人の写真が飾ってあった。その一番右の空きスペースは斉藤校長のものなのだろう。
山添は気を取り直して言った。「校長。四日前の木曜日深夜、どこにいましたか？」
校長は、こちらを不思議そうな目で見つめてくる。
「四日前の深夜に起きた事故、ご存知ですよね。踏切内に乗用車が閉じ込められ、そこに貨物列車が突っ込んだという」
「ニュースで見ましたが」
「そんな状況の事故なんで、死体の身元を警察はつかんでいないようです。死体からは、身元を示すものは何も出なかったといいますし、車も金融車で、車から身元を割りだすこともできなかった。ただ、私はそのぐちゃぐちゃになった車に見覚えがあったので、警察に被害者の身元についての情報を流しました。被害者は、本校の児童の一人の父親です」
「そう、なのですか」言葉を一度区切って校長は言った。
一撃は与えた、ということになるのか。しかし、これが校長としての一般的な反応かもしれない。ここは、やはり直球で行ってみようと思う。「校長先生。私は、その本校児童の父親、根岸栄治氏を殺害したのは、あなただと考えています」
校長が穏やかに、しかし皮肉っぽく微笑む。「山添先生、大丈夫

ですか。お怪我が酷いようですが、まさか頭の方まで」
「笛吹き男にさんざん殴られたようで、おかげで他人様の半分ほどには回るようになりましたよ。だから校長、あなたにたどり着けたのかもしれない」
「何が言いたいんです、山添先生」
「お話ししたいことはたくさんあります。聞いてくれますか」
校長は黙って頷き、校長室備え付けの応接セットのソファに座った。そして無言で、山添に対面のソファを勧めた。
山添は、肩の下から松葉杖を外し、倒れこむようにそこに座った。
「私の考えをお話しします。二月十八日の深夜、あなたは、市内錦町のあの踏切近くに、根岸栄治を呼び出した。ランデックの命令でね。あるいは、ランデックが直接、根岸にそこへ行けと命じたのかもしれない。根岸は、市内で建築設計事務所事務所を営んでいて、ランデックから仕事を請け、またランデックのために便利屋的に動いていた。根岸の事務所は、一時はかなり左前だったようですが、ランデックのおかげで息を吹き返したんです。また、ランデックの方も、根岸を目端が利く男として重宝していたのでしょう。しかし、その根岸の有能さが、ランデックにとってだんだん脅威になってきた。根岸は、ランデックがやろうとしていたことをに薄々気付いていました」
山添は、今日子が推理した「ランデックがやろうとしていたこと」を話した。さすがに校長も、少しばかり驚いたように見えた。目をしばたかさせる。
「根岸は、単に便利屋として、あるいは下請けの事務所として動くよりも、もっと大きなことをランデックに要求したと思われます。ランデックの計画の中核に関わるポジションに置いてくれ、それにふさわしい金銭的報酬がほしい、と。県教委の沢村課長の自殺にも絡んでいて、その一件をネタに脅迫したのかもしれません。そしてその時点で、ランデックは、根岸を処分することを考え始めた。というのは、ランデックにとって必要なのは、唯々諾々と動いてくれる、そして汚れ仕事をやってくれる人間だけです。やつらは、支配者と被支配者という考え方をする。この市の一般人は、やつらにとってはすべて被支配者です。被支配者が計画の中核に関わることは、許しがたいことなんです」
「山添先生」校長が皮肉っぽく笑う。「確かに、先生が今言ったようなこともあるかもしれません。しかしそれと、私がその根岸某さんを殺さなきゃならないという先生の仮説と、どう関係があるんです？」
「そいつについては、後で説明します。とにかく、二月十八日の深

夜十一時四十分頃、根岸は、あなたに会うために錦町にいた。根岸は、ランデックから、川南小校長から極秘の情報を引き出してこいというふうに指示されていたのでしょう。あのあたりは、かつてのN鉄道管理局の官舎が廃墟となって残っている。人通りなどまずない一帯だ。そこで、あなたは根岸を殺害した。そして、死体をそのままにして逃げた。あなたと根岸を結ぶ線は、ランデックを介してしかないわけだから、たとえ死体がそのままでも、あなたに警察がたどり着くことなど不可能だ。ところが、死体がそのままでは困る人がいた。春山先生だ」

校長の口元がぴくりと動いた気がした。あるいは気のせいか。

「春山先生は春山先生で、根岸殺害を計画していた。こちらは、誰に命令されたものでもなく、自発的なものだ。春山先生は、愛美のために、根岸に愛美母子には近づいてほしくなかった。もし、愛美母子に、根岸という異物が入ってしまえば、愛美の学力の奇蹟は消えてしまう、と考えていた。愛美の学力の凄さについては、あなたもある程度はご存知のはずだ――なにせ、県の基礎基本の定着度調査の個人別結果を、学内でただ一人、閲覧できる立場にいるわけですからね。ともかく春山先生は、自分の手で根岸を殺さなきゃならない日が来るかもしれないと、そのための計画をずっと以前からあたためていたのでしょう。そしてその方法は、被害者の身元を、しばらくの間不明にしておくことができるものでなくてはならなかったんです。いずれ判明するにせよ、事件自体が風化してからにしたかった。愛美に衝撃を与えないためです。それが、金融車の準備であり、その改造でした」山添は校長に、春山先生が計画していたと思われる根岸殺害方法の詳細を話した。「春山先生もあの晩、根岸を呼び出していた。愛美に関する情報を与えるとでも言ったと私は考えています。ところが、現場に行ってみた春山先生とそのお姉さんは驚きました。自分が殺すはずだった人物が死体として横たわっていたからです。しかし、その死体をそのままにしておくわけにはいかない。春山姉妹は、用意しておいた車に根岸の死体を乗せ、かねてからの計画通り、あの貨物引き込み線の踏み切り内に、貨物列車が時刻通りやって来る寸前に置いたのです。そんなふうにしてJRおよび関係各所に大きな迷惑を掛けることは春山姉妹の本意ではなかったでしょうが、しかし、それよりも優先するべきものが彼女にはあった。それに乗用車が大破するほどの事故でも、機関車の運転手は多くの場合、怪我もしないということは、事前に調べていたと思われます。そうやって春山先生は、あなたが殺した根岸の死体を身元不明にしたのです。言うまでもなく、貨物列車に激突されたとあれば、死体はぐちゃぐちゃになりますし、当然、身元を示すものはすべて死体からあらかじめ抜き取ったのでしょう。事実、警察

は身元を特定できないでいたし、愛美も、まだ自分の父親が殺されたことを知りません。もちろん根岸に対しては、別れた愛美の母親からも、雇い主であったランデックからも、捜索届が出される心配はまったくない。死体さえ身元不明ならば、かなりの長期間、その死を隠し通すことができます」

「山添先生」

「はい」

「ですからなぜ、そうしたことと私とが関係あるというんです？」

「なぜ、あなたがそういう仕事をやらなければならなかったか、それについての説明ですね。確かにランデックには、実行チームもある。私をこんなふうにしてくれたのも、その実行チームです。だからそいつらに、不要かつ危険な存在になった根岸を殺させるという選択もあったかもしれません。だが、ランデックはそれをやらなかった。どうしてもあなたにやらせたかったんです。それは、ランデックのプロジェクトの根幹に関わることです」山添は、瀬上からもたらされたカードを切ってみることにした。「校長先生、あなたには、息子さんがいらっしゃいますね」

校長は黙ってこちらに目を向けて来た。

「斉藤洋司さん、三十四歳。ランデックまついの本社であるところのローウェン・アンド・パートナーズ、その関連会社に昨年の十一月から勤務しています。勤務先は上海。大学を出てからのキャリアは、これといってなし。英語や中国語を専門に勉強した形跡もありません」

「うるさい！」校長が声を荒げた。こんな校長を見たのは、川南小に赴任して初めてだった。挑発に乗ってくれたらしい。「そんなことが、何の関係があるんだ？」

「それが、校長の先ほどの質問の答えになるんじゃないかと思います。あなたは、息子さんの就職を斡旋してもらう代わりに、ランデックに便宜を図るようになった。ランデックとしては、最初からあなたに決定的な何かをやらせるつもりだったのでしょうけどね。あなたを使えば、あなたのところでトカゲの尻尾切りを行うことができる。でも、それだけじゃない。そこが、ランデックの残酷なところなんだ。親は、子供のためなら何でもする。追い詰めれば、殺人だって厭わない。やつらは、あなたの、というよりも日本人のそうした特性を徹底的に利用してくるんです。それが、やつらの支配者としての流儀らしい」

校長がため息をつき、肩を落とした。「息子は、洋司は、東京の私大の教育学部卒業後、こちらで教職を受けたのですが、三年連続で落ちました。その頃は私もまだ教頭にもなっていなかったので、何の力にもなれなかった。教職以外の公務員試験も、行政、警察、

消防、全部駄目。民間である程度の人数を採用しているのは当時の松井組ぐらいのもので、しかしそれも不合格でした。東京で、契約社員としていくつかの仕事を転々としたのですが、三年前からはこちらに帰ってきて、引きこもり、というのですか、そんなような生活です。そこに、どこかで調べたのでしょう、ランデックまついから就職の話があり……」

「それに乗ったわけですね」

「乗らないわけにはいかなかった」校長は自嘲気味に口の端を歪めた。

「春山姉妹を殺したのも、そして火を点けたのも」

「そうです」校長は肩を落とし、しかし何か憑き物が落ちたように言った。

しばらく沈黙があった後、校長が再び口を開いた。「山添先生はなぜ、私だと」

「本校の今野先生です。今野先生も、ランデックの指示を受けていた」

校長は驚いたようだった。ということは、二人の間には連絡はなかったということになる。個別撃破。それもランデックらしい。

「今野先生は、あの猿事件を引き起こすために、数ヶ月前から自然林の猿に餌付けをしていました。おまけに、私を叩きのめしもしてくれた。むろん、ランデックの差し金です」

「今野先生はどうして？」

「お嬢さんに家をプレゼントするためです。ランデックの分譲地の」

「なるほど……」

「それでよもや校長も、と思ったんです。今野先生は、ランデックから指示を受け現場に向かったのでしょうが、それについては聞くことはできませんでした。一部始終をランデックに連絡したと聞いて、すぐに今野先生の家を飛び出してしまいましたから。そして、その次の日の早朝、春山先生の家は焼け落ちた。春山姉妹は、自殺することはあっても、しかしそれをするにあたって、類焼の危険があるような手段は採らないはずです。だから何者かに殺され、その上で火を点けられたと考えたんです。しかも、そんな早暁に誰かが訪ねてきて、女性の二人暮らしである春山姉妹が玄関のドアを開ける相手というのは、やはり限られている」山添は一呼吸してから続けた。「今野先生は、現場であなたと春山先生を見た。それをランデックに報告した。そしてランデックはあなたに指示を出した。春山姉妹を殺せ、と。そうすれば、根岸の件は万が一露見しても、春山姉妹が犯人になる。春山姉妹が罪の意識から自殺したと警察も受け取る。しかし、それは春山先生を知らない人間の考えることで

す」
「彼女は、類焼のリスクがあるような自殺の仕方はしない、か」校長がため息をついた後、皮肉っぽく言う。「やはり、彼女と私では、人間の出来というものが違うんでしょう」
「そうじゃないと思います。実際、春山先生にしても、根岸の身元を隠すために、機関車に車をぶつけるという危険で反社会的な行為をしている。でもそれは、本居愛美のための行為だった。自分の教え子のためなら、それもできるということでしょう。生意気を言うようですが、校長も、春山先生の家に放火することができたのは、息子さんのためだからでしょう。春山先生がやったこととあなたがしたことは、根っこは同じだ。それもランデックにとっては、日本の社会の、付け込むべき脆弱性というやつかもしれませんがね」
「ありがとう」校長は、俯いて言った。
「それで校長」山添は、本来の目的を果たすべきときが来たと感じていた。「自首してください。警察に同級生がいまして、彼には、あなたの自首を待ってくれるよう頼んであります。ですから、まず、息子さんに連絡を取って、ローウェン・アンド・パートナーズの関連会社を辞めるよう言ってください。校長自身も、差し出がましいことを言うようですが、辞表を提出してください。そうすれば、退職金は出るはずだ――その後であなたが自首し、罪を認めたとしても、事情が事情だけに、自首退職という名誉と退職金は、教員組合と人権派の県議が全力で守ってくれるでしょう。それを元手に、息子さんに学習塾を開業させるという方法もある。本当に差し出がましいようですが」
「山添先生、一つ訊いてもいいですか」
「はい」
「あなたは私を自首させることによって、ランデックに一撃を与えたいのですね。そしてそれによって、春山先生姉妹の名誉と本居愛美の学力を守りたいのですね」
「そうです」
「わかりました。しかし私は自首はしません」
「そうですか」仕方がない、すべて瀬上に話そうと思う。
「私は……、私は自首ではなくて逮捕されようと思います。ランデックとのつながりはすべて話します」
「それでは……」
「私が殺人の罪で逮捕されたとなれば、私とランデックのつながりが明らかになれば、やつも……、洋司も何かを考えるでしょう。それが、私が彼にしてやれる最後の親としての務めかもしれません」
「そうですか」そう言って山添は、松葉杖を支えにして片方の足だけで立ち上がり、苦労して身体の向きを変え、校長室のドアに向か

った。

エピローグ

三月も下旬とはいえ、ドイツ北部の町、ハーメルンはまるで冬のようだった。ここは、地球温暖化とは無縁の土地のようだと思う。

一週間前、急に思い立って旅行代理店に行った。格安航空券の価格は四月になったとたん一気に上がる、今しか行くときはないわよと、代理店の店長をやっている同級生に言われて、おずおずとクレジットカードをカウンターの上に差し出したのだった。翌月の生活のことが頭をよぎったが、しかしカードの引き落とし日までには退職金が振り込まれているだろうと勝手に決めつけ、フランクフルトまでの格安チケットを購った。

フランクフルトからここハーメルンまでは、レンタカーでやって来た。同級生が日本で予約してくれたレンタカーは、山添の懐具合を見抜いたのだろう最安ランクのコンパクトカーであったが、山添は、今度は空港内のエイビスのカウンターにカードを叩きつけてエクストラチャージを払い、ポルシェ９１１を借りてみたのだった。職を失い、クレジットカードまで失うことになったら、海外でレンタカーを借りることもできなくなる、ましてやポルシェなんて、という思いに動かされたわけだが、その決断を三時間後、後悔することになった。

生まれて初めてのポルシェとあって山添はかなり身構えたが、しかし、最新の９９７型９１１カレラＳは、怪我から回復したばかりで若干ぎこちない山添のクラッチワークをまったく嫌がらなかった。フランクフルトからハーメルンまでの道中も、快適そのものだった。問題は、ハーメルンの市街地に入ってからである。

ドイツ、いやヨーロッパの旧い町はどこでもそうなのかもしれないが、車で動くようにはできていない。とくに、ポルシェのようなスポーツカーは不向きであるし、レンタカーとなればなおさら気を遣う。ヴェーゼル川対岸のＢ＆Ｂのエントランスにポルシェの鼻先を突っ込むと宿主が目を剥いたが、なんとか頼み込んで裏手の小さな空き地に置かしてもらい、それで宿泊料金が割り増しになることと、これから一週間分のポルシェのレンタカーフィーがほぼ無駄になってしまうことが決定した。一円、いや一セントユーロでも節約しなきゃいけない旅行なのに、まったく俺は何をやっているんだと苦笑する。

山添は思う。ヨーロッパの町は城砦都市なのだ。そしてポルシェ

やＢＭＷといった高速ツアラーは、その都市から都市へと移動するために用いられるもの、それぞれの都市に専用の駐車場が確保されている人間だけが使うことができる乗り物だ。一度都市の中に入ってしまえば、車、とくに高回転型のエンジンを載せたスポーツカーなんてものは、まったくもってお呼びでない。

ここは、と、あらためてハーメルンの、それこそ童話に出てくるような小綺麗な街並みを見渡した。寒いということ除けば、日本のＮ市にもある、大型のショッピングモールの内部そのままではないか。それをずっと風格高くしたものだ。日本のショッピングモールと違う点は、物理的には空が見えることだが、構造的には、店舗の多くが個人事業主によるものということなのだろう。この町の中で、何代にもわたって、あるときは商店主で、あるときは買い物客になるといったことが繰り返されてきた。この町の中で、お金が循環する仕組みが出来上がり、それが今も続いている。

こうしたスタイルを持つ町は、Ｎ市に対して行われた陰謀の類いに対しては、とても堅牢だろう。逆に言えば、日本の地方都市は、商店などの小規模事業主をことごとく排除し、その構造を大きくつくり変えてしまった。それが、ランデックに付け込まれる一因にもなったのかもしれない。

山添は、金もないのに、ハーメルンまでのこのこやって来た、その根本の理由に思いを馳せた。なぜ一二八四年の夏祭りの日、このハーメルンの町から、百三十人もの子供が忽然と消え去ってしまったのか――。

もちろん、これまで七百年以上も謎とされてきた事件について、自分が何らかの解答を出すことができるとは思ってはなかった。しかし、なんとなくだが、頭の中で輪郭ができつつある。その最後の成型を、ハーメルンの街で行ってみたかったのだ。

山添は、舞楽禁制通りに足を向けた。ハーメルンの町を訪れて以来、日に何度となく、ここにやって来ている。

通りのすぐそばに、「ネズミ捕り男の家」というレストランがある。そこのスタッフに、子供消失の謎についてどう思うか、といったことを、つたない英語で訊いてみたこともあった。むろん、Ｂ＆Ｂのスタッフに対してもだ。

答えはわからないよ、というのが、ハーメルンの町の人たちの見解であった。それはそうだろう。この町の人たちにとっては、笛吹き男は重要な観光資源だ。そこには、やはり謎というロマンも付加されていた方がいい。

舞楽禁制通りは、観光シーズンというにはあまりにも寒いこの時期にあっても、世界中から、笛吹き男の伝説、いや史実に惹かれてやって来た観光客でごった返していた。

そうした混雑と喧騒の中にあって、そのシルエットは、山添の目を惹きつけた。山添はそれに駆け寄り、何か上手いことを言おうとしたのだが、口を出てきたのは結局、憎まれ口だった。「お前、塾はどうしたんだよ？」

「県立高校入試も終わって、国公立大学も前期分の合格発表があったでしょ。塾にとっては、これから春季講習が始まるまでが、一番休みが取りやすい時期なのよ」今日子は言った。

教育現場から離れてまだ半月ほどなのに、いわゆる学校カレンダーが自分の頭の中から抜け落ちてしまっていることに驚く。

「怪我の方はもういいの？」

「なんとかね」一週間前、ギプスが取れた。まだ、ぎこちなくはあるが、松葉杖なしで歩くこともできる。車の運転についても同様だ。そしてそのことも、山添をしてここハーメルンの地に向かわせた一つの動機になっていた。しかし、だからといって、今日子がここに現われるとは――。

「お前は、なんでここまで？」

「携帯にかけても、いつも圏外だから、外国にでも行ってるんじゃないかと思って。それで、旅行社のマキに訊いてみたら、山添くんが突然やって来て、フランクフルトまでの格安航空券を買ってレンタカーの予約も入れたって言うじゃない。じゃハーメルンかなと思って。愛美も、山添先生、もしかしてハーメルンに行ったんじゃないって言ってたし。それで、思い切って来ちゃった」

「来ちゃったって……」気持ちが高揚して来るのがわかる。「そりゃ、お前、まるで恋人の言い草……」

「いや、違うのよ」今日子はあっさりと山添の期待を否定した。「三日前にね、県教委から発表があったの。教育長直々に記者会見して」

「まさか……」

「そう。N市内の小中学校、その一校たりとも、統廃合の対象にしませんって」

「じゃ、川南小も」川南小は、あれ以来、閉校されたままだと聞いていた。

「新学期から再開」

「そうか。よかった」そう言ってから、本当によかったのかと自問してみる。悔恨の思いが湧いてきた。

「それが、教員を辞めた理由か」見透かしたように、気遣うように、今日子が言ってくれる。

「俺一人だけが教員やっているわけにもいかないしな。県教委も俺が辞表を出して、内心ほっとしているだろう。それに」

「そうね。『一校たりとも統廃合の対象にしません』じゃ、今はい

いかもしれないけれど」
「根本的な解決にはならない……。それで、沢村課長の件はどうなった？」
「県教委の会見では、沢村課長がランデックに全県の児童の成績データを流していたこと、そしてそのデータは、警察と県教委が責任持って回収するということが発表されたんだけど」
「沢村課長は、どうなるんだ？」沢村の、二人の娘の顔が眼に浮かぶ。
「それなんだけどね。当然、記者から質問が出たよ。生前に遡って懲戒免職処分にしないのか、いや、するべきだって」そう言って今日子は、さも可笑しそうに笑った。「そしたら親父さん、涙をぽろぽろこぼしながら頭を下げてね」
「ちょ、ちょっと待ってくれ、親父さんてのは、もしかして俺の親父ってことか？　それが記者会見に？」
「あれ、言わなかったっけ？　」
「言ってない」父親が記者会見に出ていたという事実にもかなりうろたえたが、今日子がそんな前後を取り違えた話の仕方をするのにも驚いていた。
「親父さん、『死者に鞭打つことはやめようじゃないか、お互い』て、凄みのある声で言って記者たちを黙らしちゃった。そこからは」今日子は、妙にハイテンションになっているようだった。「親父さんの独り舞台」
　頭痛がしてきた。しかし、この話をするのが嬉しくってたまらないといった風情の今日子に、やめろというのは無理な相談のようだった。
「親父さんは、亡くなった沢村元課長は責められてしかるべきだが、一分の理もある。彼は、地域別校区別の小中学生の学力の詳細をすべての人が閲覧できるシステムをつくるべきだと主張していた。これから子供をつくろうという若い夫婦にとって、学力が高い公立の小中学校がある、しかもその情報が公開されていて、住む場所を選ぶ際の参考にできるというのは、大きな魅力になる。それが地域興しにもつながる。沢村課長の構想は実現されてもいいはずだって。教育長は、苦虫を噛み潰したような顔をしていたけどね。でもそれで、沢村課長に対する追及が立ち消えになってしまったのも事実。あれは親父さんの作戦勝ちね。私たちの保釈金を持ってきたときと同じ」
　山添はうんざりしながらも、疑問を呈した。「しかし沢村課長は、いかに自らの信じるところとはいえ、ランデックと取引きするようなことをしたんだろ？　リスクというものを考えなかったのかな」
「わかるような気がするよ」

「沢村課長の行動のわけが、か？」
「そう。昔、そういう人がいたから」
どういうことだ、と口にした途端、「ここ、人の邪魔になっているみたい」と今日子は周囲を見渡し、そして歩き出した。「ねえ、私、着いたばかりでハーメルンの街って全然知らないのよ」
山添は今日子を追い、「じゃ、ハーメルンの先輩が案内してやる。この白いネズミを追いかけて歩けば、一通り街が見られるそうだ」山添は、足元のネズミの、もうネズミの態を成していない剥げかかったペイントを指し、そしてとりあえず通りにあるオープンテラススタイルのカフェに今日子を連れて行った。椅子に座り、ギャルソンにビールを二つ頼む。
「まだ午前中よ」今日子が笑う。
「夢だったんだよ。朝酒するの。親父みたいにな」
ビールが運ばれて来て、山添はそれを呷った。それで一気に幸せな気分になったのだから、われながら浅ましくも情けなかった。
今日子に目をやると、驚いたことに、今日子もまたワンパイントのビールジョッキをすっかり空けてしまっている。さらにもう一杯ずつオーダーする。このまま今日子と酔っ払ってしまえば天国には違いないが、その前に、最後に残った疑問とその答案を今日子にぶつけてみることにした。
「このハーメルンの町から、なんで忽然と一三〇人もの子供が消えたんだ？　お前は、結論らしきものを持っているのか？」
「山添くんは、どうなの？」山添の気持ちを見透かしたように今日子が訊いてくる。
「うん。まず前提として――。舞楽禁制通りに象徴されるように、一三〇人の子供が消えたことをずっと語り継がねばならない悲劇としているのは、現代の感覚、そう言っておかしければ、子供の人権というものが確立されてからの感覚だよな。以前、お前が言っていたように」
「うん」今日子は、答案を読み上げる生徒を前にしたような顔をした。
「そして、このハーメルンという町の大きさ、いや小ささと言った方がいいのかもしれないけど、ここは何世代にもわたって、この町の中で生活体系が完結していくタイプだったってことを、実際に来てみて強く感じた。ここではたぶん、変わらない日々が、孫の代もそのまた孫の代も、ずっと続いていくんだ。団地ができて子供が一気に増え学校もでき、その子供たちが巣立っていってしまうと残された学校は統廃合の対象になる、そんな町とは違う」
「それは逆に言えば、ずっとずっと前から、子供が増えたり減ったりするのを社会構造として許してなかったってことよね」

「そう。だから昔は、なんらかのかたちで『要らない子』を処分する必要があった。『要らない子』をどこかにやる、というのは、それが子捨てであれ、子供の十字軍であれ東方植民であれ、それに類することは世界中で行われてきたんだと思う。だから、ハーメルンのこの一件だけが語り継がれ、ここハーメルン市だけが、舞楽禁制通りなどを設け、『反省』しているのは、やっぱりおかしい。それに、お前が紹介してくれた阿部氏の著書にしたところで、『甦える中世ヨーロッパ』には、エドワード・ショーターという学者の言葉を引用して、と」山添は、ポケットからその記述をコピーしたものを取り出し読み上げた。以前、アムステンを見張っているときに、付箋を付け、後からコピーしたものだ。ここで語られていることと、子供がいなくなったことが悲劇として語られていることが、どうにも山添の中では、折り合いがつかなかったのだ。山添は続けた。

『『今日では繊細な優しさとか愛情あふれる親しさなどは通常の両親と子どもの関係の一部分であるかのように思われているので、われわれはそれが歴史的にみて常に不変なものだとおもいがちだ。しかしながらこういった特性は、一八五〇年以前においては、母親と小さな子どもとの関係のなかでは相対的にまれであった』とある。その手の、つまり中世では親と子供の情愛なんて皆無だったというような記述は、いろんな文献で確認できる。となれば、だ。おそらく、十三世紀のハーメルン市は、『要らない子』のオペレーションに失敗したんじゃないか。『要らない子』の処分は、それまでも何らかのかたちで行われていたけど、その年だけは、おそらく『要る子』まで東方植民に出すか、あるいは単純に子捨てしてしまった。その結果、ハーメルン市は、ギルドやツンフトの利権を失ってしまったり、田畑が荒廃してしまったり、そういう決定的なことが起きた。そしてもうそんな失敗――悲劇ではなく――を絶対に繰り返さないという思いが、伝承になったのではないか。その伝承を、現代人が現代的な子供との情愛を想定して受け取った結果、子供オペレーティングの失敗ではなく、子供を失った悲劇になってしまった、と。ま、もちろん素人の推理、もとい妄想なんだけどね」

今日子は、顎の下で両手を組み、にやにやしながらこちらを見てくる。

「お前はどうなんだ？」

「山添くんと同じ」

「本当か？」

「本当。というよりも、今の山添くんの説明で今までぼんやり考えていたことがはっきりしたという感じ。『笛吹き男』は、中世のヨーロッパのいろんな町に現われていた。それは、人さらい、というよりも、共同体から『子捨て』を請け負った、いわば業者だった。

そうした『仕事』をしていたのは、当時賤民とされていた人間で、それに対する差別意識が『笛吹き男』の派手な服装となって伝承された……」
「やっぱりそう思うか。でもまあ、あくまでも妄想だけどな」
「私たち二人だけに通用するね」
二人だけ、という言葉が大きく聞こえたような気がした。たぶん気のせいだろう。
「しかし――。嬉しい結論ではないな」
「うん」
「今回の一件が、ハーメルンの謎について、俺なりの結論を出すための材料になったんだけど、今の日本の子供を取り巻く状況は、ハーメルン事件のときと似ているんじゃないのか。今、少子化が問題になっているだろ。なぜ問題なのかといえば、やっぱり年金をはじめとした社会保障制度が課賦制になっていて、それを負担する若年層が未来永劫に絶対に必要であるということがある。もちろん、一千兆とも言われる国と自治体の借金を返していくためにも、一定の数以上の未来の納税者は絶対に必要だ。要するに、大人たちがさんざん美味しい思いをしたツケを、今の子供たちに回そうとしているわけで、子供という存在を、大人と社会の都合でいいように扱っているというふうにも言えると思う。子供が大人や社会の人質になっているんだよ。それは、基本的には、『要らない子オペレーション』をしていた十三世紀となんら変わることはない。で、そうした状況にも関わらず、『次代を担う子供たちには無限の可能性がある』なんて、綺麗なお題目のオブラートに包んでしまっていることもまた、ハーメルン事件が『失敗』ではなく『悲劇』にすりかえられてしまったことと共通性があるような気がする……」
「今の子供たちを囲む状況は、ハーメルンの笛吹き・後日譚てところね」今日子が、山添の長話を端的な言葉で要約した。
「同じことをやっているんだよ……」そう思うと、子供のときに読んだ「ハーメルンの笛吹き」のお話から感じた本能的な恐怖――ハーメルンの町の大人たちが子供たちが連れていかれるのを黙って見ていたこと――を、再び感じてしまうのだった。
「でも、救いはあるよ」今日子がビールを一口飲み、ジョッキを置いてから言った。いつかのように、頬のふちがうっすらと赤くなっている。やっぱり今日子はいい！　唐突に、そしてあらためてそう感じ、こいつを絶対に守らなければと、頼まれてもいないのに勝手に決めた。しかし、それもあながち無理のある感情ではないとも思う。今日子はなんとはなしに儚く見えたからだ。そして、瀬上の言葉を思い出していた。
久我は、救いを求めている――。

今日子が意を決したように言った。「少なくとも、少なくとも私は、救われたよ。こういうふうな考え方は不謹慎なのかもしれないけど」
「救われたって、何に？」
「県教委の沢村課長、川南小の今野先生、校長先生、それからの高村医院の老院長、山添くんの親父さん、そういう人たちの行動原理に、よ」
「そうか」山添は目を瞑った。
今日子が再び口を開く。「春山先生や山添くん、それに愛美のお母さんの行動は、私にもわかる。立場が同じなら、私も同じことしたと思う。でも、川南小の校長先生たちがしたことって……。理解を超えたことではあるけど、そういうこともあるのかなって」
「しかし、ああいう親父たちの行動で、お前は何から救われたんだ？」
またしばらくの沈黙。そして意を決したように今日子が話し始めた。
「あの、私たちが中学生の頃、市内で女子中学生を狙った変質者が出没して事件になっていたこと覚えている？」
よく覚えていた。その頃はまだまだ平和だった一地方都市のことゆえ、大きく報道もされたし、住民を恐怖に陥れた。確か十数名の女子中学生が暴行を受け、うち二人が殺されていたはずだ。
「あの犯人が逮捕されたのって、私が原因なのよ」
淡々と今日子は言い、山添は当惑する。「どういうことなんだ？」
「私が囮になった。私の父は、県警付きの記者だったのね。それで、県警の捜査班に取引きを持ちかけたの。自分の娘を囮に使っていいから、その代わり、その場に自分も立ち合わせてくれって。どういう経緯があったのかはわからないけど、県警の刑事も、たぶん個人的にだろうね、それを受けた。それで私は、父に命じられるままに、何晩も何晩も、その変質者が出没すると目星が付けられた場所を歩かされた。もちろん嫌だったけど、お父さんが言うことに間違いはないっていう意識もあった」
「それでどうしたんだ？」喉が渇き、ビールを口にする。
「そんな深刻な目で見ないでよ」今日子は、重くなりそうな雰囲気を取り払うように一度小さく笑い、そして続けた。「結局、私を襲おうとした変質者を、県警の刑事が取り押えて大手柄。父も、スクープをものにできて大手柄、というわけ」
「あ、あのさ、乱暴とかは？」
「目と口をふさがれて車に連れ込まれて手足を拘束されて」そう言って、今日子は一度息を整えた。「下着の中に手を入れられた。でも、すぐに警察官が笛の音を鳴らして、パトカーが犯人の車の道を

塞いでくれて事なきを得た。と、今言えばそうなるけど、そのときは、もう恐怖なんてもんじゃなくて。そして」
「そういうことをした親父さんを怨んだんだね」
「そう。それから父が死ぬまで一言も口を訊かなかった。自分の功名心のために、娘をそんなふうに目に遭わせることができたってことが、やっぱり許せなかった。それからは、それを止めることができなかった母とも折り合いが悪くなって」
「それで、か」
「何？」
「北高で教師やっていた頃、なんか、変なアンケートやったって聞いたから。お母さんは専業主婦ですか。一緒に勉強していますか、とかいう」
「ああ、そうね。そういう経緯で、私はなるべく父や母と接触するのを避けていたから。でも、それはやっぱりすごく寂しいものだった。一人で勉強するのはとても辛かった。ただ、うちの場合、父も母も、私についてはその事件以来、アンタッチャブルのようになってしまったから、向こうからは手を差し伸べてはくれなかった。私が、それとなく近づけばよかったんだろうけど、それはできなかった。それで、もし、父や母が傍で勉強みていてくれたら、もっとがんばれたのかなあ、なんてふと考えて、あんなアンケート取ったんだけど。その疑問に対しては、愛美母子が究極のかたちで答えを出してくれた」
　その言ったときだけ、今日子の顔が輝いたことにほっとする。
「私、父が死んだときも、悲しいというよりもほっとした。母のときもそう。姉が嫁いだときもそうだった。そして、そういう自分も許せなかった。でもね」今日子は一度目を伏せた。「山添くんの親父さんから、例の保釈金らしきものを結納金として取っておいてくださいと言われたとき、なんか、父と母と自分を許す気になった。失礼だけど、可笑しくて馬鹿馬鹿しくて、ああこういう人もいるんだな、自分の父親も、そういう馬鹿馬鹿しいことを考えていたかもしれないって。もしかしたら、娘が犯人逮捕に協力ということを、当時、反抗期に突入しつつあった私との関係修復の糸口にしようとしたのかも、なんて、突然思えたりもしたしね」
「あんな親父でも、他人様のお役に立つことがあるんだな」
　そして、もう一つの「それでか」に思い至る。
　今日子は、やたら史実としての「ハーメルンの笛吹き」に詳しかった。おそらく今日子は、ずっとずっと以前から、この話を、「要らない子の処分」として認識していたのかもしれない。自分の体験に重ね合わせていたのかもしない。そのことに、誰かが気づくのを待っていたのか。すると、それに気づいた俺という存在は……。は

なはだ都合のいい結論だったが、しかし、気持ちの高揚を抑えることができない。
「もう、他人じゃないよ」それを裏付けるように、今日子は言ってくれた。
「どういう意味だ？」頬が紅潮してきた。同時に、脇から冷たいものが流れ出す。こんなに寒いというのに。
「あのとき、山添くんと他人じゃない気がした」
「もしかして、お前、それを言いにここまで？」
「愛美にも後押しされたし」今日子は、照れくさそうに髪の毛をかきあげた。その右手には、リングがなかった。
　山添は、ビールを飲み干し、思い切って訊いてみた。「えーと、指輪してなかったっけ？」
「ああ」そう言って今日子は、右手を見つめる。「捨てた。ファッションリングとはいえ、いつまでも未練がましくしているのも変だしね」
「あのときだな。俺が瀬上に連行されそうになったとき、時間稼ぎのために、瀬上のパトカーの鍵に偽装して何かを投げてくれた」
「そう。教員になってしばらくした頃、一度だけ男性とお付き合いしたんだけどね、やっぱりなんとなく心を開けなくて、向こうもそれを感じたんだろうね」
「俺は、お前がただ傍にいるだけ、それだけでいい、それだけでいいぞ！」今まで生きてきた中で、一番と思える誠意を込めて宣言した。
「ありがと。じゃ歩こうよ。私、こういう素敵な街を男の人と腕組んで歩くのが夢だった」今日子はそう言って立ち上がった。
　そんな言い方は今日子らしくないようにも感じたが、しかし、これが本当の今日子なのかもしれないと思う。
「お、おう」そう言って山添も立ち上がろうとしたが、一気に酔いが回り、足がもつれた。

了

参考文献

フェリクス・ホフマン編『グリムの昔話１』福音館書店

阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』平凡社

阿部謹也『甦る中世ヨーロッパ』日本エディタースクール出版部

阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社

浜本隆志『魔女とカルトのドイツ史』講談社現代新書

岡崎勝編『がっこう百科』ジャパンマシニスト

『ザ・小学教師』宝島社

『地方を殺すな！』洋泉社

河上和雄『知らないと危ない「犯罪捜査と裁判」基礎知識』講談社文庫

『警察のウラ側がよくわかる本』河出書房新社